

茶院A遺跡Ⅱ 第7次調査

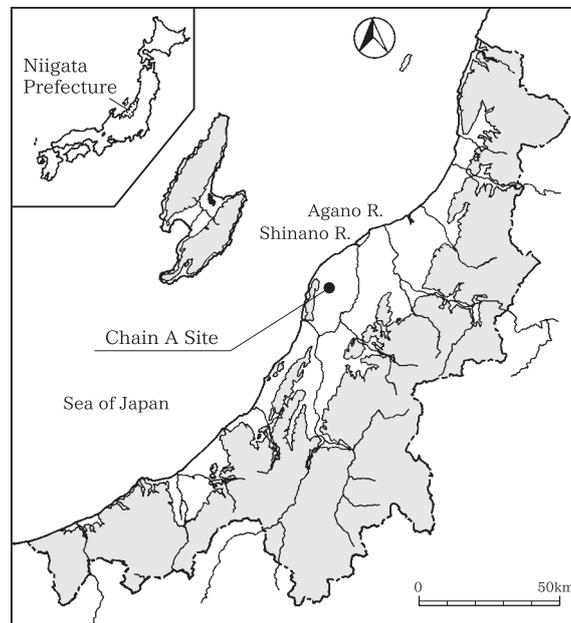
－ 経営体育成基盤整備事業（打越地区）に伴う茶院A遺跡第5次発掘調査報告書 －

2026

新潟市教育委員会

茶院A遺跡Ⅱ 第7次調査

— 経営体育成基盤整備事業（打越地区）に伴う茶院A遺跡第5次発掘調査報告書 —



2026

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区打越字沼乙 388 ほかにしかんくうちこしあざぬまおつに所在する茶院 A 遺跡ちやいんの第 7 次調査発掘調査報告書である。
- 2 調査は経営体育成基盤整備事業（打越地区）に伴い、新潟市教育委員会（以下、「市教委」）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、「市文化財センター」）が補助執行した。
- 3 本書で報告する発掘調査は、第 7 次調査（令和 5 年度 4・5・6 区）である。
- 4 令和 5 年度に発掘調査と整理作業、令和 6 年度に整理作業、令和 7 年度に報告書刊行を行った。発掘調査・整理作業の体制については第 III 章に記した。
- 5 出土遺物及び発掘・整理作業に係る記録類は、市文化財センターで収蔵・保管している。
- 6 本書の編集は今井さやか（市文化財センター）が行った。遺構及び遺物図版・写真図版の作成は、長沼吉嗣・竹部佑介・松井 智・田中万里子（株式会社吉田建設）・今井が行った。執筆分担は以下のとおりである。

第 I 章、第 II 章、第 III 章、第 IV 章第 1 節・2 節 A・3 節 A、第 V 章第 1 節・2 節 A・B・3 節 E、第 VII 章（第 2 節 C 以外）を今井、第 IV 章第 2 節 B・C・3 節 A・B を長沼、3 節 B を竹部、第 V 章第 2 節 C・3 節 A・B・C を田中、4 節 D を伊藤正志（株式会社吉田建設）、墨書土器の判読及び執筆は相澤 央氏（帝京大学文学部教授）に依頼し、玉稿を賜った（第 VII 章第 2 節 B）。なお自然科学分析（第 VI 章第 1～8 節）は株式会社古環境研究所に執筆を含めて委託した。文責は第 2 節が高橋敦氏、第 3 節・8 節が松田隆二氏、第 4 節が金原美奈子氏、第 5 節が三谷智広氏、第 6 節が辻本裕也氏、第 7 節が井上智仁氏である。
- 7 調査における遺構図面は株式会社オリスに委託して作成した。
- 8 本書に用いた写真のうち、遺跡写真は今井さやか・長沼吉嗣・竹部佑介が撮影した。空中写真は株式会社オリスが撮影したものを使用した。遺物写真撮影は、木製品を佐藤俊英（ビックヘッド）、それ以外を長沼吉嗣が行った。また、第 37 図はにいがた地域映像アーカイブ・データベースの画像を使用した。
- 9 遺物実測図のデジタルトレース、各種図版の作成・編集に関しては有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 10 土器については、春日真実氏（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、小野本敦氏（新潟県文化課）、水澤幸一氏、墨書土器については相澤 央氏（帝京大学）、木製品については山田昌久氏（東京都立大学）から指導・教示を受けた。
- 11 本書で報告する茶院 A 遺跡の調査成果の一部については、これまで現地説明会や『新潟市遺跡発掘調査速報会 2023』〔市文化財センター 2024〕、で公表されているが、本報告書と齟齬がある場合は、本書の記載内容をもって正とする。
- 12 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・諸機関からご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

五十川伸矢・小野本敦・春日真実・加藤 学・亀井 功・坂井秀弥・佐藤 俊・水澤幸一・矢田俊文・山田昌久
新潟県観光文化スポーツ部文化課・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県新潟地域振興局巻農業振興部・
新潟市文書館・新潟大学人文社会科学系附置地域映像アーカイブ研究センター・西蒲原土地改良区・
打越地区ほ場整備実行委員会

（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約8度である。
- 3 掲載した図面のうち、既存の地形図等を使用したものについては、原図の製作者・製作年を示した。
- 4 引用・参考文献は、著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 5 遺構番号は発掘調査の際に付したものをを用いた。遺構番号は遺構の種類ごとに付さず調査区（4区・5区・6区）ごとに通し番号を付けている。
- 6 遺構図版は4区→5区上層・下層→6区上層・下層の順に掲載した。
- 7 ピットについては、掘立柱建物を構成するもの及び遺構断面図・遺物実測図掲載のピットについてのみ、図面に遺構番号を示すとともに、観察表に掲載した。
- 8 遺構断面図において、土器は「P」、石・石器は「S」、柱・杭は「W」のアルファベットで示した。
- 9 土層観察の色調は『新版 標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局1967〕2014年度版を用いた。
- 10 遺物図版は4区出土遺物→6区出土遺物の順とし、各調査区で種別ごとに掲載した。
- 11 遺物番号は調査区・種別を問わず通し番号とし、本文および観察表・写真図版の番号は全て同一番号とした。
- 12 遺物図版において、包含層（Ⅶ層）及び排土出土遺物については遺構外出土遺物として掲載した。
- 13 土器実測図において、おおむね全周の1/12以下の遺存率の低いものについては、中軸線の両側に空白を作って区別した。
- 14 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。
- 15 遺物図版で用いるスクリーントーンは以下のとおりとする。

土器		黒色処理		漆		スス		
石器・石製品		砥面						
金属製品		ガラス質滓化		溶解物		還元		炉床土付着
木製品		炭化		黒漆		柱のアタリ痕		

- 16 遺構計測表中における（ ）付の数値は残存値を意味し、遺物観察表における（ ）付の数値は推定値を意味する。
- 17 遺構平面図で切り合い関係のある遺構の上端・下端の表現について、切られている遺構の場合、上端の復元が可能ならば破線、下端は切っている遺構より深く復元可能な場合は破線で示した。
- 18 遺構観察表において、遺構の新旧関係を表現する際に「<」「>」を用いた。「A>B」となる場合はAが新しく、Bが古い。
- 19 木製品実測図においては、年輪を模式的に表現しているため実測値より年輪は少ない。
- 20 遺物の注記は、調査年度（西暦）の後半数字「23」と、遺跡名の略称「茶」とし、出土地点や層位を続けて記した。

目 次

第I章 序 章

第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	2

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3

第III章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査	10
第2節 本発掘調査	10
A 調査方法	10
1) グリッドの設定	10
2) 調査方法	13
B 調査経過	13
C 調査体制	14
第3節 整理作業	14
A 整理方法	14
1) 遺物	14
2) 遺構	15
B 整理経過	15

第IV章 遺 跡

第1節 概 要	16
第2節 層 序	17
A 基本層序	17
B 地 業	17
C 水田遺構	18
第3節 遺 構	18
A 遺構の概要	18
B 遺構各説	19
1) 4区の概要	19
2) 4区の遺構	19
3) 5区上層の概要	21
4) 5区上層の遺構	21
5) 5区下層の概要	25
6) 5区下層の遺構	25
7) 6区上層の概要	30
8) 6区上層の遺構	31
9) 6区下層の概要	36
10) 6区下層の遺構	36

第V章 遺 物

第1節 概 要	38
---------------	----

第2節 土 器	38
A 記述の方法	38
B 土器の分類	39
C 土器各説	41
1) 4 区	41
2) 5 区	42
3) 6 区	45
第3節 土製品・石製品・円盤・転用研磨具・鉄製品・鍛冶関連遺物・銭貨・木製品	49
A 土製品	49
B 石製品	49
C 円盤・転用研磨具	49
D 鉄製品・鍛冶関連遺物・銭貨	49
E 木製品	50
1) 4区木製品	50
2) 5区木製品	51
3) 6区木製品	51

第VI章 自然科学分析

第1節 概 要	53
第2節 樹種同定	53
A 試料と方法	53
B 結 果	53
C 考 察	56
第3節 放射性炭素年代測定	57
A 試料と方法	57
1) 化学処理	57
2) 測 定	57
3) 算 出	57
B 結 果	58
C 所 見	60
第4節 種実同定	60
A 試料と方法	60
B 結 果	61
1) 6区SX2	61
2) 4区水田SN12	64
C 考 察	66
第5節 貝類・動物遺体同定	67
A 試料と方法	67
B 結果と所見	67
第6節 プラント・オパール分析	68
A 試 料	68
B 方 法	68
C 結 果	68
1) 4区水田SN12被覆土	69
2) 4区水田SN12	69
3) 4区水田SN12下層	69
4) 4区水口30	69
5) 4区畦畔26	69
D 考 察	69

第7節 花粉分析	70
A 試料	70
B 方法	71
C 結果	71
1) 4区水田 SN12 被覆土	71
2) 4区水口 30	71
3) 4区水田 SN12	71
D 考察	71
1) 調査地点の環境と古植生	71
2) 周辺森林植生	74
第8節 珪藻分析	74
A 試料	74
B 方法	74
C 結果	75
D 考察	75

第Ⅶ章 総括

第1節 古墳時代の様相	77
第2節 奈良・平安時代の様相	79
A 出土土器の編年的位置づけ	79
B 土器の器種構成比率	79
C 墨書土器	81
D 丸木弓	83
第3節 中世の様相	84
A 水田	84
1) 周辺遺跡の水田遺構との比較	84
2) 自然科学分析の結果から	84
B 屋敷地と植栽	84
第4節 まとめ	85
引用・参考文献	87
別表	92
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第1図 経営体育成基盤整備事業打越地区に伴う 試掘・確認調査範囲図	2	第8図 確認調査(第3次調査)土層柱状図 (調査対象範囲のみ抜粋)	11
第2図 茶院A遺跡周辺地形分類図	4	第9図 確認調査(第3次調査)・工事立会出土の遺物	12
第3図 茶院A遺跡周辺の遺跡分布図(古墳)	7	第10図 大グリッド別古代土器重量分布図	16
第4図 茶院A遺跡周辺の遺跡分布図(古代)	8	第11図 遺構の平・断面形態の分類	18
第5図 茶院A遺跡周辺の遺跡分布図(中世)	9	第12図 遺構覆土の堆積形状の分類	18
第6図 428T タテ釜出土状況	10	第13図 奈良・平安時代の土器分類	40
第7図 確認調査(第3次調査)トレンチ位置図と 工事立会遺物採集位置	11	第14図 木取り及び木材一般の部分名称	50

第 15 図	木取りの分類	50	第 28 図	推定旧河道と古墳時代の主な遺跡	77
第 16 図	木製品顕微鏡写真	55	第 29 図	茶院 A 遺跡周辺の古墳時代土器	78
第 17 図	暦年較正年代図	59	第 30 図	新潟県内の石製模造品出土遺跡	78
第 18 図	種実顕微鏡写真 (SX2)	63	第 31 図	食膳具の器種別構成比率	80
第 19 図	種実組成図	65	第 32 図	食膳具の構成比率	81
第 20 図	種実顕微鏡写真 (SN12)	65	第 33 図	茶院 A 遺跡第 7 次調査出土墨書土器集成	82
第 21 図	動物遺体顕微鏡写真	67	第 34 図	茶院 A 遺跡第 6 次調査・2019 工事立会出土 の「宅」墨書土器	82
第 22 図	SN12・畦畔 26 サンプル採取地点	68	第 35 図	茶院 A 遺跡とその周辺遺跡出土の古代・中世 丸木弓	83
第 23 図	プラント・オパール分析結果	68	第 36 図	茶院 A 遺跡第 7 次調査区内の中世土地利用図	85
第 24 図	プラント・オパール顕微鏡写真	70	第 37 図	西蒲原地区の川沿いの民家 (昭和 30 年頃)	85
第 25 図	花粉化石組成図	73			
第 26 図	花粉化石顕微鏡写真	73			
第 27 図	珪藻化石顕微鏡写真	76			

表 目 次

第 1 表	茶院 A 遺跡及び打越地区ほ場整備事業に 関連する発掘調査履歴	1	第 8 表	種実同定結果	65
第 2 表	茶院 A 遺跡の周辺遺跡 (古墳～中世)	6	第 9 表	動物遺体同定結果	67
第 3 表	確認調査 (第 3 次調査)・工事立会出土 土器・土製品観察表	12	第 10 表	プラント・オパール分析結果	69
第 4 表	樹種・種実同定結果	54	第 11 表	花粉分析結果	72
第 5 表	測定試料及び処理	57	第 12 表	珪藻分析結果	76
第 6 表	測定結果	58	第 13 表	器種別構成比率表	80
第 7 表	種実同定結果 (SX2)	63	第 14 表	茶院 A 遺跡第 7 次調査出土墨書土器一覧	82
			第 15 表	茶院 A 遺跡第 6 次調査・2019 工事立会出土 墨書土器一覧	82

別表目次

別表 1	遺構計測表	92	別表 5	円盤・転用研磨具観察表	101
別表 2	土器観察表	98	別表 6	鉄製品・鍛冶関連遺物観察表	101
別表 3	土製品観察表	101	別表 7	銭貨観察表	101
別表 4	石製品観察表	101	別表 8	木製品観察表	102

図版目次

図版 1	茶院 A 遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)	図版 10	4 区遺構個別図 3/3 (1/100・1/60・1/40)
図版 2	打越地区ほ場整備事業などに伴う試掘・確認調査 位置図 (1/12,000)	図版 11	5 区上層遺構全体図 (1/300)、基本層序 (1/40)
図版 3	茶院 A 遺跡周辺の旧地割図 (1/10,000)	図版 12	5 区上層遺構部分図 1/2 (1/100)
図版 4	茶院 A 遺跡グリッド設定図 (1/10,000)	図版 13	5 区上層遺構部分図 2/2 (1/100)
図版 5	茶院 A 遺跡グリッド設定図 (1/3,000)	図版 14	5 区上層遺構個別図 1/3 (1/80・1/40)
図版 6	4 区遺構全体図 1/2(1/300)、基本層序 1/2(1/40)	図版 15	5 区上層遺構個別図 2/3 (1/40)
図版 7	4 区遺構全体図 2/2(1/300)、基本層序 2/2(1/40)	図版 16	5 区上層遺構個別図 3/3 (1/40)
図版 8	4 区遺構個別図 1/3 (1/100・1/40)	図版 17	5 区下層遺構全体図 (1/300)
図版 9	4 区遺構個別図 2/3 (1/300・1/40)	図版 18	5 区下層遺構部分図 (1/100)
		図版 19	5 区下層遺構個別図 1/4 (1/80・1/40)

- 図版 20 5区下層遺構個別図 2/4 (1/80・1/40)
 図版 21 5区下層遺構個別図 3/4 (1/40)
 図版 22 5区下層遺構個別図 4/4 (1/40)
 図版 23 6区上層遺構全体図 (1/300)、基本層序 (1/40)、
 追加調査トレンチ位置図 (1/600)
 図版 24 6区上層遺構部分図 (1/100)
 図版 25 6区上層遺構個別図 1/3 (1/80・1/40)
 図版 26 6区上層遺構個別図 2/3 (1/40)
 図版 27 6区上層遺構個別図 3/3 (1/40)
 図版 28 6区下層遺構全体図 (1/100)、基本層序 (1/40)
 図版 29 6区下層遺構個別図 (1/40)
 図版 30 土器 1 4区遺構出土、4区遺構外出土、
 5区遺構出土 (1)
 図版 31 土器 2 5区遺構出土 (2)、5区遺構外出土 (1)
 図版 32 土器 3 5区遺構外出土 (2)
 図版 33 土器 4 5区遺構外出土 (3)、6区遺構出土 (1)
 図版 34 土器 5 6区遺構出土 (2)
 図版 35 土器 6 6区遺構出土 (3)
 図版 36 土器 7 6区遺構出土 (4)、6区遺構外出土、
 土製品、石製品、円盤・転用研磨具
 図版 37 鉄製品、鍛冶関連遺物、銭貨
 図版 38 木製品 1 4区遺構出土、4区遺構外出土、
 5区遺構出土
 図版 39 木製品 2 5区遺構外出土、6区遺構出土 (1)
 図版 40 木製品 3 6区遺構出土 (2)
 図版 41 木製品 4 6区遺構出土 (3)
 図版 42 木製品 5 6区遺構出土 (4)、6区遺構外出土

写真図版目次

- 写真図版 1 茶院 A 遺跡第 7 次調査 調査区遠景 1
 (東から)
 茶院 A 遺跡第 7 次調査 調査区遠景 2
 (西から)
 写真図版 2 4区 完掘全景 1 (西から)
 4区 完掘全景 2 (西から)
 写真図版 3 4区 水田 (SN12・13・14) 完掘 (西から)
 4区 水田 (SN12・13・14) 完掘 (南から)
 写真図版 4 4区 基本層序① (南から)
 4区 基本層序② (南から)
 4区 基本層序③ (南から)
 4区 基本層序④ (東から)
 4区 基本層序⑤ (南から)
 4区 基本層序⑥ (西から)
 4区 基本層序⑦ (西から)
 4区 基本層序⑧ (西から)
 写真図版 5 4区 SN12 土層断面 A (南から)
 4区 SN12 土層断面 B (南から)
 4区 SN13 土層断面 C (南から)
 4区 SN13 土層断面 D (南から)
 4区 SN14 土層断面 E (南から)
 4区 SN14 土層断面 F (南から)
 4区 SN14 土層断面 G (南から)
 4区 SN14 土層断面 H (南から)
 写真図版 6 4区 SN14 土層断面 I (南から)
 4区 畦畔 27 土層断面 L (南から)
 4区 畦畔 27 土層断面 M (南から)
 4区 水口 29 土層断面 K (西から)
 4区 水口 30 土層断面 J (西から)
 4区 畦畔 24 土層断面 (西から)
 4区 畦畔 25 土層断面 (東から)
 4区 畦畔 26 土層断面 (西から)
 写真図版 7 4区 畦畔 27 土層断面 (南から)
 4区 畦畔 28 土層断面 (西から)
 4区 SD8 土層断面 A (東から)
 4区 SD8 土層断面 B (南から)
 4区 SD8 完掘 (南から)
 4区 SD9 土層断面 A (東から)
 4区 SD9 土層断面 B (南から)
 4区 SD9 完掘 (南から)
 写真図版 8 4区 SD11 土層断面 (西から)
 4区 P10 土層断面 (東から)
 4区 樹木列 木-2 土層断面 (西から)
 4区 樹木列 木-3 土層断面 (南から)
 4区 樹木列 木-4 土層断面 (南から)
 4区 樹木列 木-5 土層断面 (南から)
 4区 樹木列 木-6・7 土層断面 (東から)
 4区 SD8・樹木列 完掘 (南から)
 写真図版 9 5区上層 完掘全景 (東から)
 5区 基本層序① (南から)
 5区 基本層序② (南から)
 5区 基本層序③ (南から)
 5区 基本層序④ (南から)
 写真図版 10 5区 SB45 完掘 (南東から)
 5区 SB46 完掘 (南西から)
 写真図版 11 5区 SB45-P22 土層断面 (西から)
 5区 SB45-P22 完掘 (西から)
 5区 SB45-P24 土層断面 A (南から)
 5区 SB45-P24 土層断面 B (南東から)
 5区 SB45-P24 完掘 (南東から)
 5区 SB45-P27 土層断面 (北西から)
 5区 SB45-P27 完掘 (北西から)

	5区 SB45-P28 完掘 (南東から)	5区 SD151 土層断面・完掘 (南から)
写真図版 12	5区 SB45-P37 土層断面 (南から)	5区 SX5 土層断面 (北から)
	5区 SB45-P37 礎板検出状況 (南東から)	5区 SX5 完掘 (西から)
	5区 SB45-P37 完掘 (南から)	5区 P7 土層断面・完掘 (北から)
	5区 SB46-P41・SB45-P40 土層断面 (南東から)	5区 P16 土層断面 (南東から)
	5区 SB46-P41・SB45-P40 完掘 (南東から)	5区 P16 完掘 (南東から)
	5区 SB46-P29 土層断面 (南から)	写真図版 18
	5区 SB46-P29 完掘 (南から)	5区 P23 土層断面 (北西から)
	5区 SB46-P32 土層断面 (南から)	5区 P23 完掘 (北西から)
写真図版 13	5区 SB46-P32 完掘 (南から)	5区 P33 土層断面 (南東から)
	5区 SB46-P35 土層断面 (北から)	5区 P33 完掘 (南東から)
	5区 SB46-P35 礎板検出状況 (北から)	5区 P44 土層断面 (南西から)
	5区 SB46-P38 土層断面 (西から)	5区 P44 完掘 (南西から)
	5区 SB46-P38 完掘 (西から)	5区 P63 土層断面 (西から)
	5区 SD1 土層断面 (南から)	5区 P63 柱根検出状況 (西から)
	5区 畦畔 157 土層断面・SD1 完掘 (南から)	写真図版 19
	5区 畦畔 158 土層断面 (南から)	5区下層 完掘 (東から)
写真図版 14	5区 西側低地 完掘 (東から)	5区 SB150 完掘 (南から)
	5区 SD30・47・畦畔 159・SD48・151・SN156 土層断面 (南西から)	写真図版 20
	5区 SD30・47・畦畔 159・SD48・151 土層断面 (南から)	5区 SB160 完掘 (南から)
	5区 SN156 土層断面・完掘 (南東から)	5区 SB161 完掘 (南西から)
	5区 西側低地 完掘 (西から)	写真図版 21
	5区 畦畔 158 土層断面・SD2 完掘 (南から)	5区 SB150-P82 土層断面 (南から)
	5区 SD3 土層断面 (西から)	5区 SB150-P82 完掘 (南から)
	5区 SD3 完掘 (西から)	5区 SB150-P83 土層断面 (西から)
写真図版 15	5区 SD4 土層断面 (南から)	5区 SB150-P83 完掘 (西から)
	5区 SD4 完掘 (南から)	5区 SB150-P91 土層断面 (西から)
	5区 SD11 土層断面 (東から)	5区 SB150-P91 完掘 (西から)
	5区 SD11 完掘 (西から)	5区 SB150-P130 土層断面 (北から)
	5区 SD13 土層断面 (北東から)	5区 SB150-P130 柱痕検出状況 (北から)
	5区 SD13 完掘 (南西から)	写真図版 22
	5区 SD15 土層断面 (南から)	5区 SB150-P130 完掘 (北から)
	5区 SD15 須恵器出土状況 (北西から)	5区 SB160-P81 土層断面 (北から)
写真図版 16	5区 SD17 土層断面 (南から)	5区 SB160-P81 完掘 (北から)
	5区 SD17 完掘 (南から)	5区 SB160-P98 土層断面 (南から)
	5区 SD19 土層断面 (南から)	5区 SB160-P98 完掘 (南から)
	5区 SD20・P21 土層断面 (南から)	5区 SB160-P113 土層断面 (北から)
	5区 SD15・19・20 完掘 (南から)	5区 SB160-P113 完掘 (北から)
	5区 SD30・47・48 土層断面 (北から)	5区 P153・SB160-P152 土層断面・完掘 (南から)
	5区 SD30 下駄出土状況 (北東から)	写真図版 23
	5区 SD30 漆器出土状況 (西から)	5区 SB160-P154 土層断面 (南西から)
写真図版 17	5区 SD43 完掘 (南から)	5区 SB160-P154 完掘 (南西から)
	5区 SD48 土師器出土状況 (南から)	5区 SB161-P121 土層断面 (南西から)
		5区 SB161-P121 完掘 (南西から)
		5区 SB161-P122 土層断面 (北から)
		5区 SB161-P122 柱根検出状況 (北から)
		5区 SB161-P134 土層断面 (南から)
		5区 SB161-P134 柱根検出状況 (南から)
		写真図版 24
		5区下層 完掘 (西から)
		5区 SK42 土層断面 (南西から)
		5区 SK42 完掘 (南西から)
		5区 SK114 土層断面 A (東から)
		5区 SK114 土層断面 B (南から)
		写真図版 25
		5区 SK114 完掘 (南から)

	5区 SD10 土層断面 (南から)	5区 P80 土層断面 (東から)
	5区 SD10 完掘 (南から)	5区 P80 完掘 (東から)
	5区 SD14 土層断面 (東から)	5区 P92 土層断面 (西から)
	5区 SD14 完掘 (西から)	5区 P92 完掘 (西から)
	5区 SD39 土層断面 (南西から)	5区 P96 土層断面 (西から)
	5区 SD39 完掘 (南西から)	5区 P96 完掘 (西から)
	5区 SD49 土層断面 A (西から)	写真図版 32 5区 P109 土層断面 (南西から)
写真図版 26	5区 SD49 土層断面 B (西から)	5区 P109 完掘 (南西から)
	5区 SD49 完掘 (東から)	5区 P111 土師器出土状況 (南から)
	5区 SD55 土層断面 (西から)	5区 P111 土層断面 (南から)
	5区 SD55 完掘 (西から)	5区 P111 完掘 (南から)
	5区 P74・SD62 土層断面 (東から)	5区 P112 土層断面 (南西から)
	5区 SD65・62 土層断面 (東から)	5区 P112 完掘 (南西から)
	5区 P64・SD65・62 土層断面 (東から)	5区 P116 土層断面 (南東から)
	5区 SD65・62 完掘 (東から)	写真図版 33 5区 P116 完掘 (南東から)
写真図版 27	5区 SD66 土層断面 (北から)	5区 P117 土層断面 (西から)
	5区 SD75 土層断面 (北から)	5区 P117 完掘 (西から)
	5区 SD75 完掘 (北から)	5区 P119 土層断面 (西から)
	5区 SD84 土層断面 (南から)	5区 P119 完掘 (西から)
	5区 SD84 完掘 (南から)	5区 P120 土層断面 (西から)
	5区 SD94 土層断面 (西から)	5区 P120 完掘 (西から)
	5区 SD95 土層断面 (北から)	5区 P123 土層断面 (西から)
	5区 SD100・94・P118 土層断面 (西から)	写真図版 34 5区 P123 完掘 (西から)
写真図版 28	5区 SD100 土層断面 (東から)	5区 P132 土層断面 (南から)
	5区 SD94・100 完掘 (東から)	5区 P132 完掘 (南から)
	5区 SD103 土層断面 (西から)	5区 P133 土層断面 (東から)
	5区 SD108・107 土層断面 (西から)	5区 P133 完掘 (東から)
	5区 SD107 土層断面 (西から)	5区 P136 土層断面 (南西から)
	5区 SD108・107 完掘 (西から)	5区 P140 土層断面 (南から)
	5区 SD135 土層断面 (西から)	5区 P140 完掘 (南から)
	5区 SD137 土層断面 (南西から)	写真図版 35 5区 P143・142 土層断面 (北から)
写真図版 29	5区 SD137 完掘 (南西から)	5区 P144 土層断面 (南から)
	5区 SD146 土層断面 (西から)	5区 P144 完掘 (南から)
	5区 SD146 完掘 (西から)	5区 P147 土層断面 (西から)
	5区 SD148 土層断面 (西から)	5区 P147 完掘 (西から)
	5区 SX106 土層断面 (西から)	5区 P149 土層断面 (南から)
	5区 SX106 完掘 (北から)	5区 P149 完掘 (南から)
	5区 P18 土層断面 (東から)	5区 噴砂検出状況・砥石出土状況 (南から)
	5区 P18 完掘 (東から)	写真図版 36 6区 完掘全景 (東から)
写真図版 30	5区 P58 土層断面 (西から)	6区 完掘全景 (西から)
	5区 P58 完掘 (西から)	写真図版 37 6区 木製品弓 出土状況 8E-8E21 (西から)
	5区 P60 土層断面 (南西から)	6区 基本層序① (北から)
	5区 P60 完掘 (南西から)	6区 基本層序② (北から)
	5区 P67 土層断面 (西から)	6区 基本層序③ (北から)
	5区 P67 完掘 (西から)	6区 8E-8B 畦畔 (北から)
	5区 P72 土層断面 (西から)	写真図版 38 6区 SD53 土層断面・完掘 (南東から)
	5区 P72 完掘 (西から)	6区 地業 1・2 土層断面 (南から)
写真図版 31	5区 P79 土層断面 (南から)	写真図版 39 6区 SB95-P60 柱根検出状況 (西から)
	5区 P79 完掘 (南から)	

	6区 SB95-P63 礎板検出状況(東から)	写真図版 45	6区 P28・29 土層断面・完掘(北から)
	6区 SB95-P65 柱根検出状況(西から)	6区	P30 土層断面・完掘(南から)
	6区 SB95-P68 柱根検出状況(西から)	6区	P31 土層断面(南から)
	6区 SB95(P68・65・63・60)検出状況(西から)	6区	P31 完掘(南から)
写真図版 40	6区 SE5 土層断面・完掘(北から)	6区	P35 土層断面・完掘(南から)
	6区 SE7 土層断面・完掘(南から)	6区	P49 土層断面(北から)
	6区 SE19 土層断面・完掘(南から)	6区	P49 完掘(北から)
	6区 SK1 土層断面・完掘(北から)	6区	P59 土層断面(東から)
	6区 SK34 土層断面(南から)	写真図版 46	6区 P59 完掘(東から)
	6区 SK34 完掘(南から)	6区	P83・82 土層断面(南から)
	6区 SK44 土層断面(南から)	6区	P84 土層断面(東から)
	6区 SK44 完掘(南から)	6区	P84 完掘(東から)
写真図版 41	6区 SK47 土層断面・完掘(南から)	6区	P85 土層断面(西から)
	6区 SK80 土層断面(東から)	6区	P85 完掘(西から)
	6区 SK80 完掘(東から)	6区	P88 土層断面(西から)
	6区 SD3 土層断面・完掘(北から)	6区	P88 完掘(西から)
	6区 SD6 土層断面・完掘(北から)	写真図版 47	6区下層 完掘(西から)
	6区 SD8 土層断面・完掘(北から)	6区下層	基本層序 拡張部(南から)
	6区 SD9・16 土層断面・完掘(北から)	6区	SB96-P69 柱根検出状況(西から)
	6区 SD23・P24 土層断面・完掘(南から)	6区	SB96-P69 完掘(西から)
写真図版 42	6区 SD26 土層断面・完掘(北から)	6区	SB96-P93 土層断面(北から)
	6区 P43・SD36 土層断面・完掘(南から)	6区	SK91 土層断面・完掘(南から)
	6区 SD41 土層断面・完掘(南から)	6区	SD75 土層断面(東から)
	6区 SD42 土層断面・完掘(南から)	6区	SN94・畦畔 プラン確認(西から)
	6区 SD45 土層断面・完掘(北から)	写真図版 48	6区 SN94・畦畔 土層断面(北から)
	6区 SD46 土層断面・完掘(北から)	6区	SN94 土層断面(北から)
	6区 P98・SD50 土層断面・完掘(北から)	6区	SN94 完掘(西から)
	6区 SD51 土層断面(東から)	6区	P71 土層断面(西から)
写真図版 43	6区 P86・SD87 土層断面・完掘(北から)	6区	P72 土層断面(西から)
	6区 SX2 土層断面・完掘(北から)	6区	P90 土層断面・完掘(南から)
	6区 P4 土層断面(東から)	6区	P97 柱根検出状況(西から)
	6区 P4 完掘(北から)	6区	Ⅷ層土師器出土状況
	6区 P10 土層断面(東から)	写真図版 49	出土遺物 1(土器 1)
	6区 P10 完掘(東から)	写真図版 50	出土遺物 2(土器 2)
	6区 P11 土層断面・完掘(南から)	写真図版 51	出土遺物 3(土器 3)
	6区 P13・14 土層断面(南から)	写真図版 52	出土遺物 4(土器 4)
写真図版 44	6区 P14・13 完掘(北から)	写真図版 53	出土遺物 5(土器 5)
	6区 P17 土層断面(東から)	写真図版 54	出土遺物 6(土器 6・土製品・石製品・円盤・転用研磨具)
	6区 P17 完掘(東から)	写真図版 55	出土遺物 7(土器拡大)
	6区 P20 土層断面(東から)	写真図版 56	出土遺物 8(鉄製品・鍛冶関連遺物・銭貨)
	6区 P22 土層断面(東から)	写真図版 57	出土遺物 9(木製品 1)
	6区 P22 完掘(東から)	写真図版 58	出土遺物 10(木製品 2)
	6区 P27 土層断面(南から)	写真図版 59	出土遺物 11(木製品 3)
	6区 P27 完掘(南から)	写真図版 60	出土遺物 12(木製品 4)

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観

茶院 A 遺跡は、新潟市西蒲区（旧中之口村）打越字沼乙 388 ほかに所在する。信濃川左岸の沖積地の微高地に立地し、現在の打越集落の西側に位置する（図版 1）。周辺には南の燕市から大通川が、東の月潟から木山川が流れている。地表面の標高は 2.0 ～ 2.4m で、打越集落から西の大通川方向へわずかに標高が下がっている。

遺跡の発見は、昭和 25（1950）年の真島衛氏が西蒲原一帯で行った分布調査である。その後、昭和 34（1959）年の耕地整理の際、削られた土から須恵器・土師器などが発見されているが、遺物の大部分は散逸している。

昭和 43（1968）年、北陸自動車道の整備計画が発表され、新潟県教育委員会（以下、県教委という）によって昭和 43 年と昭和 46（1971）年に沿線の遺跡分布調査が 2 回行われた。その結果、茶院遺跡が道路法線にかかることが確認され、昭和 48（1973）年に本発掘調査が行われた（第 1 次調査）。遺構は確認されなかったが、出土遺物から茶院遺跡は 8 世紀中頃から 9 世紀前半の遺跡とされた〔本間・家田 1976〕。なお、昭和 54（1979）年に茶院遺跡周辺の古銭出土地 2 か所を茶院 B 遺跡・茶院 C 遺跡として新たに周知化し、その際、第 1 次調査を行った茶院遺跡を茶院 A 遺跡に改称している。

昭和 48 年以降、県教委、中之口村教育委員会、新潟市教育委員会がそれぞれ発掘調査を実施しており、遺跡の統合があったため、調査履歴の把握が複雑になっている。これまで実施された調査履歴を第 1 表に整理する。位置図は図版 2 のとおりである。

第 1 表 茶院 A 遺跡及び打越地区ほ場整備事業に関連する発掘調査履歴

遺跡名	茶院A遺跡通算調査回数	経営体育成基盤事業打越地区に伴う調査回数	調査期間	調査種別	調査原因	調査主体	調査担当	調査面積 (m ²)	文献	新潟市調査番号	主な調査成果
茶院	1		昭和48(1973)年 11.12～12.19	本発掘調査	北陸自動車道建設	新潟県教育委員会	新潟県教育委員会 本間信昭	1,260	新潟県教育委員会 1976『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 茶院遺跡』	1973001	須恵器・土師器出土
昭和54(1979)年7月 遺跡カードを作成する際に「茶院」と古銭出土地の「茶院B」「茶院C」に分割											
茶院	2		平成8(1996)年 4.8～4.10	確認調査	工場拡張	中之口村教育委員会	新潟県教育委員会 小田由美子	360		1996104	土師器出土
平成8(1996)年 遺跡カードを更新する際に「茶院」を「茶院A」に変更											
			平成27(2015)年 10.26～11.12	試掘調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 潮田憲幸	416		2015161	珠洲焼出土 繁ノ木原遺跡新発見
茶院A			平成28(2016)年 10.3～11.21	確認調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 潮田憲幸	1,719		2016180	仲歩切遺跡範囲拡大 宮下遺跡新発見
茶院A			平成29(2017)年10.23～ 平成30(2018)年1.22	確認調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 潮田憲幸	556		2017235	西遺跡・宮上西遺跡・宮上南 遺跡・狐塚遺跡新発見
茶院A	3	1	平成30(2018)年 10.1～11.20	確認調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 金田拓也	946.69		2018170	高六遺跡を統合し、範囲拡大 茶院A遺跡の時代に古墳・中 世を追加
平成30(2018)年 遺跡カードを更新する際に茶院A遺跡に高六遺跡を統合し、範囲拡大											
茶院A			令和1(2019)年6.3～ 令和2(2020)年3.17	工事立会	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 諫山えりか		新潟市文化財センター 2021『新潟市文化財 センター年報 第8号』	2019127	井戸・土坑 須恵器・土師器・中世土師器・ 木製品(丸木弓・田下駄)出 土
茶院A	4	2	令和1(2019)年 11.11～12.9	確認調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 諫山えりか	510		2019175	囲内遺跡新発見
令和元(2019)年 遺跡カードを更新する際に茶院A遺跡に茶院C遺跡を統合し、範囲拡大											
茶院A			令和2(2020)年10.5	確認調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 牧野耕作	38.15		2020177	囲内遺跡確認調査 須恵器・土師器・石製品出土
茶院A	5	3	令和3(2021)年 10.6～10.7	確認調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 牧野耕作	57.17		2021176	遺構・遺物無し
茶院A			令和3(2021)年10.4～ 令和4(2022)年5.24	工事立会	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 諫山えりか			2021199	須恵器・土師器出土
茶院A	6	4	令和4(2022)年 7.20～11.18	本発掘調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市文化財セン ター 今井さやか	2,530.8	新潟市教育委員会 2024『茶院A遺跡』	2022002	
茶院A			令和4(2022)年10.17～ 令和5(2023)年3.24	工事立会	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市歴史文化課 牧野耕作			2022167	須恵器・土師器・石製品出土
茶院A	7	5	令和5(2023)年 6.20～11.22	本発掘調査	県営ほ場整備事業	新潟市教育委員会	新潟市文化財セン ター 今井さやか	2,086	[本書]	2023001	

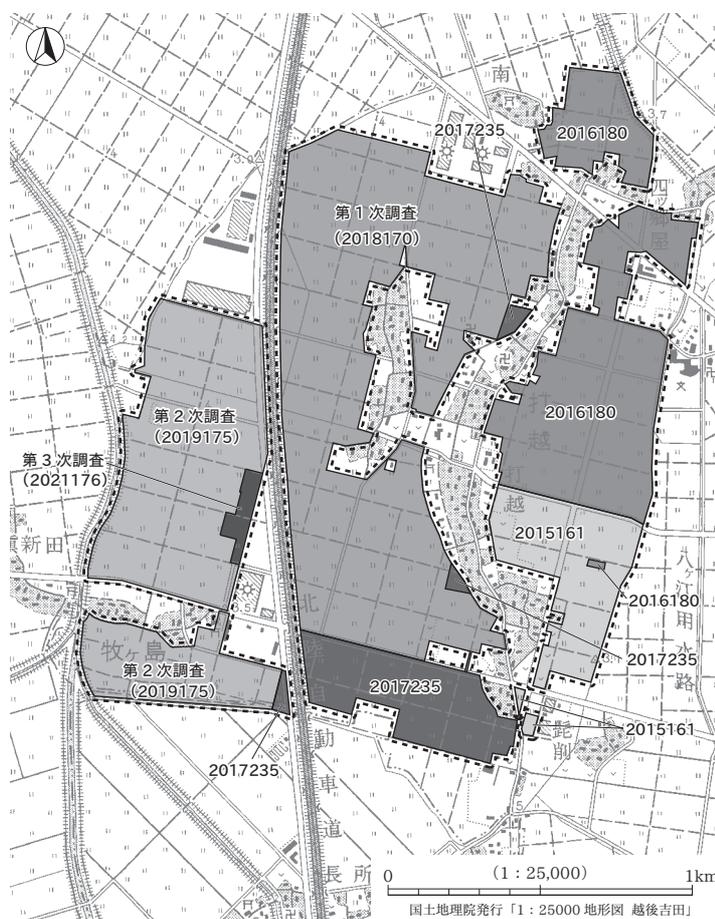
第2節 発掘調査に至る経緯

西蒲区打越地区で計画されていた経営体育成基盤事業（打越地区）（対象面積 192.2ha、以下「県営ほ場整備事業（打越地区）」という）に伴い、新潟市歴史文化課は、平成 27 年から遺跡の有無を確認する試掘・確認調査を順次行った（図版 2・第 1 図）。打越地区での試掘・確認調査は令和 3 年までのべ 7 回行われ、その結果、新たに繁ノ木原遺跡、宮上遺跡、宮上西遺跡、宮上南遺跡、西遺跡、狐島遺跡、団内遺跡の 7 遺跡を周知化した。

県営ほ場整備事業打越地区に伴う試掘・確認調査のうち、茶院 A 遺跡にかかる確認調査は平成 30 年度が最初である（茶院 A 遺跡第 3 次調査・打越ほ場関連第 1 次調査）。この確認調査で、古墳時代・中世の遺物が出土したことから、遺跡の時代に古墳・中世を追加した。この他、茶院 A 遺跡の北東への範囲拡大に伴い、高六遺跡と茶院 C 遺跡を茶院 A 遺跡に統合した。

茶院 A 遺跡の本発掘調査対象範囲については、茶院 A 遺跡第 3 次調査（打越ほ場関連第 1 次調査）の確認調査結果を基に新潟地域振興局巻農業振興部（以下、巻農業振興部）と新潟市歴史文化課で遺跡の取り扱いについて協議を重ね、平成 11 年の新潟県教育委員会教育長通知「発掘調査の要否の判断基準について（通知）」の基準により、保護層が確保できない用排水管布設部分について 3 か年に分けて本発掘調査を行う事で合意した。初年度の令和 4 年度は 2,530.8m² を調査し、掘立柱建物 2 棟を含む 8 世紀後半を主体とする集落跡を確認した〔今井ほか 2024〕。

令和 5 年度調査地については、令和 5 年 3 月 3 日付け新振巻農第 671-2 号で文化財保護法第 94 条の第 1 項の通知が提出され、令和 5 年 3 月 17 日付け文第 1911 号の 2 で新潟県知事から新潟地域振興局長あてに、事業実施に先立ち用排水管及び排水路について発掘調査を実施するよう勧告が出された。それを受け新潟地域振興局長から新潟市教育委員会教育長（以下、「市教育長」という）あてに令和 5 年 3 月 27 日付け新振巻農第 751 号で本発掘調査の依頼が提出され、令和 4 年度中に受諾の回答を送付した。なお、遺跡内であっても掘削幅が 1m 未満の工事、保護層が確保できる一部の排水路については、工事立会で対応することとした。その後、調査開始時期（大豆耕作開始後）や借地などについて巻農業振興部と詳細な協議を重ね、令和 5 年 6 月 20 日付け新歴 F 第 1 号の 4 で、市教育長から新潟県知事宛に文化財保護法第 99 条第 1 項による発掘調査の通知を提出し、本発掘調査に着手した（第 7 次調査）。調査終了後、令和 5 年 12 月 27 日付け新歴 F 第 1 号の 6 で終了報告を市教育長から新潟県知事あてに提出した。



第 1 図 経営体育成基盤整備事業打越地区に伴う試掘・確認調査範囲図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置と地理的環境 (第 2 図)

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置する。越後平野は阿賀野川や信濃川をはじめとする多くの河川により形成された沖積平野で、海岸部は砂丘地帯、南西側は角田・弥彦山塊、南東側は新津丘陵に囲まれる。大規模な海岸砂丘と砂丘間低地、氾濫原と自然堤防で構成され、砂丘列と自然堤防に囲まれるようにして後背湿地が広く分布するのが特徴である。後背湿地は水はけが悪く、西蒲原地域では、周囲よりさらに低い部分に湛水してできた大潟・田潟・鎧潟など多くの潟湖や湿地が形成された。潟は、増水時に遊水池としての役割を果たしたほか、コイ・フナ・ナマズなどの漁業やカモやガンなどの水鳥の狩猟も盛んであった〔新潟市 2009・新潟市潟環境研究所 2018〕。しかし、これらの潟は江戸時代後期文政 3 (1820) 年の新川開削や戦後 1958～1968 年の鎧潟干拓工事により消滅した。現在、遺跡周辺は一部が水田として利用されているが、これは江戸時代から行われた数々の排水事業と昭和 30 年代に行われた耕地整理事業によって形成された景観である。次に新潟市の気候について述べる。平均気温は 13.5℃で夏は高温多湿、冬は冬型の気圧配置の影響で降雪があるが、最深積雪の平均値は 36cm と多くない〔新潟地方気象台 2010、東京管区気象台 2015〕。近年筑波大学の研究で、新潟市の北西に位置する佐渡島の陰雪効果が立証された。佐渡島があることにより風下の水蒸気・雲水・雲氷の量が減ることで、新潟市を含む地域の雪が少ないという〔筑波大学計算科学研究センター 2023.7.27 ウェブリリース〕。このように多雪地域とされる日本海側に位置しながらも、比較的冬も過ごしやすい気候にあることは県内で最も人口の多い地域である理由の一つであろう。

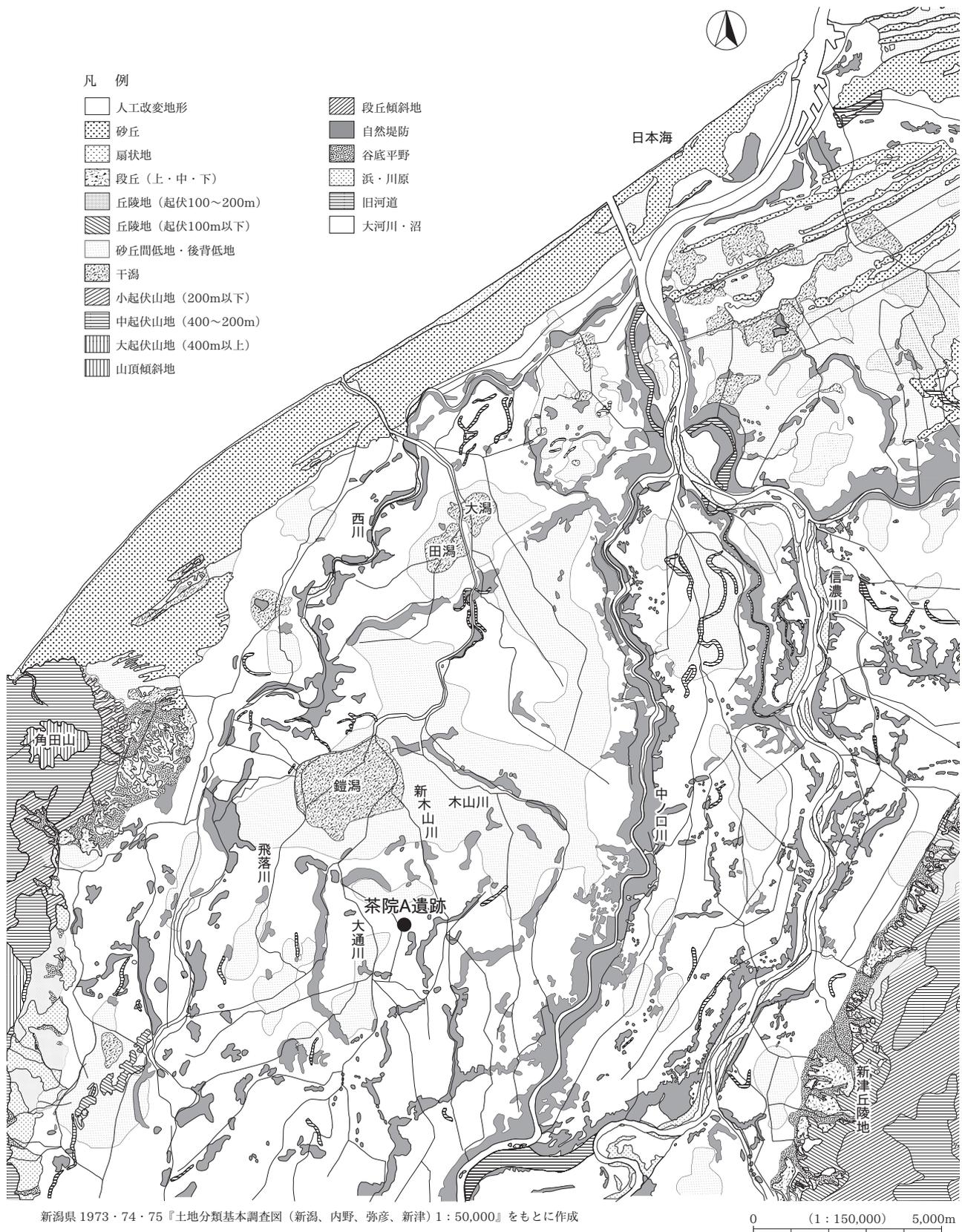
今回調査した茶院 A 遺跡は、信濃川左岸に広がる沖積地の南北に細長い自然堤防上に立地する。標高は 2.0～2.4m である。同じ自然堤防上には、北東に道上集落、南西に長所集落(燕市)があり、いずれも大通川を由来とする自然堤防と推測される。正保 2 (1645) 年の越後国絵図では、名称の記載はないものの、大通川と考えられる河川が現在の燕市砂子塚で西川から分流し、旧鎧潟に注いでいる。また、遺跡の東約 6km には、信濃川支流の中ノ口川がある。中ノ口川・西川は西蒲原の重要な用排水を担い、鉄道輸送にとって替わられるまで、新潟湊と白根・三条・長岡(中ノ口川)内野・巻・吉田・与板(西川)を結ぶ舟運の内陸航路であった。

第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境 (図版 1、第 2 表、第 3～5 図)

ここでは、周辺の縄文時代から中世(鎌倉・室町時代)の遺跡分布状況について概観する。

縄文・弥生時代 遺跡分布は図示していないが、この時期の遺跡は角田・弥彦山麓、砂丘列を中心に分布している。沖積地での確認例は極端に少ないが、中ノ口川左岸の味方排水機場遺跡では、排水機場建設工事の際に地下約 19m 地点から縄文時代中期後葉から後期前葉の土器が出土し〔寺崎・高浜ほか 2000〕、越後平野の地盤沈降を示す事例として注目される。弥生時代においては、砂丘上の六地山遺跡・緒立 B 遺跡でまとまった遺物の出土が見られる。縄文・弥生時代において越後平野の沖積地は、生活痕跡はあるものの、集落として大規模に利用されたとは考え難い状況である。

古墳時代 遺跡分布は、角田山麓が最も多く、菖蒲塚古墳(12)・山谷古墳(18)、集落遺跡は南赤坂遺跡(10)、御井戸 B 遺跡(17)がある〔相田 2003〕。沖積地でも一定数の遺跡が確認でき、地下 2.8m から古墳時代前期の高杯が出土し、萱中遺跡(26)〔相田 2024〕、仲歩切遺跡(27)〔龍田 2016・2019〕や本遺跡(28)でも出土量は



第2図 茶院A遺跡周辺地形分類図

多くないが、古墳時代中期から後期の土器が出土している〔今井 2024〕。

古代（飛鳥・奈良・平安時代）茶院 A 遺跡は、古代の行政区分では蒲原郡に属していた。郡域はおおむね三条市以北から阿賀野川以西の越後平野と推定され、南北朝期に蒲原郡が旧沼垂郡を含む領域に拡大するまでは大幅な変更はないと考えられている。10 世紀に成立した『倭名類聚抄』によると、蒲原郡内には「日置・桜井・勇礼・青海・小伏」の 5 郷が存在したとされる。これらの所在については諸説あり、小林昌二氏の説に拠れば「小伏郷」は三条市又は五泉市付近、「桜井郷」は弥彦村付近、「勇礼郷」は三条市付近、「青海郷」は加茂市付近に比定されている。「日置郷」については、記載順が反時計回りになる傾向から信濃川河口付近と推定している〔小林 2010〕。その後、下新田遺跡から「日置女」と記された墨書土器が出土したことから〔龍田ほか 2015〕、この地域周辺が「日置郷」の範囲であったと考えられる〔相澤 2023〕。

遺跡の分布について述べる。7 世紀、飛鳥時代になると大島橋遺跡（80）や、大通川の上流の燕市大橋遺跡（189）などで遺物が定量出土しており、沖積地において本格的に集落が形成され始めた様相が窺える。

続く奈良時代になると沖積地で遺跡数が増加する。初め頃に旧鎧瀨周辺の島灘瀨遺跡（25）〔遠藤ほか 2016〕・下新田遺跡（138）が出現し、次いで仲歩切遺跡、大通川の自然堤防上には古辻遺跡（168）（遺跡範囲がまたがる燕市では助次郎遺跡（169）として周知化）・奈良時代のカマドを伴う竪穴建物が見つかった燕市小諏訪前遺跡（279）・三角田遺跡などがある。平安時代になると沖積地の遺跡数はさらに増加し、本遺跡の北側では、「郡」墨書土器や円面硯・帯金具が出土した釈迦堂遺跡（74）〔江口ほか 2000〕・五之上曾根上遺跡（120）・「川合（川井）」墨書土器や大型掘立柱建物が出土した林付遺跡（136）〔相田ほか 2012〕などが存在する。また、本遺跡の南側では、燕市佐渡山の中組遺跡（175）で緑釉陶器の椀・皿や墨書土器が出土した〔吉田町 2000〕ほか、燕市江添 E 遺跡（181）では石鏝が出土している〔布施・平岡 2000〕。

沖積地以外では、角田山東麓に前平野須恵器窯跡（72）や重稲場窯跡（83）といった生産遺跡が出現する。また、内水面を利用した官衙関連遺跡である的場遺跡（1）・緒立 C 遺跡（2）は砂丘上に、倉庫群と考えられる掘立柱建物や「津」の墨書土器が出土した四十石遺跡（5）は埋没した砂丘上に立地する。

9 世紀における遺跡数増加の背景として、沖積地の開発が進み集落数（人口）が増加した点のほか、大規模な遺跡が解体され小規模分散化した側面も指摘されている〔春日 2000〕。

中世（鎌倉・室町時代）中世の当該地域は蒲原郡内の弥彦荘に属す。南北朝から室町時代には石瀬（旧岩室村）に本拠地を置く小国氏の影響下にあり、戦国時代末期には上杉氏の支配下に置かれる〔山口 1994〕。集落跡は山麓、砂丘上、沖積平野の微高地に分布し、発掘調査された事例として、いずれも信濃川左岸の沖積平野微高地に立地する小坂居付遺跡（224）と馬場屋敷遺跡がある。小坂居付遺跡では、洪水堆積層を間層に挟んだ 5 時期の水田跡と溝に囲まれた屋敷地が見つっている。水田からは稲の品種名「しろわせ」と書かれた種札木簡が出土した。出土遺物から 13 世紀と考えられる〔佐藤ほか 2012〕。さらに信濃川に近い南区白井には、洪水堆積層に埋もれ、建ったままの状態の柱や床材が検出されたほか、正応 6（1293）年の記載がある木簡（萱刈札）が出土した馬場屋敷遺跡がある〔川上・遠藤 1983・渡邊ほか 2021〕。建武 2（1335）年、阿賀野川以北の戦を皮切りに越後における南北朝の動乱が始まった。この動乱を経て越後国は守護上杉氏・守護代長尾氏の支配下となった。周辺の自然堤防上に立地する中世城館としては、巻館跡（218）、館ノ腰（239）、和納館跡（247）、西川大関館跡（213）等がある。このうち本調査が行われたのは和納館跡のみで、二重に巡る堀の一部が確認された。堀の内側の館からは井戸や柱穴が多数確認され、珠洲焼や中世陶器のほか、漆器椀をはじめとする多数の木製品が出土した〔川上 1997〕。茶院 A 遺跡周辺では、打越集落の中に一辺 80m の方形の縄張りが打越館跡（252）として周知化されている。昭和 50 年代に撮影された写真には、土塁の残存する様子が見られるが〔本間・家田 1976〕、現在は見る事ができない。発掘調査が行われた 15 世紀以降の遺跡としては、大通川左岸の自然堤防上に立地する馬堀上組遺跡（280）がある。直径 4m の大型井戸 2 基と掘立柱建物がみつかるとともに、白磁皿や漆器椀が出土している〔長谷川 2025〕。馬堀地区の北東側には、室町時代終わりごろから江戸時代のごく初期まで営まれた寺裏遺跡（237）

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

[長谷川・遠藤ほか2024] がある。

第2表 茶院A遺跡の周辺遺跡（古墳～中世）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	的場	48	病院脇	95	平田	142	道上荒田	189	大橋（燕市）	236	下和納
2	緒立C	49	北浦原B	96	猿田今山宮	143	万坊江	190	池田（燕市）	237	寺裏
3	緒立A	50	北浦原A	97	桜田	144	宮下	191	弥五郎屋敷A（燕市）	238	河井前
4	緒立B	51	上谷内B	98	寛越	145	長善寺	192	熊ノ田（燕市）	239	館ノ腰
5	四十七石	52	上谷内A	99	岩室曾根	146	福島土手内	193	内野潟端A	240	馬堀中組
6	前田	53	沼	100	長島天神	147	上向	194	内野潟端B	241	園ノ内
7	大藪	54	南浦原	101	狐塚	148	狐島	195	高山	242	高橋
8	浦田	55	坂田	102	大縄	149	西	196	高山西	243	三田・新谷
9	諏訪山	56	大原	103	郷屋	150	宮上西	197	高山前田	244	童子
10	南赤坂	57	山田屋敷	104	新道	151	宮上南	198	沢田	245	上町
11	越王	58	原付	105	飛落	152	羽黒西	199	本地	246	和納八幡前
12	菖蒲塚古墳	59	清水上	106	赤縮砂山	153	姥島	200	笠木堤	247	和納館跡
13	角田浜妙光寺山古墳	60	代官屋敷	107	一心作	154	早稲田	201	木場城跡	248	童子西
14	桜本	61	下稲場	108	潟頭新田	155	島田	202	伝念野毛	249	原館跡
15	舟山神社A・B	62	権作	109	ハガヤバ	156	梅田	203	木山水田中古銭出土地	250	長潟
16	御井戸A	63	イタチバラ	110	おおよさま屋敷	157	水戸下	204	山崎水田中古銭出土地	251	二丁下
17	御井戸B	64	長道	111	住吉神社脇	158	拾参番割	205	藤蔵新田	252	打越館跡
18	山谷古墳	65	定口	112	高畑	159	見対（燕市）	206	興業古墓	253	真木江向
19	山谷	66	大沢	113	地蔵腰	160	長所天神（燕市）	207	兵衛塚	254	宇智古志神社
20	神明社	67	上堰潟A	114	馬堀荒田	161	浦田乙（燕市）	208	浦稲場1～5号塚	255	モスの塚
21	新谷	68	上堰潟B	115	三角耕地	162	浦田川東（燕市）	209	松野尾屋敷添	256	茶院B
22	観音山古墳	69	赤坂	116	四ッ割	163	居畑（燕市）	210	二ノ沢	257	宮上
23	高島	70	タテ	117	潟前	164	香語田（燕市）	211	布目館跡	258	繁ノ木原
24	岩室神明社	71	さかしの	118	漆山上田	165	川上（燕市）	212	上の原	259	河間八幡
25	鳥灘瀬	72	前平野須恵器窯跡	119	沼下	166	上徳（燕市）	213	西川大関館跡	260	福島
26	萱中	73	下田東	120	五之上曾根上	167	桑橋（燕市）	214	太田	261	東船越館
27	仲歩切	74	釈迦堂	121	味方曾根下	168	古辻（燕市）	215	松崎屋敷	262	長田
28	茶院A	75	桑山前田	122	ヅギリ	169	助次郎（燕市）	216	元宮	263	本行寺
29	圃内	76	中才	123	弥左エ門	170	横地（燕市）	217	真田	264	島田B
30	緒立城館跡	77	三町歩	124	土手内	171	川下A（燕市）	218	巻館跡	265	円明寺跡
31	細越	78	漕上り	125	樋切	172	川下B（燕市）	219	馬塚（観音山）	266	長所（燕市）
32	六地山	79	なえびき橋	126	骨田	173	西横（燕市）	220	石塔島	267	僕田（燕市）
33	道下	80	大島橋	127	与平潟	174	野神屋敷（燕市）	221	下城跡	268	長所館跡（燕市）
34	尼池	81	峰岡城山	128	六十歩下	175	中組（燕市）	222	上城跡	269	浦谷地（燕市）
35	茨曾根	82	天神C	129	三條田	176	稲葉（燕市）	223	芋畑	270	佐渡山城跡（燕市）
36	木山	83	重稲場窯跡	130	西前田	177	十二田（燕市）	224	小坂居付	271	雀森（燕市）
37	ヤマサキ	84	ケカチ堂	131	味方用水路	178	五人割（燕市）	225	前	272	江添B（燕市）
38	茶畑	85	大間潟	132	千日	179	江添C（燕市）	226	浦廻	273	北小脇（燕市）
39	屋敷添	86	ヤチ	133	本田	180	江添D（燕市）	227	永安寺の五輪塔群	274	館屋敷（燕市）
40	屋敷浦	87	峰岡上町	134	浦A	181	江添E（燕市）	228	天神	275	糺（燕市）
41	巳ノ明	88	番場西	135	家掛	182	江添F（燕市）	229	長島館跡	276	福蔵寺（燕市）
42	ツル子C	89	七十刈	136	林付	183	小川（燕市）	230	寺尾敷石塔	277	鴻ノ巢城跡（燕市）
43	ツル子B	90	堰場B	137	浦B	184	七嶋（燕市）	231	泉性寺跡	278	本町城跡（燕市）
44	吹荒地	91	下町	138	下新田	185	堅割（燕市）	232	夏井経塚	279	小諏訪前（燕市）
45	ツル子A	92	舟戸上田B	139	兵蔵	186	三方口（燕市）	233	矢根五郎屋敷	280	馬堀上組
46	赤塚神明社	93	クリヤ潟	140	六枚田	187	西ノ神（燕市）	234	金丸		
47	荒所B	94	堰場A	141	堤	188	鴻ノ巢大坪（燕市）	235	下和納寺跡		



国土地理院 新潟・新津・内野・弥彦 1/50,000→1/100,000 に加筆

0 (1:100,000) 4,000m

第3図 茶院A遺跡周辺の遺跡分布図(古墳)



第4図 茶院A遺跡周辺の遺跡分布図(古代)



第5図 茶院A遺跡周辺の遺跡分布図(中世)

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査

経営体育成基盤事業（打越地区）に伴う試掘・確認調査は、平成27年度から令和3年度までに事業全区域（2,243.8ha）に対し行っている（図版2）。調査面積は平成27年度に416m²、平成28年度に1,719m²、平成29年度に556m²、平成30年度に946.69m²、令和元年度に510m²、令和2年度に38.15m²、令和3年度に57.17m²であり、7か年で計4,243.01m²を調査した。調査は、バックホーで表土から徐々に掘削した後、人力により精査を行い、遺構・遺物の有無と土層堆積状況を記録した。トレンチの大きさは、おおむね2.0×3.0mで、調査の深さは用排水路・農道が予定されている地点は2.0m、水田面工事の地点は1.0mとした。なお、いずれのトレンチも調査後には、耕作機械の空転防止のため、川砂を30cmの厚さで耕作土直下に入れて復旧している。

今回の調査地点は、旧高六遺跡の範囲で、平成30年度の確認調査（第3次調査）の結果、茶院A遺跡に含まれた場所である（第7・8図）。4区は現在の集落に最も近い調査区で、413TでⅥ層とⅦ層から古代の土器が出土している。また、428Tでは、Ⅶ層でタテ型の^{うけ}釜が出土している（第6図）。全体的に遺物包含層（Ⅶ層）の標高が1.0～1.5mと深い位置で確認されている。5区は420Tが地表面の標高2.0m前後で最も高く、西へ行くほど現地表面も包含層（Ⅶ層）も標高が1.0～1.5mと下がっている。420・421Tの各トレンチでⅦ層から古代の遺物が出土している。6区も5区同様に西へ行くほど標高が低くなり遺物も出土しない。409・411・414Tの3か所で遺構・遺物が確認された。特に411Tでは包含層と遺構確認面が複数あったため、部分的に文化層が複数あることが想定された。411Tは出土遺物も多く、須恵器壺蓋（第9図1）や無台杯（第9図5）、土製品土錘（第9図6）などが出土している。なお、遺構や遺物の出土がなくても遺物包含層相当であるⅦ層が確認されたトレンチについては、遺跡範囲とし本調査対象とした。



第6図 428T タテ釜出土状況

また、試掘・確認調査の結果、遺跡が見つかった場所については歴史文化課と事業者で協議を行い、掘削幅が1m未満の工事および、掘削が遺跡に影響を及ぼさない深さの工事については、掘削時に工事立会を行った。工事立会は耕土調査と仮排水路工事・6号排水路で行い、それぞれ土層の記録と遺物の採集を行った。

第2節 本発掘調査

A 調査方法

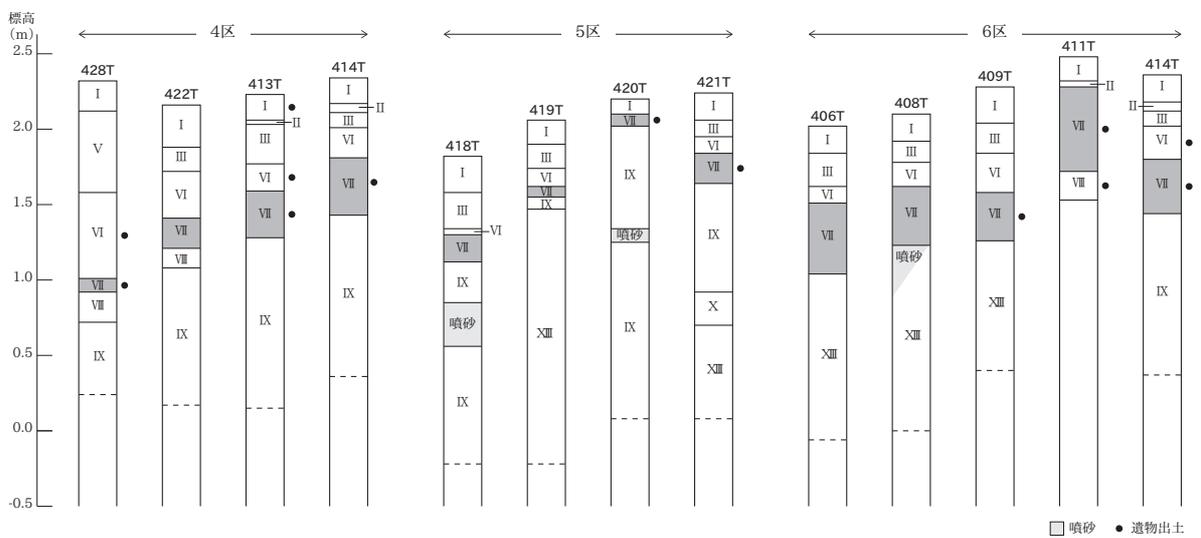
1) グリッドの設定

茶院A遺跡は複数年の発掘調査が予定されていたため、遺跡範囲全体を網羅するようにグリッド設定を行った。なお、グリッド設定において原点基準を1A-1A杭とし、X座標193000.000、Y座標38300.000、（緯度：37°44'18"5993 経度：138°56'04"4212）に設定し、座標値には平成23年の東日本大震災に伴う改定後の三角点・水準点成果（測地成果2011）を採用している。

この原点基準より、平面直角座標系第Ⅷ系座標軸を用いて100mの方眼を組み、これを大大グリッドとした。大大グリッドの名称は北西隅の原点基準1A-1Aを起点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。この大大グリッドに10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。

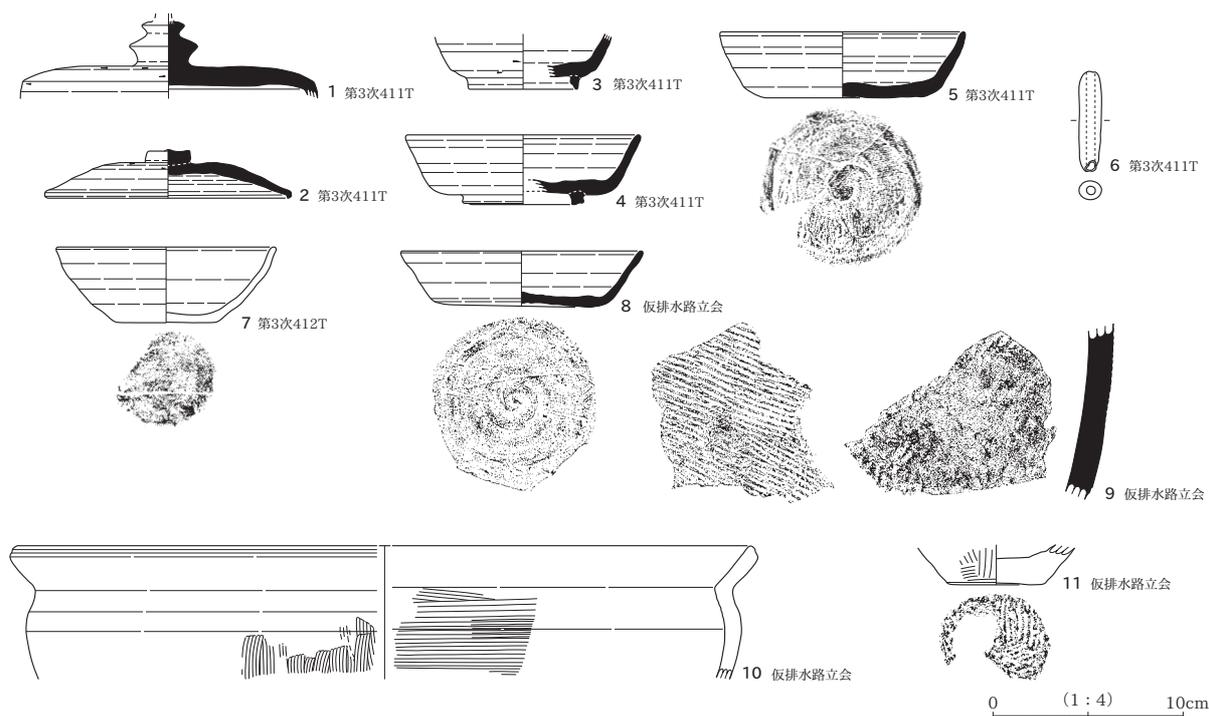


第7図 確認調査（第3次調査）トレンチ位置図と工事立会遺物採集位置



第8図 確認調査（第3次調査）土層柱状図（調査対象範囲のみ抜粋）

第2節 本発掘調査



第9図 確認調査（第3次調査）・工事立会出土の遺物

第3表 確認調査（第3次調査）・工事立会出土土器・土製品観察表

No.	出土位置 トレンチ	層位	種別	器種	法量 (cm)			胎土		色調	製作痕・手法				残存率		備考		
					口径	底径	器高	状態・含有物	分類		外面	内面	底面	回転	口縁	底部			
1	411T	VII	須恵器	壺蓋				精	石・長・白	B	灰	ロクロナデ, ロクロケズリ	ロクロナデ, ナデ			右		自然軸	
2	411T	VII	須恵器	杯蓋	12.6		2.6	精	石・長・白	C	灰	ロクロナデ, ロクロケズリ	ロクロナデ後ナデ, ロクロナデ				2		
3	411T	VII	須恵器	有台杯		5.6		精	石・長・白	B	灰	ロクロナデ, ロクロケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り			12		
4	411T	VII	須恵器	有台杯	12.4	6.4	3.7	普	石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	右	9	18	自然軸	
5	411T	VII	須恵器	無台杯	12.6	8.3	3.5	精	石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	13	34		
6	411T	VII	土製品	土錘	5.3	1.2	1.0	精	石・長・角・海		浅黄	ナデ							
7	412T	VII	土師器	無台椀	11.4	5.2	4.0	普	石・長・角		にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	3	28		
8	仮排水路		須恵器	無台杯	12.55	9.2	3.0	普	石・長・白		灰白	ロクロナデ, ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	右	4	36	2022167立会	
9	仮排水路		須恵器	甕			(9.3)	普	石・長・白		黄灰	タタキメ	当て具(同心円)					内外面摩耗、砥石として使用したか 2022167立会	
10	仮排水路		土師器	鍋	38.6		(7.0)	普	石・長・白		にぶい橙	ロクロナデ, ハケメ	ロクロナデ, カキメ				1	2022167立会	
11	仮排水路		土師器	小甕		5.2	(2.2)	普	石・長・雲・角		灰白	ハケメ	ナデ	ハケメ				24	内外面表面剥落 2022167立会

大グリッドも大大グリッド同様の表示方法とした。大グリッドをさらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し「3H-2C2」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。本書で扱う調査区全体のほぼ中央 7F-6F1 杭 (X座標: 192350.000、Y座標: 38850.000) で南北方向を座標北の0度0分0秒とし、真北方向角は-0度16分11秒、磁北は真北に対して8度24分西偏する。

第7次調査(4・5・6区)の3地点の座標は次のとおりである。

8F-2H1 (4区)

測地成果 2011 (X座標: 192290.000、Y座標: 38870.000、緯度: 37° 43' 55" 4824、経度: 138° 56' 27" 5665)

真北方向角は-0度16分12秒、磁北は真北に対して8度23分西偏

7E-4H1 (5区)

測地成果 2011 (X座標: 192370.000、Y座標: 38770.000、緯度: 37° 43' 58" 0926、経度: 138° 56' 23" 4977)

真北方向角は-0度16分9秒、磁北は真北に対して8度24分西偏

8E-10I1 (6区)

測地成果 2011 (X座標: 192210.000、Y座標: 38780.000、緯度: 37° 43' 52" 9012、経度: 138° 56' 23" 8754)

真北方向角は-0度 16分 9秒、磁北は真北に対して8度 23分西偏

2) 調査方法

- ①表土除去：確認調査および令和4年度の調査結果から、管路である4区と6区では、調査区幅1.8mに対して深さが1.0mあり、安全のために壁面に勾配をつけ、遺物の出土に注意しながらバックホーにより表土を除去した。旧自然堤防が想定されているところ以外では、Ⅶ層からの遺物出土が少ないと予想されたため、上層確認面(Ⅷ層)まで、重機による掘削を数cmの厚さに切り替えて掘り下げた。前述したように、掘削幅1.8mと狭く、安全勾配をつけると遺構確認面に到達した時点で、幅が1mに満たない箇所が多くあった。また、調査区の湛水防止のために表土掘削と並行して調査区に土側溝を掘り、2時のポンプで強制排水を行った。
- ②包含層掘削・遺構検出・発掘：重機で表土掘削後、人力で行った。遺物包含層は連続した2層(Ⅶ層・Ⅷ層)であるが、場所によって厚さや表土からの深度が異なった。Ⅷ層上面でジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層掘削及び遺構検出を行った。遺構の発掘は、半裁し覆土の観察・記録後に完掘を行ったが、細長い形状の調査区を分断する溝状遺構や壁面にかかる遺構も多く、覆土の観察・記録と完掘が同時となる場合も多くあった。なお、排土は人力で調査区外へ搬出した。
- ③実測・写真：調査に係る実測・測量はすべて測量業者に委託した。断面実測はすべて写真測量で行い、平面実測はトータルステーションを用いて作成した。遺構断面・平面の写真撮影はデジタル一眼レフ及び35mmカメラを用い、35mmはカラーポジフィルムを使用した。35mmカメラは全体完掘撮影と主要遺構のみに使用した。なお、遺構の全体(俯瞰)写真撮影は、高所作業車による撮影と測量業者による無人航空機(ドローン)での撮影を併用した。
- ④遺物取り上げ：包含層出土遺物は小グリッド単位で取り上げた。遺構出土遺物は、基本的に層位ごとに取り上げを行った。
- ⑤自然科学分析：古環境の復元や資源利用の解明のため、植物珪酸体分析・花粉分析・種実同定・骨貝同定・樹種同定・木製品の放射性炭素年代測定を実施した。分析は専門業者に委託した。

B 調査経過

令和5年6月20日から草刈り、重機搬入路設置、調査区設定などの諸準備を開始。6月26日、調査員と代理人、市担当職員で現地確認を行い、4区北側に耕作中の水田が隣接し、用水路も稼働しており不測の事態を避けるため、4区は稲刈り後に調査に入ることにし、5区・6区を先行して調査する計画をたてた。7月18日から調査員3名体制で5区の調査に着手。表土掘削を重機で行い、人力で土側溝掘削・法面仕上げ・遺構精査を行う。並行して7月25日から6区の調査を開始した。5区・6区ともに西側から調査を行ったが、5区は7F-3Fグリッド、6区は8E-9Hグリッドまで遺構・遺物ともに希薄であった。8月2日に広聴相談課事業の動く市政教室参加の親子19名を受け入れた。参加者には5区の包含層掘削を体験してもらった。8月に入り、連日最高気温が38度の酷暑であったため、8月8日～10日を作業員のみ休みとした。盆休みをはさみ8月16日から調査再開。8月25日5区東端の溝SD48から古墳時代の高杯が出土、6区では東端に中世の遺物を含む溝SD53を確認、5区・6区に下層があることが判明した。8月29日5区上層の調査が終了し、ドローンによる空中写真撮影を行った。6区も搬入口部分を残し、上層を完掘。8月30日4区の調査を開始、支障物の少ない南側から表土掘削を行った。9月1日5区の下層包含層(Ⅷ層)を人力で掘削を行い、順次精査し遺構確認・掘削を開始した。9月26日4区南8F-9Gグリッドおよび5区下層の完掘写真撮影を高所作業車から行った。9月19日、4区北側の表土掘削を開始。10月2日4区中央の幅が最も広い箇所(6F-8G～7F-5Fグリッド)で水田遺構がみつかる。10月14日に市民向けの現地説明会を行い、130名の参加があった。10月16日から6区9F-1D付近の15m区間にかかっていた駐車場出入口を撤去し、未調査のおよそ170m²分の調査を開始。出土する遺物の

第3節 整理作業

量が多いことや砂利が混ぜられていることから、自然堆積ではなく人為的な盛土整地層（地業1層・地業2層）とわかり、人力掘削に切り替える。地業2層上面で遺構精査を行ったところ、木柱が3本並び掘立柱建物であることが想定された。10月25日6区上層の調査が終了し、ドローンによる全景空中写真撮影を行った。撮影後に6区西側から中央部において上層遺構の最終確認を行っていたところ、8E-8E21グリッドで木製品の一部が土側溝開口部から露出しているのを確認した。調査区南壁から飛び出る形で露出していた木製品全体を検出するため、26～27日にかけて南壁法面を上から切り込む形で掘削した結果、木製品は全長約140cmの丸木弓と分かった。この作業と並行して26日から6区下層の調査を開始し、下層においても古代の木柱が複数あることが確認された。

11月8日に6区下層完掘状況空中写真をドローンで撮影し、4・5・6区の調査を全て終了した。また、10月20日に行われた巻農業振興部と市歴史文化課との協議の結果、来年度施工部分の水路工が前倒しとなり、集水桝と水路6.7m²について追加で令和5年度中に本発掘調査を行う事となった。この調査については、地元打越安全協議会に諮ったのち11月22日に実施した。12月13日までに駐車場の盛砂除去含め、鉄板・プレハブ・機材等を撤収した。

最終的な調査面積は、4区上層上端面積804.49m²、下端面積377.05m²。5区上層上端面積646.85m²、下端面積524.00m²、5区下層下端面積268.75m²。6区上層上端面積332.36m²、下端面積298.92m²、6区下層下端面積61.71m²。追加トレンチ上端面積6.74m²、下端面積3.16m²である。合計面積は上層上端面積1,790.44m²、下端面積1,203.13m²、下層下端面積330.46m²である。

C 調査体制

茶院A遺跡の発掘調査の調査体制は以下のとおりである。

平成30年度 第3次調査（確認調査）

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課 事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 小沢昌己、課長補佐 廣野耕造・小島真由美、埋蔵文化財担当係長 朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長 渡邊朋和、主幹 遠藤恭雄）
調査員	金田拓也（歴史文化課 副主査）

令和5年度 第7次調査（本発掘調査）

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課 事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 萬歳真紀、課長補佐 廣野耕造・拝野博一、埋蔵文化財担当係長 遠藤恭雄） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長 村山 明、主幹 朝岡政康）
調査担当	今井さやか（文化財センター 主査）
調査員	長沼吉嗣・竹部佑介（株式会社吉田建設）

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして54箱と大型水槽1箱である。古墳時代の土器、石製品、奈良・平安時代の土器、土製品、石製品、陶器、鎌倉・室町時代の陶器、磁器、木製品、金属製品がある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③遺物の種類別の重量・個体数計測。④接合。⑤報告

書掲載遺物の抽出。⑥実測図・観察表の作成。⑦トレース図作成。⑧写真撮影。⑨割付図作成。⑩版下作成。このうち⑦と⑩は業者に委託してデジタル編集を行った。

2) 遺 構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した 1/20 遺構平面図と写真測量で作成した断面図との校正作業を行った。報告書に掲載する 1/300 平面図、1/100 遺構部分図、個別遺構の平面図と断面図を 1/40・1/80 縮尺で組み合わせたものを測量業者が作成し、デジタルデータとした。

B 整 理 経 過

令和 5 年度の発掘調査と並行して、出土遺物の水洗・注記・種類別の重量計測を行った。現地調査終了後に本格的な報告書作成作業に入り、出土遺物の接合・実測作業と写真・図面整理、遺構平面図の校正、遺物写真の撮影、遺構図版のレイアウト作業を行った。木製品、金属製品の実測図は新潟市で行ったが、それ以外の作業は支援業務委託をした株式会社吉田建設が主体となって行った。遺物のデジタルトレース及び各種図版の作成・編集作業は有限会社不二出版に委託した。自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。また、木製品の写真撮影をビックヘッドに委託した。

令和 6 年度は、遺物図版作成と遺構・遺物の事実記載、木製品以外の遺物の写真撮影を株式会社吉田建設に委託した。令和 7 年度は全体編集を行い、報告書を刊行した。

各年度の整理作業の体制は以下のとおりである。

令和 5 年度

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 萬歳真紀、課長補佐 廣野耕造・拝野博一、埋蔵文化財担当係長 遠藤恭雄） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長 村山 明、主幹 朝岡政康）
調査担当	今井さやか（文化財センター 主査）
調査員	長沼吉嗣・竹部佑介・松井智・中川晃子（株式会社吉田建設）

令和 6 年度

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 夏目久義）
所管課事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 萬歳真紀、課長補佐 廣野耕造・阿部和男、埋蔵文化財担当係長 遠藤恭雄） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長 村山 明、主幹 朝岡政康）
整理担当	今井さやか（文化財センター 主査）
調査員	長沼吉嗣・田中万里子（株式会社吉田建設）

令和 7 年度

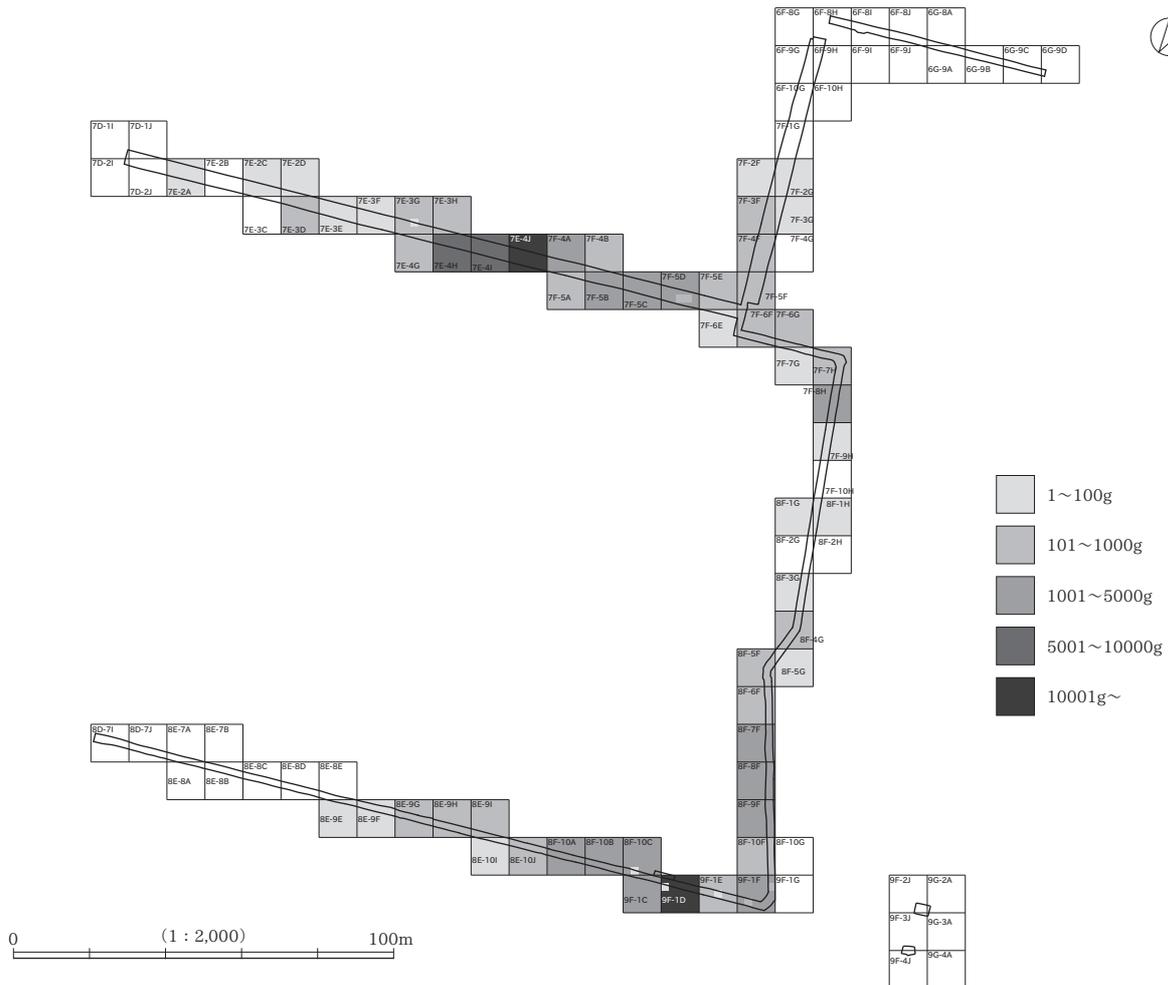
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 夏目久義）
所管課事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長 野澤真里子、課長補佐 廣野耕造・阿部和男、埋蔵文化財担当係長 遠藤恭雄） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長 村山 明、主幹 朝岡政康）
整理担当	今井さやか（文化財センター 主査）
調査員	長沼吉嗣・田中万里子（株式会社吉田建設）

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

茶院 A 遺跡は大通川右岸の自然堤防上に立地し、現在の打越集落に対して西側に位置する。現況は沖積地で水田として利用されている。第7次調査の調査地は、遺跡の中心からやや北側に位置する。本発掘調査地点は、用排水管敷設に伴う路線調査であり調査区が複数に分かれていたため、便宜上北から4～6区と呼称した。

遺物包含層は連続した上下の2層であり、遺構はそれぞれの下面で検出される。ただし、表土直下に遺跡があり間層が消失している箇所もあったため、覆土の色調をもって上層か下層かを判断している場合もある。上層の遺構は標高1.5m以上の箇所に集中しており、その範囲は5・6区をまたがった南北の帯状となり、現在の打越集落と平行する古い自然堤防と考えられる。上層では、掘立柱建物・井戸・溝・土坑・性格不明遺構・樹木列などがあり、最も集落寄りの4区では、水田遺構がみつまっている。下層は5区と6区の一部で掘立柱建物2棟・溝・土坑・水田遺構が確認された。遺構の検出状況と遺跡全体の遺物の出土量の傾向（第10図）から遺跡全体を俯瞰すると、遺構と遺物の検出は調査区中央からやや東寄りに集中しており、前年度調査範囲を含めて広く見ると茶院 A 遺跡は幅80～90mの細長く南北に延びる島状の自然堤防上に形成されたと考えられる。



第2節 層 序

A 基本層序

茶院 A 遺跡の基本層序 (図版 6・7・11・23) は大きく 11 層に分けられる。過去の確認調査結果と第 6 次調査の結果を参考に分層したが、第 7 次調査では第 6 次調査で VIIa 層とした層について、VI 層が堆積過程で VII 層を巻き込んだ漸移層との理解により VI 層に区分を変更し VIb 層とした。II～IV 層は削平されている箇所が大半である。V 層は河川堆積層で 4 区北側のみで確認される。遺物包含層は VII 層と VIII 層である。VII 層は主に古代の遺物を包含していることから、これまでの調査で低湿地帯に繁茂した植物が腐植堆積した古代の遺物包含層として報告してきたが、今回の第 7 次調査では VII 層下で中世の遺構が確認された。VII 層中で中世に属する遺物はほとんど確認できなかったが、中世の遺構や木柱の年代測定結果から VII 層は中世の遺物包含層とした。遺構確認面は、VIII 層上面と IX 層上面であるが、前述のとおり 5 区と 6 区の標高が高い場所については、VIII 層上面が消失しており、IX 層で上層・下層それぞれの遺構を確認した場所がある。

なお、VIIc 層とした層は、均一的でなく小さな凹凸がある堆積で、平面では捉えられなかった水田遺構の可能性が高い。

- 0 層 道路路床 (盛土)
- I 層 水田耕作土・床土含む
- II 層 灰黄褐色粘土質シルト (10YR5/2) 粘性あり・しまりあり。近代の遺物含む。
- III 層 灰色粘土質シルト (7.5Y4/1) 粘性あり・しまりあり。確認調査では近世の遺物包含層とされる層である。4 区北側のみで確認される。
- IV 層 褐灰色粘土質シルト (10YR6/1) 粘性強い・しまりあり。4 区と 6 区の東側のみで確認される。
- V 層 灰色 (10Y6/1) シルトと粘土の互層 粘性なし・しまりあり。未分解有機物 (腐植) や灰砂が互層になっている箇所もある。4 区と 6 区の東側のみで確認される。
- VIa 層 灰色粘土 (5Y6/1) 粘性あり・しまりあり。ごく薄い未分解有機物 (腐植) が層状に混じる箇所もある。
- VIb 層 灰色粘土 (5Y5/1) 粘性あり・しまりあり。湿地環境の堆積層。黒褐色粘土質シルトと薄い互層を成す。堆積過程で VII 層を巻き込んだ漸移層であり、第 6 次調査の VIIa 層に相当する。
- VIIa 層 黒褐色粘土質シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりあり。湿地環境の堆積層。薄い黄灰色粘土と互層。
- VIIb 層 黒色粘土質シルト (10YR1.7/1) 湿地環境の堆積層 分解・土壌化が進んでいる。〔中世の遺物包含層〕
- VIIc 層 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 湿地環境の堆積層 青灰色粘土ブロックを含む。〔水田遺構の可能性〕
- VII d 層 黒色粘土質シルト (10YR1.7/1) 湿地環境の堆積層 未分解有機物層。遺物はほぼ出土しない。
- VIII 層 灰色シルト (5Y5～6/1) 粘性あり・しまり強い。未分解有機物 (腐植)・炭化物少量含む。〔古代の包含層・上層確認面〕
- IX 層 灰色粘土質シルト (5Y5/1) 粘性あり・しまり弱い。未分解有機物 (腐植) を少量含む。〔古代の下層確認面〕
- Xa 層 灰色粘土 (7.5Y4/1) 粘性強い・しまりあり。
- Xb 層 灰色粘土 (7.5Y4/1) 粘性強い・しまりあり。未分解有機物 (腐植) を含む。白色塊を多く含む。
- XI 層 灰色粘土 (5Y5/1) 粘性強い・しまり強い。未分解有機物 (腐植) を少量含む。確認調査で古墳時代の包含層とされるが、今回の調査では、当該層は確認されなかった。

B 地 業

6 区の東端では軟弱な地盤を居住域として拡張するためか、VII 層・VIII 層由来の土に粗砂・小礫を混ぜて敷ならし圧縮・積層した地盤改良が施されていた。この盛土層を色調の違いで地業 1・2 と呼称した。

地業1は、15世紀の白磁が出土していることから、15世紀以降の盛土であると考え、また、Ⅶ層との直接的な切り合い関係は見つけられなかったが、Ⅶ層を由来とした土であることから、Ⅶ層より新しい層と考える。また、地業2については、Ⅷ層を由来とした土で、13世紀の溝SD53に切られていることから年代的に13世紀かそれよりやや古いものとする。

C 水 田 遺 構

4区全域および5・6区の西側、標高1.1～1.3mの低地部分に広がる。

これまでの茶院A遺跡の調査で、水田遺構は確認できなかったが、4区7F-5Fグリッドで表土掘削を行った際、Ⅶ層土（黒褐色シルト）が帯状に盛り上がっているのを検出した。そのⅦ層土の盛り上がり方を調査区断面で精査したところ、水田畦畔であり、その両脇は水田面であることがわかった。また、その畦畔（畦畔26）の断面では、水田耕作土の下に地山であるⅩ層が畦畔とともに掘り残される擬似畦畔が確認された（図版9）。これによって、過去の茶院A遺跡調査による記録で散見されたⅦ層の盛り上がりについても、水田畦畔であった可能性が高まった。

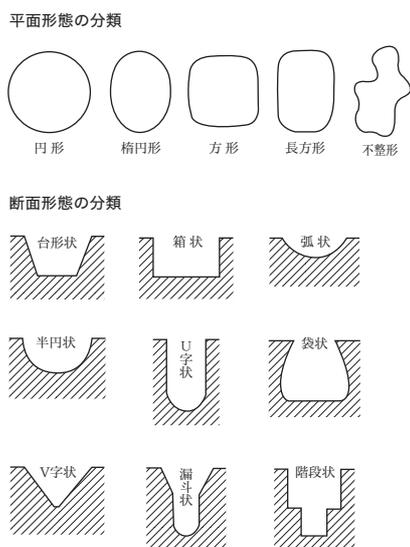
第3節 遺 構

A 遺 構 の 概 要

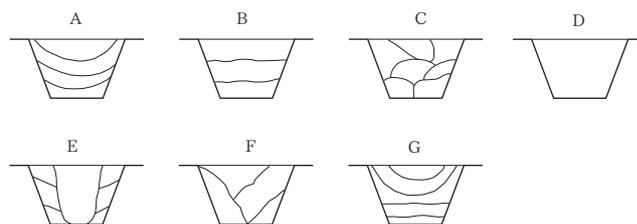
今回の調査で確認された遺構は、上層が中世、下層が古代に属すると考えられる。一部、Ⅶ層より上から掘りこまれた中世以降の遺構がある。本遺跡では古代の遺物が非常に多く、上層の遺構であっても、古代の遺物しか出土しない傾向にある。このため、後述する覆土の色調を基に遺構の大まかな時期を決定した。

各遺構の記述は、4区・5区・6区の上層・下層の順とし、さらに掘立柱建物・井戸・土坑・溝・性格不明遺構・ピットの順番で記述する。なお、遺構番号は上層・下層、遺構の種別に関係なく区ごと、確認順に通し番号を付した。ただし、遺構番号を付した後、調査により遺構でなくなったものは欠番としている。

遺構の平面形態及び断面形態、堆積状況の分類については、〔加藤1999・荒川2004〕で示された分類基準に倣った（第11・12図）。なお、遺構の計測値等は別表1の遺構計測表において、平面形態や規模・深度が不明な場合は「-」で示した。



第11図 遺構の平・断面形態の分類〔加藤1999〕



A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B 水平	複数層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	覆土が単一層のもの。
E 柱痕	柱痕と思われる土層が堆積するもの。
F 斜位	斜めに堆積するもの。
G 水平・レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第12図 遺構覆土の堆積形状の分類（〔荒川2004〕を一部改変）

遺構覆土は大きく3つに分けられる。

A類 黒色粘土質シルト (10YR1.7/1) ※ VII層を主体とする

A'類 黒色粘土質シルト (10YR1.7/1) に灰色粘土がブロック状に混ざる

B類 褐灰色シルト (10YR4/1) を主体とする

C類 灰色シルト (5Y6/1) が主体で炭化物を僅かに含む。地山と見分けがつかず、炭化物の有無で判断した。

A・B類は、VII層に近い黒色の強い灰色粘土質シルトを基調とする中世の遺構と判断した。C類はVIII層に近い灰色シルトで、出土した木柱の年代から古代の遺構と考えた。

B 遺 構 各 説

1) 4 区 の 概 要

本調査区は、周辺の集落と農地の境界に配置される用排水路敷設工事範囲に設定された南北に長い調査区で、東西方向に延びる5・6区の東端とそれぞれ繋がる。調査区の規模は長さ約316m、幅は1.8～4.5mである。

4区の調査では集落の痕跡を示す建物跡などの遺構は見つからなかったが、調査区南側で南北方向の溝2条を検出し、調査区北側では水田遺構を検出した。4区の地形は遺構が検出できた地点では確認面の標高約1.3m、遺構が検出できなかった地点は標高約1.1mであった。

4区で検出した遺構は水田3基とそれとともなう水口2条、畦畔5条、溝3条、ピット1基である。

2) 4 区 の 遺 構

a 水 田 (SN)

SN12 (図版6・8・9、写真図版3・5)

7F-5Fに位置し、主軸方位はN-13°-Eである。遺構の北側は畦畔26に、西側は畦畔27に囲まれており、東側及び南側は調査区外に広がっている。また畦畔27を挟んで隣接するSN13とは、遺構北西隅にある水口29で繋がっている。検出した遺構の規模は現存長軸7.00m、現存短軸0.30m、深さ0.11mを測る。断面形は幅の広い弧状で、覆土は単層である。覆土の土質は黒褐色粘土でVIIc層土と見分けがつきにくい。遺物は須恵器の無台杯(1・2)・杯蓋、土師器の無台碗・長甕、鉄滓(135)、木製品杓文字(156)が出土している。またウマの臼歯が出土している(第VI章第5節)。

SN12中から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ1226-1280calADの値がでている。(第VI章第3節)

SN13 (図版6・8・9、写真図版3・5)

7F-5Fに位置する。主軸方位はN-13°-Eである。遺構の北側は畦畔26、東側は畦畔27に囲まれており、西側及び南側は調査区外に広がっている。また畦畔27を挟んで隣接するSN12とは、遺構北西隅にある水口29で繋がっている。畦畔27はまっすぐ南に走行し、7F-6F21付近で調査区がL字に曲がった先まで続き、さらに調査区外に延びている(図版6)。SN13を南北に区切る東西方向の畦畔は畦畔26のほかには検出できなかったことから、遺構の規模は現存長軸18.00mとなる。現存短軸は4区のみで見れば調査区西壁から畦畔27までの1.75mだが、5区東側で南北方向に延びる畦畔159が検出されており、畦畔159から畦畔27想定ラインまでが一つの水田と考えたならば想定短軸15.90mとなる。深さは0.11mである。断面形は幅の広い弧状で、覆土は単層である。覆土の土質は黒褐色粘土でVIIc層土と見分けがつきにくい。遺物は須恵器の無台杯・有台杯・杯蓋、土師器の長甕が出土している。

SN14 (図版6・8・9、写真図版3・5・6)

7F-3F・3G、4Fに位置する。主軸方位はN-10°-Eである。遺構の北側には東西方向に延びる畦畔25(想定ライン)があり、南側は畦畔26がある。西側は調査区中央で立ち上がり、東側は調査区外に広がっている。また、畦畔26に沿って水口30があり、調査区西側とをつないでいる。SN14西側の立ち上がりは遺構確認面の

標高が高く、細長い島状になっており、平面図上は畦畔のように見えるが、SN14の西側で水田覆土が確認できなかったことから水田域の端である可能性を考慮し、畦畔と分類しなかった。以上をふまえた遺構の規模は長軸20.70m、現存短軸3.00m、深さ0.24mを測る。断面形は幅の広い弧状で、覆土は2層に分層でき、水平に堆積している。遺物は須恵器の無台杯・有台杯(3)・杯蓋・鉢・甕、土師器の無台椀・長甕・小甕、鍛冶関連遺物(136・137)、板状木製品(157)が出土している。

b 水 田 水 口

水口29(図版6・8、写真図版6)

7F-5F3・4に位置し、SN12とSN13をつなぐ。主軸方位はN-84°-Wで、短軸0.26m、深さ0.13mを測る。東側は調査区外に延びる。断面形は弧状で単層である。覆土の分類はB類である。

水口30(図版6・8、写真図版6)

7F-4F23・24に位置しSN14に付随する。主軸方位はN-74°-Wで、短軸0.24m、深さ0.11mを測る。断面形は弧状で単層である。覆土の分類はB類である。遺物は出土していない。

c 畦 畔

平面では検出できなかったが、4区北側の調査区東西壁面で東西方向に延びていると思われる畦畔24・25を検出した(図版6参照)。東西方向に延びる畦畔24～26の間の距離は24-25間が24.30m、25-26間が20.40mである。以上から畦畔を面的に検出できなかった範囲にも水田は広がっていると考えられ、畦畔の間隔から南北方向に約20m程度の規模を持つ水田が複数あったものとみられる。

畦畔24(図版6・9、写真図版6)

6F-10G13・14・18・19に位置する。平面で検出できなかったが、断面からの推定主軸方位はN-86°-Eで幅2.15m、高さ0.51mを測る。東西の両端は調査区外に延びる。断面は台形状で4層に分かれる。

畦畔25(図版6・9、写真図版6)

7F-2F25、3F5に位置する。断面からの推定主軸方位はN-89°-Eで、東側はプランを確認出来ず、西側は調査区外に延びる。幅1.30m、高さ0.19mを測る。断面は台形状で3層に分かれる。

畦畔26(図版6・8・9、写真図版6)

7F-4F23・24、5F3・4に位置する。主軸方位はN-74°-Eで幅1.52m、高さ0.51mを測る。東西の両端は調査区外に延びる。断面は台形状で4層に分かれる。

畦畔27(図版6・8・9、写真図版6・7)

7F-5F3・4・8・13・17・18・22、6F16・17に位置する。主軸方位はN-13°-Eで幅0.75m、高さ0.18mを測る。北端は畦畔26に接続し、両端は調査区外に延びる。断面は台形状で2層に分かれる。

畦畔28(図版7・9、写真図版7)

8F-5F5・10、5G1・6に位置する。断面からの推定主軸方位はN-64°-Wで幅1.50m、高さ0.36mを測る。東西の両端は調査区外に延びる。

d 溝(SD)

SD8(図版7・10、写真図版7・8)

8F-8F10・15・20・25、9F5に位置し、主軸方位はN-8°-Wである。北側及び南側は調査区外に延び、短軸1.04m、深さ0.53mを測る。SD8の北側には、近い規模のSD9が平行に延び、南側には樹木列木1～7がSD8と同軸方向に並んでいた。真北方向に設定された調査区に対して、SD8はわずかに西に傾いて延びていたため、幅は図上で上端の想定ラインを調査区外まで延長して計測した。断面形は弧状で、覆土は6層に分層でき、レンズ状に堆積している。覆土が地業1とⅦ層を切っていることから中世の遺構であると考えられる。遺構直上の土層は現代の畑のために入れられた客土によって攪乱されていた。遺物は須恵器の無台杯(4)・有台杯・杯蓋・甕、土師器の無台椀・長甕・小甕・鍋が出土している。無台杯(4)の底部には「宅成」の墨書が認められる。

SD9 (図版7・10、写真図版7)

8F-6F20・25、7F5・10・15・20に位置し、主軸方位はN-16°-Wである。北側及び南側は調査区外に延び、短軸2.36m、深さ0.56mを測る。南側にはSD8が平行に延びる。遺構規模の計測方法はSD8と同様である。断面形は弧状、覆土はB類で4層に分かれ、レンズ状に堆積する。覆土が地業1とVII層を切っていることから中世以降の遺構であると考えられる。遺構直上の土層は現代の畑のために入れられた客土によって攪乱されていた。この客土が覆土1層の上に弧状に堆積していることから、SD9は最近まで完全に埋没していなかった可能性がある。遺物は須恵器の無台杯・杯類・杯蓋・壺・瓶類・甕、土師器の無台碗・長甕、木製品の把手(158)・箸(159)が出土している。

なおSD8・9は、いずれも明治期の更正図(図版3)に水路として描かれていない。

SD11 (図版7・10・23・24、写真図版8)

9F-1F19・20に位置し、主軸方位はN-81°-Eである。東側は調査区外に延び、短軸0.28m、深さ0.12mを測る。断面形は弧状で、覆土はB類で単層である。遺構直上には6区SD53覆土2層が堆積することからSD53より古い遺構である。遺物は須恵器の無台杯・杯類、土師器の無台碗・長甕が出土した。

e ピット(P)・樹木列

P10 (図版7・10、写真図版8)

8F-9F20に位置する。遺構の検出面は調査区西壁にかかり、西側は調査区外に延びる。長軸0.56m、現存短軸0.32m、深さ0.22mを測る。平面形は円形で断面形は半円形である。覆土は2層に分層でき、レンズ状に堆積している。遺物は須恵器の杯蓋、土師器の長甕、鍛冶関連遺物が出土した。

樹木列 木1～7 (図版7・10、写真図版8)

8F-9F4・9・10・15・20・25、10F5に位置し、N-8°-Wの方位に1.40～1.70mの間隔で樹木の根を検出した。このうち木-4について樹種同定を行った結果、樹種はヤナギで放射性炭素同位体による年代は1255-1279calAD(第七章第3節)であった。この根は、断面を観察したところ、VII層から生えており、同軸上で等間隔に検出したことから人為的な植栽とみられる。また、これら樹木列の南北両端は調査区東西壁面にかかっており、調査区外に延びているものと思われる。樹木列北側には同方位に走行するSD8があり、溝の岸辺に柳の木が並ぶ光景が想起される。

3) 5区上層の概要

本調査区は既存農道を幅3.9mの排水路に作りかえる工事に伴い設定した。東西方向に長く、東端は4区に接続する。遺構確認面の標高は2.0～1.1mで、調査区のほぼ中央、7E-3・4GHグリッド付近が最も高く、東西に向かって傾斜している。この微高地上にあたる7E-3Eグリッドから7F-4Jグリッド間の標高1.6～2.0mの区間に土坑、溝、ピットなどの遺構が集中する。調査区東側では、7F-4Aグリッド以東は標高1.5～1.6mで推移し、遺構密度は希薄となる。7F-4Bから7F-5Cグリッド間では再び遺構密度が濃くなり、掘立柱建物を2棟検出した。7F-5Dグリッドでは古墳時代から中世にかけての溝を検出、標高1.1～1.4mの低地に水田域が広がる。調査区西側では7D-2Jから7E-3Dグリッド間に標高1.4～1.5mの低地が広がっており、畦畔・溝を検出した。低地以西では遺構は存在しない。検出した遺構は掘立柱建物2棟、水田遺構1基、畦畔3条、溝15条、性格不明遺構1基、ピット20基である。

4) 5区上層の遺構

a 掘立柱建物(SB)

SB45 (図版11・13・14、写真図版10～12)

7F-5B・5Cグリッドに位置し、主軸方位はN-76°-Wである。東西方向に3間、南北方向に1間となる6基のピットP22・24・27・28・37・40を検出した。柱間距離は東西方向2.5～3.0m、南北方向2.2mである。南側は調査区外に延び、南北2間以上の建物になると推定する。全長は東西方向で8.68mあり、大規模な建物であ

る可能性が高い。ピットの平面形はP22・24・27が楕円形、P28・37・40は円形で、断面形はP24が階段状、P22・27が漏斗状、その他がU字状である。P37は底面で礎板(161)を検出し、P22・24・27・40では柱痕状の堆積が認められる。礎板の樹種はハンノキ属が使用されていた。礎板の放射性炭素年代測定を行ったところ、1205～1270calADであった。遺物はP22から土師器長甕、P24から須恵器無台杯、土師器長甕、被熱礫、P27から土師器長甕、P40から土師器長甕、被熱粘土塊が出土した。

SB46 (図版11・13・14、写真図版10・12・13)

7F-5Bグリッドに位置し、主軸方位はN-64°-Wである。東西方向に2間、南北方向に1間となる5基のピットP29・32・35・41を検出した。P35は礎板(163)を検出したため、建物を構成するピットと捉えたが、建物プランは平行四辺形に歪む。P38を用いると建物プランは整った矩形となるため、P38が建物を構成していた可能性も考えられる。柱間距離は東西方向で1.8m、南北方向はP35-P41間で2.32m、P38-P41間で1.5mを測る。南側は調査区外に延びると推定する。全長は東西方向に3.6mで、柱穴の規模や柱間距離から、SB46はSB45より小型の建物であるといえる。ピットの平面形はP41が方形、その他が円形で、断面形はP29が漏斗状、その他がU字状である。P32では柱根(162)を検出し、P29では杭状の土層堆積が認められた。柱根の樹種はヤナギ属、礎板はハンノキ属であった。遺物はP32から須恵器無台杯(9)、土師器長甕が出土した。

b 水 田 (SN)

SN156 (図版6・11・13・15、写真図版14)

7F-5D・5E・6E・6Fグリッドに位置し、調査区東側の低地全体に広がる。南北方向は調査区外に延び、東側は4区の水田と接続する。西側はSD151及び畦畔159で区画される。平面形は不明、断面は調査区北壁で観察したが平坦であり、小畦畔は検出できなかった。覆土は5層に分かれ、1層が広く平坦に堆積する。西端ではⅧ層をブロック状に含む2・4・5層が浅い溝状に堆積する。遺物は須恵器、土師器が少量出土した。

c 畦 畔

畦畔 157 (図版11・12・15、写真図版13)

7D-1・2Jグリッドに位置し、主軸方位はN-58°-Eである。遺構上部は近代以降の削平を受けており、調査区内で平面プランを明らかにすることはできなかった。調査区北壁断面で観察し、畦畔の存在を確認することができた。現存高0.35mを測る。東側にSD1を伴っており、最終的にはSD1に切られる。盛土は単層で、Ⅶ層を基調とした黒色シルトが堆積する。SD1以東は低地が広がっており、水田が存在した可能性があるが、水田区画を平面的に検出することはできなかった。遺物は出土していない。

畦畔 158 (図版11・12・15、写真図版13・14)

7E-2Cグリッドに位置し、主軸方位はN-15°-Wである。遺構上部は近代以降の削平を受けている。現存高0.30mを測る。北側及び南側は調査区外へ延びており、遺構断面は調査区北壁で観察した。東側にSD2を伴っており、SD2は水田に関連したものの可能性がある。盛土は2層に分かれ、Ⅶ層を基調として灰白色粘土をブロック状に含む。周囲には平坦な低地が広がっており、水田の可能性があるが、水田区画を平面的に検出することはできなかった。遺物は出土していない。

畦畔 159 (図版11・13・15、写真図版14)

7F-5Dグリッドに位置し、主軸方位はN-44°-Wである。遺構上部は近代以降の削平を受けている。現存高0.37mを測る。北側及び南側は調査区外へ延びており、遺構断面は調査区北壁で観察した。盛土は5層に分かれ、Ⅶ層を基調として灰白色シルト及び黒褐色粘土をブロック状に含む。1層は想定される畦畔の形状から西側に延びており、後世の改変を受けた可能性がある。他の畦畔と比べて形が不明瞭である。遺物は出土していない。畦畔159はSD48及びSD151埋没後に形成されており、1層はSD30、3層はSD47に切られる。

d 溝 (SD)

SD1 (図版 11・12・15、写真図版 13)

7D-2J5・9・10、7E-2A1・6 グリッドに位置し、主軸方位は N-32° -E である。短軸 1.33m、深さ 0.57m を測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土は A 類で 6 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。西側に畦畔 157 を伴い、最終的に畦畔 157 を切る。

SD2 (図版 11・12・15)

7E-2C16・17・22・23、3C3 グリッドに位置し、主軸方位は N-19° -W である。短軸 1.38m、深さ 0.22m を測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土は A 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。西側に畦畔 158 を伴い、SD2 埋没後に畦畔覆土が覆う。

SD3 (図版 11・12・16、写真図版 14)

7E-3F25、3G16～19・21～24 グリッドに位置し、主軸方位は N-79° -E である。短軸 1.24m、深さ 0.25m を測る。平面形は直線的で、北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土は A 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は瓦質土器 (10) が出土した。P9 を切る。

SD4 (図版 11・12・16、写真図版 15)

7E-3G23・24、4G3・4 グリッドに位置し、主軸方位は N-3° -E である。短軸 0.67m、深さ 0.15m を測る。平面形は直線的で、北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土は 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

SD11 (図版 11・12・16、写真図版 15)

7E-4H3～5 グリッドに位置し、主軸方位は N-86° -E である。長軸 3.26m、短軸 0.22m、深さ 0.05m を測る。平面形は直線的に延び、断面形は弧状である。覆土は A 類の単層であり、遺物は出土していない。

SD13 (図版 11・12・16、写真図版 15)

7E-4H5 グリッドに位置し、主軸方位は N-66° -E である。長軸 0.84m、短軸 0.18m、深さ 0.03m を測る。平面形は直線的に延び、断面形は弧状である。覆土は A 類の単層であり、遺物は出土していない。

SD15 (図版 11・12・16、写真図版 15・16)

7E-4I8・13 グリッドに位置し、主軸方位は N-12° -E である。短軸 0.66m、深さ 0.22m を測る。南側は調査区外へ延びる。断面形は台形状である。覆土は B 類で 4 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯 (11)・有台杯 (12・13)・瓶類・甕、土師器無台椀 (14・15)・長甕 (16)・小甕が出土した。

SD17 (図版 11・12・16、写真図版 16)

7E-4I2・7・12 グリッドに位置し、主軸方位は N-3° -E である。短軸 0.37m、深さ 0.27m を測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土は B 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SD19 (図版 11・12・16、写真図版 16)

7E-4I9・14・19 グリッドに位置し、主軸方位は N-2° -E である。短軸 0.59m、深さ 0.19m を測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は台形状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯、土師器無台椀・長甕 (17)・小甕が出土した。

SD20 (図版 11・12・16、写真図版 16)

7E-4I9・10・14・15・20 グリッドに位置し、主軸方位は N-5° -W である。短軸 0.53m、深さ 0.10m を測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は台形状で一部弧状になる。覆土は B 類の単層で、レンズ状に堆積する。須恵器無台杯・瓶類、土師器は無台椀・長甕・小甕、須恵器を加工した円盤 (130) が出土した。P21 を切る。

SD30 (図版 11・13・15・16、写真図版 14・16)

7F-5D12・13・17・18 グリッドに位置し、主軸方位は N-1° -E である。短軸 1.42m、深さ 0.42m を測る。

北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。遺構覆土は調査区の南北壁面で観察した。覆土はB類で6層に分かれ、レンズ状に堆積する。覆土上位にあたる1～4層では流木や未分解有機物(腐植)を含み、漆器椀(164)・下駄(165)・加工材が出土した。覆土下位にあたる5層では須恵器無台杯・瓶類、土師器長甕、被熱礫が出土した。畦畔159、SD47・48を切る。

SD43(図版11・12・16、写真図版17)

7E-4J12・13・16～18・22・23グリッドに位置し、主軸方位はN-1°-Wである。短軸2.78m、深さ0.44mを測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土はA類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯・有台杯(18)、土師器甕・長甕が出土した。

SD47(図版11・13・15・16、写真図版14・16)

7F-5D13・18グリッドに位置し、主軸方位はN-14°-Eである。短軸0.71m、深さ0.41mを測る。北方及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土はA類の単層であり、土師器長甕が出土した。SD30に切られ、畦畔159を切る。

SD48(図版11・13・15・16、写真図版14・16・17)

7F-5D14・18・19グリッドに位置し、主軸方位はN-53°-Eである。短軸0.97m、深さ0.25mを測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土はB類の単層で、遺物は須恵器無台杯・甕、土師器甕・長甕、底面から土師器高杯(19・20)・杯(21)、石製模造品(127)など古墳時代の遺物が出土した。畦畔159、SD151に切られる。

SD151(図版11・13・15、写真図版14・17)

7F-5D14・19・20グリッドに位置し、主軸方位はN-16°-Wである。短軸0.79m、深さ0.56mを測る。北側は調査区外へ延び、断面形は半円状である。覆土はB類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。畦畔159に伴う溝の可能性がある。遺物は出土していない。SD48を切る。

e 性格不明遺構(SX)

SX5(図版11・12・16、写真図版17)

7E-3D10・15、3E6・11グリッドに位置し、主軸方位はN-6°-Wである。全体を検出できなかったため長軸規模は不明、短軸1.93m、深さ0.15mを測る。遺構南側は調査区外となり、断面形は弧状である。覆土はA類の単層であり、遺物は出土していない。

f ピ ッ ト(P)

P7(図版11・12・16、写真図版17)

7E-3E13グリッドに位置し、短軸0.47m、深さ0.18mを測る。遺構南側は調査区外となる。平面形は円形、断面形は半円状である。覆土はA類で3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P16(図版11・12・16、写真図版17)

7E-4I6グリッドに位置し、長軸0.28m、短軸0.26m、深さ0.23mを測る。平面形は円形、断面形はV字状である。覆土はA類で4層に分かれ、柱痕状に堆積する。遺物は土師器無台椀(22)・長甕が出土した。

P21(図版11・12・16、写真図版16)

7E-4I9・10・14・15グリッドに位置し、現存長軸0.95m、短軸0.68m、深さ0.28mを測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土はC類で3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。SD20に切られる。

P23(図版11・13・16、写真図版18)

7F-5B9グリッドに位置し、長軸0.38m、短軸0.24m、深さ0.21mを測る。平面形は不整形、断面形は階段状である。覆土はA類で3層に分かれ、斜位に堆積する。須恵器無台杯、土師器長甕が出土した。

P33 (図版 11・13・16、写真図版 18)

7F-5C7 グリッドに位置し、長軸 0.54m、短軸 0.33m、深さ 0.39m を測る。平面形は不整形、断面形は階段状である。覆土は A' 類で 5 層に分かれ、柱痕状に堆積する。須恵器横瓶、土師器長甕・小甕が出土した。

P34 (図版 12)

7E-4J20 グリッドに位置し、長軸 0.37m、短軸 0.35m、深さ 0.09m を測る。平面形は円形、断面形は弧状である。覆土は A' 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P44 (図版 11・13・16、写真図版 18)

7F-5B4 グリッドに位置し、長軸 0.35m、短軸 0.32m、深さ 0.22m を測る。平面形は円形、断面形は不整形である。覆土は A' 類で 3 層に分かれ、柱痕状に堆積する。遺物は出土していない。

P63 (図版 11・12・16、写真図版 18)

7E-3H21 グリッドに位置し、現存長軸 0.57m、深さ 0.58m を測る。平面形は円形で、遺構北側は調査区外となる。断面形は U 字状で、底面に向かい細くなる。覆土は B 類で 4 層に分かれ、柱痕状の堆積が認められる。底面付近では柱根 (166) を検出した。柱根付近のみピットが一段と深まり細くなっているため、柱根は自重で沈下した可能性が高い。柱根の樹種はコナラ属であった。柱根の放射性炭素年代測定を行ったところ、1152-1220calAD であった。柱根以外の遺物は出土していない。

5) 5 区下層の概要

7E-3E グリッドから 7F-5C グリッド間において、IX 層上で確認できる遺構を検出し、これを下層として調査を行った。7E-4H ~ 7E-4J グリッド間にピットを中心として掘立柱建物、土坑、溝などが集中する。7F-4B ~ 7F-5C グリッド間では中世の掘立柱建物直下から、古代の柱穴・溝を検出した。この 2 地点以外では遺構は存在しない。検出した遺構は掘立柱建物 3 棟、土坑 2 基、溝 20 条、性格不明遺構 1 基、ピット 65 基である。

6) 5 区下層の遺構**a 掘立柱建物 (SB)****SB150** (図版 17 ~ 19、写真図版 19・21・22)

7E-4I・4J グリッドに位置し、主軸方位は N-85°-E である。東西方向に 3 間、南北方向に 1 間となる 5 基のピット P82・83・88・91・130 を検出した。柱間の距離は 2.0 ~ 2.4m である。全長は現存長で 6.66m となる。ピットの平面形は P82 が楕円形、その他が円形、断面形は P88 は箱状、その他は U 字状である。覆土に柱痕状の堆積が認められるものが多い。遺物は P82 から須恵器無台杯 (23)、土師器長甕、P83・88・91・130 から土師器長甕が出土した。P130 は SD100 底面で検出しており、SB150 は SD100 に切られる。SD135・SD146 を切る。

SB160 (図版 17 ~ 19、写真図版 20・22・23)

7E-4I グリッドに位置し、主軸方位は N-22°-W である。南北方向に 2 間東西方向に 1 間となる 5 基のピット P81・98・113・152・154 を検出した。柱間距離は南北方向に 1.8 ~ 2.0m、東西方向に 2.2 ~ 2.3m である。柱穴列は調査区の北側に延びる。ピットの平面形は、P98 が不整形、その他は円形である。断面形は階段状と U 字状の 2 種類ある。遺物は P81 から須恵器無台杯 (24)、P98・113 から土師器長甕が出土した。

SB161 (図版 17・18・20、写真図版 20・23)

7F-5B・5C グリッドに位置し主軸方位は N-77°-W である。東西方向に 2 間となる 3 基のピット P121・122・134 を検出した。柱間距離は 2.0 ~ 2.4m である。P122 と P134 はそれぞれ柱根が残っていた (167・168)。P122 の柱根の樹種はニレ属であった。遺物は P121 から土師器長甕・小甕、P122 からは土師器無台碗・長甕が出土した。

b 土 坑 (SK)

SK42 (図版 17・18・20、写真図版 24)

7E-4J18・19・23・24 グリッドに位置し、主軸方位はN-16°-Wである。長軸 1.21m、短軸 0.92m、深さ 0.10m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土はB類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯、土師器無台椀・長甕・小甕が出土した。

SK114 (図版 17・18・20、写真図版 24・25)

7E-4J13 グリッドに位置し、主軸方位はN-48°-Wである。長軸 1.09m、短軸 0.78m、深さ 0.14m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土はC類で3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕が出土した。P99 に切られる。

c 溝 (SD)

SD10 (図版 11・17・18・20、写真図版 25)

7E-3G25、4G5、4H1 グリッドに位置し、主軸方位はN-19°-Wである。短軸 0.58m、深さ 0.11m を測る。北側及び南側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土はB類の単層であり、須恵器杯蓋、土師器長甕が出土した。

SD14 (図版 17・18・20、写真図版 25)

7E-4H10、4I6 グリッドに位置し、主軸方位はN-74°-Wである。長軸 1.89m、短軸 0.52m、深さ 0.11m を測る。平面形は直線的に延び、断面形は弧状である。覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器無台椀・長甕が出土した。

SD39 (図版 17・18・20、写真図版 25)

7E-4J24・25、7F-4A16・21 グリッドに位置し、主軸方位はN-73°-Eである。短軸 0.36m、深さ 0.09m を測る。東側は調査区内で収まり、西側は調査区外へ延び、断面形は弧状である。覆土はC類の単層であり、須恵器無台杯、土師器長甕が出土した。

SD49 (図版 17・18・20、写真図版 25・26)

7E-3E13・14 グリッドに位置し、主軸方位はN-77°-Wである。長軸 3.24m、短軸 0.98m、深さ 0.20m を測る。直線的に延びる溝で、断面形は弧状である。覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SD55 (図版 17・18・20、写真図版 26)

7E-3G23～25 グリッドに位置し、主軸方位はN-84°-Eである。長軸 2.81m、短軸 0.34m、深さ 0.07m を測る。直線的に延びる溝で、西側及び東側は上層遺構 SD4・10 直下で途切れる。断面形は弧状である。覆土はC類の単層であり、土師器長甕が出土した。

SD62 (図版 17・18・20、写真図版 26)

7E-4H2～5・7～9 グリッドに位置し、主軸方位はN-88°-Eである。短軸 0.65m、深さ 0.14m を測る。調査区南壁付近で湾曲する溝で、南側は調査区外となる。断面形は弧状である。覆土はC類の単層であり、須恵器無台杯 (25)、土師器長甕が出土した。SD65 を切り、P74 に切られる。

SD65 (図版 17・18・20、写真図版 26)

7E-4H7～9 グリッドに位置し、主軸方位はN-83°-Eである。短軸 0.38m、深さ 0.10m を測る。全体的に蛇行しており、調査区南壁付近で大きく湾曲する。南側は調査区外となる。断面形は弧状である。覆土はC類の単層であり、土師器無台椀・長甕・小甕が出土した。SD62 に切られる。

SD66 (図版 17・18・20、写真図版 27)

7E-4H9 グリッドに位置し、主軸方位はN-6°-Eである。短軸 0.53m、深さ 0.12m を測る。平面形は直線的で、南側は調査区外となる。断面形は弧状である。土層断面は調査区南壁で観察した。覆土はC類の単層で、Ⅷ層

下面から掘り込まれている。遺物は土師器長甕・小甕が出土した。SX106 を切る。

SD75 (図版 17・18・20、写真図版 27)

7E-3H21、4H1・6 グリッドに位置し、主軸方位は N-4° -W である。短軸 0.43m、深さ 0.25m を測る。平面形は蛇行しており、北側及び南側は調査区外に延びる。断面形は弧状である。土層断面は調査区南壁で観察した。覆土は C 類の単層で、Ⅷ層下面から掘り込まれている。遺物は土師器長甕が出土した。SD103 を切る。

SD84 (図版 17・18・21、写真図版 27)

7E-4I8 グリッドに位置し、主軸方位は N-19° -W である。短軸 0.45m、深さ 0.14m を測る。平面形は直線的で、北側は調査区外に延び、南側は上層 SD15 直下で途切れる。断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器無台碗・長甕が出土した。

SD94 (図版 18・21、写真図版 27・28)

7E-4I12～15 グリッドに位置し、主軸方位は N-82° -E である。短軸 0.42m、深さ 0.14m を測る。平面形は直線的で、西側は調査区外に延び、東側は SD100 に切られる。断面形は弧状である。SB150 の柱穴列に平行しており、SB150 に伴う溝であると考えられる。覆土は C 類の単層で、須恵器杯蓋・甕 (26)、土師器無台碗・長甕が出土した。SD100・P86 に切られ、P118 を切る。

SD95 (図版 17・18・21、写真図版 27)

7E-4G5 グリッドに位置し、主軸方位は N-4° -W である。短軸 0.36m、深さ 0.22m を測る。平面形は直線的で、南側は調査区外に延びる。断面形は弧状である。土層断面は調査区南壁で観察した。覆土は C 類の単層であり、Ⅷ層から掘り込まれている。遺物は土師器甕が出土した。

SD100 (図版 17～19・21、写真図版 27・28)

7E-4I8～10・13～15、4J11・12 グリッドに位置し、主軸方位は N-84° -W である。現存長軸 8.63m、短軸 0.63m、深さ 0.19m を測る。平面形は直線的で、断面形は弧状である。覆土は C 類の 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯 (27・28)・有台杯 (29)・瓶類、土師器長甕 (30・31) が出土した。SB150-P82・130、SB160-P113、SD94、P118・144 を切る。

SD103 (図版 17・18・21、写真図版 28)

7E-4G5、4H1 グリッドに位置し、主軸方位は N-76° -E である。短軸 0.31m、深さ 0.09m を測る。平面形は直線的で断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。土師器甕が出土した。遺構東側で SD75 に切られる。

SD107 (図版 17・18・21、写真図版 28)

7E-4J23～25 グリッドに位置し、主軸方位は N-89° -E である。短軸 0.23m、深さ 0.09m を測る。平面形は直線的で、西側は調査区外に延びる。断面形は弧状である。覆土は C 類の単層であり、須恵器無台杯、土師器長甕・小甕が出土した。SD108 を切る。

SD108 (図版 17・18・21、写真図版 28)

7E-4J18・23・24 グリッドに位置し、主軸方位は N-70° -W である。短軸 0.36m、深さ 0.08m を測る。平面形は直線的、断面形は弧状である。覆土は C 類の単層であり、土師器長甕・小甕が出土した。SD107 に切られる。

SD135 (図版 17・18・21、写真図版 28)

7E-4I20、4J16 グリッドに位置し、主軸方位は N-82° -E である。短軸 0.29m、深さ 0.14m を測る。平面形は直線的で、西側は調査区外に延びる。断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。隣接する SD146 と平行しており、P88・96 に切られる。

SD137 (図版 17・18・21、写真図版 28・29)

7F-5C6～8・11 グリッドに位置し、主軸方位は N-69° -E である。短軸 0.49m、深さ 0.09m を測る。平面

形は直線的で、北側及び南側は調査区外に延びる。断面形は弧状である。覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。土師器長甕・小甕が出土した。

SD146 (図版 17・18・21、写真図版 29)

7E-4I20、4J16 グリッドに位置し、主軸方位はN-83°-Eである。短軸 0.21m、深さ 0.06m を測る。平面形は直線的で、断面形は弧状である。覆土はC類で単層であり、土師器小甕が出土した。隣接するSD135と平行しており、P88・96に切られる。

SD148 (図版 17・18・21、写真図版 29)

7E-4J19・20 グリッドに位置し、主軸方位はN-77°-Eである。短軸 0.27m、深さ 0.13m を測る。平面形は直線的で、東側は調査区外に延びる。断面形は半円状である。覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。土師器甕が出土した。

d 性格不明遺構 (SX)

SX106 (図版 17・18・21、写真図版 29)

7E-4H8・9 グリッドに位置し、深さ 0.07m を測る。平面形は不整形のため、長軸・短軸は不明である。遺構南側は調査区外となる。断面形は弧状である。覆土はC類で単層であり、土師器長甕・小甕、被熱礫が出土した。遺構東側でSD66に切られる。

e ピ ッ ト (P)

P18 (図版 18・21、写真図版 29)

7E-4I12 グリッドに位置し、長軸 0.34m、短軸 0.32m、深さ 0.36m を測る。平面形は円形、断面形は漏斗状である。覆土はC類で2層に分かれ、柱痕状に堆積する。遺物は出土していない。

P58 (図版 17・18・21、写真図版 30)

7E-4H3 グリッドに位置し、長軸 0.43m、短軸 0.36m、深さ 0.14m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土はC類で2層に分かれ、斜位に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P60 (図版 17・18・21、写真図版 30)

7E-4H5 グリッドに位置し、長軸 0.30m、短軸 0.29m、深さ 0.25m を測る。平面形は円形、断面形はU字状である。覆土はC類で3層に分かれ、柱痕状に堆積する。遺物は出土していない。

P64 (図版 17・18・20、写真図版 26)

7E-4H8 グリッドに位置し、長軸 0.38m、現存短軸 0.25m、深さ 0.11m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土はC類の単層であり、遺物は出土していない。

P67 (図版 17・18・21、写真図版 30)

7E-3G23 グリッドに位置し、長軸 0.33m、短軸 0.30m、深さ 0.14m を測る。平面形は円形、断面形は弧状である。覆土はB類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P72 (図版 17・18・21、写真図版 30)

7E-4I1 グリッドに位置し、長軸 0.38m、深さ 0.17m を測る。平面形は円形で、遺構北側は調査区外となる。断面形はU字状である。覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P79 (図版 17・18・21、写真図版 31)

7E-4J11 グリッドに位置し、長軸 0.43m、現存短軸 0.38m、深さ 0.38m を測る。平面形は円形、断面形はU字状である。覆土はC類で4層に分かれ、柱痕状に堆積する。遺物は土師器長甕、被熱粘土塊が出土した。

P80 (図版 17・18・22、写真図版 31)

7E-4J16 グリッドに位置し、長軸 0.56m、短軸 0.42m、深さ 0.14m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土はC類で3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。SB150-P88を切る。

P92 (図版 17・18・22、写真図版 31)

7E-4I9・10 グリッドに位置し、長軸 0.31m、短軸 0.29m、深さ 0.15m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P96 (図版 17・18・22、写真図版 31)

7E-4I20、4J16 グリッドに位置し、長軸 0.41m、短軸 0.37m、深さ 0.46m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 3 層に分かれ、柱痕状の堆積が認められた。遺物は土師器長甕・小甕が出土した。SD135・146 を切る。

P99 (図版 18・20)

7E-4J13 グリッドに位置し、長軸 0.37m、短軸 0.34m、深さ 0.15m を測る。平面形は円形、断面形は弧状である。覆土は B 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕が出土した。SK114 を切る。

P109 (図版 17・18・22、写真図版 32)

7F-4A16・17 グリッドに位置し、長軸 0.44m、短軸 0.40m、深さ 0.23m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P111 (図版 17・18・22、写真図版 32)

7E-4I9 グリッドに位置し、長軸 0.75m、現存短軸 0.38m、深さ 0.44m を測る。平面形は不整形、断面形は階段状である。覆土は C 類で 3 層に分かれ、柱痕状の堆積が認められる。土師器長甕・小甕が出土した。P104 に切られる。

P112 (図版 18・22、写真図版 32)

7E-4I13 グリッドに位置し、現存長軸 0.38m、短軸 0.33m、深さ 0.22m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。SD100 に切られる。

P116 (図版 17・18・22、写真図版 32・33)

7E-4J13・18 グリッドに位置し、現存長軸 0.38m、現存短軸 0.26m、深さ 0.23m を測る。平面形は楕円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、柱痕状の堆積が認められた。土師器長甕・小甕が出土した。

P117 (図版 17・18・22、写真図版 33)

7F-5B9 グリッドに位置し、長軸 0.49m、現存短軸 0.40m、深さ 0.18m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕が出土した。

P118 (図版 17・18・21、写真図版 27)

7E-4I15 グリッドに位置し、現存長軸 0.19m、短軸 0.18m、深さ 0.16m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類の単層であり、遺物は出土していない。SD94・100 に切られる。

P119 (図版 17・18・22、写真図版 33)

7F-5B2 グリッドに位置し、長軸 0.70m、短軸 0.52m、深さ 0.18m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P120 (図版 17・18・22、写真図版 33)

7F-5A5 グリッドに位置し、長軸 0.29m、現存短軸 0.27m、深さ 0.14m を測る。平面形は円形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P123 (図版 17・18・22、写真図版 33・34)

7F-5B3 グリッドに位置し、長軸 0.39m、現存短軸 0.36m、深さ 0.28m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、柱痕状の堆積が認められる。遺物は土師器長甕が出土した。

P132 (図版 17・18・22、写真図版 34)

7E-4J14・19 グリッドに位置し、長軸 0.54m、短軸 0.49m、深さ 0.13m を測る。平面形は円形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P133 (図版 17・18・22、写真図版 34)

7E-4J18 グリッドに位置し、長軸 0.45m、現存短軸 0.36m、深さ 0.08m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P136 (図版 17・18・22、写真図版 34)

7E-4J13・14 グリッドに位置し、長軸 0.48m、短軸 0.39m、深さ 0.11m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P140 (図版 17・18・22、写真図版 34)

7F-5C10・15 グリッドに位置し、長軸 0.54m、深さ 0.23m を測る。平面形は円形で遺構北側は調査区外となる。断面形は箱状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P142 (図版 17・18・22、写真図版 35)

7E-4I15 グリッドに位置し、長軸 0.19m、現存短軸 0.19m、深さ 0.17m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P143 (図版 17・18・22、写真図版 35)

7E-4I15、4J11 グリッドに位置し、長軸 0.32m、現存短軸 0.19m、深さ 0.07m を測る。平面形は不整形、断面形は弧状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

P144 (図版 17・18・22、写真図版 35)

7E-4I9・14 グリッドに位置し、現存長軸 0.33m、深さ 0.37m を測る。平面形は円形と推測される。断面形は U 字状である。覆土は C 類で 3 層に分かれ、斜位に堆積する。遺物は出土していない。SD100・SB150-P113 に切られる。

P147 (図版 17・18・22、写真図版 35)

7E-4I7 グリッドに位置し、長軸 0.83m、深さ 0.19m を測る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は C 類の単層であり、遺物は出土していない。

P149 (図版 17・18・22、写真図版 35)

7E-4I14 グリッドに位置し、長軸 0.26m、現存短軸 0.22m、深さ 0.20m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

P153 (図版 17～19、写真図版 22)

7E-4I10 グリッドに位置し、現存長軸 0.36m、深さ 0.39m を測る。平面形は円形で、遺構北側は調査区外となる。断面形は U 字状である。土層断面は調査区北壁で観察した。覆土は C 類で 2 層に分かれ、柱痕状に堆積する。Ⅷ層から掘り込まれている。遺物は出土していない。

7) 6 区上層の概要

本調査区は農業用水路の敷設工事に伴い設定された。調査区の形状は東西方向に細長く、その規模は長さ約 183m、幅約 1.8m である。調査区の地形は調査区西端遺構確認面が標高約 1.3m と最も低く、調査区中央の 8E-9H・9I 近辺で標高約 1.8m と最も高くなる。中央から東は調査区東端まで平坦で標高は約 1.5m であった。調査区中央は一部遺構確認面まで後世の土木工事により攪乱されていたため、集落として営まれていた時代の地形を残していない部分がある。また、茶院 A 遺跡基本層序Ⅶc 層(黒色粘質土層)は中世の水田であったことが分かっている。さらに、Ⅶ層は古代の遺物を包含していることから、茶院 A 遺跡の古代の遺構は中世の水田開発に伴い削平された可能性がある。

上層で検出した遺構は、掘立柱建物 1 棟、井戸 3 基、土坑 5 基、溝 17 条、ピット 49 基、性格不明遺構 1 基である。

8) 6区上層の遺構

a 掘立柱建物 (SB)

SB95 (図版 23～25・27、写真図版 39)

9F-1D6～9に位置し、主軸方位はN-81°-Wである。東西方向に3間となる4基のピット P60・63・65・68を検出した。柱間距離はP60-63間が1.40m、P63-65間が2.08m、P65-68間が2.12mである。調査区の南北幅が狭かったため、建物跡の柱列は東西方向しか検出しなかったが、南北どちらかには検出した柱列に直交する方位に南北方向の柱列が遺存しているとみられる。P60・65・68にはクリ材の柱根が残存し(173・176・177)、P63・68には遺構底部に同じくクリ材の礎板が残存していた(174・175・178)。特にP68では礎板の上に柱根が据えられた状態で検出している。P63は遺構の断面が階段状を呈しており、再利用のため柱の根元近くまで掘削して柱を抜いたものと考えられる。SB95を構成する4基のピットは地業2の造成後に掘削されていた。また、P68・63の底部に礎板を据えていたことから、この地の地盤が軟弱であったことが窺える。また、P60・65の遺構断面を観察すると、検出した柱根の底部は平坦に加工されていたにも関わらず、柱根が掘削したピットの底面を大きく超えている。これはSB95の建て込みの際、P60・65に柱を据えたところ予想よりかなり深く沈んだため、P63・68施工時には礎板を入れた後、柱を据えたと考えるのは飛躍のしすぎであろうか。なおP68の木柱について放射性炭素年代測定を行ったところ、1220-1275calADの値がでている。

遺物はP63から須恵器の無台杯、土師器の長甕、黒色土器の椀が出土、P65から須恵器の無台杯(62)が1点出土している。底部外面には「宅成」の墨書が認められた。他には土師器の無台椀、須恵器の杯・鉢が出土している。P68からは須恵器の杯とみられる破片・鉢、土師器の長甕・鍋が出土した。

上述したピット覆土から出土した遺物はいずれも古代の遺物で、掘立柱を据える際、遺物包含層か地業の土に含まれていたものが、中世の遺構に混入したと考えられる。

b 井 戸 (SE)

SE5 (図版 23～26、写真図版 40)

8E-10J2・3・7・8に位置し、短軸2.26m、深さは0.96mを測る。北側及び南側は調査外に延びるため、全体の形状は不明である。遺構断面形状は遺構上部が大きく広がり、狭まった下部断面が垂直に近い角度で落ち込む階段状に近い形状である。覆土A類で8層に分かれ、堆積状況は一部崩落による乱れがあるもののレンズ状に堆積しており、断面形もふまえ、素掘りの井戸と判断した。遺物は須恵器の甕、土師器の無台椀・長甕、木製品箸(179～182)・円盤状木製品(183)が出土している。

SE7 (図版 23～25、写真図版 40)

8E-10I5・10J1に位置し、長軸1.17m、現存短軸0.52m、深さ0.82mを測る。北側は調査区外へ延び、断面形はU字状で、覆土はA類で7層に分かれレンズ状に堆積する。覆土1層の直上に現代の耕作土(I層)が堆積していることから、遺構上部は削平されている可能性が高い。遺物は須恵器の杯、土師器の無台椀が出土している。P12を切る。

SE19 (図版 23～25、写真図版 40)

8E-9I22に位置し、主軸方位はN-89°-Wである。現存長軸0.78m、短軸0.44m、深さ0.83mを測る。北側は調査区外に延びる。平面形は楕円形、断面形は漏斗状で、覆土はA類で3層に分かれ、1・2層間がレンズ状、2・3層間は水平に堆積する。検出した地点周辺は後世の土木工事により遺構確認面(VII層)が掘削されており、掘削を免れた範囲からSE19を検出した。断面観察では現耕作土(I層)と遺構覆土1層の間に遺物包含層であるVII層が挟まるが、土色・土質とも安定せずこのVII層は自然堆積であるか疑わしい。遺物は土師器の無台椀が出土している。

c 土 坑 (SK)

SK1 (図版 23 ~ 25、写真図版 40)

8F-10A11・12 に位置し、主軸方位は N-75° -W である。長軸 0.98m、現存短軸 0.32m、深さ 0.46m を測る。南側は調査区外へ延び、平面形は楕円形、断面形は台形状である。覆土は A 類で 4 層に分かれ、レンズ状に堆積する。覆土は黒色の土色から VII 層由来とみられ、遺構上部は過去の土木工事により削平されている。遺物は須恵器の有台杯・甕、土師器の無台碗が出土した。

SK34 (図版 23 ~ 25、写真図版 40)

8E-9G15・9H11 に位置し、主軸方位は N-66° -E である。現存長軸 0.94m、現存短軸 0.93m、深さ 0.41m を測る。平面形は楕円形、断面形は漏斗状である。覆土は A' 類で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構確認面 (VIII 層) が一部後世の土木工事により削平されており、遺構の南側は攪乱された土を除去した下から検出した。覆土 2、3 層は自然堆積と思われるが、遺構の大部分を占める 1 層の覆土には VII 層由来の黒色シルトにブロック状の VIII 層土が混じることから、土坑が掘られた後、ある程度時間が経ってから人為的に埋められたものとみられる。遺物は須恵器の無台杯、土師器の小甕が出土した。

SK44 (図版 23・24・26、写真図版 40)

8E-7A24・8A4 に位置し、主軸方位は N-78° -W である。現存長軸 0.68m、短軸 0.60m、深さ 0.12m を測る。平面形は円形、断面形は台形状である。覆土は黒色シルトに比較的大きいブロック状の地山が混じる A' 類で、それが遺構底部まで一様に堆積している。以上の点から SK44 は掘られた後、自然堆積が始まる前に掘削した土で埋め戻されたものとみられる。遺物は出土していない。

SK47 (図版 23・24・26、写真図版 41)

9F-1E6・7・11 に位置し、主軸方位は N-65° -E である。現存長軸 0.60m、短軸 0.66m、深さ 0.36m を測る。北側は調査区外となり、平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は A 類で 4 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構の検出層位は地業 2 であったが、調査区北壁で断面観察を行ったところ、地業 1 を掘り込んでいることが分かった。遺構は地業 1 を掘り込んでいるものの、遺構覆土 1 層の上にもほぼ同じ地業 1 が堆積していることから地業 1 を造成している際に掘削され、直ぐに埋め戻されたとみられる。遺構底面がやや不整形であることから木の根を抜いた痕跡の可能性もある。遺物は須恵器の無台杯・有台杯 (63)・甕、土師器の無台碗・長甕が出土した。

SK80 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8E-10I3 に位置し、主軸方位は N-13° -E である。現存長軸 0.53m、現存短軸 0.70m、深さ 0.32m を測る。遺構の南側は調査区外となり、平面形は方形、断面形は漏斗状である。覆土は C 類で 2 層に分かれ、水平に堆積する。また、SK80 を検出する前に土側溝が掘削されてしまったために遺構上端の一部は土側溝の底部で確認した。覆土は地業 2 に類似した土が 1 層に堆積しており、地業 2 造成時に埋められたものとみられ、地業 2 の時期に建て替えのため抜き取られた柱の痕跡である可能性もある。遺物は出土していない。

d 溝 (SD)

SD3 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8F-10B16・17 に位置し、主軸方位は N-38° -E である。短軸 1.30m、深さ 0.21m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状で、遺物は須恵器の杯蓋・甕、土師器の無台碗・鍋が出土した。

SD6 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8E-10J1・2・6 に位置し、主軸方位は N-28° -E である。短軸 0.92m、深さ 0.55m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は半円状である。覆土は A 類で 5 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器の無台碗・長甕、木製品木柱 (184) が出土した。

SD8 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8F-10B18・19 に位置し、主軸方位は N-40°-E である。短軸 1.30m、深さ 0.19 m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状で、覆土は C 類で単層であり、遺物は須恵器の杯蓋、土師器の無台椀・鍋が出土した。

SD9 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8E-10J9 に位置し、主軸方位は N-19°-E である。短軸 0.92m、深さ 0.25m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状で、覆土は A 類で単層であり、遺物は出土していない。SD16 を切る。しかし、両者の土質は類似しており時期差があったとしてもわずかであろう。

SD16 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8E-10J8・9 に位置し、主軸方位は N-46°-E である。短軸は 0.52m、深さ 0.28m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は A 類で単層であり、遺物は出土していない。SD9 に切られる。

SD23 (図版 23・24・26、写真図版 41)

8E-9I23 に位置し、主軸方位は N-4°-W である。短軸 0.26m、深さ 0.22m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状で、覆土は A 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。P24 に切られる。

SD26 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8E-10J3・8 に位置し、主軸方位は N-19°-E である。短軸 0.52m、深さ 0.36m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は A 類で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構上部は後世の土木工事により攪乱されている。遺物は須恵器の甕、土師器の無台椀・小甕が出土した。

SD36 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8E-10I5 に位置し、主軸方位は N-15°-E である。短軸 0.78m、深さ 0.30m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は半円状である。覆土は VII 層由来の黒色シルトに VIII 層土がブロック状に混じっており、遺構の上に VII b 層が堆積していることから水田関連遺構の可能性がある。遺物は土師器の無台椀、黒色土器の椀が出土している。P43 に切られる。

SD41 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8E-9F3・4・8・9 に位置し、遺構の方位は N-2°-E である。短軸 1.28m、深さ 0.16m を測る。遺構南端は後世の土木工事により攪乱されていた。SD42 とほぼ平行に隣接する。断面形は弧状で、覆土は A 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SD42 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8E-9F3・8 に位置し、主軸方位は N-5°-E である。短軸 0.56m、深さ 0.12m を測る。北側は調査区外に延び、遺構南端は後世の土木工事により攪乱されていた。SD41 とほぼ平行に隣接する。断面形は弧状で、覆土は A 類で単層である。遺物は出土していない。

SD45 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8E-8E23・24、9E3・4 に位置し、主軸方位は N-8°-E である。短軸 1.40m、深さ 0.30m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は台形状である。覆土は A' 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。覆土の類似性から中世に水田が経営されていた時期に溝として機能していたと考えられ、排水溝など水田施設の一部であった可能性が検討される。遺物は出土していない。

SD46 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8D-7J18・19 に位置し、主軸方位は N-13°-E である。短軸 2.50m、深さ 0.15m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は A' 類で単層である。遺物は出土していない。

SD50 (図版 23・24・26、写真図版 42)

9F-1E13・14・19 に位置し、主軸方位は N-4°-E である。短軸 2.44m、深さ 0.22m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は A 類で 4 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構の上部は後世の土木工事によって攪乱されていた。遺物は須恵器の杯・鉢・壺か瓶類・甕、土師器の無台椀・長甕・小甕・鍋が出土した。

SD51 (図版 23・24・26、写真図版 42)

8E-8E21・22 に位置し、主軸方位は N-84°-E である。短軸 0.28m、深さ 0.09m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は A' 類で単層であり、遺物は出土していない。

SD53 (図版 7・23・24・26、写真図版 38)

8F-7F～10F、9F-1F に位置し、主軸方位は N-1°-W である。北側及び南側と東岸上端は調査区外に延び、全体の規模が不明であるが、現存短軸 8.72m、深さ 0.71m を測る。調査区の幅が狭く、地山掘削工の安全性を担保するため遺構下端を検出するまで掘削することができなかった。さりながら、かなり深さを持った遺構であり、かつては水路か堀のように機能したものとみられる。覆土は A 類で 6 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構の直上には地業 1 が堆積していた。覆土各層と VII 層土は土色が類似していることから中世の水田耕作が営まれた時期は溝として機能しており、居住区の拡張に伴って地業 1 を造成する際に埋められたと考えられる。

覆土 2 層は、調査区東側に大きく広がっており、6 区に直交して続く 4 区でも約 20m にわたって面的に検出されたが立ち上がりは検出できなかった。広範囲に広く浅く広がっていることから覆土 2 層の時期は水田として機能していた可能性がある。遺物は珠洲焼の片口鉢 (64)・甕 (65)、須恵器の杯蓋 (66)・無台杯 (67～71)・有台杯 (72～74)・横瓶 (75)・鉢、土師器の無台椀・長甕・小甕・鍋、石製品敲石 (129)、転用研磨具 (134)、鉄製品鏝 (145)、鍛冶関連遺物 (146～148)、銭貨 (154)、木製品漆器皿 (185)・箸 (186～188)・形代 (189～191)・曲物側板 (192)、下駄 (193～195)、板材 (196・197) が出土した。

SD87 (図版 23・24・26、写真図版 43)

8F-10C22・23 に位置し、主軸方位は N-33°-E である。短軸 0.44m、深さ 0.15m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は単層である。遺物は須恵器の杯、土師器の長甕が出土した。P86 に切られる。

e 性格不明遺構 (SX)

SX2 (図版 23・24・26、写真図版 43)

8F-10A14・15・20、10B11・16 に位置し、主軸方位は N-0°-S である。現存長軸 0.61m、短軸 2.48m、深さ 0.54m を測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状、覆土は A 類で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構上部は後世の土木工事により攪乱されていた。遺物は須恵器の無台杯・有台杯 (76)・杯蓋・鉢・甕、土師器の無台椀・長甕・小甕・鍋、珠洲焼の甕、銭貨 (155)、木製品曲物の側板 (198) が出土した。

f ピ ッ ト (P)

P4 (図版 23・24・27、写真図版 43)

8F-10B25 に位置し、長軸 0.56m、現存短軸 0.52m、深さ 0.45m を測る。南側は調査区外に延び、平面形は楕円形、断面形は階段状である。覆土は A 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器の無台椀が出土した。

P10 (図版 23・24・27、写真図版 43)

8F-10C21 に位置し、長軸 1.02m、現存短軸 0.35m、深さ 0.50m を測る。断面形は半円状である。覆土は A 類で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構の南半分は調査区外である。遺物は土師器の無台椀、鍛冶関連遺物 (150)・炉壁 (151) が出土した。

P11 (図版 23・24・27、写真図版 43)

8E-10J9・10 に位置する。長軸 0.88m、現存短軸 0.40m、深さ 0.51m を測る。北側は調査区外に延び、断面形は弧状である。覆土は B 類で単層である。遺物は出土していない。

P13 (図版 23・24・27、写真図版 43・44)

8E-10I4・5 に位置し、長軸 0.46m、短軸 0.40m、深さ 0.21m を測る。平面形は円形、断面形は階段状である。覆土は A' 類で単層である。遺物は出土していない。P14 を切る。

P14 (図版 23・24・27、写真図版 43・44)

8E-10I5 に位置し、長軸 0.22m、現存短軸 0.20m、深さ 0.08m を測る。平面形は円形、断面形は弧状である。覆土は A' 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器の杯、土師器の無台椀が出土した。P13 に切られる。

P17 (図版 23・24・27、写真図版 44)

8E-9I22・23 に位置し、長軸 0.44m、短軸 0.40m、深さ 0.35m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は A' 類で 2 層に分かれ、斜位に堆積する。検出した地点は後世の土木工事により遺構確認面が削平されており、P17 も攪乱を除去した底面で検出した。遺物は土師器の無台椀 (77～79)、鍛冶関連遺物炉壁 (152) が出土した。

P20 (図版 23・24・27、写真図版 44)

8E-9H25 に位置し、長軸 0.38m、短軸 0.36m、深さ 0.41m を測る。平面形は円形、断面形は V 字状である。覆土は A 類で単層である。遺物は須恵器の杯蓋、土師器の無台椀・長甕が出土した。

P22 (図版 23・24・27、写真図版 44)

8E-9H20・25 に位置し、長軸 0.56m、短軸 0.50m、深さ 0.29m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は A 類で 3 層に分かれ、ブロック状に堆積する。遺物は出土していない。

P27 (図版 23・24・27、写真図版 44)

8E-9H25 に位置し、P28・29 とともに調査区南壁で検出し、長軸 0.30m、短軸 0.28m、深さ 0.67m を測る。調査のための土側溝底面で検出した遺構の平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は A 類で 2 層に分かれ、水平に堆積する。遺物は出土していない。P27・28・29 は遺構の規模・深さが似通っており、同軸上に並んで検出されていることから一連の柱列である可能性がある。

P28 (図版 23・24・27、写真図版 45)

8E-9H24 に位置し、P27・29 とともに調査区南壁で検出し、長軸 0.24m、短軸 0.24m、深さ 0.44m を測る。調査のための土側溝底面で検出した遺構の平面形は円形、断面形は U 字状、覆土は A 類で単層である。遺物は出土していない。

P29 (図版 23・24・27、写真図版 45)

8E-9H24 に位置し、P27・28 とともに調査区南壁で検出し、長軸 0.53m、短軸 0.44m、深さ 0.57m を測る。遺構の平面形は円形で、断面形は U 字状である。覆土は A 類で 2 層に分かれ、階段状に堆積する。遺物は出土していない。

P30 (図版 23・24・27、写真図版 45)

8E-9H18 に位置し、長軸 0.30m、現存短軸 0.14m、深さ 0.32m を測る。北側半分は調査区外となる。平面形は円形、断面形は階段状である。覆土は B 類で 2 層に分かれ、断面形と堆積状況から柱痕とみられる。遺物は出土していない。

P31 (図版 23・24・27、写真図版 45)

8E-9H18 に位置し、長軸 0.38m、短軸 0.27m、深さ 0.28m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は A 類で単層である。遺物は出土していない。

P35 (図版 23・24・27、写真図版 45)

8E-9G14 に位置し、現存長軸 0.30m、短軸 0.45m、深さ 0.11m を測る。北側半分は調査区外となる。平面形は楕円形、断面形は弧状、覆土は A 類で単層である。遺構の真上には VII 層土が堆積しているが、検出した地点は後世の土木工事による攪乱をうけており、この VII 層土が自然に堆積したものであるかは疑わしい。遺物は出土していない。

P59 (図版 23・24・27、写真図版 45・46)

9F-1D10 に位置し、長軸 0.26m、短軸 0.26m、深さ 0.24m を測る。平面形は円形、断面形は U 字状である。覆土は A 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器の無台椀が出土した。

P82 (図版 23・24・27、写真図版 46)

8F-10B25、10C21 に位置し、長軸 0.64m、現存短軸 0.40m、深さ 0.18m を測る。北側は調査区外に延び、平面形は円形、断面形は弧状である。覆土は B 類で 3 層に分かれ、断面形と堆積状況から柱痕とみられる。遺物は須恵器の杯・鉢、土師器の無台椀が出土した。P83 を切る。

P83 (図版 23・24・27、写真図版 46)

8F-10B25 に位置し、長軸 0.43m、現存短軸 0.33m、深さ 0.36m を測る。北側は調査区外に延び、平面形は円形、断面形は漏斗状である。覆土は B 類で 2 層に分かれ、断面形と堆積状況から柱痕とみられる。遺物は出土していない。P82 に切られる。

P84 (図版 23・24・27、写真図版 46)

9F-1D8 に位置し、長軸 0.32m、短軸 0.30m、深さ 0.18m を測る。平面形は円形、断面形は箱状である。覆土は A' 類で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積している。遺物は須恵器の杯が出土した。

P85 (図版 23・24・27、写真図版 46)

8F-10C22 に位置し、長軸 0.39m、短軸 0.35m、深さ 0.25m を測る。平面形は円形、断面形は階段状である。覆土は 2 層に分かれ、レンズ状に堆積している。遺物は土師器の長甕・小甕が出土した。

P88 (図版 23・24・27、写真図版 46)

9F-1D7 に位置し、長軸 0.24m、現存短軸 0.15m、深さ 0.16m を測る。遺構を検出した調査区南壁付近は調査のための土側溝が掘られており、P88 は土側溝底面で確認した。平面形は方形で、断面形は U 字状である。覆土は B 類で単層である。柱根 (199) が残存していた。なおこの木柱について放射性炭素年代測定を行ったところ、1261-1299calAD の値がでている。SB95-P68 に切られている。

9) 6 区下層の概要

上層の調査により、6 区東端から西へ向かって約 40m (8F-10B ~ 9F-1F) にかけて VII・VIII 層土由来とみられる版築状の盛土層を断面で検出した。本調査ではこの盛土層を地業 1 (VII 層由来)・地業 2 (VIII 層由来) と分類したが、地業 1 は上層の遺構を検出するため精査段階で掘削してしまっていた。しかし、地業 2 の層は上層遺構確認段階でも残っていた。この地業 2 の土層を精査しつつ掘削・除去したところ、地業 2 の下から遺構のプランを検出した。これらの遺構覆土は VII 層の土を含まず、また地業の土も含まないことから地業が形成された中世期以前の遺構と思われ、上記の条件に合致した遺構を古代に画期を持つ下層の遺構として調査を行った。下層の遺構は掘立柱建物 1 棟、水田 1 基、土坑 3 基、溝 3 条、ピット 5 基であった。

10) 6 区下層の遺構

a 掘立柱建物 (SB)

SB96 (図版 28・29、写真図版 47)

9F-1C5、1D2 に位置し、主軸方位は N-74°-W である。東西方向に 2 基のピット P69・93 を検出した。P69 から P93 の柱間の距離は 2.60m である。P69・93 とともに柱根が残存しており、P69 底部からは礎板が出土している。柱根のあるピット 2 基のみの検出ではあるが、調査した面積が狭いことから調査区外に遺構が延

びる可能性は十分あるため、SB96とした。遺物はP93から柱根(203)が、P69から須恵器の杯・鉢、土師器の無台碗・長甕・小甕・鍋、柱根(204・205)・礎板(206・207)が出土した。なおP93柱根の放射性炭素年代測定を行ったところ、678-749calADの値がでている。

b 水 田 (SN)

SN94 (図版 28・29、写真図版 47・48)

9F-1E・1Fに位置し、主軸方位はN-0°-Sである。方位はSN94と隣接するSD89の間の地山を畦畔ととらえ、その畦畔の方位から割り出した。覆土は単層で、畦畔からSD53西岸付近まで9.48mの範囲に、底部に耕作跡とみられる凹凸をもちながら、おおむね一定の深さで広がっていた。水田覆土の上には地業2が堆積しており、中世期には埋め立てられたものと思われる。遺物は須恵器の無台杯・有台杯・杯蓋・短頸壺(115)・瓶類・甕、土師器の無台碗・長甕・小甕が出土した。

c 土 坑 (SK)

SK91 (図版 28・29、写真図版 47)

8F-10C23、9F-1C3に位置し、主軸方位はN-72°-Wである。現存長軸0.32m、短軸0.80m、深さ0.37mを測る。北側半分は調査区外である。平面形は不明、断面形は箱状である。覆土はA'類で3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器の杯が出土した。

d 溝 (SD)

SD75 (図版 28・29、写真図版 47)

9F-1D2・7～10・15、1E11に位置し、主軸方位はN-72°-Wである。短軸0.65m、深さ0.09mを測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状、覆土はC類で単層である。遺物は須恵器の無台杯(116～118)・有台杯(119)・鉢、土師器の無台碗・長甕・小甕・鍋、須恵器片を転用した円盤(131)が出土した。

SD89 (図版 28・29)

9F-1E12に位置し、主軸方位はN-0°-Sである。短軸1.00m、深さ0.30mを測る。北側及び南側は調査区外に延び、断面形は弧状で、覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺構はⅧ層を掘り込んでおり、東側にはSN94がある。SN94とSD89の間の地山が畦畔とすれば、SD89は畔溝の可能性がある。遺物は須恵器の無台杯・有台杯・杯蓋・甕、土師器の無台碗・長甕・小甕が出土している。

e ピ ッ ト (P)

P71 (図版 28・29、写真図版 48)

9F-1D1に位置し、長軸0.39m、短軸0.36m、深さ0.14mを測る。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土はC類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器の無台杯・杯類、土師器の無台碗・長甕・小甕・鍋が出土した。

P72 (図版 28・29、写真図版 48)

9F-1C5に位置し、北側は調査区外に延び、長軸0.59m、現存短軸0.37m、深さ0.33mを測る。平面形は円形で、断面形は階段状である。覆土はB類で2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器の杯類、土師器の無台碗・長甕が出土した。

P90 (図版 28・29、写真図版 48)

9F-1E13・14に位置し、長軸0.85m、現存短軸0.35m、深さ0.18mを測る。北側は調査区外に延び、平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土はB類で単層である。遺物は板状木製品(208)が出土した。SN94を切る。

P97 (図版 28・29、写真図版 48)

8F-10A15・20に位置する打ち込みの柱根(209)である。樹種はスギである。上層SX2の底面で検出されたため確認面は不明である。放射性炭素年代測定の結果675-779calADであったため古代と判断した。

第V章 遺 物

第1節 概 要

古墳時代・古代・中世の遺物が出土した。出土量はコンテナ（内寸54.0×34.0×15.0cm）で58箱（土器55箱、土製品0.5箱、石製品2箱、鍛冶関連遺物0.5箱）と、大型水槽1箱分の木製品である。古墳時代と中世の土器の出土量はごく少量で、奈良・平安時代（8世紀後半から9世紀）の土器が最も多く出土した。

第2節 土 器

A 記述の方法

時代ごとに4～6区の順に、同一区内では遺構、包含層の順に記述した。土器の胎土や色調等の詳細な情報は観察表に記載した。古代の時期区分及び年代観については〔春日1999・2005〕、灰釉陶器の年代・編年については〔斉藤1994〕、中世の珠洲焼については〔吉岡1994〕に従った。調整技法及び実測図の表現方法については、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井ほか1989〕の報告書を参考に以下のとおりとした。

ロクロ回転を利用したナデをロクロナデ、利用しないものをナデとした。

ロクロ回転を利用した削りをロクロケズリ、利用しないものをケズリとした。

ロクロ回転を利用した刷毛目をカキメ、利用しないものをハケメとした。

ロクロ成形された土器の底部の切り離し技法は、回転ヘラ切りと回転糸切りがある。記述の際には「回転」を省略した。

須恵器甕や土師器長甕等の外面に見られる叩板の痕跡をタタキメ、内面の当て具の痕跡を当て具痕とした。

小破片のため径の復元が困難な場合は、実測図の中心線と左右の線の間隔をあけた。

口縁部と胴部の境付近における調整技法の変化（ロクロナデからハケメまたはカキメ等）を明示するため、当該箇所を実線で表示した。

色調については『新版標準土色帖』37版〔小山・竹原2014〕に従い、土器外面の平均的な色調を観察表に記載した。本資料の須恵器胎土及び編年の位置付けについては春日真実氏にご教示頂いた。須恵器の胎土については〔春日2019〕に準拠し、以下のとおりとした。

A群：大型の石英・長石などを多く含む粗い胎土。阿賀北地域の窯跡群産に特徴的な胎土。

B群：白色小粒子を多く含むきめ細かい胎土。器面に黒色の吹き出しや斑点が見られる。佐渡小泊窯跡群産に特徴的な胎土。

C群：小型の石英・長石を少量含む粘土質の胎土。新津丘陵窯跡群産に特徴的な胎土。

D群：A～C群以外のもの

また、土師器の胎土については、前山の研究〔前山2021〕に基づき以下のとおり分類した。

a群：主として摩耗した岩石細粒子・粉碎した石英および岩石細粒子～微粒子を含むグループ。b群に比べ摩耗度が低く、摩耗した石英粒子の含有率は低い数値に留まる点が特徴的。西蒲原区域の土師器に一般的な胎土。今回の調査において、古代土器のほとんどがこの分類にあたる。

b群：著しく摩耗して光沢を帯びる岩石細粒子を多量に含むとともに、a群の指標となる破碎石英・岩石細粒子～微粒子が乏しいグループ。旧三島郡内を流れる島崎川の砂粒と類似度が高く西山丘陵周辺の土師器

に特徴的な胎土。第6次調査の出土土器には一定量見られたが、今回の出土土器には見られなかった。

c群：著しく摩耗した石英粗粒子・微粒子を含むグループで、破碎した石英や岩石粒子の含有量は少ない。新津丘陵の河川砂に類似し、新津丘陵周辺の土師器に特徴的な胎土。第6次調査の出土土器には見られたが、今回の出土土器には見られなかった。

d群：a～c群を特徴づける摩耗粒子が皆無に等しく、石英の破碎細粒子を多量に含むグループ。笹神丘陵の河川砂との類似性が指摘できるが、石英の粗粒子が欠落する点で、阿賀北の土師器とは異質な特徴をもつ。今回の出土土器には見られなかった。

e群：摩耗粒子が欠落し、破碎した白色岩石細粒子を多量に含むグループ。越後平野の周辺で同様の内容をもつ河川砂は確認されておらず、凝灰岩などの軟質岩石を粉碎して混和材とした可能性が高い資料。今回の出土土器には見られなかった。

f群：破碎した石英や岩石粒子を僅かに含むだけのグループ。生地に含まれた粒子の可能性が高く、混和材を欠落する資料と考える。今回の出土土器にわずかに見られる。

B 土器の分類

古代土器は、〔春日2019〕を参考に、種別ごとに器種を分類した。大別はアルファベット、細別は算用数字、法量による分類はローマ数字を使用し、器種ごとに組み合わせて表記した（第13図）。古墳時代の土器および中世の土器については数量が少ないため分類は行わない。

須 恵 器

無台杯 杯のうち高台が付かないもの。底部の切り離しはヘラ切りである。底部の形態により丸底をA類、平底をB類とした。法量分布は口径12～14cmに収まるものをI類、12cm未満のものをII類とした。

有台杯 杯のうち高台が付くもの。口縁から高台まで残存する個体が少なく、器高指数（器高/口径×100）での分類を行わなかった。高台の断面が三角形のものをA類、四角形のものをB類とした。B類にはハの字状に開くものと垂直に降りるものがあるが、数が少なく細分はしていない。底径7cm以上をI類、7cm未満をII類とした。

杯蓋 有台杯に伴う蓋である。口縁端部が短く垂下するものをA類、逆三角形の形状のものをB類とした。また、口端部径15cm以上をI類、口端部径13cm以上15cm未満をII類、13cm未満をIII類とした。鈕の残存する個体が少なかったため鈕の分類は行っていない。

長頸瓶（壺） 算盤玉状に肩が張る胴部に細長い頸部が付く。器形を復元できる資料は出土していない（45・90など）。

短頸壺 口縁部が短い球胴形の壺である。出土量は少ない（115）。

横瓶 俵型の胴部に短く外反する口縁部が付く。破片資料が少量出土した（123など）。

甕 口径30cm前後の中型と思われる口縁部片と体部破片が数点出土した（26・46など）。

壺蓋 短頸壺に伴う蓋である。出土は1点である（85）。

土 師 器

椀 ロクロ成形で底部を糸切りで切り離している。口縁部が直線的にのびるものをA類、口縁部が外反するものをB類とした。法量分布は、14～16cmに収まるものをI類、14cm未満のものをII類とした。

鉢 ロクロ成形で、椀より法量が大きく、口径は16cmを超える。出土は1点である（49）。

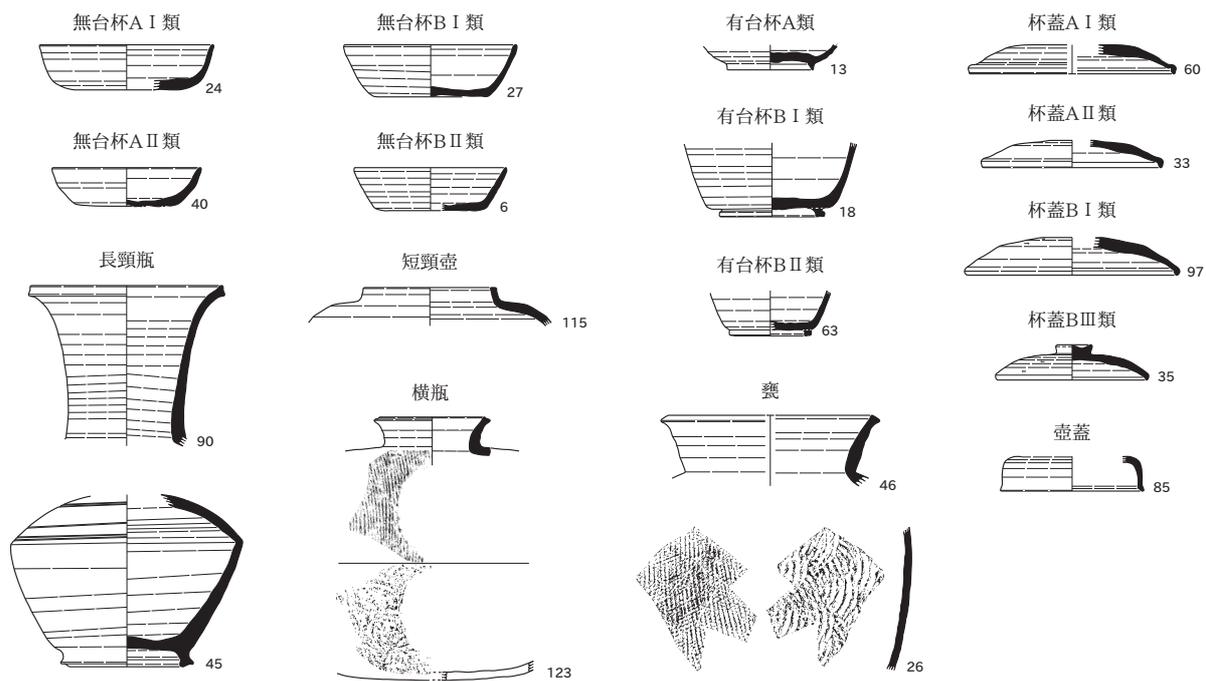
長甕 非ロクロ成形をA類、ロクロ・タタキ成形をB類、また口縁部形態により以下のように細分した。

1類：口縁端部が丸いもの

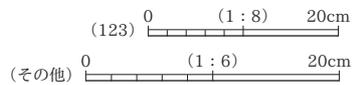
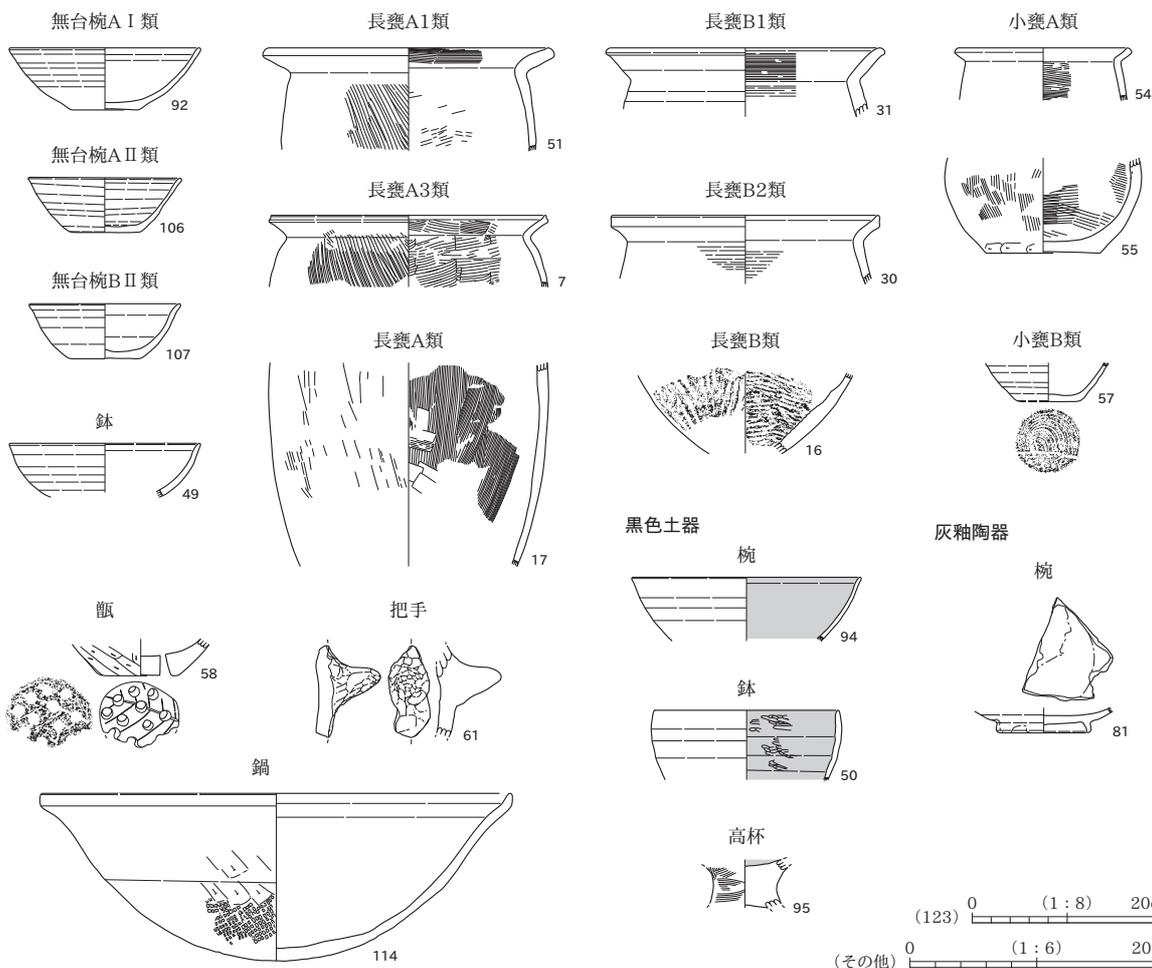
2類：口縁端部に面をもつもの

3類：口縁端部をつまみ上げるもの

須恵器



土師器



第13図 奈良・平安時代の土器分類

長甕は全形が残る資料はないが、長甕A類の口縁部形態3類はいわゆる「西古志甕」で口縁部の調整にロクロを使用している。また底部の細分は行っていないが基本的に平底である。長甕B類は長胴で丸底であり、胴部上半はロクロナデまたはカキメ調整、下半はタタキ成形である(16)。

小甕 分類の基準は長甕と同様である。小甕A類の口縁部形態は1類のみである。底部外面は無調整で、胴部外面下半をケズリで調整している(55)。小甕B類は2点出土である。底部は糸切りのもの(57)と無調整のものとなる。

鍋 ロクロ成形で下半がタタキ成形の鍋が数点出土した(114)。

甌 底部片を2点図示した(58・59)。このほかに把手が1点出土した(61)。

黒色土器

出土量は少ない。椀(94)と鉢(50)、高杯(95)を図示した。

灰釉陶器

皿の底部1点(81)を図示した。

C土器各説

1) 4区

4区SN12(図版30、写真図版49) 須恵器無台杯(1・2)を図示した。

須恵器無台杯 1はBⅡ類で、外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。底部内外面は赤く、還元が不十分であったことから、焼成の際、重ね焼きされたと考えられる。2はBⅡ類で底部から口縁部にかけて残存し、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。体部外面には漆と思われる付着物があり、いずれも胎土B群の佐渡小泊産で春日編年(以下同じ)Ⅴ期の所産と考える。

4区SN14(図版30、写真図版49) 須恵器有台杯(3)を図示した。

3はBⅠ類で底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる。底部はヘラ切りで切り離されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く。底部内面にススが、高台底部外面には炭化物もしくは漆が付着する。胎土はC群でⅤ期に比定される。

4区SD8(図版30、写真図版49・55) 須恵器無台杯(4)を図示した。

4は底部から体部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデで丁寧にヘラ切り痕を消している。底部外面には「宅成」の墨書文字が記されている。胎土はB群でⅤ～Ⅵ期に比定される。

4区遺構外(図版30、写真図版49・55) Ⅶ層、Ⅶ下層から須恵器無台杯(5・6)、土師器長甕(7)、排土から須恵器杯蓋(8)を図示した。

須恵器無台杯 5はBⅠ類で底部から口縁部にかけて残存し、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。内面にはススが散り、底部外面に墨書文字の一部が認められるが判読不能である。胎土は小砂利を多く含むC群で新津丘陵産と考える。6はBⅡ類で底部から口縁部にかけて残存し、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。胎土は小砂利を多く含むC群である。いずれもⅤ期に比定される。

土師器長甕 7は外面は縦位、内面は横位のハケメが施され、口縁端部は短くつまみ上げられているA3類である。胎土には海綿骨針が多く含まれる。Ⅳ～Ⅴ期の西古志甕である。

須恵器杯蓋 8は天井部から口縁部にかけて残存し、天井部は平坦で、口縁部に向かって軽く外反しながら下降し、口縁端部は短く垂下するAⅡ類である。天井部外面上端部はロクロケズリを施されている。胎土はC群でⅤ期に比定される。

2) 5 区

5区上層 SB46-P32 (図版 30、写真図版 49) 須恵器無台杯 (9) を図示した。

9 は底部から口縁部にかけての残存で、丸底で体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部はやや肉厚になる A II 類である。底部はヘラ切り後、丁寧にナデが施されヘラ切り痕を消している。IV 2・3 期の所産である。

5区上層 SD3 (図版 30、写真図版 49) 瓦質土器の火鉢・風炉 (10) を図示した。

10 は口径 36.0cm と推定される中世の瓦質土器である。頸部から口縁部にかけての残存で、頸部は強く屈曲して開き、口縁部は外反する。ロクロ成形で、頸部に 5 条の浮線文が巡る。胎土は白色粒子を多く含む。立ち上がりや口径から、火鉢か風炉と考えられる。15 世紀頃と考える。

5区上層 SD15 (図版 30、写真図版 49) 須恵器無台杯 (11)・有台杯 (12・13)、土師器無台椀 (14・15)・長甕 (16) を図示した。

須恵器無台杯 11 は底部から体部下端にかけての残存である。底部はヘラ切り後、ナデが施されている。また、使用による磨滅が著しい。胎土は C 群で、時期は IV 期に比定される。

須恵器有台杯 12 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がり、底部はヘラ切りで切り離されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く B I 類とした。内面と底部外面が生焼けで、還元が不十分だったことから、重ね焼きされたと考えられる。胎土は B 群で V 期に比定される。13 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる。底部はヘラ切りで切り離されている。高台は逆三角形で貼り付けされる A 類である。IV 期に比定される。体部外面下端まで自然釉がかかっており、伏せられた 13 の高台内に別個体をのせて焼かれたと考える。胎土は B 群で VI 期に比定される。

土師器無台椀 14 は底部から体部にかけての残存で、外傾して立ち上がる。ロクロ成形で、底部は糸切りにより切り離されている。15 は底部から体部にかけての残存で、内湾気味に立ち上がる。ロクロ成形で、底部は糸切りで切り離された後、縁辺部にナデを施している。体部や内面は磨滅していて、調整が不明瞭である。

土師器長甕 16 は体部下端のみ残存する長甕 B 類である。外面縦位の平行タタキメ、内面横位の当て具痕がみられる。胎土は磨滅した石英・長石を多く含む。

5区上層 SD19 (図版 30、写真図版 49) 土師器長甕 (17) を図示した。

17 は胴部のみ残存で、内面に縦位のハケメが施され外面は板状のもので削っている。外面は煮沸によるススが見られる。

5区上層 SD43 (図版 30、写真図版 49) 須恵器有台杯 (18) を図示した。

18 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる B I 類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く。外面は自然釉がかかっている。内面には降灰が厚く積もった痕がある。胎土は C 群で IV 2・3 期に比定される。

5区上層 SD48 (図版 31、写真図版 49) 土師器高杯 (19・20)・杯 (21) を図示した。

土師器高杯 19 は裾部から口縁部までの残存で、裾部は「ハ」の字状に開き、杯部は外反して立ち上がり、口縁部はやや内湾する。脚部は輪積み後、脚部外面は縦位のハケメ後ナデ調整、脚部内面は斜位のハケメ後ナデ調整を施している。杯部外面は斜位と縦位のハケメで、杯部外面下方に杯底部と口縁部との接合による稜をもつほか指頭圧痕が認められる。杯部内面には多方向のハケメが施されている。20 は裾部から脚部にかけての残存である。脚部は「ハ」の字状に開く。内面にはハケメが確認できる。

土師器杯 21 は底部から口縁部までの残存で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部でやや外反する。丸底である。体部内外面、底部ともにナデによる調整がなされている。内外面に黒斑が観察される。

5区上層 P16 (図版 31、写真図版 49) 土師器無台椀 (22) を図示した。

22 は底部から体部にかけての残存で、底部から外傾して立ち上がり、口縁部がやや外反する B II 類である。ロクロ成形で、底部は糸切りにより切り離されている。体部外面にはススが若干付着している。

5区下層 SB150-P82 (図版 31、写真図版 50) 須恵器無台杯 (23) を図示した。

23 は体部から口縁部にかけての残存で、内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する I 類である。還元が不良で赤味のある色調である。胎土は C 群である。

5区下層 SB160-P81 (図版 31、写真図版 50) 須恵器無台杯 (24) を図示した。

24 は底部から口縁部にかけての残存で、内湾して立ち上がり、口縁部に至る。体部内面に炭と思われる付着物がある。底部はヘラ切り後、ナデを施され丸みを帯びた A I 類である。胎土は C 群で IV 1・2 期に比定される。

5区下層 SD62 (図版 31、写真図版 50) 須恵器無台杯 (25) を図示した。

25 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。ロクロ成形で、底部をヘラ切り後、底部から体部外面下端にかけてケズリを施している。胎土は B 群で IV 期に比定される。

5区下層 SD94 (図版 31、写真図版 50) 須恵器甕 (26) を図示した。

26 は胴部のみ残存で、外面には格子状タタキメが、内面には同心円当て具痕が残る。器壁の厚みから、胴部中央の部分とみられる。還元不良で赤味がかった色調である。胎土は B 群である。

5区下層 SD100 (図版 31、写真図版 50) 須恵器無台杯 (27・28)・有台杯 (29)、土師器長甕 (30・31) を図示した。

須恵器無台杯 27 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る B I 類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。28 は底部から体部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデを施されてヘラ切りの痕を消している。胎土は白色粒子を多く含む。V 期に比定される。

須恵器有台杯 29 は底部から体部下端までの残存である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く B I 類である。内面は使用により磨滅が著しい。胎土は C 群で IV 期に比定される。

土師器長甕 30 は頸部から口縁部にかけての残存で、頸部は「く」の字状に屈曲して開き、口縁端部は面を持つロクロ成形で、内外面横位のカキメが施されている B2 類である。胎土は磨滅した石英・長石が多く含まれている。31 は頸部から口縁部にかけての残存で、頸部は「く」の字状に屈曲して開き、口縁部は外反する。ロクロ成形で、内面にカキメが施され、口縁端部は外方につまみ出されている B1 類である。III 2～IV 期に比定される。

5区遺構外 (図版 31～33、写真図版 50・51・55) VII、VIII 層から須恵器杯蓋 (32～35)・無台杯 (36～42)・有台杯 (43・44)・長頸瓶 (45)・甕 (46)、土師器無台椀 (47・48)・鉢 (49)・長甕 (51～53)・小甕 (54～57)・甌 (58・59)、黒色土器鉢 (50)、また表採から、須恵器杯蓋 (60)、土師器甌把手 (61) を図示した。

須恵器杯蓋 32 は天井部のみ残存である。天井部は平坦で、つまみは中央が突出する。天井部外面上端はロクロケズリが施されている。胎土は B 群で V～VI 1 期に比定される。33 は天井部から口縁部にいたる残存である。天井部は平坦で、口縁部に向かって軽く外反しながら緩やかに下降し、口縁端部は逆三角形を呈する B II 類である。ロクロ成形で、V 期に比定される。34 は口縁部のみ残存である。口縁端部は逆三角形を呈する B I 類である。ロクロ成形である。口縁部外面に降灰が見られる。35 は天井部から口縁部にいたる残存である。つまみ中央は小さく突出し、ボタン状を呈する。天井部は平坦で口縁部に向かって外傾し、口縁端部はわずかに垂下する B III 類である。天井部外面上端はロクロケズリである。また、天井部内面に漆と考えられる付着物がある。胎土は B 群で V 期に比定される。

須恵器無台杯 36 は底部から口縁部にかけての残存で、やや小ぶりの丸底で外傾して立ち上がり、口縁部でやや外反する A II 類である。底部はヘラ切り後、ナデが施されている。胎土は C 群で IV 2・3 期に比定される。

37 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる B I 類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。胎土は C 群で IV 1・2 期に比定される。38 は底部から口縁部にかけての残存で、やや内湾して立ち上がり、口縁部に至る A I 類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されているが平らでなく凹凸が目立つ。胎土は C 群で IV 2・3 期に比定される。

39 は底部から口縁部にかけての残存で、体部から外傾して立ち上がり、口縁部に至る A I 類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。やや軟質な焼きで IV 2・3 期に比定される。

40 は底部から口縁部にかけての残存で、体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る AⅡ類である。底部はヘラ切りで切り離されている。その後のナデはわずかなため、底部下端とも粗い仕上がりである。また、体部および底部内面には黒色の小さな吹き出しがみられる。胎土は B 群で V 期に比定される。41 は底部から口縁部にかけての残存で、体部から内湾して立ち上がり、口縁部に至る BⅡ類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。内外面ともに黒色の小さな吹き出しがみられ、口縁部には自然釉が帯状に巡る。底部外面には「×」の焼成前刻書がある。胎土は C 群で V 期に比定される。42 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る BⅠ類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。焼きは軟質で表面は摩耗している。胎土は B 群で V 期に比定される。

須恵器有台杯 43 は底部から口縁部にかけての残存で、体部から内湾して立ち上がり、口縁部に至る。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く BⅠ類である。胎土は C 群で IV 2・3 期に比定される。44 は底部から体部までの残存で、内湾気味に立ち上がる。底部はヘラ切りで高台を貼り付けた後、ナデが施されている BⅠ類である。胎土は粗い A 群で IV 期に比定される。

須恵器長頸瓶 45 は底部から肩部にかけての残存で、胴部は外傾して立ち上がり、中位で最大径をもち、屈曲する。肩部には金属器を模した 2 条 1 単位の沈線が 2 本ある。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く。還元不良で色調は赤い。胎土は C 群でⅢ～Ⅳ期に比定される。

須恵器甕 46 は頸部から口縁部にかけての残存で、頸部で屈曲して開き、口縁部で外反する。ロクロ成形で、頸部外面にカキメが、口縁部は面取りが施されている。胎土は C 群である。

土師器無台椀 47 は体部から口縁部にかけての残存で、外傾して立ち上がり、口縁部に至る AⅡ類である。内面に稲の茎と考えられる圧痕がある。48 は底部のみの残存である。底部は糸切りで切り離される。胎土は a 類で海綿骨針を多く含む。

土師器鉢 49 は体部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。胎土は f 類で精良である。

黒色土器鉢 50 は体部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾にして立ち上がり、口縁部に至る。ロクロ成形で、内面横位のミガキ後、内面と外面口縁部に黒色処理が施されている。

土師器長甕 51 は胴部から口縁部にかけての残存である。胴部は内湾気味に立ち上がり、頸部で屈曲して開き、口縁部で外反する。非ロクロ成形の AⅠ類で、胴部外面には斜位の、胴部内面と口縁部内面には横位のハケメが施されている。口縁部外面にロクロナデが認められる。口縁端部は丸みを帯びている。52 は胴部から口縁部にかけての残存で、胴部から内湾気味に立ち上がり、頸部で屈曲して開き、口縁部で外反する。非ロクロ成形の AⅠ類で、両面とも摩耗が激しいが、胴部内外面には斜位の、口縁部内面には横位のハケメが認められる。口縁端部は丸みを帯びている。IV 2・3～V 期に比定される。53 は胴部から口縁部にかけての残存である。胴部から内湾気味に立ち上がり、頸部で屈曲して開き、口縁部で外反する。非ロクロ成形で、胴部外面には斜位の、胴部内面には横位のハケメが施されている。口縁部にはロクロが使用され、口縁端部は上方につまみ出されている A3 類である。西古志型で IV 2・3～V 期に比定される。

土師器小甕 54 は小甕 AⅠ類である。胴部から口縁部にかけての残存で、胴部は内湾気味に立ち上がり、頸部で屈曲して開き、口縁部で外反する。内面には横位のハケメがみられ、口縁端部は面取りがされている。外面は被熱により赤く、剥落が著しい。55 は底部から胴部にかけての残存で、胴部は内湾して立ち上がる。非ロクロ成形の A 類で、胴部外面は縦位の、胴部内面は横位や斜位のハケメが施されている。胴部外面下端には横位のケズリがみられる。底部は不調整である。外面は被熱により赤い。時期はⅢ～ⅣⅠ期に比定される。56 は底部から胴部にかけての残存で、胴部は内湾して立ち上がる。ロクロ成形の B 類で、内外面ともに横位のカキメが施されている。底部は不調整である。Ⅲ～ⅣⅠ期に比定される。57 は底部から体部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。ロクロ成形で、底部は糸切りで切り離されている。

土師器甑 58 は底部から胴部下端にかけての残存で、胴部は内湾して立ち上がる。胴部外面はケズリが、胴部内面はナデが施されている。底部には木葉痕がある。甑の孔は13孔まで認められ、外から穿孔されている。59 は底部から胴部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる。被熱による器面の摩耗が激しく、判然としないが、底部および胴部下端外面のハケメが確認できる。底部には甑の孔が14孔まで認められ、外から穿孔されている。いずれもⅢ期に比定される。

須恵器杯蓋 60 は天井部から口縁部にかけての残存である。天井部は平坦で、天井部から口縁部に向かってなだらかに下降し、口縁端部は短く垂下するAⅠ類である。天井部外面上端はロクロケズリが施されている。天井部内面には2本の線の刻書がある。胎土はC群でⅣ期に比定される。

土師器甑把手 61 は土師器甑の把手部分である。指頭圧痕があることから角状の部分はつまんで成形されている。把手の付け根にはススの付着が認められる。

3) 6 区

6区上層 SB95-P65 (図版33、写真図版51・55) 須恵器無台杯(62)を図示した。

62 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至るBⅡ類である。底部はヘラ切り後、ナデでヘラ切り痕を消している。底部外面には「宅成」の墨書が認められる。胎土はC群でⅤ期に比定される。

6区上層 SK47 (図版33、写真図版51) 須恵器有台杯(63)を図示した。

63 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に開くBⅡ類である。底部外面にススの付着が認められる。胎土はB群でⅤ期に比定される。

6区上層 SD53 (図版33、写真図版51・52・55) 珠洲焼片口鉢(64)・甕(65)、須恵器杯蓋(66)・無台杯(67～71)・有台杯(72～74)・横瓶(75)を図示した。

珠洲焼片口鉢 64 は体部から口縁部にかけての残存で、体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。ロクロ成形で、内面に12条1単位の卸目がある。口縁部は面取りされている。吉岡編年Ⅲ期と考えられる。

珠洲焼甕 65 は口縁部から頸部にかけての破片である。外面に平行タタキメが施される。吉岡編年Ⅲ期と考えられる。

須恵器杯蓋 66 は天井部から口縁部にかけての残存で、天井部は平坦で、天井部から口縁部に向かってなだらかに下降し、口縁部は屈曲して、やや開く偏平なフォルムである。口縁端部は逆三角形を呈するBⅡ類である。天井部外面上端はロクロケズリが施されている。胎土はC群でⅤ期に比定される。

須恵器無台杯 67 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至るBⅡ類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。胎土は白色粒子を多く含む。68 は底部から体部の残存で、体部は内湾して立ち上がるB類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。内外面に黒色の吹き出しがあり、底部内面には、細い植物繊維が埋まったままで焼成されたと考えられる痕がある。すべてⅤ期に比定される。69 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至るBⅠ類である。底部はヘラ切りで切り離された後、ナデを施されている。口縁部外面に重ね焼き痕がある。また、底部内面には漆と考えられる付着物が認められる。70 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至るBⅠ類である。底部はヘラ切りで切り離された後、ナデを施しヘラ切り痕を消している。内面には黒色の小さな吹き出しがある。口縁部外面に重ね焼き痕がある。71 は底部から体部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。胎土に大きめの石英が含まれる。

須恵器有台杯 72 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けて、底部よりほぼ垂直に付くBⅡ類である。体部外面には墨書が認められるが、判読不能である。73 は底部のみの残存で、底部はヘラ切りで切り離された後、ナデを施されている。高台は貼

り付けで、やや内傾に付く BⅡ類である。74 は底部のみの残存で、底部はヘラ切りで切り離された後、ナデを施されている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く BⅠ類である。底部外面に自然釉がかかっていることから、逆位にして焼成したと考えられる。内外面に漆と考えられるものが付着している。また、人為的に底部縁辺部を打ち欠いており、底部のみにしようとした意図が窺える。

須恵器横瓶 75 は胴部から肩部にかけての残存で、肩部で屈曲する。外面は平行タタキメ後ロクロナデ、内面は同心円の当て具痕が施されている。胎土は C 群である。

6 区上層 SX2 (図版 34、写真図版 52・55) 須恵器有台杯 (76) を図示した。

76 は底部のみ残存で、底部はヘラ切りで切り離された後、ナデを施されている。高台は貼り付けで、底部からほぼ垂直に付く BⅠ類である。底部外面には墨書が認められるが、判読不能である。胎土は B 群で V 期に比定される。

6 区上層 P17 (図版 34、写真図版 52・55) 土師器無台碗 (77～79) を図示した。

土師器無台碗 77 は体部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部でやや外反する BⅡ類である。胎土は磨滅した石英・長石を多く含む。78 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる。底部は糸切りで切り離され摩耗が激しく、回転方向は判別できなかった。内面に稲藁の圧痕が認められる。79 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部は糸切りで切り離された後、周囲にナデを施されている。胎土は f 類である。すべて IV 期に比定される。

6 区上層地業 1 (図版 34・35、写真図版 52・53・55) 白磁皿 (80)、灰釉陶器碗 (81)、須恵器杯蓋 (82～84)・壺蓋 (85)・無台杯 (86)・有台杯 (87～89)・長頸瓶 (90)、土師器無台碗 (91～93)、黒色土器碗 (94)・高杯 (95) を図示した。

白磁皿 80 は底部のみの残存である。底部はヘラ切り後、高台を垂直にケズリ出している。内面は全面に釉薬が施釉されているが、外面は高台内が無釉である。15 世紀頃の所産と考える。

灰釉陶器碗 81 は底部から体部にかけての残存である。底部はヘラ切りで切り離され、高台は貼り付けで、三日月状高台である。外面と体部内面に灰釉が施釉されている。見込みは無釉だが、中心部に一部施釉がある。胎土はやや粗いが内面は使用により磨滅している。9 世紀後半の所産と考える。

須恵器杯蓋 82 は天井部から外周部にかけての残存で、天井部は平坦で外周部はなだらかに下降する。つまみは中央が小さく突出し、ボタン状を呈する。天井部外面上端はロクロケズリが施されている。胎土は B 群である。83 は天井部から口縁部にかけての残存で、天井部は平坦で、口縁部にむかってなだらかに下降し、口縁部で屈曲し、口縁端部は逆三角形を呈する BⅢ類である。天井部外面上端はロクロケズリを施されている。外面は降灰により全体に自然釉がかかっている。また、人為的に口縁部を打ち欠いたとみられる痕跡がある。84 は天井部から口縁部にかけての残存で、天井部は平坦で、口縁部にむかってなだらかに下降し、口縁端部は短く垂下する AⅠ類である。口縁部外面は色の濃い部分が帯状に巡る重ね焼き痕がある。すべて V 期に比定される。

須恵器壺蓋 85 は天井部から口縁部にかけての残存で、天井部は平坦で、口縁部にむかって急降下し、口縁部は外反する。ロクロ成形で、内外面に自然釉がかかっている。胎土は C 群である。

須恵器無台杯 86 は底部から口縁部にかけての残存で、体部から外傾して立ち上がり、口縁部に至る BⅠ類である。底部はヘラ切りで切り離された後、ナデを施されている。胎土は B 群で V 期に比定される。

須恵器有台杯 87 は底部のみの残存である。ロクロ成形で、底部はヘラ切りで切り離された後、高台を貼り付けている BⅠ類である。底部外面には松葉状の 2 本の焼成前刻書がみられる。また、人為的に底部縁辺を打ち欠いており、底部だけにしようとした意図が認められる。V 期に比定される。88 は底部から体部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がる。底部はヘラ切りで切り離された後、高台は貼り付けで「ハ」の字状になる B2 類である。体部から底部外面にかけて植物繊維も残る火樨が、底部外面には「×」状と思われる焼成前刻書が認められる。内面は自然釉が所々剥がれた状態で体部を中心に遺る。89 は底部から体部にかけての残存である。

底部は高台を「ハ」の字状にケズリ出している BⅡ類である。底部外面を除き、釉がかかっている。また、底部外面には「×」状の焼成前刻書が認められる。胎土はすべて C 群で V 期に比定される。

須恵器長頸瓶 90 は頸部から口縁部にかけての残存である。頸部は外反して立ち上がり、口縁部で開く。外面と内面に自然釉がかかる。胎土は B 群で IV 期に比定される。

土師器無台椀 91 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾気味に立ち上がる AⅡ類である。ロクロ成形で底部は糸切りで切り離されるが、調整は明瞭でない。口縁部内外面の向かい合う 2 か所にススがあるため、灯明皿と考えられる。また、体部内面には糊殻と思われる圧痕が 2 か所ある。92 は底部から口縁部にかけての残存で内湾気味に立ち上がる AⅠ類である。ロクロ成形で、底部は糸切りで切り離されている。93 は底部から体部下端にかけての残存である。ロクロ成形で、底部は糸切りで切り離されている。体部外面と底部内面のススの付着から灯明皿と考える。いずれも VI 期に比定される。

黒色土器椀 94 は体部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。内面は摩耗しているが、黒色処理が認められる。胎土は f 類で精良である。IV 期に比定される。

黒色土器高杯 95 は脚部の破片である。杯内部にわずかに黒色処理が認められる。Ⅱ～Ⅲ期に比定される。

6 区上層地業 2 (図版 34・35、写真図版 53・55) 須恵器杯蓋 (96・97)・無台杯 (98～103)・有台杯 (104)・壺あるいは瓶 (105)、土師器無台椀 (106～113)・鍋 (114) を図示した。

須恵器杯蓋 96 は天井部から外周部にかけての残存で、天井部は平坦で、外周部にかけてゆるやかに下降する。つまみは中央が突出する。天井部外面上端はロクロケズリを施されている。97 は天井部から口縁部にかけての残存で、天井部は平坦で、口縁部に向かってなだらかに下降し、口縁端部は逆三角形を呈する BⅠ類である。天井部外面上端はロクロケズリを施されている。磨滅した石英・長石を多く含む。いずれも IV 期に比定される。

須恵器無台杯 98 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる BⅠ類である。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。口縁部外面には色の濃い部分が帯状に巡る重ね焼き痕がある。99 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る BⅠ類である。底部はヘラ切りで切り離れた後、粗くナデを施されている。体部の一部を人為的に打ち欠いているが、目的は不明である。100 は底部から口縁部にかけての残存で、体部から外傾して立ち上がる BⅠ類である。底部はヘラ切り後、多方向のナデを施されている。胎土は B 群で IV 期に比定される。101 は底部から体部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる A 類である。底部はヘラ切り後、全周を削っている。胎土は B 群で IV 期に比定される。口縁部外面には色の濃い部分が帯状に巡る重ね焼き痕がある。102 は底部のみの残存である。ロクロ成形で、底部はヘラ切り後、ナデを施されているが、ナデが粗いほか、板の痕で凹凸になっているにもかかわらず、底部外面に「宅成」の墨書が記されている。103 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。BⅠ類で IV 期に比定される。

須恵器有台杯 104 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、高台を貼り付けている BⅠ類である。体部と底部外面に自然釉がかかっている。

須恵器壺・瓶 105 は底部から体部下端にかけての残存である。底部はヘラ切り後、高台を貼り付けている。底部下端と高台に自然釉がかかっている。

土師器無台椀 106 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや肥厚する AⅡ類である。ロクロ成形で、底部外面は糸切りで切り離されている。胎土は f 類である。107 は底部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾し立ち上がり、口縁部でやや開く。ロクロ成形で、底部外面は糸切りで切り離されている。108 は体部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。ロクロ成形である。内面は剥離が激しい。内面に局所的にススが付着するため灯明皿の可能性はある。109 は底部から体部下端にかけての残存である。ロクロ成形で底部は糸切り後、ナデが施されている。110 は底部から体部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がる。ロクロ成形で、底部外面は糸切りで切り離されている。111

は底部から体部下端にかけての残存である。ロクロ成形で、底部は糸切り後、ナデを施されている。112は底部から体部にかけての残存で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。ロクロ成形で、底部外面は糸切りで切り離されている。胎土は海綿骨針を含む。113は底部から体部下端にかけての残存である。ロクロ成形で、底部は糸切り後、ナデが施されている。すべてVI期に比定される。

土師器鍋 114は底部から口縁部にかけての残存で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部でやや開き、口縁端部は垂直に立ち上がる。ロクロ成形で、底部外面から体部外面下端には格子状タタキメが認められるが、内面は摩耗のため当て具痕等は認められなかった。

6区下層 SN94 (図版36、写真図版54) 須恵器短頸壺(115)を图示した。

115は肩部から口縁部にかけての残存で、頸部で屈曲し、口縁部はやや垂直に立ち上がる。ロクロ成形である。口縁部は還元されているが、肩部は還元不良で赤味がかかっている。

6区下層 SD75 (図版36、写真図版54) 須恵器無台杯(116～118)・有台杯(119)を图示した。

須恵器無台杯 116は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部はヘラ切り後、ナデを施されているBI類である。口縁部外面に、色の濃い部分が帯状に巡る重ね焼き痕がある。117は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部でやや開くBII類である。118は底部から体部下端にかけての残存で、体部下端は外傾して立ち上がる。底部はヘラ切り後、多方向にナデを施されている。すべてV期に比定される。

須恵器有台杯 119は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。底部はヘラ切り後、ナデを施されている。高台は貼り付けて、垂直に付くBI類である。胎土はD群でV期に比定される。

6区遺構外 (図版36、写真図版54・55) 須恵器杯蓋(120)・有台杯(121)・甕(122)・横瓶(123)、土師器無台碗(124)を图示した。

須恵器杯蓋 120は天井部から口縁部にかけての残存で、天井部は平坦で、口縁部に向かってなだらかに下降し、口縁端部は短く垂下するAII類である。天井部にロクロケズリが見られる。天井部外面に墨書が認められるが、判読不能である。

須恵器有台杯 121は体部から口縁部にかけての残存で、体部は外反して立ち上がる。

須恵器甕 122は頸部の小片で、外反して立ち上がる。ロクロ成形で、外面には、3条の波状文が施されている。胎土は石英を多く含む。

須恵器横瓶 123は肩部から口縁部にかけての残存で、頸部で屈曲し開き、口縁部で外反する。ロクロ成形後、外面は平行タタキメ、内面は同心円の当て具痕がみられる。頸部には口縁の接着痕が残る。また口縁部内外面には自然釉がかかる。

土師器無台碗 124は底部から口縁部にかけての残存で、体部は外傾して立ち上がりは、やや外反する。AII類である。ロクロ成形で、底部は糸切りで切り離される。

第3節 土製品・石製品・円盤・転用研磨具・鉄製品・ 鍛冶関連遺物・銭貨・木製品

A 土製品

土錘 125 は管状の土錘である。両端とも一部欠損している。長さ 4.35cm、外径 1.2cm、内径 0.4cm、重量 4.6g である。表面はナデと指頭による調整があるほか、靱殻と考えられる圧痕がある。

126 は大型の土錘で半身のみの残存である。長さ 6.4cm、外径 5.2cm、内径 1.9cm、重量 92.3g である。表面はナデ調整である。胴部外面には刃物によるガジリ痕が複数あり、内面には靱殻と考えられる圧痕が認められる。

B 石製品

石製模造品 127 は双孔円盤の半身のみの残存で、穿孔が 1 か所残る。粘板岩製である。長さ 2.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.2cm、重量 0.5g である。

砥石 128 は凝灰岩製の砥石である。1 面のみ、摩耗が顕著である。

敲石 129 は花崗閃緑岩製の敲石である。下部に敲き痕がある。

C 円盤・転用研磨具

円盤 須恵器および土師器の甕体部破片を打ち欠いて円盤状にしたものが 4 点確認されている。大きさはいずれも 2.5～3.0cm に収まる。131 のみ土師器甕破片で、その他は須恵器甕の転用である。結七島遺跡〔植田ほか 2003〕や加茂市馬越遺跡〔伊藤 2005〕に出土例がある。なお馬越遺跡では、打ち欠いた周囲に磨痕を持つものと打ち欠いただけのものの 2 種が確認されているが、本遺跡では、周囲を打ち欠いただけのタイプしか確認されていない。

転用研磨具 134 は長さ 7.75cm、幅 6.1cm、厚さ 1.7cm、重量 131.0g で、珠洲焼甕の体部片を転用したと考えられる。内外面と断面 1 辺を研磨に使用しているが、特に断面の摩耗が顕著である。

D 鉄製品・鍛冶関連遺物・銭貨

鉄製品には和釘・鉄鎌・羽釜の鏝・鉄片、鍛冶関連遺物には鍛造滓・椀型滓・流動滓・鉄滓・炉壁・フイゴ羽口、ほかに銭貨がある。

出土の分布は、調査範囲の制約から判然としないものの、4 区は畦畔 26 (7F-4・5F) 付近、6 区は SD53 (4 区に延伸する) からの出土が多い傾向にある。いずれも (142・153 を除く) VII 層または上層の遺構からの出土であり、中世の所産とみられる。以下、調査区ごとに記述する。

4 区 (135～137)

すべて水田 1 層から出土した。135 は鉄滓である。表面に気泡を発生し、ガラス質滓化する。最下部に炉床土が付着する。136 は鍛造滓の剥片である。端部の一方はくの字に折れ曲がる。137 は流動滓である。楕円形を呈し、一部はガラス質滓化して光沢がある。やや重量感がある。

5 区 (138～144)

遺構に伴うものはなく、142 を除き VII 層からの出土である。138 は 4 点に散じた板状の鉄片である。形状は非対称で一端は幅広、全体に平坦で、厚さ 2.3mm を測る。用途は不明である。139 は鉄滓である。細かい気泡を有する。溶解物が付着し、錆化している。140～142 は和釘で、断面形はいずれも四角形を呈する。140

は頭部を欠損し、錆の付着が著しい。細い形状から錐の可能性もある。141は遺存状態が良好である。頭部をかぎ状に折り曲げている。142は先端部を欠損し、中央部分でくの字に折れ曲がる。頭部も欠損がみられるが、形状から頭巻型の可能性がある。本個体はI層からの出土であり、中世以降に位置付けられようか。143は流動滓である。細かい気泡を発生し、密度が低く非常に軽い。一部にガラス質滓化がみられる。2点あるが出土状況と上記の特徴から同一のものと考えた。144は鉄滓である。ガラス質滓化がみられ、軽い。

6区 (145～155)

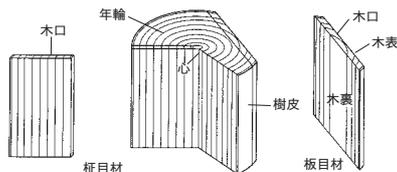
おもにSD53とピットから出土した。SD53から出土したものは145～148である(4区に延びるSD53出土もここで記述する)。145は鉄鎌である。錆が付着するが全体の形状がよくわかる。鎌身部は先端部を欠損するものの槲葉形を呈する。頸部・柄部は錆の付着が著しい。頸部は中央に向かいやや括れ、断面は方形を呈する。柄部の断面は円形である。茎部は端部に向かい細くなる。断面は方形を呈する。征矢に分類されるもので、軍陣用とされる。146～148はフィゴ羽口でいずれも小破片である。146は外面に溶解物が付着し、胎土は砂質に富む。推定内径は約3cmである。147も外面に溶解物が付着する。内面に通風孔部がわずかに残存する。内面から外面にかけて、明赤褐色、灰褐色、黒褐色の被熱色を示す。148は帯状に灰褐色を呈する。149は羽釜の鏝である。地業2層から出土した。厚さ19.7mm、外径330mm、内径276mmを測る。鋳造品で全面に錆が付着する。150・151はP10から出土した。150は椀型滓である。不整な六角形で、全体的に凹凸がみられるものの、断面は緩い弧状を呈し、中央部がややくぼむ。底面に取り込まれた炉壁の一部が付着する。151は炉壁である。151は内面が青灰色を呈し、器面を整えるナデが施される。胎土には混和材(スサ)が焼けた痕跡と思しき条痕が残る。152はP17から出土した炉壁である。砂粒を含まない均一な胎土で、表面に細かいヒビが入る。内面に溶解物が付着する。153は攪乱から出土したフィゴ羽口である。外面に溶解物と炉壁が付着する。胎土は長石を微量含み、緻密である。154・155は銭貨である。154は唐銭の開元通寶。155は南宋銭の宣和通寶である。

E 木製品

木製品は80点を数え、このうち55点を図示した。木材の部位名称は〔橋本2003〕(第14図)、木取りは〔猪狩2004〕(第15図)に従った。区ごと、上層、下層、包含層の順に掲載した。

1) 4区木製品 (図版38、写真図版57)

156は杓文字状木製品である。先端部が欠損しているため全体の形状が不明であるが、柄も含め全体的に平たい板状で調理具の杓文字の可能性が高い。生活必需品として、小坂居付遺跡や浦廻遺跡など周辺の中世遺跡でも出土している。わずかに刃物痕が残る。157は板状木製品である。細く折り取られた板目材で先端が焦げており、付け木として使用されたと考えられる。158は把手である。両端が斜めに削られており、この内片側は炭化している。鍋蓋と一緒に焦げたのであろう。159は箸である。片側が欠損している。160は用途不明品である。斜めに加工された端部を持ち、片側が著しく炭化している。



第14図 木取り及び木材一般の部分名称 (〔橋本2003〕から転載)

丸木取り	半割	偏半割	ミカン割	偏ミカン割
芯去りミカン割	削り出し	板目	柃目	流れ柃目

第15図 木取りの分類 (〔猪狩2004〕から転載)

2) 5 区 木 製 品 (図版 38・39、写真図版 57)

161 は SB45-P37 から出土した礎板である。偏半割材で木裏を上面にしており、柱のアタリ痕が3箇所確認できる。樹種はハンノキ属ハンノキ亜種であった。162 は SB46-P32 から出土した木柱である。ヤナギ属の丸木取り材で、底面を緩いV字状に加工している。163 は SB46-P35 から出土した礎板である。ハンノキ属ハンノキ亜種の偏半割材で木裏を上面に出土した。164 は SD30 から出土した漆器椀である。ケヤキ材で口径が14.2cmを測る。内外面黒漆が施されていた。形態から15世紀頃のものとする。165 は SD30 から出土した下駄である。モクレン製で足指のところに使用による摩滅が認められる。166 は P63 から出土した木柱である。樹種はコナラ属コナラ節で、直径4.9cmと木柱としてはかなり細い。167 は SB161-P122 から出土した木柱である。ニレ属の丸木取り材で底面をV字に加工している。直径は12.9cmで茶院A遺跡の木柱としては、平均的なサイズと言える。放射性炭素年代測定で669-774calADと出ており、古代の木柱である。168 は SB161-P134 から出土した木柱である。オニグルミの丸木取り材で底面は伐採後に整えた程度の加工が施されている。直径は12.2cmで同じSB161から出土したP122の木柱とほぼ同サイズである。放射性炭素年代測定の結果も673-779calADと同時期である。169 はヤマウルシの丸木取り材の杭である。直径は3.4cmで3方向から削っている。170・171 は齋串である。170 は柁目材の上端を尖らせている。尖らせた肩の部分には刃物で何箇所か刻みを入れた痕跡が残る。171 は板目材で上端は広く、下端は細長く尖らせている。鎌などの武器形の形代の可能性がある。172 は火鑽臼である。使用されたのは1か所のみである。

3) 6 区 木 製 品 (図版 39～42・写真図版 58～60)

173 は SB95-P60 から出土した木柱である。クリの芯去りミカン割材で、周囲を面取りし、底面も平らに加工している。側面にはチョウナ痕が認められる。174・175 は SB95-P63 から出土した礎板である。いずれも樹種同定をしていないが広葉樹材である。174 の側面は弓型に凹んでおり、本来は梁など別の部材が長期間あたっていたものと考えられる。建築部材の両端を切断して礎板に転用したと考えられる。175 は174との接合関係は見られないが、同一の部材の可能性が高い。176 は SB95-P65 から出土した木柱である。173 同様クリの芯去りミカン割材を使用しているが、断面がやや不整形である。177 は SB95-P68 から出土した木柱である。173・176 同様クリの芯去りミカン割材でチョウナによる面調整が顕著である。放射性炭素年代測定を行った結果、1220-1275calADという年代が出ている。178 は SB95-P68 の礎板である。177 の下に敷かれていた。クリの板材の両端を加工しており、2.5mm角の釘穴が1か所あることから、建築部材を礎板に転用したと考えられる。179～182 は箸である。いずれも両端が欠損していて遺存状態は悪い。183 は不明木製品である。元々の形状は、やや厚手の円形板だったと考える。容器の底板とするには厚い。184 は SD6 から出土した木柱である。ハンノキ属ハンノキ亜種の直径9.7cmの丸木取り材だが、横位で出土していることから、遺構に伴う構造物ではないと考える。185 は漆器皿である内外面黒漆が施され、外面には朱漆で花が描かれる。186～188 は箸である。いずれも欠損していて遺存状態は悪い。189 は舟形である。片方は舳先の曲線を出すため細かく削られている。近隣同時期の小坂居付遺跡でも類似のものが出土している。190 は加工板である。刃物痕が多い板の片側を削って刀様に加工している。191 は人形の形代と考える。厚みが均等でない板目の板を用いて、先端を頭部様に両側から削り出している。市内の馬場屋敷遺跡にも類例がある。192 は曲物側板の破片である。スギ材で外面からの穿孔が1か所あるほか、内面にはケビキが残る。193 は下駄で樹種はモクレン属である。下駄の歯を差し込む穴が焦げていることから、穿孔の際に焼いた鉄箸などで穴を開けている可能性がある。また、親指の跡と考えられる使用痕があるので、左足の下駄と推測する。194・195 は下駄の歯である。いずれもスギ材である。194 には本体に差し込んでいた際のアタリ痕がある。196 は板状木製品である。厚さ1.45cmの長い板材で中央に2mmの穿孔がある。表面に調整は無く、縦に割っただけの材と考える。用途は不明。197 は棒状木製品である。先端のみ削って加工している。198 は曲物側板である。内面に刃物痕が見られるが、曲物のケビキとは異り、方向や間隔が一定ではない。199 は P88 の木柱である。ハンノキ属の丸木取り材で、底面を

平らに仕上げている。表面には樹皮が残り、放射性炭素年代測定の結果、1261-1299calADの暦年代が出ている。200・201は刀子の柄と鞘である。いずれもスギ材である。200の柄には刀子の身を固定するための目釘穴が2か所あり、201の鞘には刀子が収まるよう刀子の形に削ってくぼめてある。いずれも半身が欠けている。同様の遺物が小坂居付遺跡からも出土している。202は匙未成品である。凹みの加工がされているが浅く、未成品と考える。203はSB96-P93から出土した木柱である。クリの丸木取り材で直径は23cmと大きい。放射性炭素年代測定を行ったところ678-749calADという結果が出ている。204・205はSB96-P69から出土したクリ材の木柱である。2本が接した状態で出土したため、接合関係にあると想定したが、隙間が多く接合はできなかった。底面は平らでクリのタンニンが沈着していた。放射性炭素年代測定の結果、772-883calADの暦年代が出ている。206・207はSB96-P69から出土した礎板である。204・205の両側から固定するように斜めに置かれていた。208は板状木製品である。表面には刃物痕が認められるが、中央に偏っている。209はP97から出土した木柱である。スギ材で先端を尖らせた打ち込み式の柱である。放射性炭素年代測定の結果、675-779calADの暦年代が出ている。210は丸木弓である。下部先端が裂けているが、全長139.6cmである。樹種はイヌガヤで放射性炭素年代測定の結果、820-901calADの暦年代が出ている。上部の弭は削り出されているものの、分枝部が太く残り、全体的に荒削りで角ばっていることから、製作途中で裂けて放棄された可能性がある。また、下から24cmに直交する用途不明の四角い切れ込みが入っている。

第VI章 自然科学分析

第1節 概要

茶院A遺跡第7次調査においては、大きく奈良・平安時代と鎌倉時代の2時期の掘立柱建物や水田遺構などが検出された。しかしながら、出土土器のほとんどが古代の土器で、土器のみで遺構の時代を判断することは困難であった。幸いなことに木柱などの有機質遺物が多かったため、遺構の構築年代を検討する目的で放射性炭素年代測定を行った。また、水田遺構の検討を行うため、種実同定、プラント・オパール分析、花粉分析、珪藻分析を実施した。このほか、当時の植物・動物利用を検討する目的から、樹種・骨・貝類の同定も行った。

第2節 樹種同定

A 試料と方法

樹種同定の対象は、第7次調査で出土した木製品等36点(試料1~15・17~29・34~42)である。いずれも調査担当者によって採取された木片を試料とする。木材のうち、試料2・8・9・11・12・13・21・24・27・29・30・34・35の13点は、同一試料を用いて放射性炭素年代測定を行っている(第3節)。

剃刀を用いて、横断面(木口)、放射断面(柁目)、接線断面(板目)の3断面について徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東1982、Wheeler他1998、Richter他2006]を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、[林1991、伊東1995、1996、1997、1998、1999]を参考にする。

B 結果

樹種同定結果を第4表に示す。木製品等は、針葉樹2分類群(イヌガヤ、スギ)広葉樹9分類群(モクレン属、ニレ属、ケヤキ、コナラ属コナラ節、クリ、オニグルミ、ハンノキ属ハンノキ垂属、ヤナギ属、ヤマウルシ)に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イチイ科イヌガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・モクレン属 *Magnolia* モクレン科

散孔材。道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は階段状~対列状となる。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~40細胞高。

・ニレ属 *Ulmus* ニレ科

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が1~2列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では、小径の道管が塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~6細胞幅、1~40細胞高。

・ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

ニレ科ケヤキ属

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が少なくとも1列認められる。晩材部では小径の道管が塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が1列配列した後、急激に径を減少させる。晩材部では、小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が3~4列配列した後、やや急激に道管径を減少させる。晩材部では小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・ヤマウルシ *Toxicodendron trichocarpum* (Miq.) Kuntze ウルシ科ウルシ属

環孔材。年輪の始めにやや大型の道管が3~4列配列した後、緩やかに径を減少させる。晩材部では、小径でやや厚壁の道管が単独または2~3個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

・オニグルミ *Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis* (Komatsu) Kitam. クルミ科クルミ属

散孔材。道管径は比較的大径、単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科

散孔材。道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は階段穿孔板、壁孔は対列状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと集合放射組織とがある。

・ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

散孔材。道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。

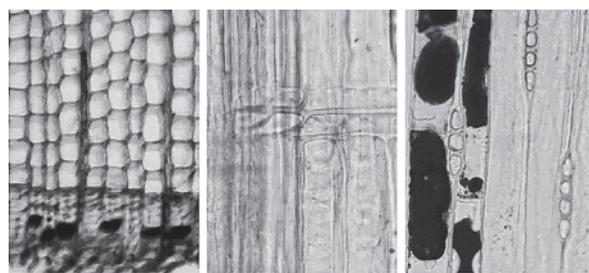
第4表 樹種・種実同定結果

試料 No.	区	遺構	グリッド	種類	樹種
1	4	樹木列木3	8F-9F20	自然木	ヤナギ属
2	4	樹木列木4	8F-9F15	自然木	ヤナギ属
3	4	樹木列木5	8F-9F15	自然木	ヤナギ属
4	4	樹木列木6	8F-9F10	自然木	ヤナギ属
5	6	SD53	8F-9F25	下駄	モクレン属
6	6	SD53	8F-9F25	下駄の歯	スギ
7	5	SD30	7F-5D17	椀	ケヤキ
8	5	SB46-P32	7F-5B4	木柱	ヤナギ属
9	5	SB45-P37	7F-5C8	礎板	ハンノキ属ハンノキ亜種
10	5	SB46-P35	7F-5B8	礎板	ハンノキ属ハンノキ亜種
11	5	P63	7E-3H21	木柱	コナラ属コナラ節
12	5	SB161-P122	7F-5B9	木柱	ニレ属
13	5	SB161-P134	7F-5C6	木柱	オニグルミ
14	5	SD30	7F-5D18	下駄	モクレン属
15	6	SD6	8E-10J2	木柱	ハンノキ属ハンノキ亜種
17	6	SD53	9F-1F17	曲物側板	スギ
18	6	SD53	9F-1F17	板状木製品	スギ
19	6	SD53	9F-1F17	下駄の歯	スギ
21	6	P97	8F-10A20	木柱	スギ
22	6	地業1	9F-1E20	鞘	スギ
23	6	地業1	9F-1E20	柄	スギ
24	6	遺構外	8E-8E21	弓	イヌガヤ
25	6	SB95-P60	9F-1D9	木柱	クリ
26	6	SB95-P65	9F-1D7・8	木柱	クリ
27	6	SB95-P68	9F-1D6	木柱	クリ
28	6	SB95-P68	9F-1D6	礎板	クリ
29	6	SB96-P93	9F-1C5	木柱	クリ
34	6	P88	9F-1D7	木柱	ハンノキ属ハンノキ亜種
35	6	SB96-P69	9F-1D2	木柱	クリ
36	5	遺構外	7F-5B10	杭	ヤマウルシ
37	5	遺構外	7F-5D18	火きり白	スギ
38	6	SB95-P63	9F-1D9	礎板	クリ
39	6	SB95-P63	9F-1D9	礎板	クリ
40	6	SB96-P69	9F-1D2	木柱	クリ
41	6	地業2	9F-1E20	匙状木製品	モクレン属
42	6	SB96-P69	9F-1D2	礎板	スギ

※20は欠番



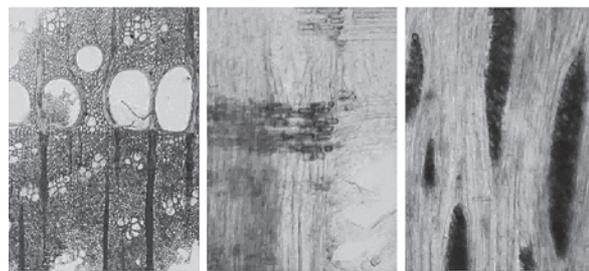
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
イヌガヤ 試料24



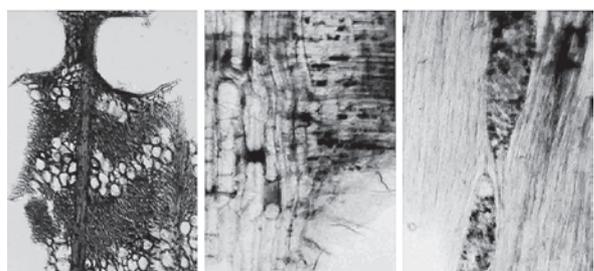
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
スギ 試料18



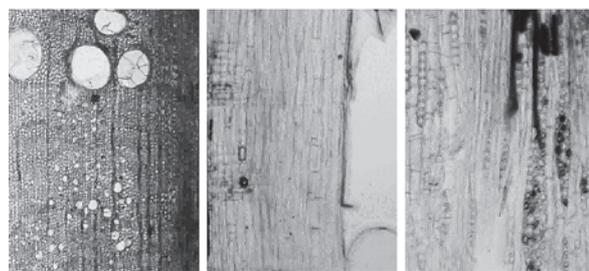
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
モクレン属 試料5



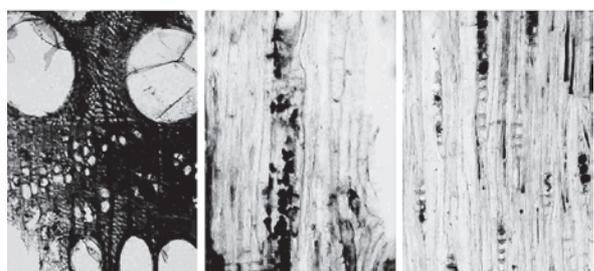
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ニレ属 試料12



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ケヤキ 試料7



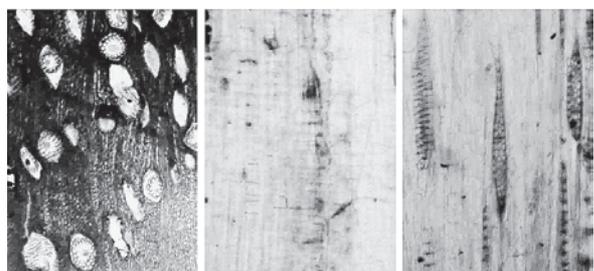
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
コナラ属コナラ節 試料11



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
クリ 試料26



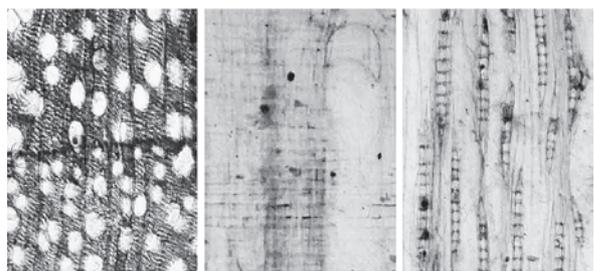
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ヤマウルシ 試料36



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
オニグルミ 試料13



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ハンノキ属ハンノキ亜属 試料10



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ヤナギ属 試料4

第 16 図 木製品顕微鏡写真

C 考 察

樹種同定を実施した木材は、〔伊東・山田 2012〕の木器分類を参考にすると、工具（火きり白、鞘・柄）、武器・武具・馬具（弓）、服飾具（下駄）、容器（椀、曲物）、食器具（匙）、祭祀具（形代）、建築部材（柱、礎板）、土木材（杭）、その他に分類される。これらの木材は、11 分類群の樹種が同定された。

木器分類別に樹種をみると、工具の柄・鞘、火きり白、その他の板状製品はいずれもスギに同定され、〔伊東・山田 2012〕のデータベースによれば、スギは本地域で最も多く利用されている針葉樹材であり、入手が容易で加工も容易なスギ材を柄や鞘に利用したことが推定される。火きり白には針葉樹の利用が多い傾向があり、とくに新潟県を含む北陸地方ではスギの利用が多い。新潟県についてみると、野中土手付遺跡、蔵ノ坪遺跡、鬼倉遺跡、一之口遺跡で古代の資料、仲田遺跡、海道遺跡で中世の資料について樹種同定が実施されているが、種類不明の針葉樹が 1 点認められる他は全てスギである。今回の結果は、既存の結果とも整合的である。火きり白の用材について、〔小口 1991〕は、熱を逃がさないために、熱伝導率が低く、保温性の高いことを指摘しており、スギ材を熱伝導率の低い木材の一つとして挙げている。また、スギは、燃料材としてみた場合でも着火性が高い木材の一つであり、もっとも発火効率の良い道具は厚みが 1cm 前後のスギの赤身やサワラの板との研究もある〔関根 2003a・b〕。厚さ 1cm 前後は、一般的な火鑽白の厚みとも整合的である。これらの点から、発火性の良いスギを発火効率の良い形状で利用したことが推定される。

弓はイヌガヤであり、緻密で靱性のある木材が選択・利用されたと考えられる。〔伊東・山田 2012〕のデータベースによれば、同様の事例は、野中土手付遺跡（新発田市）の古墳時代中期～平安時代初期とされる資料や、屋敷遺跡および蔵ノ坪遺跡（胎内市）の古墳時代末期～平安時代初期とされる資料など、下越地方の古墳時代中期～平安時代の資料に確認されている。針葉樹イヌガヤは基本種のイヌガヤのほか、多雪地に生育するハイイヌガヤがある。木材組織で区別することは難しいが、現在の分布等を考慮するとハイイヌガヤの可能性はある。ハイイヌガヤは河畔の林床等に生育する常緑低木であり、木材は比較的緻密で強度、耐水性、靱性がある。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

服飾具の下駄は、下駄の台（試料 5・14）と下駄の歯（試料 6・19）がある。下駄の台はいずれもモクレン属、下駄の歯はいずれもスギに同定され、2 種の木材が利用されたことが推定される。本遺跡周辺では、〔伊東・山田 2012〕のデータベースによれば、モクレン属は正尺 C 遺跡（新潟市）から出土した差歯下駄の台に確認された例がある。スギは、住吉遺跡（新発田市）から出土した連歯下駄、差歯下駄の台と歯に確認された例がある。

容器は、曲物と椀がある。曲物は側板であり、スギに同定された。曲物側板は板状を呈していることから、板状木製品と同様の用材選択が推定される。椀は、ケヤキに同定され、重硬な木材の利用が推定される。〔伊東・山田 2012〕のデータベースによれば、周辺では、上浦遺跡・正尺 C 遺跡（新潟市）の漆器椀、住吉遺跡の漆塗皿と白木皿にケヤキが確認された例がある。

食器具の匙状木製品はモクレン属に同定され、強度や保存性は低いものの、加工が容易な樹種を利用したことが推定される。〔伊東・山田 2012〕のデータベースによれば、新潟県内で匙あるいは剝物杓子の類について樹種を明らかにした例は中世の資料が多い。主な事例としては、下割遺跡でニシキギ属とモクレン属、仲田遺跡のヤナギ属、東原町遺跡のスギ、長表遺跡のコナラ節、大武遺跡のマツ属複雑管束亜属、坂井遺跡のシナノキ、寺前遺跡のトチノキ等がある。モクレン属の利用は、下割遺跡で確認されており、既存の調査例とも整合的である。また、これまでの調査をみると、様々な樹種が認められ、例外はあるが、全体的に軽軟で加工が容易な樹種が多い傾向がある。

建築部材は柱と礎板である。柱は、ヤナギ属、ハンノキ亜属、ニレ属、オニグルミ、クリ、スギが利用されている。耐水性の高い木材（スギ）、重硬な木材（クリ、コナラ節、ニレ属、オニグルミ、ハンノキ亜属）が利用される一方、軽軟な木材（ヤナギ属）も利用されており、材質的にも幅広い木材が利用されている。礎板 1 点はハンノ

キ亜属に同定され、柱材と同様の木材が利用されたことが推定される。柱材の結果は、茶院 A 遺跡でこれまでに実施された柱材の樹種同定結果とも整合的である。

〔春日 2008〕によれば、古墳時代～中世の柱材では、時代が下るほどスギやクリの利用例が増加する傾向があること、倉庫と考えられる掘立柱建物跡でクリの利用が多いこと、スギが集落内で特別な建物の柱材に利用された可能性があること、小型の梁間 1 間型の建物ではヤナギ属、トネリコ属、ハンノキ亜属の利用が多いこと等が指摘されている。今後、建物の形態、大きさと用途等も合わせて用材選択を検討することが必要である。

樹木列 4 点は全てヤナギ属に同定された。水分の多い沖積地でも生育可能であること、挿し木で容易に増えること、生長が早いことなどが利用の背景に考えられる。距離は離れるが、二本柳遺跡（山梨県南アルプス市）の平安～鎌倉とされる畦畔立木でもヤナギ属が主体で、モモが混じる結果が報告されている〔伊東・山田 2012〕。

第 3 節 放射性炭素年代測定

A 試料と方法

試料は、第 7 次調査で出土した木製品、種実と炭化材の計 14 点である。第 5 表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

第 5 表 測定試料及び処理

試料No.	調査区	遺構等	グリッド	試料	前処理・調整	測定法
2	4区	樹木列木4	8F-9F15	木材（ヤナギ属）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
8	5区	SB46-P32（木柱）	7F-5B4	木材（ヤナギ属）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
9	5区	SB45-P37（礎板）	7F-5C8	木材（ハンノキ属）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
11	5区	P63（木柱）	7E-3H21	木材（コナラ節）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
12	5区	SB161-P122（木柱）	7F-5B9	木材（ニレ属）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
13	5区	SB161-P134（木柱）	7F-5C6	木材（オニグルミ）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
16	6区	SD53（種子）	9F-1F17	種実（モモ核）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
21	6区	P97（木柱）	8F-10A20	木材（スギ）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
24	6区	遺構外（弓）	8E-8E21	木材（イヌガヤ）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
27	6区	SB95-P68（木柱）	9F-1D6	木材（クリ）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
29	6区	SB-96-P93（木柱）	9F-1C5	木材（クリ）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
30	4区	SN12	7F-5F	炭化材	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
34	6区	P88（木柱）	9F-1D7	木材（ハンノキ亜種）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS
35	6区	SB96-P69（木柱）	9F-1D2	木材（クリ）	酸-アルカリ-酸処理（AAA）	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

1) 化学処理

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

2) 測定

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C 濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO_x II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

3) 算出

(1) δ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である。

- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する [Stuiver and Polach, 1977]。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.3\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース [Reimer et al., 2020] を用い、OxCalv4.4 較正プログラム [BronkRamsey, 2009] を使用する。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

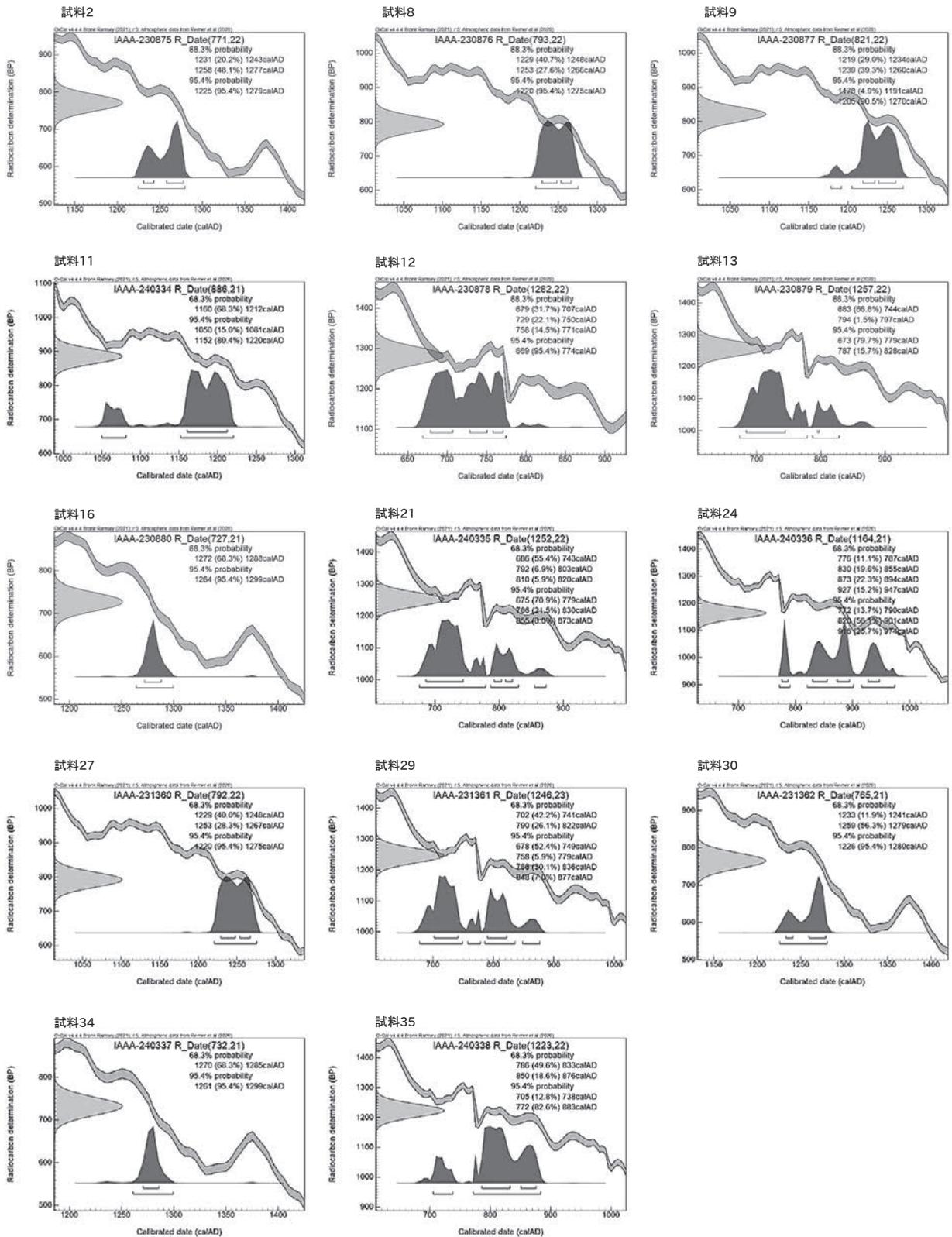
B 結果

加速器質量分析法 (AMS : Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。第6表にこれらの結果を示し、第17図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

第6表 測定結果

試料No.	測定No. (IAAA-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.3%確率)	2 σ (95.4%確率)
2	230875	-29.21 \pm 0.26	771 \pm 22	770 \pm 20	1231-1243 cal AD (20.2%) 1258-1277 cal AD (48.1%)	1255-1279 cal AD (95.4%)
8	230876	-26.15 \pm 0.24	793 \pm 22	790 \pm 20	1229-1248 cal AD (40.7%) 1253-1266 cal AD (27.6%)	1220-1275 cal AD (95.4%)
9	230877	-28.05 \pm 0.25	821 \pm 22	820 \pm 20	1219-1234 cal AD (29.0%) 1239-1260 cal AD (39.3%)	1178-1191 cal AD (4.9%) 1205-1270 cal AD (90.5%)
11	240334	-29.20 \pm 0.18	886 \pm 21	890 \pm 20	1160-1212 cal AD (68.3%)	1050-1081 cal AD (15.0%) 1152-1220 cal AD (80.4%)
12	230878	-27.86 \pm 0.26	1282 \pm 22	1280 \pm 20	679- 707 cal AD (31.7%) 729- 750 cal AD (22.1%) 758- 771 cal AD (14.5%)	669- 774 cal AD (95.4%)
13	230879	-28.21 \pm 0.25	1257 \pm 22	1260 \pm 20	683- 744 cal AD (66.8%) 794- 797 cal AD (1.5%)	673- 779 cal AD (79.7%) 787- 828 cal AD (15.7%)
16	230880	-26.44 \pm 0.27	727 \pm 21	730 \pm 20	1272-1288 cal AD (68.3%)	1264-1299 cal AD (95.4%)
21	240335	-23.20 \pm 0.14	1252 \pm 22	1250 \pm 20	686- 743 cal AD (55.4%) 792- 803 cal AD (6.9%) 810- 820 cal AD (5.9%)	675- 779 cal AD (70.9%) 786- 830 cal AD (21.5%) 855- 873 cal AD (3.0%)
24	240336	-26.71 \pm 0.15	1164 \pm 21	1160 \pm 20	776- 787 cal AD (11.1%) 830- 855 cal AD (19.6%) 873- 894 cal AD (22.3%) 927- 947 cal AD (15.2%)	772- 790 cal AD (13.7%) 820- 901 cal AD (56.1%) 916- 974 cal AD (25.7%)
27	231360	-22.96 \pm 0.24	792 \pm 22	790 \pm 20	1229-1248 cal AD (40.0%) 1253-1267 cal AD (28.3%)	1220-1275 cal AD (95.4%)
29	231361	-24.14 \pm 0.24	1246 \pm 23	1250 \pm 20	702- 741 cal AD (42.2%) 790- 822 cal AD (26.1%)	678- 749 cal AD (52.4%) 758- 779 cal AD (5.9%) 786- 836 cal AD (30.1%) 848- 877 cal AD (7.0%)
30	231362	-24.91 \pm 0.28	765 \pm 21	770 \pm 20	1233-1241 cal AD (11.9%) 1259-1279 cal AD (56.3%)	1226-1280 cal AD (95.4%)
34	240337	-29.95 \pm 0.18	732 \pm 21	730 \pm 20	1270-1285 cal AD (68.3%)	1261-1299 cal AD (95.4%)
35	240338	-28.79 \pm 0.17	1223 \pm 22	1220 \pm 20	786- 833 cal AD (49.6%) 850- 876 cal AD (18.6%)	705- 738 cal AD (12.8%) 772- 883 cal AD (82.6%)

BP : Before Physics (Present), AD : 紀元



第 17 図 曆年較正年代図

C 所 見

第7次調査で出土した遺構の年代を検討する目的で、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、4区で出土した樹木列4(ヤナギ属、試料2)は、補正¹⁴C年代が770±20年BP、2σの暦年較正值は1225 cal AD～1279 cal AD(95.4%)であった。5区のSB46-P32で出土した木柱(ヤナギ属、試料8)は、補正¹⁴C年代が790±20年BP、2σの暦年較正值は1220 cal AD～1275 cal AD(95.4%)であった。5区のSB45-P37で出土した礎板(ハンノキ属、試料9)は、補正¹⁴C年代が820±20年BP、2σの暦年較正值は1178 cal AD～1191 cal AD(4.9%)、1205 cal AD～1270 cal AD(90.5%)であった。5区P63で出土した柱(コナラ属コナラ節、試料11)は、補正¹⁴C年代が890±20年BP、2σの暦年較正值は1050 cal AD～1081 cal AD(15.0%)、1152 cal AD～1220 cal AD(80.4%)であった。5区のSB161-P122で出土した柱(ニレ属、試料12)は、補正¹⁴C年代が1280±20年BP、2σの暦年較正值は669 cal AD～774 cal AD(95.4%)であった。5区のSB161-P134で出土した礎板(オニグルミ、試料13)は、補正¹⁴C年代が1260±20年BP、2σの暦年較正值は673 cal AD～779 cal AD(79.7%)、787 cal AD～828 cal AD(15.7%)であった。6区のSD53で出土した種実(モモ核、試料16)は、補正¹⁴C年代が730±20年BP、2σの暦年較正值は1264 cal AD～1299 cal AD(95.4%)であった。

6区P97で出土した木柱(スギ、試料21)は、補正¹⁴C年代が1250±20年BP、2σの暦年較正值は675 cal AD～779 cal AD(70.9%)、786 cal AD～830 cal AD(21.5%)、855 cal AD～873 cal AD(3.0%)であった。6区で出土した弓(イヌガヤ、試料24)は、補正¹⁴C年代が1160±20年BP、2σの暦年較正值は772 cal AD～790 cal AD(13.7%)、820 cal AD～901 cal AD(56.1%)、916 cal AD～974 cal AD(25.7%)であった。6区で出土した木柱SB95-P68(クリ、試料27)は、補正¹⁴C年代が790±20年BP、2σの暦年較正值は1220 cal AD～1275 cal AD(95.4%)であった。同じく木柱SB96-P93(クリ、試料29)は、補正¹⁴C年代が1250±20年BP、2σの暦年較正值は678 cal AD～749 cal AD(52.4%)、758 cal AD～779 cal AD(5.9%)、786 cal AD～836 cal AD(30.1%)、848 cal AD～877 cal AD(7.0%)であった。4区で出土したSN12から検出された炭化材(試料30)は、補正¹⁴C年代が770±20年BP、2σの暦年較正值は1226 cal AD～1280 cal AD(95.4%)であった。6区P88で出土した柱(ハンノキ属ハンノキ垂属、試料34)は、補正¹⁴C年代が730±20年BP、2σの暦年較正值は1261 cal AD～1299 cal AD(95.4%)であった。6区SB96-P69で出土した柱(クリ、試料35)は、補正¹⁴C年代が1220±20年BP、2σの暦年較正值は705 cal AD～738 cal AD(12.8%)、772 cal AD～883 cal AD(82.6%)であった。

この結果から、木柱が検出された5区の建物SB45・46、6区の建物SB95と樹木列、SN12は概ね同時期(鎌倉時代)、木柱が検出された5区の建物SB161、6区建物SB96は古代(奈良時代)と推定される。

第4節 種実同定

A 試料と方法

試料は、6区SX2と4区水田SN12(試料31)、4区SN12水口30(試料32)、4区水田SN12被覆土(試料33)の堆積物より水洗選別された種実である。

試料土約200cm³に水を加えて放置し、泥化する。攪拌後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別し残渣を回収して種実を抽出する。試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。なお、同定された現生種実とみられる未炭化のイネ類は省く。

B 結 果

1) 6区SX2

(1) 分類群

樹木 5、草本 19 の計 24 分類群が同定された。学名、和名および粒数を第 7 表に示し、主要な分類群を写真に示す (第 18 図)。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 (破片) クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 (完形) バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。サイズは長さ × 幅 × 厚さ、27.38×22.14×17.14mm である。形態は〔金原 1996〕によると C 類から D 類にかけて当てはまり、律令期の左右非対称になる形態である。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 (破片) トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

ブドウ属 *Vitis* 種子 (破片) ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 (破片) スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

〔草本〕

ミクリ属 *Spaganium* 果実 (完形) ミクリ科

淡褐色で側面観は倒卵形、上面観は円形を呈す。表面には縦方向に 5 本程度の筋が走る。

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 (完形・破片) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。サイズは長さ × 幅、4.28×2.28mm、4.91×2.79mm、4.52×2.76mm、4.93×2.97mm、平均値は 4.66×2.70mm である。粒形とその大きさは〔佐藤敏也 1988〕によると極小から小の短粒 S に当てはまり、弥生時代から古墳時代の平均的な大きさである。

イヌビエ属 *Echinochloa* 穎炭化果実 (完形) イネ科

炭化している。類円形を呈し、胚の部分がくぼむ。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化果実 (完形) イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。サイズは長さ × 幅、3.83×1.82mm である。

ウキヤガラ *Scirpus fluviatilis* A. Gray 果実 (完形) カヤツリグサ科

黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 (完形) カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に 4～8 本の針状の付属物を持つ。

スゲ属 *Carex* 果実 (完形) カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

アサ *Cannabis sativa* L. 種子 (破片) クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。サイズは長さ × 幅、3.45×3.05mm である。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子(破片) クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

アサーカナムグラ *Cannabis-Humulus* 種子(細片)

アサ、カナムグラと思われるが、破片で形態が不明のため、科レベルの同定までである。

タデ属 *Polygonum* 果実(完形・破片) タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

黒褐色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は扁平、表面には光沢はなく表面は粗い。

アカザ属 *Chenopodium* 種子(完形) アカザ科

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ササゲ属 *Vigna* 炭化子葉(破片) マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

カタバミ属 *Oxalis* 種子(完形) カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端が尖る。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。

エノキグサ *Acalypha australis* L. 種子(完形) トウダイグサ科

黒褐色で頂端がやや尖る卵形を呈す。表面には微細な網目模様がある。

シソ属 *Perilla* 果実(完形・破片) シソ科

黒褐色~灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子(完形) ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。

ナス *Solanum melongera* L. 種子(完形) ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。サイズは長さ×幅、2.39×3.10mmである。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子(破片) ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

(2) 種実群集の特徴

樹木種実のヤマグワ種子破片4個、モモ核完形1個、アカメガシワ種子破片2個、ブドウ属種子破片2個、ニワトコ核破片5個、草本種実のミクリ属果実完形2個、イネ炭化果実完形4個、破片5個、イヌビエ属炭化果実完形1個、オオムギ炭化果実完形1個、ウキヤガラ果実完形41個、ホタルイ属果実完形8個、スゲ属果実完形7個、アサ種子破片11個、カナムグラ種子破片10個、アサーカナムグラ種子細片29個、タデ属果実完形3個、破片25個、アカザ属種子完形20個、ササゲ属子葉破片1個、カタバミ属種子完形2個、エノキグサ種子完形1個、シソ属果実完形116個、細片(++)、イヌホウズキ種子完形1個、ナス種子完形3個、ヒョウタン類種子破片6個が同定され、他に昆虫破片、虫瘤、貝類殻皮、植物破片、土塊が確認された。

(3) 種実同定から推定される植生と農耕

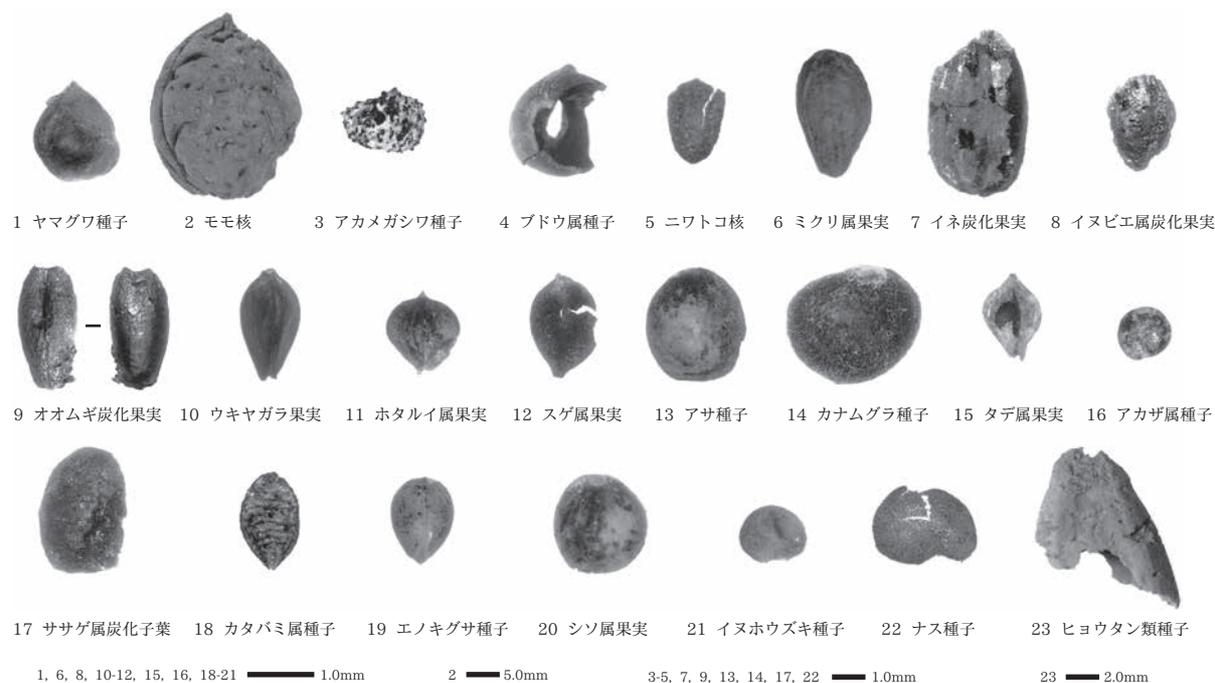
いずれの種実も温帯に広く分布するものばかりである。ヤマグワは流路沿いなどに生育し、モモは水はけ、日当たりの良い場所に植えられる。アカメガシワは山地、丘陵などの林内から人為環境に接する林縁に自生する落葉低木であり、二次林種でもある。ブドウ属はつる性の低木落葉樹で日当たりのよい林縁などに生育し、ニワトコは低地と山地の藪や林縁に生育し、二次林種でもある。なお、ヤマグワ、モモ、ブドウ属は食用になり、モモは栽培植物である。作物ではイネ、オオムギおよびアサ、ササゲ属、ナス、ヒョウタン類がある。他の草本のミクリ属、イヌビエ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属は、湿地から浅い水域の水辺に生息する抽水性の水生植物である。また、イネ、オオムギは主要な栽培植物であり、食用になる。アサ、カナムグラは人里付近に生育す

るつる植物で一年草であるが、アサは生育速度と環境順応性が高いため栽培植物としても有用である。タデ属、アカザ属、カタバミ属、エノキグサ、シソ属、イヌホウズキは日当たりの良い乾燥地に生育する人里植物ないし畑作雑草である。なお、ササゲ属、ナス、ヒョウタン類は栽培植物でもあり食用にもなり、また、アカザ属、シソ属も食用可能である。

以上のことから、本遺跡周辺にはアカメガシワ、ニワトコ、ブドウ属などの樹木が生育する日当たりのよい林縁の環境が分布し、ヤマグワなどが生育する水際の環境までが示される。草本ではミクリ属、イヌビエ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属の水湿地草本が生育し、堆積地の環境が示される。周辺ではモモ、イネ、オオムギ、アサ、ササゲ属、ナス、ヒョウタン類などが樹園地、水田、畑で栽培植物として栽培され、日当たりの良い乾燥地にはタデ属、カナムグラ、アカザ属、カタバミ属、エノキグサ、シソ属、イヌホウズキが生育していたと考えられる。また、ブドウ属、アカザ属、シソ属は食用になる有用植物で、モモは弥生時代に大陸から稲作と共に栽培種が伝来し、弥生時代から古墳時代にかけて出土例が多くなり、食用となる栽培植物である。また、モモは食用のほかに薬用、祭祀用途にも用いられ、斎串など祭祀遺物と伴出することもある。イネ、アサ、ササゲ属、ナス、ヒョウタン類の栽培植物の中でも、イネ

第7表 種実同定結果 (SX2)

結果 (学名/和名)		部位		個数	備考
<i>Arbor</i> 樹木					
<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ	種子	破片	4	
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	完形	1	
<i>Mallotus japonicus</i> MuelL.etArg.	アカメガシワ	種子	破片	2	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	破片	2	
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex Graedn	ニワトコ	核	破片	5	
<i>Herb</i> 草本					
<i>Sparganium</i>	ミクリ属	果実	完形	2	
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎	破片	1	未炭化
		炭化果実	完形	5	未成熟1
		炭化果実	破片	5	
<i>Echinochloa</i>	イヌビエ属	炭化果実	完形	1	
<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	炭化果実	完形	1	
<i>Scirpus fluvialis</i> A. Gray	ウキヤガラ	果実	完形	41	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	完形	8	
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	完形	7	
<i>Cannabis sativa</i> L.	アサ	種子	破片	11	
<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	カナムグラ	種子	破片	10	
<i>Cannabis-Humulus</i>	アサーカナムグラ	種子	細片	29	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	完形	3	
			破片	25	
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	完形	20	
<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉	破片	1	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	完形	2	
<i>Acalypha australis</i> L.	エノキグサ	種子	完形	1	
<i>Perilla</i>	シソ属	果実	完形	116	
			細片	(++)	
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子	完形	1	
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	完形	3	
<i>Lagenaria siceraria</i> StandL.	ヒョウタン類	種子	破片	6	
Total	合計			313	
備考	昆虫片・虫瘤		破片	(++)	
	貝類殻皮		破片	(+)	
	植物		破片	(+)	
	土塊			(+)	



第18図 種実顕微鏡写真 (SX2)

は弥生時代以降比較的良好に検出され出土例が多い。アサは生育速度と環境順応性が高く、古い時代から繊維用植物として利用され、種子は食用にもなり、実は油がとれる有用植物であり、様々な形で用いられる。ナスは律令期に伝わる。

出土した種実から推定される環境は、山地、丘陵などの林縁から湿地や池状水域と、日当たりの良い耕作地が接するところとみられる。なお、時期は律令期以降が考えられる。

2) 4区水田 SN12

(1) 分類群

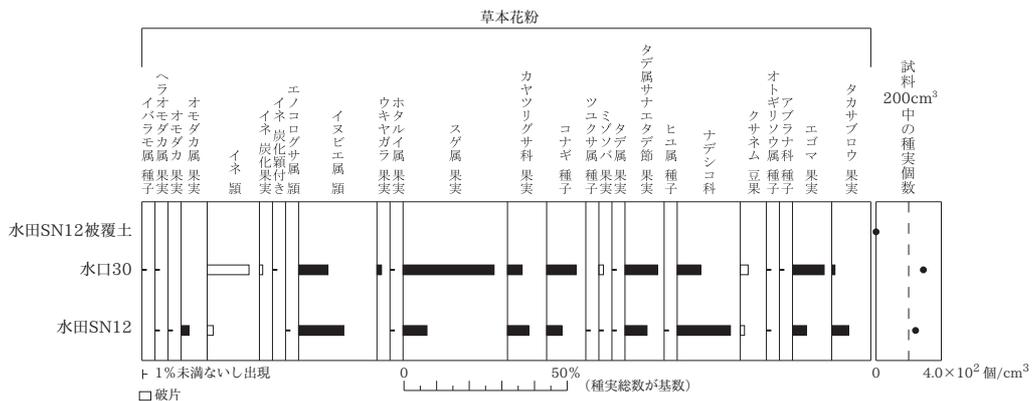
草本23分類群が同定された。学名、和名および粒数を第8表に、200cm³中の種実数をダイアグラムを第19図、主要な分類群を写真に示す(第20図)。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

- ・ イバラモ属 *Najas* 種子 イバラモ科
黄褐色～灰褐色で長楕円形を呈す。表面には大きい網目模様がある。
- ・ ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche 果実 オモダカ科
黄褐色で倒卵形を呈す。背部には縦方向に1本の深い溝がある。
- ・ オモダカ *Sagittaria trifolia* L. 果実 オモダカ科
淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状となり、上部は針状にとがる。
- ・ オモダカ属 *Sagittaria* 果実 オモダカ科
淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定にとどめる。
- ・ イネ *Oryza sativa* L. 穎(破片)・炭化果実(破片) イネ科
穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。
炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。穎がついている個体も確認できる。
- ・ エノコログサ属 *Setaria* 穎 イネ科
穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。
- ・ イヌビエ属 *Echinochloa* 穎 イネ科
茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。
- ・ ウキヤガラ *Scirpus fluviatilis* A. Gray 果実 カヤツリグサ科
黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。
- ・ ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科
黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。
- ・ スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科
茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。
- ・ カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実
茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。
黄褐色で広倒卵形を呈す。断面形は片凸レンズ状である。基部に針状の付属物を持つ。
茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。
- ・ コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms Laub. 種子 ミズアオイ科
淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7～9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。
- ・ ツユクサ属 *Commelina* 種子 ツユクサ科
茶褐色で楕円形を呈し、一端は切形である。表面には「一」字状のへそがあり、切形の端まで達する。一側面

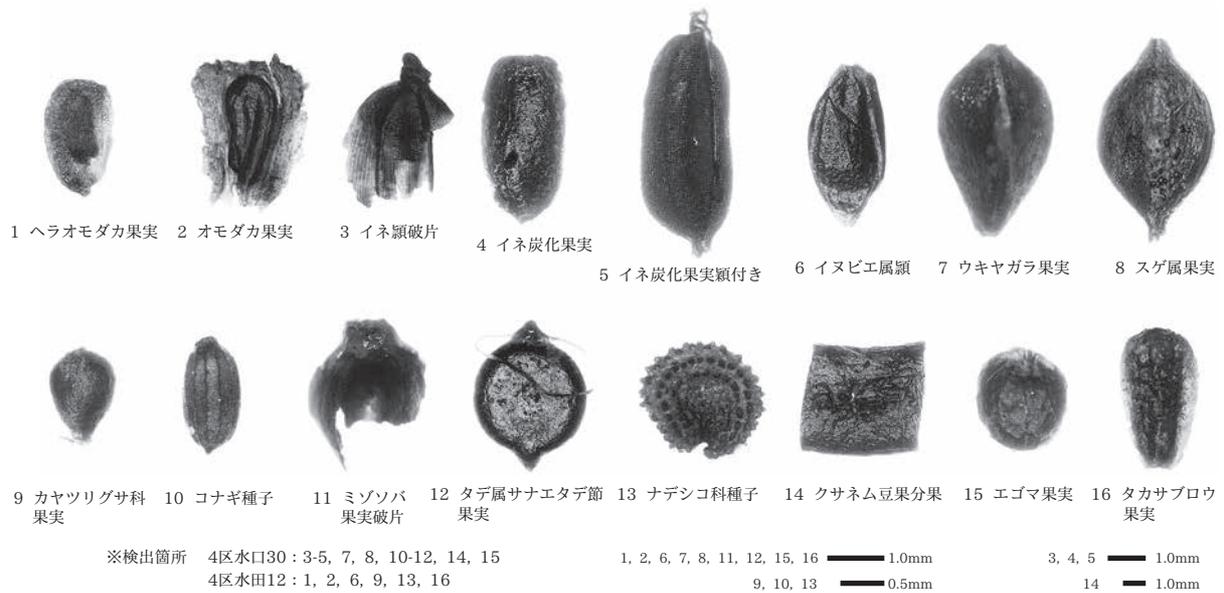
第 8 表 種実同定結果

			水田SN12被覆土	水口30	水田SN12
			試料33	試料32	試料31
Herb	草本				
<i>Najas</i>	イバラモ属	種子		1	
<i>Alismacanaliculatum</i> A.Br.etBouche	ヘラオモダカ	果実		1	3
<i>Sagittariatrifolia</i> L.	オモダカ	果実			2
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	果実			8
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎 破片		37	6
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	炭化果実 破片		3	
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	炭化果実 穎付き		1	
<i>Setaria</i> Beauv.	エノコログサ属	穎			2
<i>Echinochloa</i> Beauv.	イヌビエ属	穎		26	45
<i>Scirpus fluviatilis</i> A. Gray	ウキヤガラ	果実		4	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実		2	2
<i>Carex</i>	スゲ属	果実		81	24
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		13	21
<i>Monochoriavaginalis</i> Preslvar.plantagineaSolms-Laub.	コナギ	種子		26	15
<i>Commelina</i>	ツユクサ属	種子			2
<i>PolygonumThunbergii</i> S.etZ.	ミゾソバ	果実 破片		4	1
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実		1	2
<i>Polygonumsect.Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	果実		29	22
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子			2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子		21	53
<i>Aeschynomene indica</i>	クサネム	豆果 分果		7	4
<i>Hypericum</i>	オトギリソウ属	種子		1	1
Cruciferae	アブラナ科	種子		1	
<i>Perillafrutescens</i> var. <i>japonica</i> Hara	エゴマ	果実		28	14
<i>Ecliptaprostrata</i> L.	タカサブロウ	果実		3	17
Total	合計		0	290	246

(200cm³中0.25mm篩) (200cm³中0.25mm篩)



第 19 図 種実組成図



第 20 図 種実頭顕鏡写真 (SN12)

にくぼんだ発芽孔がある。

- ・ミゾソバ *Polygonum thunbergii* S. et Z. 果実(破片) タデ科
黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。
- ・タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科
黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。
- ・タデ属サナエタデ節 *Polygonum* sect. *Persicaria* 果実 タデ科
黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。
- ・ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科
黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。
- ・ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子
黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。
- ・クサネム *Aeschynomene indica* L. 豆果(分果) マメ科
豆果は広線形を呈し、4～8個の小節果からなる。無毛である。
- ・オトギリソウ属 *Hypericum* 種子 オトギリソウ科
暗褐色で円柱状長楕円形を呈す。表面に不明瞭な網目模様が発達。
- ・アブラナ科 Cruciferae 種子
茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。
- ・エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* Hara
黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。
- ・タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科
淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にいぼ状の突起がある。断面はひし形である。

(2) 種実群集の特徴

4区水田 SN12 被覆土からは種実を検出されなかった。

4区水口 30 はすべて草本種実で、イバラモ属種子 1 個、ヘラオモダガ果実 1 個、イネ穎破片 37 個、イネ炭化果実破片 3 個、内穎付き 1 個、イヌビエ属穎 26 個、ウキヤガラ果実 4 個、ホタルイ属果実 2 個、スゲ属果実 81 個、カヤツリグサ科果実 13 個、コナギ種子 26 個、ミゾソバ果実破片 4 個、タデ属果実 1 個、タデ属サナエタデ節果実 29 個、ナデシコ科種子 21 個、クサネム豆果分果 7 個、オトギリソウ属種子 1 個、アブラナ科種子 1 個、エゴマ果実 28 個、タカサブロウ果実 3 個が検出された。

4区水田 SN12 からは、オモダガ果実 3 個、オモダカ果実 2 個、オモダカ属果実 8 個、イネ穎破片 6 個、エノコログサ属果実 2 個、イヌビエ属穎 45 個、ホタルイ属果実 2 個、スゲ属果実 24 個、カヤツリグサ科果実 21 個、コナギ種子 15 個、ツユクサ属 2 個、ミゾソバ果実破片 1 個、タデ属果実 2 個、タデ属サナエタデ節果実 22 個、ヒユ属種子 2 個、ナデシコ科種子 53 個、オトギリソウ属種子 1 個、エゴマ果実 14 個、タカサブロウ果実 17 個が検出された。

C 考 察

検出された種実はすべて草本であり、イバラモ属、ヘラオモダガ、オモダカ、オモダカ属、イネ、エノコログサ属、イヌビエ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、コナギ、ツユクサ属、ミゾソバ、タデ属、タデ属サナエタデ節、ヒユ属、ナデシコ科、クサネム、オトギリソウ属、アブラナ科、エゴマ、タカサブロウであった。水生植物のイバラモ属、ヘラオモダガ、オモダカ、オモダカ属、イネ、エノコログサ属、イヌビエ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、コナギ、ミゾソバ、タデ属は、湿地から浅い水域の水

辺に生息する抽水性の植物である。イネは栽培植物で食用にもなり、他はすべて水田雑草でもある。ツククサ属、タデ属サナエタデ節、ヒユ属、ナデシコ科、オトギリソウ属、アブラナ科、エゴマ、タカサブロウは、人里植物ないし畑作雑草であり、道端や田の畦道などの日当たりの良い乾燥地に生育する。またエゴマは栽培植物でもあり食用にもなる。

4区水田 SN12 では、ヘラオモダカ、オモダカやコナギなどの典型的な水田雑草が多く、低湿な水田が示唆される。4区水口 30 では、スゲ属が多いため水湿地の様相を呈している。また、イネ類が多く、浮いて流れ水口で引っ掛かるなどして集積したと考えられる。周囲には水田が広がり、周辺の畑または畦などの乾燥したところにはエゴマが植えられ、ナデシコ科などの乾燥を好む雑草が生育していたと推定される。

第5節 貝類・動物遺体同定

A 試料と方法

試料は、包含層や攪乱層、6区 SD50 から出土した動物遺体である。肉眼で試料を観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。

B 結果と所見

同定結果を第9表に示す。出土した動物遺体からは、クロダカワニナ (*Semisulcospira kurodai*) とウマ (*Equus caballus*) が同定された。

包含層のⅦ層からは、上下および左右不明のウマの臼歯1点と、ウマの右上顎臼歯1点、哺乳綱の部位不明破片が1点出土している。Ⅷ層からは、上下および左右不明のウマの臼歯1点が出土している。ウマの臼歯は、形状は残るものの、咬合面などの保存状態が悪く歯種の同定には至らなかった。哺乳綱の部位不明の破片は、四肢骨内部の海绵体破片と思われる。攪乱層から出土したウマの臼歯は、咬合面が遠心側ですぼまり、遠心側に湾曲する点からみて、右上顎の第3後臼歯とみられる。

SD50 から出土した巻貝は、淡水性のクロダカワニナと考えられる。カワニナよりも細長い殻をもち、螺肋はカワニナよりも粗い。クロダカワニナは小川の泥底などに生息する種で、その出土は、こうした水域で貝の採取が行われたことを示唆する。

水田 SN12- 畦畔 27 からウマの臼歯破片と、地業 1 から哺乳綱の四肢骨と思われる破片が1点出土した。

第9表 動物遺体同定結果

試料No.	区	グリッド	層位等	分類群	部位	左右	状態	点数	備考
1	5	7F-5B9	Ⅶ層	ウマ	臼歯	不明	破片	1	上下不明
2	5	8E-10J10	カクラン	ウマ	上顎第3後臼歯	右		1	
3	4	8F-4G8	Ⅶ層	ウマ	臼歯	不明	破片	1	上下不明
4	6	8F-10A15	Ⅶ層	ウマ	上顎臼歯	右		1	歯種不明
5	6	9F-1E6	Ⅶ層	哺乳綱	不明	不明	破片	1	
6	6	9F-1E14	SD50	クロダカワニナ	—	—	殻頂部やや欠	1	
7	4	7F-5F21	水田SN12-畦畔27	ウマ	臼歯	不明	破片	7	歯種不明
8	6	9F-1C5	地業1(黒)	哺乳綱	不明	不明	破片	1	四肢骨



第21図 動物遺体顕微鏡写真

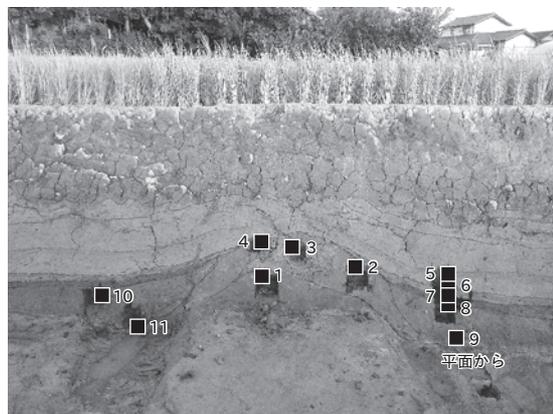
第6節 プラント・オパール分析

A 試料

試料は、4区水田SN12とその下層（試料31、地点8・9）、4区水口30（試料32、地点11）、4区水田SN12被覆土（試料33、地点7）、4区畦畔26（地点4）の計5点である（第22図）。

B 方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原 1976）を用いて次の手順で行う。(1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）する。(2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)する。(3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）により有機物の燃焼処理を行う。(4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により粒子を分散する。(5) 沈底法により20μm以下の微粒子を除去する。(6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。



第22図 SN12・畦畔26 サンプル採取地点

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行う。計数は、プレパラート全面を走査し、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行う。計数結果から、試料1g中のプラント・オパール個数を算出する（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率を乗じて求める）。おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出する。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に捉えることができる〔杉山 2000〕。

C 結果

産出したプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第10表、第23図に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を第24図に示す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって差異があることから、検出密度の評価は分類群によって異なる。そこで、プラント・オパール群集の占有状況を比較するために、植物体生産量（推定）を算出した。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ

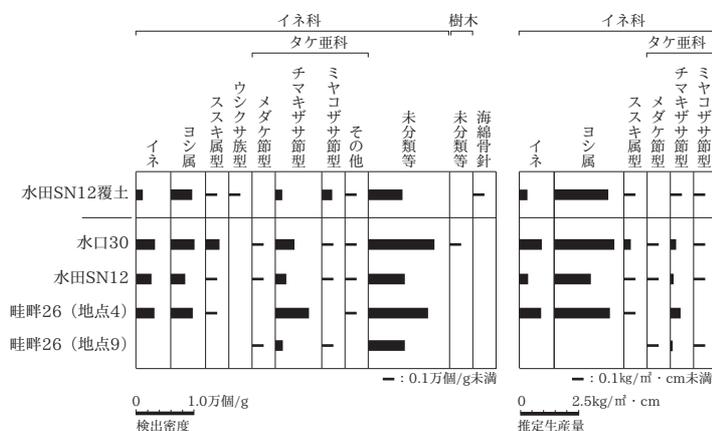
族型

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他

〔イネ科-その他〕

未分類等



第23図 プラント・オパール分析結果

第10表 プラント・オパール分析結果 (単位: ×100 個/g)

分類群	学名	水田SN12被覆土	水田SN12	水田SN12下層	水口30	畦畔26
		試料33 地点7	試料31 地点8	地点9	試料32 地点11	地点4
イネ科	Gramineae					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	12	26		33	32
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	37	25		41	38
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	6	6		24	6
ウシクサ族型	Andropogoneae type	6				
タケ亜科	Bambusoideae					
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>		6	6	8	
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	12	19	13	33	58
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	18	6	6	8	
その他	Others	6	6		8	6
その他のイネ科	Others					
未分類等	Others	49	63	63	114	103
樹木起源	Arboreal					
未分類等	Others				8	
海綿骨針	Sponge	6				
プラント・オパール総数	Total	146	157	88	277	243
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.35	0.76		0.97	0.94
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.33	1.58		2.59	2.40
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.07	0.07		0.30	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>		0.07	0.07	0.09	
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.09	0.14	0.10	0.25	0.44
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.05	0.02	0.02	0.02	

〔樹木起源〕

未分類等

〔その他〕

海綿骨針

以下にプラント・オパールの産状を示す。

1) 4区水田 SN12 被覆土

ヨシ属が多く産出し優占する。他にはイネ、ススキ属型、ウシクサ族型、チマキザサ節型が少量認められる。プラント・オパール以外に海綿骨針が少量産出する。

2) 4区水田 SN12

ヨシ属が多く優勢である。イネも比較的多い。他にはススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量産出する。

3) 4区水田 SN12 下層

プラント・オパールの産出量は少ない。メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量認められる。

4) 4区水口 30

ヨシ属が多く優勢である。イネ、ススキ属型、チマキザサ節型も比較的多い。他にはメダケ節型、ミヤコザサ節型が少量産出する。また、樹木起源(未分類等)が認められるが低密度である。

5) 4区畦畔 26

畦畔最上部(地点4)ではヨシ属が多く優勢である。イネ、チマキザサ節型も比較的多い。他にはススキ属型が少量産出する。畦畔脇(地点9)では、プラント・オパールの産出量は少ない。メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量認められる。

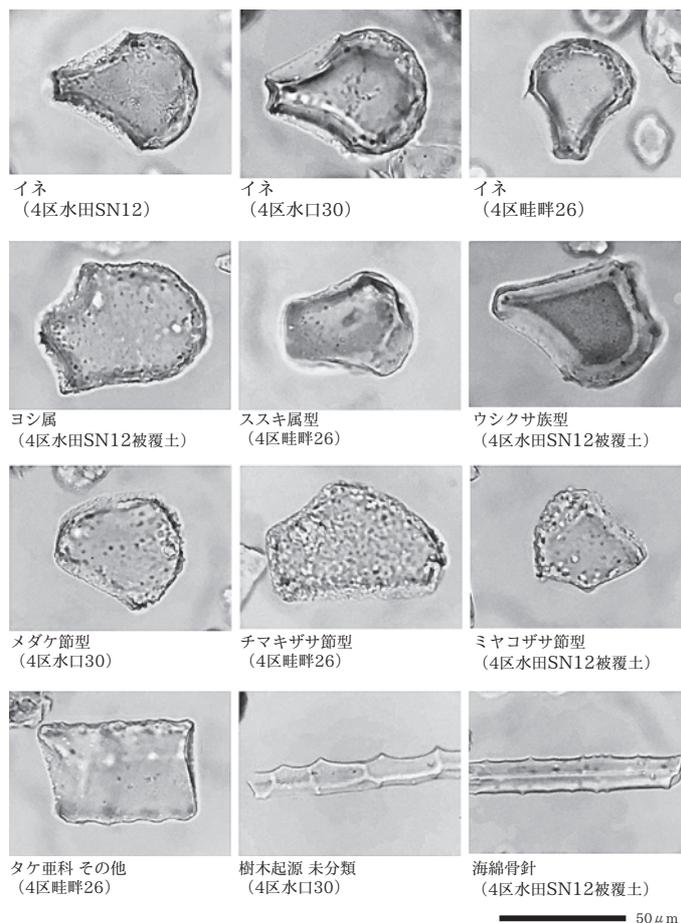
D 考 察

プラント・オパール分析において稲作跡の探査や検証を行うにあたっては、通常、イネのプラント・オパールが試料 1g あたり 5,000 個以上の密度で検出された場合に、当該地点で稲作が行われていた可能性が高いと判断している〔杉山 2000〕。ただし、最近の調査では密度が 3,000 個/g 程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を 3,000 個/g として検討を行う。また、ヨ

シ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。さらに、タケ亜科植物（竹・笹類）のうち、ササ属（チマキザサ節、チシマザサ節、ミヤコザサ節など）は比較的寒冷な地域に、メダケ属（ネザサ節やメダケ節）は比較的温暖な地域に分布しており〔室井 1960〕、標高の比較的高いところにササ属が、低いところにはメダケ属が分布している。これらを参考にして、稲作の可能性と周辺植生・環境について検討する。

4区水田 SN12 では、イネが 2,600 個 / g と比較的高い密度である。一方、4区水田 SN12 被覆土では 1,200 個 / g と低い密度であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した可能性は考え難い。また、4区水口 30 でも稲作跡の判断基準値を上回る 3,300 個 / g の密度で産出している。これらのことから、当該水田において稲作が営まれていたことがプラント・オパール分析の結果からも強く支持される。なお、4区畦畔 26 からイネが 3,200 個 / g と高い密度で産出している。このことは、畦畔の構築に水田土壌が利用されていた、水田土壌で畔塗りが行われていた、などのことを示唆している。

イネ以外の分類群の産出状況については、おもな分類群の推定生産量を見るといずれの試料もヨシ属が多く優勢であり、ススキ属型やタケ亜科（メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型等）はやや少ないか少ない。こうしたことから、当時の調査地近辺はヨシ属などの生育する比較的湿った環境であり、周辺にはススキ属やササ類（チマキザサ節やミヤコザサ節など）が生育していたと推定される。このことは、花粉分析結果とも整合的である。



第 24 図 プラント・オパール顕微鏡写真

第7節 花粉分析

A 試料

試料は、調査担当者によって採取された堆積物で、4区水田 SN12（試料 31、地点 8・9）、4区水口 30（試料 32、地点 11）、4区水田 SN12 被覆土（試料 33、地点 7）の 3点である（第6節第22図）。各試料の層相は、水田 SN12 試料が 10YR4/3 ~ 5/3 にぶい黄褐粘土混じり極細粒砂質シルト、水口 30 試料が 10YR3/3 暗褐シルト質粘土（腐植を僅かに含む）、水田 SN12 被覆土試料が 10YR3/3 ~ 3/4 暗褐シルト質粘土（腐植を僅かに含む）からなる。水田 SN12 試料と水口 30 試料の層相は類似するが、水田 SN12 被覆土試料はこれら試料とは異なっている。調査地が氾濫原に位置することを踏まえると、水田 SN12 試料と水口 30 試料は後背湿地のような堆積環境、水田 SN12 被覆土試料は洪水時の浮遊土砂が沈積した氾濫堆積物のような堆積環境に起因する堆積物の可能性がある。

B 方 法

花粉化石の抽出は、以下の方法で行う。(1) 試料約 2～3g を 10% 水酸化カリウム処理 (湯煎約 15 分) により粒子を分離する。(2) 傾斜法により粗粒砂を除去する。(3) フッ化水素酸処理 (約 30 分) により珪酸塩鉱物などを溶解する。(4) フッ化水素酸処理後、重液分離 (臭化亜鉛を比重 2.1 に調整) により有機物の濃集を行う。(5) アセトリシス処理 (氷酢酸による脱水、濃硫酸 1 に対して無水酢酸 9 の混液で湯煎約 5 分) を施す。(6) 残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。

検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数値の一覧表と花粉化石群集の分布図として示す。なお、複数の種類 (分類群) をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

C 結 果

花粉分析結果を第 11 表、第 25 図、主な産出花粉分析の写真を第 26 図に示す。以下に試料別に花粉化石の産状を示す。

1) 4 区水田 SN12 被覆土

花粉化石が少ない。化石の保存状態は著しく悪い。僅かに産出した花粉化石は花粉外膜が壊れており、同定できない化石も多い。なお、同定された種類は形態が特徴的な種類が主体で、下記する水口 30 試料・水田 SN12 試料でも確認されている。

2) 4 区水口 30

花粉化石の保存状態はやや悪く、花粉外膜が壊れているものが多い。比較的多産する。花粉化石群集の構成比は草本花粉が高率を占める。その中ではイネ科が優占し、次いで荒地に多いヨモギ属が多産する。このほかカヤツリグサ科や水生植物のガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属などを伴う。木本花粉では、針葉樹のスギ属が最も多産し、次いで落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ亜属、ブナが比較的多産する。このほか、ヤナギ属、クマシデ属-アサダ属、アカガシ亜属、クリ属-シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。

3) 4 区水田 SN12

花粉化石は多産する。化石の保存状態は普通からやや悪く、外膜が壊れている花粉化石が散見される。花粉化石群集の構成比は草本花粉が高率を占め、その中ではイネ科が優占する。このほかカヤツリグサ科やヨモギ属、水生植物のガマ属-ミクリ属、ヒルムシロ近似種、オモダカ属、ミズアオイ属、ヒシ属などを伴う。木本花粉では、落葉広葉樹のハンノキ属が 30% 以上と多産する。次いで針葉樹のスギ属や落葉広葉樹のコナラ亜属が比較的多産する。このほか、ヤナギ属、クマシデ属-アサダ属、ブナ、アカガシ亜属、モチノキ属などを伴う。

D 考 察

1) 調査地点の環境と古植生

(1) 4 区水田 SN12 被覆土

花粉化石の保存状態が悪く、化石数が少なかった。同定された種類は、分解作用の影響を受けても同定可能な花粉の形態が特徴的な種類であり、保存状態が悪く同定できない花粉化石も多かった。一般に花粉・胞子化石は、土壌化が進行するような場所では、物理・化学・生物的要因により分解消失することが知られている [中村 1967、徳永・山内 1971 など]。今回の調査地は氾濫原の微地形である自然堤防から後背湿地にかけて位置する。花粉化石は、後背湿地のような水位の高い場所では良好に保存されるが、自然堤防のような氾濫後に離水する領域では分解消失している場合が多い。水田 SN12 試料の産状は後者の産状に類似し、試料の層相も後者のような環境を示唆する。水田遺構の場合、検出面が作土上面の場合と作土下面の場合の双方があり、下記する水口 30

第7節 花粉分析

試料の層相や花粉の産状を踏まえると、水田 SN12 試料は作土直下の堆積物に相当する可能性がある。この点は発掘調査時の所見を踏まえ、再評価するようにしたい。いずれにしても、水田 SN12 試料は、好気的な条件に曝されることの多い堆積環境で形成された堆積物で、産出した花粉化石は堆積時・後の分解作用の影響を受け、淘汰され残存したものと推定される。そのため、花粉化石群集は偏った組成になっていると判断されるが、産出した種類は当該期の植生構成要素であったとみられる。特に草本花粉は木本花粉に比較して局地性が高く、イネ科やサナエタデ節ーウナギツカミ節、キク亜科などが調査地近辺に生育していた可能性がある。

第 11 表 花粉分析結果

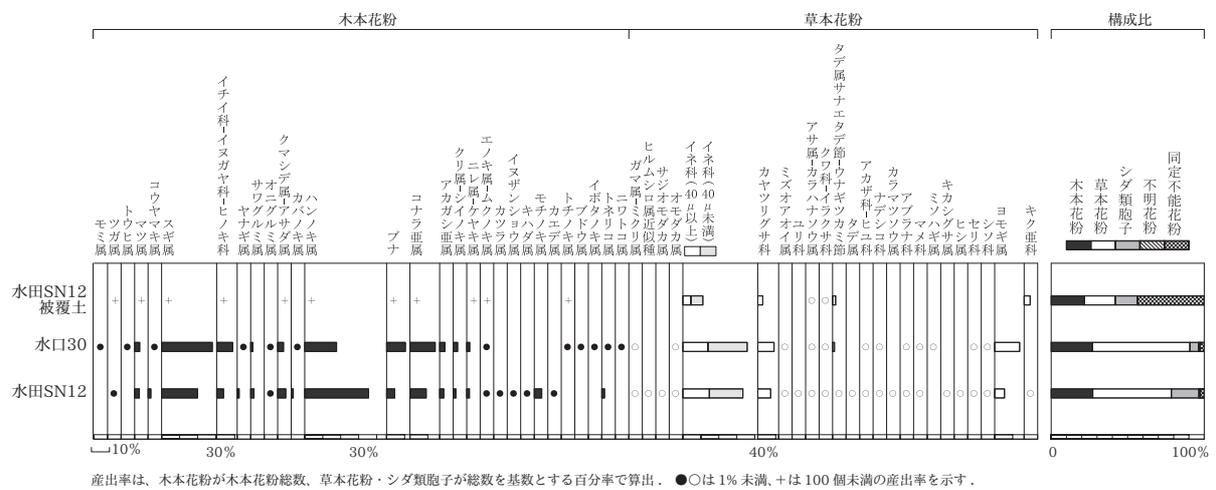
種類	Taxa	水田SN12被覆土	水口30	水田SN12
		試料33	試料32	試料31
木本花粉	Arboreal pollen			
モミ属	<i>Abies</i>		1	
ツガ属	<i>Tsuga</i>	3		1
トウヒ属	<i>Picea</i>		1	
マツ属	Pinus (other)	3	7	7
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>		2	4
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	5	70	53
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae- Cupressaceae	1	22	10
ヤナギ属	<i>Salix</i>		1	3
サウグルミ属	<i>Pterocarya</i>		3	5
オニグルミ属	<i>Juglans</i>		2	1
クマシデ属ーアサダ属	<i>Carpinus- Ostrya</i>	3	8	12
カバノキ属	<i>Betula</i>		2	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	11	44	94
ブナ	<i>Fagus crenata</i>	8	27	12
コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	1	35	24
アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		7	6
クリ属	<i>Castanea</i>		1	2
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>		5	2
ニレ属ーケヤキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>	2	4	4
エノキ属ームクノキ属	<i>Celtis-Ahananthe</i>	1	1	2
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>			1
イヌザンショウ属	<i>Fagara</i>			1
キハダ属	<i>Phellodendron</i>			1
モチノキ属	<i>Ilex</i>			11
カエデ属	<i>Acer</i>			2
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	2	
ブドウ属	<i>Vitis</i>		1	
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>		1	
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>		1	4
ニワトコ属	<i>Sambucus</i>		1	
草本花粉	NonArboreal pollen			
ガマ属ーミクリ属	<i>Typha-Sparganium</i>		5	9
ヒルムシロ属近似種	<i>Potamogeton</i>			1
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>			5
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>		2	3
イネ科 (40 μ 以上)	Gramineae	8	129	144
イネ科 (40 μ 未満)	Gramineae	12	202	182
カヤツリグサ科	Cyperaceae	5	84	70
ミズオアオイ属	<i>Monochoria</i>		3	1
ユリ科	Liliaceae			1
アサ属ーカラハナソウ属	<i>Cannabis-Humulus</i>	1	3	1
クワ科ーイラクサ科	Moraceae-Urticaceae	1	3	6
タデ属サナエタデ節ーウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	3	10	4
タデ属	<i>Polygonum</i>			1
アカザ科ーヒコ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae		4	3
ナデシコ科	Caryophyllaceae		6	4
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>			1
アブラナ科	Cruciferae		1	1
マメ科	Leguminosae		1	1
ミソハギ属	<i>Lythrum</i>		2	
キカングサ属	<i>Rotala</i>			1
ヒシ属	<i>Trapa</i>			1
セリ科	Umbelliferae		6	2
シソ科	Labiatae		1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>		128	53
キク亜科	Carduoideae	6		4
シダ類胞子	Spore			
ヒカゲノカズラ科	Lycopodiaceae		4	13
ゼンマイ科	Osmundaceae	2		
単条型胞子	Monoletespore	18	46	157
三条型胞子	Triletespore	6	3	7
不明	Unknown			
不明花粉	Unknown pollen		7	8
同定不能花粉	Poorly preserved Pollen	78	26	25
合計	Total			
木本花粉	Arboreal pollen	39	249	265
草本花粉	NonArborealpollen	36	590	500
シダ類胞子	Pteridophyta	26	53	177
不明花粉	unknown	78	33	33
合計	Total	179	925	975

(2) 4区水口30

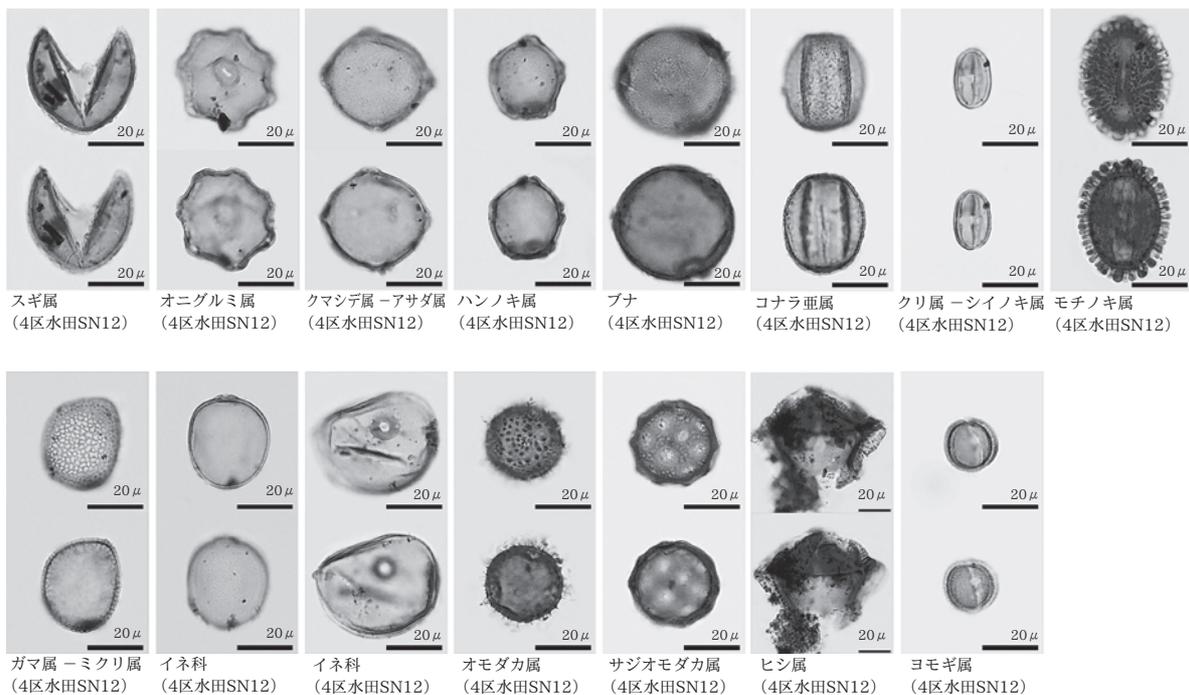
花粉化石は比較的多産したが、保存状態の悪い化石が多く認められた。好气的条件に曝される時期を挟在する、乾湿を繰り返す後背湿地のような場所であったと思われる。

花粉化石群集は草本花粉が卓越し、その中ではイネ科が優占した。調査地周辺はイネ科植物が生育する開けた草地であったと推定される。イネ科花粉の多くが、大きさ40 μ 以上の大型のものであった。大型のイネ科花粉には、栽培種のイネ属やコムギ属、野生種のカモジグサ、メダケなどのタケ亜科植物が含まれるが、花粉の粒径・表面模様から栽培種と野生種を識別することが難しく〔中村1974〕、特定できない。しかしながら、随伴した水生植物のガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが水田雑草の種類でもあること、調査地が水田の水口であることから、大型のイネ科花粉には栽培種が含まれている可能性が高いと思われる。また、水田の畦など、水田近辺には荒地に普通なヨモギ属などが生育していたとみられる。

以上の堆積環境や古植生は、水田の水口という環境と同調的な結果といえる。



第25図 花粉化石組成図



第26図 花粉化石顕微鏡写真

(3) 4区水田 SN12

花粉化石は多産し、保存状態は上記水口 30 試料より良かったものの、保存の悪い化石も散見された。多少の好気的条件下に曝される時期を挟んでいたものの、水口 30 試料より花粉化石が分解しない、水位の高い後背湿地のような堆積環境が推定される。本試料が水口 30 試料の上位に堆積したものだとなると、調査地の水位が上昇傾向にあったことになる。この点は調査地の堆積層の累重状況を踏まえ、再評価する必要がある。

花粉化石群集は、多少の差異があるが基本的には水口 30 試料と概ね類似する。草本花粉が高率を占め、イネ科が優占したことから、被覆層形成期も調査地周辺は開けた場所で、イネ科植物や水生植物が生育する水湿地が広がっていたことが推定される。また、イネ科花粉には大型のものが多く認められることから、栽培種の種類が含まれている可能性がある。水田 SN12 被覆土試料となっているが、上記の水田 SN12 の産状を踏まえると、水田機能機から埋没期までの長期にわたる植生を反映している可能性もある。堆積層序学的検討を踏まえた評価が今後必要である。

2) 周辺森林植生

調査地周辺の森林植生を反映している木本花粉組成をみると、水口 30・水田 SN12 とともに種類構成は類似するが、産出率が多少異なっていた。いずれの試料も針葉樹のスギ属や落葉広葉樹のブナ、コナラ亜属、ハンノキ属などが多産した。ハンノキ属以外の種類は広域要素とされる種類で、集水域の広範囲の植生を反映している要素である。スギ属は斜面下部や谷あいやや湿気があり、肥沃で深い土壌を好む陽樹である。当時は河川から離れた洪水の影響を受けにくい比較的安定した氾濫原や丘陵・台地などの沢筋を中心に分布していたとみられる。また、ブナは冷温帯性落葉広葉樹林の代表樹種であり、山地などの安定した場所に生育する。当時はそのような場所に林分を形成していたとみられる。コナラ亜属には山地から河畔などに生育する種類が含まれる。

ハンノキ属には、ヤシヤブシなどの山地に生育する樹種や、ハンノキのように後背湿地や水田の畦などに分布する樹種が含まれる。調査地の立地環境、ハンノキ属樹種の生態性、花粉のタフォノミーを考慮すると、ここでのハンノキ属は調査地周辺低地に分布していた要素の可能性が高く、ハンノキ湿地林の存在が示唆される。水口 30 に比較して、水田 SN12 の方が高い産出率であり、河畔林要素を含むヤナギ属も同様の産状を示している。水田 SN12 が水口 30 より層位的に上位に位置するとすれば、これらの樹種が水田埋没期に分布を広げた可能性が示唆され、調査地一帯の氾濫原の水位が上昇傾向にあったことになる。

第8節 珪藻分析

A 試料

試料は、4区水田 SN12 (試料 31)、4区水口 30 (試料 32)、4区水田 SN12 被覆土 (試料 33) の3点の堆積物である。いずれも花粉分析試料と同一である。

B 方法

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作成する。(1) 湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。(2) 分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。(3) 上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4～5 回繰り返す。(4) 自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。(5) 乾燥した試料上に封入剤のプリユラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作成する。検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、

全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、[Horst Lange-Bertalot 2000, Hustedt 1930-1966, Krammer and Lange-Bertalot 1985 ~ 1991, Desikachary 1987]などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

C 結 果

結果を第12表に示す。分析の結果、すべての試料から珪藻化石は産出したが、いずれも産出数が非常に少ない。保存状態は、全体的に壊れた殻が多く、不良である。

以下、試料ごとに結果を記す。

4区水田 SN12 被覆土からは、3個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Fragilaria ulna*、流水不明種の *Fragilaria* spp. である。

4区水口 30 からは、6個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata*、流水不明種の *Pinnularia* spp. 等である

4区水田 SN12 からは、8個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水不明種の *Neidium* spp.、*Pinnularia* spp. 等である。

D 考 察

4区水田 SN12 被覆土、4区水口 30、4区水田 SN12 の3試料から産出した種の生態性について述べると、淡水生種で流水不定性種の *Fragilaria ulna* は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一種で広範のさまざまな水域から見出される。流水不定性種とした *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* は、塩分、pH および流水のいずれに対しても不定であるが、承名変種の *Stauroneis phoenicenteron* に伴って生育していることが多いため、概ね湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種と考えられる。淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. は、それぞれ数種類で構成されるが、これら2属はいずれも湿地に最も特徴

第12表 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	水田SN12被覆土	水口30	水田SN12
	塩分	pH	流水		試料33	試料32	試料31
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	—	1	—
<i>Amphora</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	1
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	1	—
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	1
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	—	—
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	—	—
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	2
<i>Pinnularia maior</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ac-il	l-bi	N,O,U	—	—	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	2	3
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	—	1	—
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	1	—
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0
淡水生種					4	6	8
珪藻化石総数					4	6	8

凡例

塩分：塩分濃度に対する適応性

- Euh : 海水生種
- Euh-Meh : 海水生種-汽水生種
- Meh : 汽水生種
- Ogh-Meh : 淡水生種-汽水生種
- Ogh-hil : 貧塩好塩性種
- Ogh-ind : 貧塩不定性種
- Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk : 貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性

- al-bi : 真アルカリ性種
- al-il : 好アルカリ性種
- ind : pH不定性種
- ac-il : 好酸性種
- ac-bi : 真酸性種
- unk : pH不明種

流水：流水に対する適応性

- l-bi : 真止水性種
- l-ph : 好止水性種
- ind : 流水不定性種
- r-ph : 好流水性種
- r-bi : 真流水性種
- unk : 流水不明種

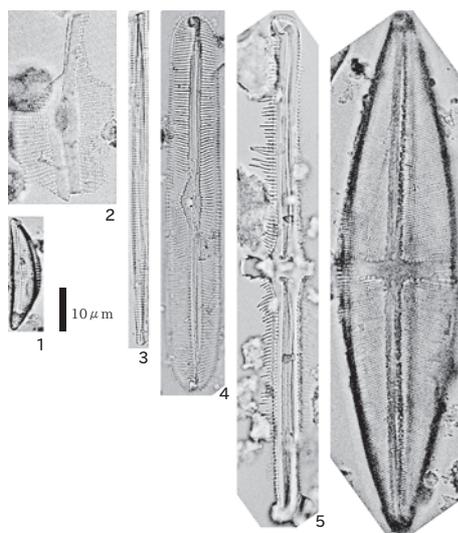
環境指標種

- A：外洋指標種 B：内湾指標種 C1：海水藻場指標種 C2：汽水藻場指標種 D1：海水砂質干潟指標種 D2：汽水砂質干潟指標種
- E1：海水泥質干潟指標種 E2：汽水泥質干潟指標種 F：淡水底生種群（以上は〔小杉1988〕）
- G：淡水浮遊性種群 H：河口浮遊性種群 J：上流性河川指標種 K：中～下流性河川指標種 L：最下流性河川指標種群 M：湖沼浮遊性種群
- N：湖沼沼沢湿地指標種 O：沼沢湿地付着生種 P：高層湿原指標種群 Q：陸域指標種群（以上は〔安藤1990〕）
- S：好汚濁性種 U：広適応性種 T：好清水性種（以上は〔Asai and Watanabe 1995〕）
- R：陸生珪藻（RA：A群, RB：B群, RI：未区分、〔伊藤・堀内1991〕）

的に認められ、主要な構成種になる属である。

本3試料は、産出数が非常に少なかったため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好气的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている〔千木良1995〕。また、〔小杉1986〕によると、珪藻の遺骸は、堆積する際には、その大きさからシルトと挙動と共にするとされていることから、粗粒な堆積物の場合、珪藻殻は取り込まれにくいことが推定される。

本3試料からは、いずれも湿地性種が産出したことから、概ね湿地環境であった可能性が唆されるが、取り込まれたほとんどの珪藻化石は、堆積後に分解・消失した可能性が高い。



- 1 *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (4区水口30)
- 2 *Cymbella* spp. (4区水田SN12)
- 3 *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (5区水田SN12被覆土)
- 4 *Pinnularia maior* (Kuetz.) Rabenhorst (4区水田SN12)
- 5 *Pinnularia* spp. (4区水田SN12)
- 6 *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* Meister (4区水口30)

第27図 珪藻化石顕微鏡写真

第Ⅶ章 総 括

第 1 節 古墳時代の様相

市内の信濃川左岸に分布する古墳時代の遺跡は、御井戸遺跡や南赤坂遺跡などの集落遺跡がある角田山麓域に集中するとして知られてきた。しかし、近年調査事例が増加し、沖積地にも分布することが判明した（第 28 図）。本遺跡の第 7 次調査では、5 区の中世の溝 SD48 の底面から古墳時代中期後半（新潟県の考古学Ⅲ古墳時代中期第 3 段階・漆町 13 並行〔小野本 2019〕）の土師器高杯 2 点（19・20）と鉢 1 点（21）、石製模造品 1 点（127）が一括出土した。古墳時代の遺物はこの 4 点のみであったが、2018 年の確認調査（第 3 次調査）の際にも甕と鉢が出土しており（第 29 図 26～29）〔今井 2024〕、少量ながらも遺跡の広範囲に古墳時代の遺物が分布することが分かってきた。

本遺跡の周辺でも仲歩切遺跡（中期）、萱中遺跡（早期～前期）、囲内遺跡・島瀬瀬遺跡（詳細時期不明）¹⁾がある〔相田 2024〕（第 29 図）。南に隣接する燕市でも浦谷地遺跡（前期）・大橋遺跡（後期）が周知化されている。いずれも試掘・確認調査などの小規模調査であったため、遺構を確認することができなかったが、その出土量や内容から居住していたとみて問題ないだろう。

これらの沖積地の遺跡はいずれも西川流域、特に大通川沿いに分布する。大通川は、江戸初期正保 4（1647）年の国絵図によれば、現在の燕市砂小塚の西川から分流し、鎧瀧に注ぐ²⁾。さらにその後大瀧・田瀧を経由し早通川として西川に再び合流していた。西川は、同絵図で信濃西川と書かれたように、かつては信濃川の本流に近い分流であったことが地質学的にも指摘されており、ボーリングデータから、2,000 年前の信濃川河口は現在の新川付近にあったとしている〔嶋井・安井 2004、嶋井ほか 2016、野崎 2023〕。相田泰臣氏は、古墳時代においても信濃川河口を現在の新川付近とする水澤幸一氏の説〔水澤 2015〕を前提に、河口から砂丘間低地の流路で潟湖へとつながる内水面交通が機能していたとし、河川および潟湖単位で古墳や集落の分布を捉えた〔相田 2015〕。さらに相田氏は、江南区道正遺跡の船の線刻土器の出土から、古墳時代前期に大型の準構造船による海上交通が行われていたと報告している〔相田 2024〕。この視点で、当時の茶院 A 遺跡周辺の交通路を考えると、海からは、信濃川河口（現在の新川河口周辺）から西川を通り、鎧瀧を経由し大通川でたどり着くことが可能であり、逆に信

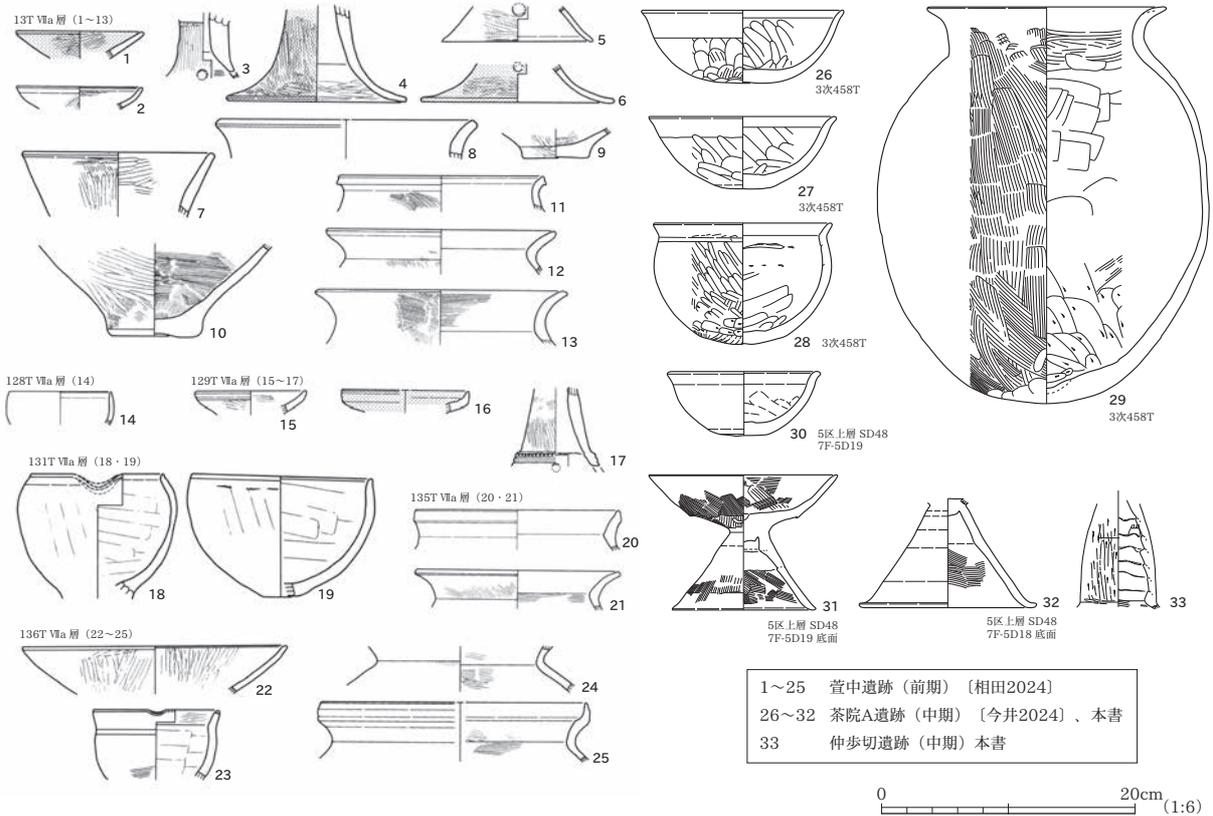


第 28 図 推定旧河道と古墳時代の主な遺跡
（〔長谷川 2001〕を再トレースして加筆）

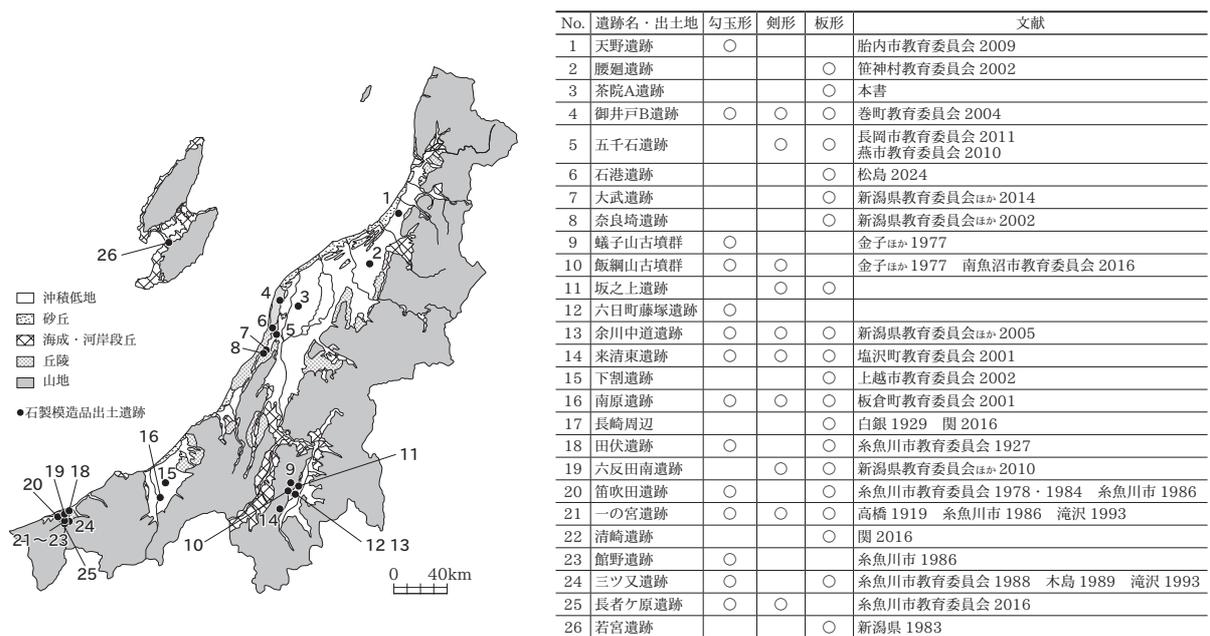
1) 巻町史編さんカード（新潟市歴史文化課所蔵）に出土遺物写真と土師器の赤彩壺口縁や二重口縁壺が出土したという記載がある。遺物の所在については不明。
2) 正保国絵図に「大通川」との記載は無いが、鎧瀧の形状を見るに大通川河口が最も三角州が発達していることから、上流部から長期間大量の土砂の供給があったことは明らかである。

第1節 古墳時代の様相

濃川上流からは、西川～大通川のルートが考えられる。大通川の成立に関しては、米軍撮影写真等で川筋の復元を試みた長谷川晴一氏が、複雑な網状の河川で河道をたどることは容易でないとしつつも、少なくとも古墳時代の頃から燕市西太田～米納津～佐渡山～牧ヶ島～茶院 A 遺跡のある西村を通るルート（大通川左岸ルート）があったとし、燕市八王寺で中ノ口川から分流し大曲～灰方～関崎～佐渡山方面に流れるルートがもうひとつあったと推測している〔長谷川 2001〕。



第 29 図 茶院 A 遺跡周辺の古墳時代土器



第 30 図 新潟県内の石製模造品出土遺跡（〔金田 2019〕を改変）

また、先述のように茶院 A 遺跡第 7 次調査では、石製模造品（双孔円盤）（127）が出土している。石製模造品は、市内では角田山麓の御井戸遺跡の 7 点（勾玉形 1 点、剣形 1 点、円盤 5 点）〔相田・前山 2004〕に続き 2 例目となる。市外では、長岡市の大武遺跡・奈良崎遺跡、燕市の石港遺跡、長岡市と燕市にまたがる五千石遺跡などの島崎川流域の遺跡で出土している（第 30 図）。島崎川は、大河津分水が掘削される前は、燕市の牧ヶ花で西川に合流していた。石製模造品は水辺の祭祀で使用される例が多く、県内には群馬から魚野川・信濃川を通るルートで搬入されると考えられている〔金田 2019〕。この例においても、西川が内水面交通として重要なルートであったことが裏付けられる。

このように、出土遺物は少ないが、周辺の状況を鑑みるに、沖積地においても古墳時代前期頃には西川や大通川沿いで人々の活動が始まっていたといえる。これらの遺跡は、どのような性格の集落であっただろうか。一つ一つの遺跡の消長は、長くはない。角田山麓に位置する古墳を伴う大規模な集落の御井戸遺跡が長期間存続するのと対照的である。広大な沖積地において稲作を開始したものの、条件が厳しく長くは続かなかった可能性もある。

第 2 節 奈良・平安時代の様相

A 出土土器の編年的位置づけ

茶院 A 遺跡第 7 次調査では、遺構内の出土土器が少なく、大半がⅦ層（遺物包含層）からの出土であった。第 7 次調査のみで変遷表を作成せず、傾向を述べるに留める。

茶院 A 遺跡が所在する西蒲原地域および県内の古代土器編年は、春日真実氏によってまとめられている〔春日 1999・2005〕これを基に編年的位置づけを行う。

最も古手は、土師器甑（58・59）で春日編年 1999 古代Ⅲ期（以下「春日編年 1999」を省略して示す）8 世紀前葉が上限である。土師器については、全体を示す資料がほとんどなかったが、古代Ⅲ～Ⅳ 2・3 期 8 世紀中葉～9 世紀初頭に位置づけられる非ロクロ成形の甕、いわゆる西古志型甕が目立つ（51・52・53）。底部不調整の小甕（55・56）などもある。またこの時期の須恵器は、無台杯（24・36）・瓶（45）など胎土 C 群（新津丘陵産）のものが多く認められる。古代Ⅴ期段階 9 世紀前葉～中葉には、土師器の煮炊具にロクロ成形の甕（30）が出現する。須恵器は胎土 B 群（佐渡小泊産）が席卷しはじめるが、胎土 C 群（新津丘陵産）や胎土 D 群（その他の産地）も一定量認められる。同じ大通川流域にある燕市稲葉遺跡では、古代Ⅴ期に小泊産がほとんどを占めるが〔高橋 2022〕、茶院 A 遺跡第 6 次調査では、古代Ⅴ期でも小泊産須恵器は全体を占めるほどではなかった〔中川 2024〕。古代Ⅵ期に入ると、須恵器的技法で作られた土師器が優勢になる。ロクロ成形で底部に回転糸切痕が残る椀（106～108）のほか、ロクロ成形とタタキを併用した鍋（114）などがある。須恵器は胎土 B 群（佐渡小泊産）のみとなり、貯蔵具・食膳具（90・103）が見られる。なお、古代Ⅶ期までは下らないと考える。

上記をまとめると、第 7 次調査の出土土器は、春日編年古代Ⅲ期 8 世紀前葉から古代Ⅵ期 9 世紀後葉におさまり、古代Ⅴ期 9 世紀前葉～中葉に画期があると言える。第 6 次調査と比較し、古代Ⅵ期の土器が出土しているのが特徴である。

B 土器の器種構成比率

第 7 次調査では、古代の遺構の多くが中世期に攪乱を受けており、遺構一括資料が得られなかったことから、区毎の総計でエリアの様相を論じたい。包含層と遺構出土の数値を混ぜる事は、正確な位置情報ではないが、南北に長い本遺跡の中での様相を述べるためにこの方法を採用した。

今回 4～6 区出土土器について、口縁部残存率計測法〔宇野 1992〕を用いて器種別構成比率を算出した（第 13 表）。器種別構成比率は全体の出土数に対する各器種の出土数の比率を示したものである。計測方法は、土器を器種分類し、口縁部の残存率を 36 分割の同心円を用いて計測し、器種ごとに集計した。口縁部破片のみで、

須恵器有台杯か無台杯か判別できない場合は、それぞれの比率に応じて数値を按分した。口縁部を計測の対象とする口縁部残存率計測法では、胴部片や底部片があっても口縁部片が出土していないと数値が現れず、土器組成に反映されない場合がある。口縁部の出土数が少ない貯蔵具は特にこの現象が生じやすい。こうした現象を回避するため、数値には現れない破片が存在する場合は表中に「*」の記号を記した。

最多器種は、4・5区で須恵器無台杯であるが、6区は土師器無台杯と須恵器の無台杯が拮抗し、わずかに土師器無台杯が上回っている。また、6区に須恵器貯蔵具が集中している。

機能別器種構成比率

機能別の構成比率については、食膳具：貯蔵具：煮炊具が4区(80%：1%：19%)、5区(65%：1%：34%)、6区(90%：2%：8%)という結果になった。春日真実氏の古墳時代から古代にかけての機能別比率を比較した研究では、越後においてⅢ期からⅤ期にかけて煮炊具比率が減り食膳具の比率が上がる傾向が見られ、Ⅵ期で顕著になり、Ⅶ期でさらに進むとしている〔春日2015〕。前述したように第7次調査では出土土器の編年推移がⅦ期にピークがありⅥ期で終焉を迎えている。器種構成比率について5区・6区で見ると、5区は食膳具が6割、6区は食膳具が9割となっている。第6次調査全体では(59%：3%：38%)で食膳具の比率が最も低い〔中川2024〕。遺跡北側の第6次調査地区から、遺跡中央部の第7次調査地区にかけて、食膳具の比率が上がっていくことが示された。遺跡における居住空間が北から南へと移っていることが、器種構成比率でも表れているといっ

てよいだろう。

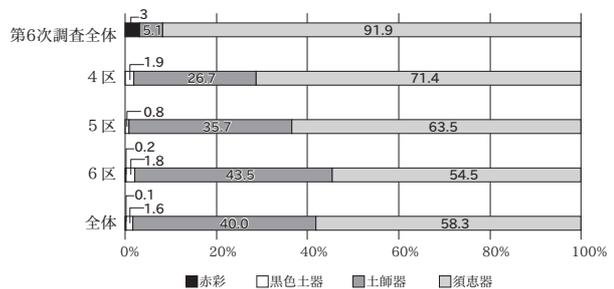
食膳具種類別構成比率

第13表をもとに食膳具種類別構成比率を算出した(第31図)。4区はほぼ水田域であることから、ここでは5・6区について述べたい。5区は土師器が35.7%・須恵器63.5%・黒色土器0.8%、6区は土師器が43.5%・赤彩土器が0.2%・須恵器54.5%であった。

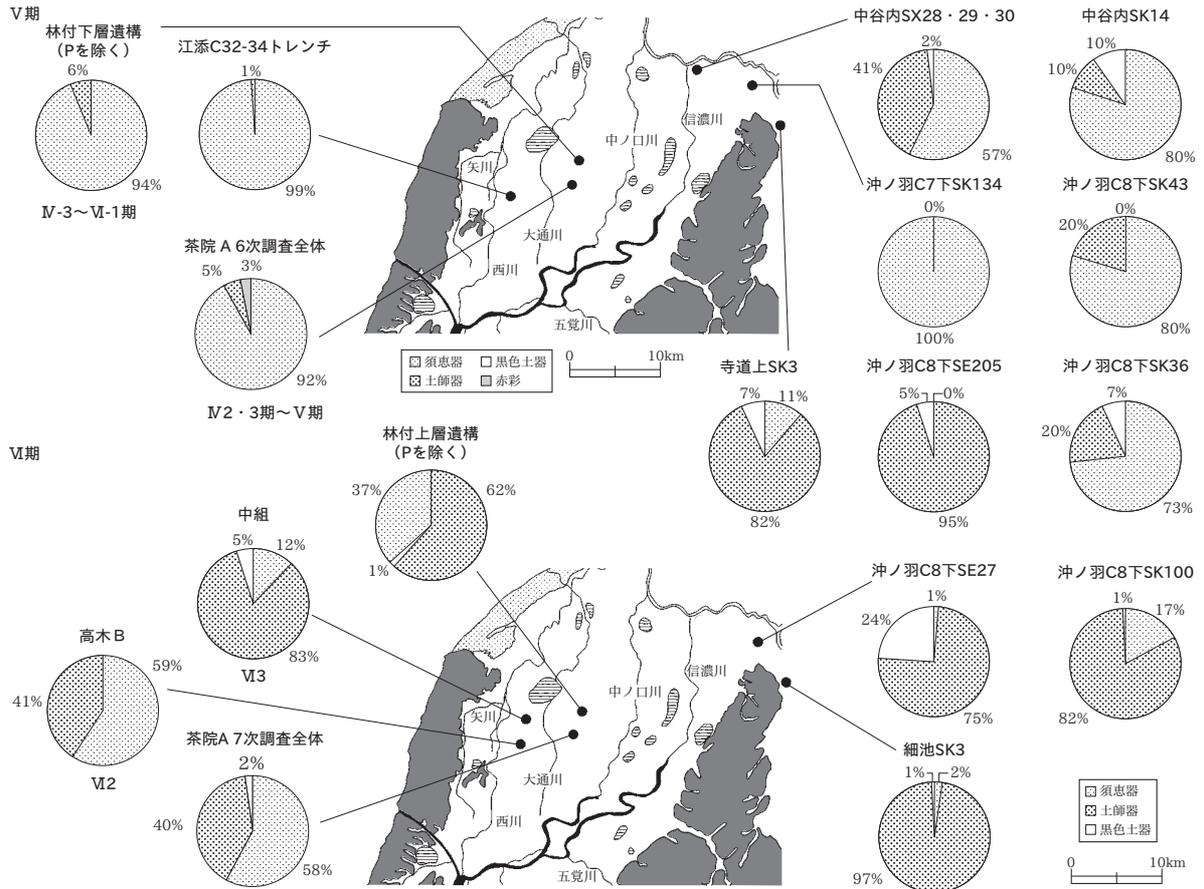
第6次調査の際は、食膳具における須恵器の比率が9割であったほか、黒色土器もほとんどみられなかった。蒲原郡域の食膳具における種類別構成比率の変遷についての春日氏の研究によると、西蒲原地域(西川・矢川周辺)においてⅣ期の頃には須恵器が9割を超えることが多いのに対し、Ⅴ期の頃には土師器と須恵器が4：6ほどの比率になり、時代が下りⅥ期になると土師器と須恵器の比率が逆転する〔春日2003〕。茶院A遺跡においても、Ⅳ～Ⅴ期中心の第6次調査エリアと、Ⅴ～Ⅵ期中心の第7次調査エリアでは、食膳具における須恵器と土師器の比率が逆転するという西蒲原地域の典型的な様相を示している。

第13表 器種別構成比率表

区分	種別	器種	4区全体		5区全体		6区全体		第7次調査全体	
			口縁部残存率/36	比率(残存率)	口縁部残存率/36	比率(残存率)	口縁部残存率/36	比率(残存率)	口縁部残存率/36	比率(残存率)
土師器	無台杯	54	21.5%	256	21.0%	762	38.8%	1072	31.2%	
	鉢	0	0.0%	24	2.0%	4	0.2%	28	0.8%	
	その他	0	0.0%	3	0.2%	*	—	3	0.1%	
須恵器	無台杯	111	44.0%	397	32.7%	711	36.2%	1219	35.6%	
	有台杯	4	1.6%	30	2.5%	54	2.7%	88	2.6%	
	杯蓋	26	10.3%	65	5.3%	161	8.2%	252	7.4%	
	鉢	4	1.6%	11	0.9%	33	1.7%	48	1.4%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
黒色土器	鉢	*	—	7	0.6%	0	0.0%	7	0.2%	
	碗	4	1.6%	*	—	32	1.6%	36	1.0%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
赤彩土器	無台杯	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	1	0.0%	
	鉢	0	0.0%	0	0.0%	3	0.2%	3	0.1%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
小計		203	80.6%	793	65.2%	1761	89.7%	2757	80.4%	
貯蔵具	須恵器	横瓶	0	0.0%	*	—	9	0.5%	9	0.3%
		壺蓋	0	0.0%	0	0.0%	8	0.4%	8	0.2%
		壺・瓶類	0	0.0%	*	—	16	0.8%	16	0.5%
		甕	3	1.2%	10	0.8%	13	0.7%	16	0.5%
小計		3	1.2%	10	0.8%	46	2.3%	59	1.7%	
煮炊具	土師器	長甕	44	17.5%	351	28.9%	73	3.7%	468	13.6%
		小甕	0	0.0%	55	4.5%	43	2.2%	98	2.9%
		鍋	2	0.8%	7	0.6%	40	2.0%	49	1.4%
		その他	0	0.0%	*	—	0	0.0%	*	0.0%
小計		46	18.3%	413	34.0%	156	7.9%	615	17.9%	
その他	土師器	小片	*	—	*	—	*	—	*	—
	須恵器	小片	*	—	*	—	*	—	*	—
	黒色土器	小片	0	0.0%	0	0.0%	*	—	*	0.0%
	赤彩土器	小片	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
小計		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
総計		252	100.0%	1216	100.0%	1963	100.0%	3431	100.0%	



第31図 食膳具の器種別構成比率



第 32 図 食膳具の構成比率 ((春日 2003) [相田 2012] に追加)

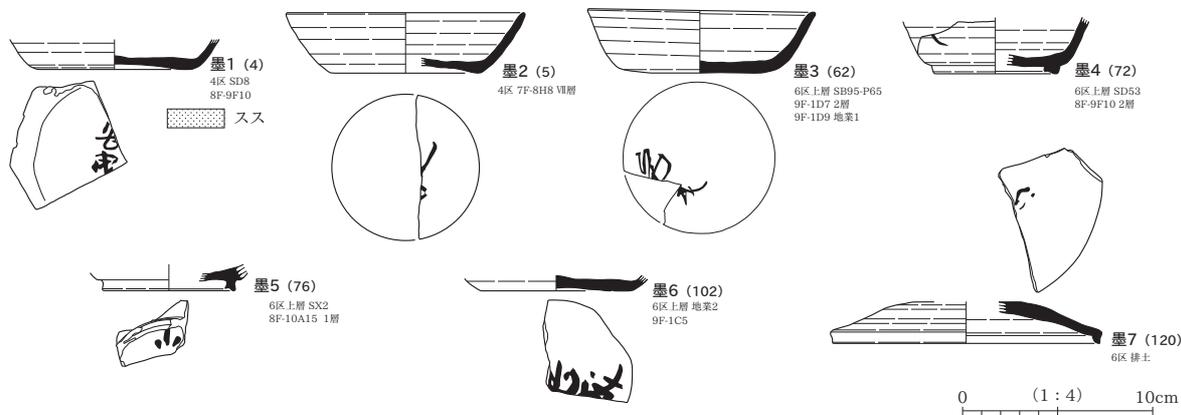
C 墨書土器

第7次調査では7点の墨書土器が出土した(第33図、第14表)。4区では、SD8から1点(墨1)、遺構外から1点(墨2)の合計2点。6区ではSB95-P65から1点(墨3)、SD53から1点(墨4)、SX2から1点(墨5)、遺構外から2点(墨6・7)の合計5点が出土した。このうち須恵器食膳具の無台杯が4点で、墨書部位はいずれも底部外面である。有台杯2点は底部外面が1点、体部外面が1点。杯蓋1点は天井部外面に記されている。文字を判読できたものは3点で、すべて「宅成」である。しかし、書き方はそれぞれ異なっている。

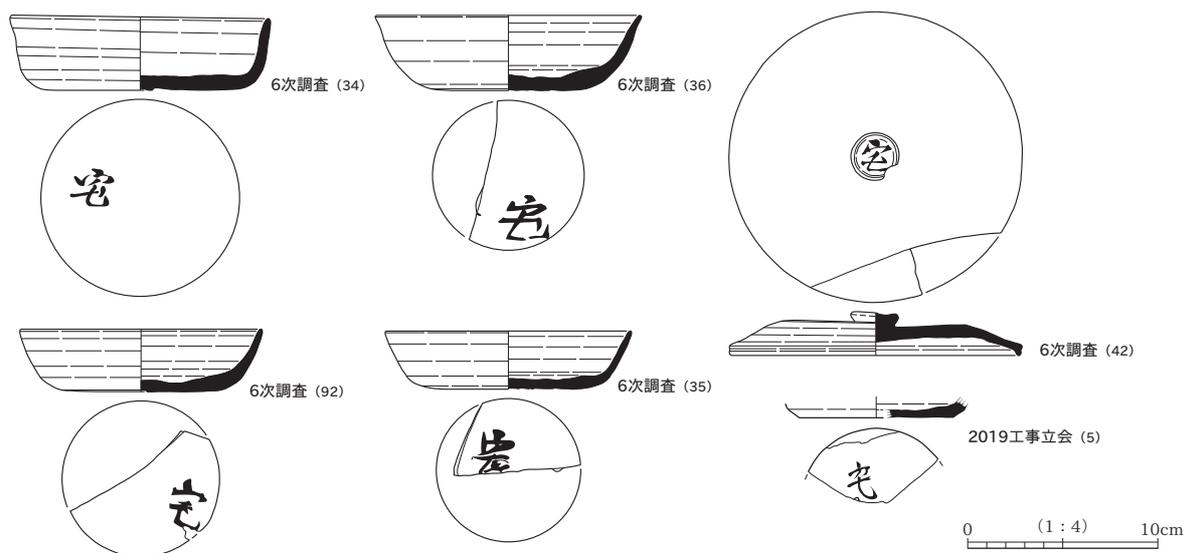
墨1は底部外面のほぼ中央にやや小さい文字で記している。墨3は底部外面の左上寄りに、墨1よりひとまわり大きな文字で記しているが、文字の線の太さは細い。墨6は底部外面の下寄りに墨1よりひとまわり大きな文字で記し、線の太さは墨1や墨3よりも太い。これらの書き方の違いは、書き手が異なることによると考えられる。なお、墨2は墨痕の一部が確認できるだけで文字を読み切ることができないが、右下方向への払いの残画が確認でき、「成」の可能性が高い。墨1・3・6と同様に「宅成」と書かれていたとすると、他のものよりも大きな文字で書かれていたことになる。

「宅」の一文字を単独で記した墨書土器は、第6次調査で、遺跡の北端に近い1区から5点出土している。これらの時期は8世紀後半である〔今井ほか2024〕(第34図、第15表)。一方、第7次調査で出土した「宅成」と書かれた墨書土器3点は、遺跡の中ほどの4区、6区からの出土であり、時期も9世紀で、1区出土の「宅」の墨書土器とは異なる。「宅成」は人名と考えられるが、必ずしも実在した人物の名前とは限らず、嘉名(縁起の良い名前)の可能性が高い〔三上2013〕。「宅成」の事例は県内では見られないが、長岡京左京第76次調査で「宅成」の墨書土器が2点、「□□〔宅成カ〕」とされる墨書土器が2点出土している〔百瀬ほか1997〕。なお、本遺跡の2019年度工事立会では、遺跡の南寄りの地点から「宅□」と記された9世紀の墨書土器が出土しており〔今

井 2021)、第7次調査で出土した墨書土器との共通性がうかがえる。墨書土器の文字の検索には、明治大学古代学研究所全国墨書土器・刻書土器、文字瓦横断検索データベース (<https://bokusho-db.kodaishiryo-db.jp/>) を用いた。



第33図 茶院A遺跡第7次調査出土墨書土器集成



第34図 茶院A遺跡第6次調査・2019工事立会出土の「宅」墨書土器

第14表 茶院A遺跡第7次調査出土墨書土器一覧

墨書No.	報告No.	遺構	区	グリッド	層位	種別	胎土	器種	墨書部位	釈文	備考
1	4	SD8	4	8F-9F10		須恵器	B	無台杯	底部外面	宅成	
2	5	遺構外	4	7F-8H8	VII	須恵器	C	無台杯	底部外面	□	「成」の可能性あり
3	62	SB95-P65	6	9F-1D7 9F-1D9	2 地業1	須恵器	C	無台杯	底部外面	宅成	
4	72	SD53	6	8F-9F10	2	須恵器	B	有台杯	底部外面	□	
5	76	SX2	6	8F-10A15	1	須恵器	B	有台杯	底部外面	□	
6	102	地業2	6	9F1C5		須恵器	B	無台杯	底部外面	宅成	
7	120	遺構外	6	排土		須恵器	D	杯蓋	天井部外面	□	

第15表 茶院A遺跡第6次調査・2019工事立会出土墨書土器一覧

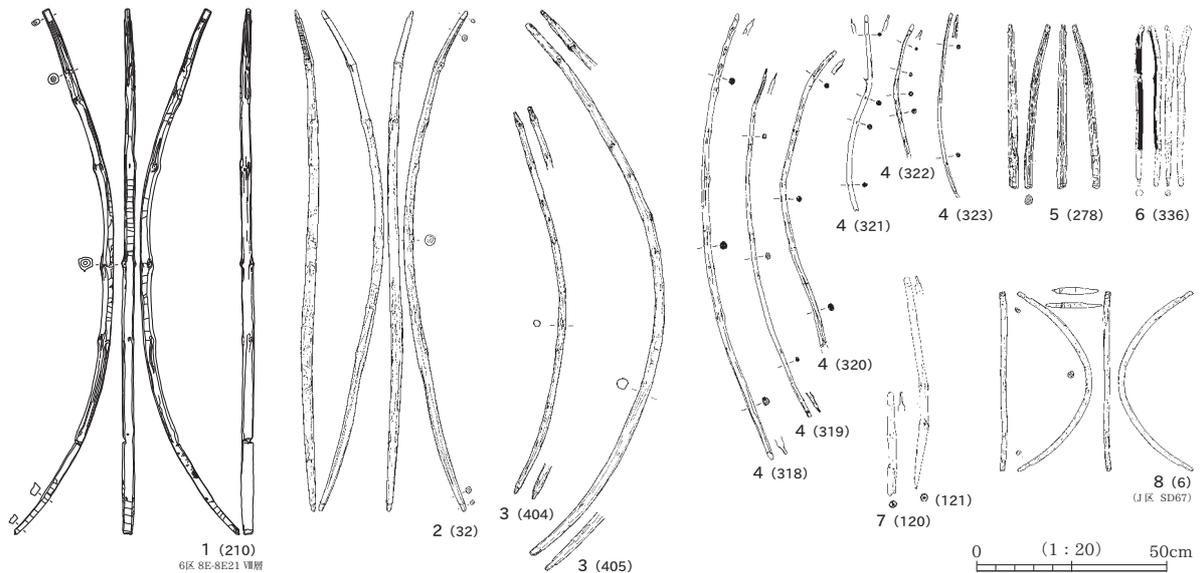
報告No.	遺構	区	グリッド	層位	種別	胎土	器種	墨書部位	釈文	備考
34	NR30	1	2G-10G	I	須恵器	C	無台杯	底部外面	宅	
36	NR30	1	2G-10F	I	須恵器	C	無台杯	底部外面	宅	
92	遺構外	1	2G-10F	VII	須恵器	C	無台杯	底部外面	宅	
35	NR30	1	2G-10F	I	須恵器	C	無台杯	底部外面	宅	
42	NR30	1	8F-10A15	I	須恵器	C	杯蓋	つまみ部	宅	
5	立会	-			須恵器	B	無台杯	底部外面	宅□	

D 丸木弓

6区 8E-8E21のⅧ層から、イヌガヤ製の丸木弓1(210)が出土した。全長139cmで下部が裂けており、分枝部が太く残っていることから、製作途中に放棄されたと考えられる。放射性炭素年代測定の結果、820-901calAD(56.1%)の暦年代が得られ(第Ⅵ章参照)、古代の弓と考える。2019年の本遺跡の工事立会においても、全長132cmの丸木弓2(32)が出土し〔今井2021〕、本遺跡では2例目の出土である。2(32)は年代測定を行っていないが、Ⅷ層相当から出土していることから同年代のものと考えて差し支えないだろう。2019年出土の丸木弓2(32)は、漆が塗布されており、糸が巻かれた痕跡が認められるほか、使用やたわみによる横方向の細かい傷が複数入っていることから、実用に供されたと考えられる。なお、矢の走行を安定させるための樋は認められない。

新潟市および近郊の古代遺跡から出土した丸木弓を集成した(第35図)。弭がどちらかに残っているものを弓として判断した。いずれもイヌガヤ製で、7世紀頃とされる市内秋葉区の大沢谷内遺跡(弓形として報告)が1点〔細野ほか2012〕、市外では7世紀後半とされる田上町行屋崎遺跡で両端に弭のある完形の弓が2点、片側の弭が欠損するものが5点出土している〔田畑ほか2015〕。三条市石田遺跡でも9世紀頃の遺物とともに出土している〔高野ほか2019〕。加茂市馬越遺跡では47.6cmと小ぶりで完形のものが出土しているが、所属時期を中世としている〔伊藤2010〕。茶院A遺跡出土の弓に最も近いサイズのもは、阿賀北地域になるが、胎内市屋敷遺跡で川跡から8世紀頃の遺物とともに出土した140cmの完形の弓である。ほかに100cmのものも1点出土している。木製祭祀具とともに出土していることから形代の可能性がある〔水澤2004〕。同じ阿賀北地域では、新発田市野中土手付遺跡で川跡から2点出土例がある〔嶋田ほか2004〕。

いずれの遺跡も古代・中世もしくは古墳・古代の複合遺跡であり、川跡という時期を特定しにくい出土状況である。弓は時代によって形状にあまり変化がみられず、形やサイズから年代を推測できないことから、積極的に自然科学分析による年代測定を行い、実用か否かを判断するため使用痕の観察が必要になるだろう。



1 茶院A遺跡(第7次調査) 2 茶院A遺跡(2019立会) 3 屋敷遺跡(胎内市) 4 行屋崎遺跡(田上町)
5 石田遺跡(三条市) 6 大沢谷内遺跡(新潟市) 7 野中土手付遺跡(新発田市) 8 馬越遺跡(加茂市)

第35図 茶院A遺跡とその周辺遺跡出土の古代・中世丸木弓

第3節 中世の様相

A 水田

第7次調査では、主に4区全域と5・6区の東西両端の確認面の標高が低い箇所水田遺構が検出された。特に4区北側は、調査の幅が他より広がったこともあり、畦畔を平面的に検出できた。4区の水田SN12・13・14については、当初古代の須恵器や土師器のみが出土していたことから、水田の所属時期を古代と考えていたが、古代とするには畦畔のサイズが大きいほか、畦畔の間隔が20mと広く水田の規模が大きかったため、中世以降の水田と想定した。また、明治初期の更正図とも整合しないことから、江戸期以前に収まると考えた。さらにSN12から出土した炭化材の放射性炭素年代測定をおこなったところ1226-1280calAD(95.4%)であり、中世の水田である可能性が高まったため、以下中世の水田という前提で考察する。

1) 周辺遺跡の水田遺構との比較

周辺の同時期の水田遺構として南区小坂居付遺跡があげられる。小坂居付遺跡は中ノ口川右岸の微高地に立地する鎌倉時代の水田を伴う屋敷地である。この水田は、全部で5面確認され、洪水の被害に遭いながらも同じ場所に5回水田を築いている。さらに畦畔の基部には崩壊を防ぐために粗朶や木製品を敷いている箇所もあった。イネ属機動細胞由来の植物珪酸体個数は最も多いX層水田面で3,400(個/試料1g)で、その他4面は1,000～1,700(個/試料1g)となっている。また水田祭祀が行われており人形などの祭祀具が畦畔から出土している〔佐藤ほか2012〕。

次に本遺跡の水田を見てみると、水田は複数面確認できなかった。これは小坂居付遺跡の水田確認面標高(-0.5m～1.0m)に比べて標高が高く、洪水の被害に遭わなかったため同一面で営農していた可能性がある。ただし、遺跡を覆う基本層序VI層は、細かな腐植を含むシルト質で層も厚いことから、遺跡廃絶後(室町時代以降)に湛水していた時期があると考えられる。次に畦畔の構造であるが、畦畔の基礎となる部分に粗朶などの芯材は構築されていなかった。これは、畦畔を構成する土の粘性が高く崩壊しにくい土質であることから、芯材を必要としなかったためと考えられる。畦畔の大きさについて、4区SN12～14を見ると東西方向の畦畔は、最も大きい畦畔24で基部の幅が2.15m、高さが0.51mあるが、南北方向の畦畔27は高さ0.18cmとあまり大きくはない。東西方向の畦畔24が大畦畔で、それ以外が小畦畔と捉えることができよう。水田祭祀については、第7次調査区内で水田祭祀に伴う明確な遺構・遺物は確認できなかった。

2) 自然科学分析の結果から

SN12ではイネの植物珪酸体が2,600(個/試料1g)、水口30で3,200(個/試料1g)産出できた(第VI章第6節)。一般に稲作跡の検証に使用される基準の5,000(個/試料1g)は下回っているものの、遺構として水田が検出されていることから、収量の多くない水田だったのかもしれない。実際にSN12で行った種実同定では、イネ類以外にオモダカ・カヤツリグサなどの水田雑草が多く見られ、この点からも収量が多くなかったことが想像できる(第VI章第4節)。また、SN12からウマの歯が出土している。ウマの歯は、第7次調査で出土地点は異なるものの計5点出土している。また、第6次調査および近隣の下新田遺跡でも出土例がある。近代の事例になるが、西蒲原地域では、田打ちや代掻きで畜耕が行われていた。深田では馬が入れず、仕事量は落ちるが、深田で動ける牛の方が重宝されたという〔織田島2020〕。このことから、茶院A遺跡の水田は、ある程度の乾田であったことが想定される。さらに花粉分析において、花粉化石の保存状態が悪く、離水し乾湿を繰り返す環境にあったことが想定されていることから(第VI章第7節)、いわゆる湛水田ではなかったことが裏付けられる。

B 屋敷地と植栽

4区と6区の接続部分ではVIII層上に、粗砂・小礫を混ぜて敷均した地盤改良層が認められ、地業と表現した。

地業は大きく2層に分かれ、上層の地業1は13世紀の溝の廃絶後に施工され、15世紀の白磁が出土していることから15世紀以降のものとする。下層の地業2は、13世紀の溝SD53に切られていることから、13世紀かそれよりやや古いものとする。地業2の範囲は、東側が6区SD53まで、西は6区SD8付近で見られなくなる。北は、確認調査(第3次調査)の411Tで同様の層が認められることから、およそ1,500m²の範囲に広がると推測する(第36図)。さらに地業層が確認できる東端の4区8F-9Fから8F-10Fにかけて、7本の木からなる樹木列を検出した。このうち4点について樹種同定をおこなったところ全てヤナギであり、さらに1点について放射性炭素年代測定を行った結果、暦年代1255-1279calADの値であった。



第36図 茶院A遺跡第7次調査区内の中世土地利用図

これらは、同軸上に1.4mの等間隔で存在することから、地業とともに人為的に植栽された中世の樹木列と考える。

このような、植栽を伴う整地工事の例として、直線距離にして北東9kmにある同時期の小坂居付遺跡が挙げられる。小坂居付遺跡では溝で区画された中に大きく3層の盛土整地層があり(小坂居付遺跡SR-1・2・3)、およそ1,100m²におよぶ。また、溝の内側に植栽が24基確認された。これらの植栽は1本を除き全てヤナギの木であり、ヤナギが多用されることも類似している。小坂居付遺跡では、区画溝の外側には水田が広がり、生産域として利用されていたようだ。また、信濃川右岸の大沢谷内遺跡においても整地層や植栽は無いものの、同様の土地利用が見られる[相田ほか2015]。鎧渦周辺地域の生活についてまとめた齋藤幸太郎氏は蒲原平野の民家構造について、低湿地帯では屋敷の敷地を高くするとし、農作業で屋内を使用するため家は大型であると述べ、さらに(太平洋側と比べ)坪数は大きいのが貧弱でみすぼらしいとしている[齋藤1966]。さらに、屋敷の北西側には季節風避けと防寒を目的としてスギ・マツ・ケヤキなどの大木を配置し、南・東側にかけての表側には落葉樹・果樹類をまばらに植えるのみで開放的であるとしている。鎧渦周辺の風景写真を数多く撮影した石山与五栄門氏の西蒲原の民家写真にも同様の民家が収められている(第37図)。自然堤防上の細長い微高地を居住域とし、周辺の後背湿地を水田とする土地利用は、沖積地が広がるこの地域の典型的な集落スタイルとして、現代でも見られる。



第37図 西蒲原地区の川治いの民家(昭和30年頃)

第4節 まとめ

茶院A遺跡は、現在の打越集落のほぼ西に平行する形で位置する南北に細長い形状の遺跡である。一見して自然堤防であるとわかる地形だが、その由来の河川については、遺跡の西を流れる大通川と推定する。正保2

(1645)年の越後絵図では、大通川は河川名こそ書かれていないものの、地藏堂・砂子塚付近で信濃西川から分流している。旧河道とそれに伴う自然堤防の多さから、かつては水量も多く蛇行を繰り返していたのだろう。流域にある燕市中組遺跡では湊を表す「池津」の墨書土器が出土している〔吉田町2000〕。余談ではあるが文化13(1816)年の越後輿地全図では、大通川は西川からでなく現在と同じ燕市の野本・田中から始まる表記になっている。大通川は江戸時代後期には周辺の水田からの悪水(排水)を流す川になっており、新田開発が盛んに行われたのを機に、舟道から排水路へと機能が変わったのではないだろうか。

古墳時代

大通川の河川交通を利用し、古墳時代から大通川流域で人々が活動を開始したことがわかった。本遺跡では、遺構こそ確認できなかったものの古墳時代中期の土器が複数出土した。また、同じ古墳時代中期の石製模造品は、角田山麓のほか島崎川流域の遺跡での出土例が多く、河川を通じた関連が窺える。

島崎川流域や信濃川と西川が分岐する付近では、長岡市・燕市にまたがる五千石遺跡や燕市石港遺跡などの古墳時代の大集落が存在するが、大通川周辺では未知の古墳時代集落遺跡があると推察する。今後、調査事例が増え、遺物だけでなく遺構等が見つかり研究が進むことを期待したい。

奈良・平安時代

第6次調査の結果も総合すると、春日編年古代Ⅲ期からⅥ期にかけて居住があった。ただし、集落の中心は春日編年Ⅵ期頃に北部から南部へと変遷している。出土遺物から官衙関連や権威的なものは出土していないが、わずかに出土した灰釉陶器や赤彩土師器、「宅」「宅成」の墨書土器から地元有力者が関わった集落と考える。水田耕作を行っていたであろうが、水田遺構は中世の水田遺構によって消滅している。なお、4区の確認調査で出土した竪筥(第Ⅲ章)や土錘(125・126)の出土から、水田耕作の傍らで小規模ながら漁撈を行っていたと考える。竪筥は、簀子編みの筥で、これは大きな流れのところに仕掛けるという〔森2020〕。干拓前の鰍潟でもナマズやコイなどを捕る際に使用していた。また、周辺の下新田遺跡では、土器に残る種子圧痕からイネ以外にキビの栽培が示唆されており〔龍田2015〕、今後の調査においても水田耕作以外の複合的な生産活動を考える必要がある。また丸木弓(210)と鉄鎌(145)の出土もこの遺跡の性格を考える上でカギとなってくる。弓の大きさは狩猟用でなく対人用であることから、ある程度の緊張関係が周囲にあったのかもしれないが推測の域を出ない。

鎌倉時代

地業(盛土)を伴う屋敷地の一角が見つかったことは、大きな成果と言える。掘立柱建物は確認できるものの、遺物の量は少ないため居住者の性格は見えないが、水田域に囲まれ、盛土地業を行う単独の屋敷地という小坂居付遺跡との屋敷地の構造の類似性は、この地域における集落の在り方の一例となろう。

また、水田耕作が本格化(大規模化)したのもこの頃だと考える。本遺跡全体で計6点のウマの白歯が確認されることから、農耕や運搬に馬を使役していたと考える。さらに羽口や炉壁の出土から野鍛冶が行われていたようで、鎌倉時代の一般的な集落のなりわいの一端が垣間見える。なお、県内では初例となる鉄製の羽釜(149)が出土している。羽釜は鍋に比べ工程が複雑であり、値段も高かったとされる〔五十川1992〕。しかし鏝の部分のみの出土であることから、鍛冶の材料として持ち込まれた鉄片の可能性もある。

鎌倉時代以降

本遺跡での最も新しい遺構・遺物は、地業1から出土した白磁皿(80)、5区SD3瓦器(10)である。いずれも15世紀の所産と考える。一方で16・17世紀以降の陶磁器は表土からであってもほとんど採集できない。矢田俊文氏の研究に拠れば、越後では低地に点在していた中世前期の集落が15世紀末には廃絶し、16世紀には現在の比較的標高の高い自然堤防の集落へ移動するとしている〔矢田1991〕。本遺跡においても、その傾向が見られ、16世紀以降は現在の打越本村や西村の集落へ移動しているのではないだろうか。

引用・参考文献

- ア 相澤 央 2023 「文字資料から見た越佐の地名」『—新潟県埋蔵文化財センター 2023 年度企画展 1「発掘された名前」図録』新潟県埋蔵文化財センター
- 相田泰臣 2003 『菖蒲塚古墳・隼人塚古墳 2002 年度確認調査の概要』巻町教育委員会
- 相田泰臣・前山精明 2004 『御井戸遺跡Ⅱ 2003 年度確認調査の概要』巻町教育委員会
- 相田泰臣ほか 2012 『林付遺跡第 2 次調査』新潟市教育委員会
- 相田泰臣ほか 2015 「越後の古墳と潟湖」『日本海の潟湖と古墳の動態 —北陸からの視点』研究集会海の古墳を考える V 予稿集 研究集会「海の古墳を考える V」実行委員会
- 相田泰臣・金田拓也・八藤後智人ほか 2015 『大沢谷内遺跡Ⅳ第 19・20・21 次調査』新潟市教育委員会
- 相田泰臣 2024 「V 2 萱中遺跡第 1 次調査・第 2 次調査出土の古墳時代の土器について」『新潟市文化財センター年報』第 11 号 新潟市文化財センター
- 浅井勝利 2023 「発掘された古代人名録（女性編）」『—新潟県埋蔵文化財センター 2023 年度企画展 1「発掘された名前」図録』新潟県埋蔵文化財センター
- 安立 聡 2001 『来清東遺跡』第 19 輯 塩沢町教育委員会
- 安立 聡 2016 『六日町史』資料編 第一巻 先史・古代・中世 南魚沼市教育委員会
- 荒川隆史 2004 「第Ⅳ章 遺構」『青田遺跡 本文・観察表編』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰・今井勇雄・笹川隆・外山浩史 2005 『余川中道遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 139 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 猪狩俊哉 2004 「第Ⅴ章 木製品」『青田遺跡 本文・観察表編』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 五十川伸矢 1992 「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集 国立歴史民俗博物館
- 伊藤秀和 2005 『馬越遺跡』加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010 『馬越遺跡Ⅲ』加茂市教育委員会
- 今井さやか 2021 「資料報告 茶院 A 遺跡工事立会遺物」『新潟市文化財センター年報』第 8 号 新潟市文化財センター
- 今井さやかほか 2024 『茶院 A 遺跡第 6 次調査』新潟市教育委員会
- 植田 真ほか 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新津市教育委員会・株式会社パスコ
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 国立歴史民俗博物館
- 江口友子ほか 2000 『釈迦堂遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 100 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤恭雄ほか 2016 『島灘遺跡第 5 次調査』新潟市教育委員会
- 大平理恵 2001 『南原遺跡』板倉町教育委員会
- 大森 勉ほか 1984 『笛吹田遺跡範囲確認調査報告書』糸魚川市教育委員会
- 織田島利門 2020 「5 農業の発達 第 1 章 土地の開発と農業の発達」『西川郷土史考』西川地域コミュニティ協議会
- 小野本敦 2019 「第 4 章 古墳時代 第 2 節 土器 第 2 項 中期」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 小野本敦ほか 2020 『余川中道遺跡Ⅲ第 4・5 次調査』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 287 集 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- カ 春日真実 1999 「第 4 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2000 「第 5 章 まとめ」『吉田町史 資料編 1 考古・古代・中世』吉田町
- 春日真実ほか 2002 『奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 116 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003 『沖ノ羽遺跡Ⅲ C 地区』新潟県埋蔵文化財報告書第 123 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について —「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に—」『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第 18 号 新潟県考古学会

- 春日真実 2014 「古代遺跡の動態 -西蒲原地域を事例として-」『郷土史燕』第7号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
- 春日真実 2015 「土器・陶磁器の機能別比率 -越後の古墳時代～古代を中心に-」『研究紀要』第8号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2019 「第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第1項 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 春日真実 2021 「須恵器有台杯と無台杯の比率 -7世紀末～9世紀の越後の事例を中心に-」『研究紀要』第12号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・加藤 学・坂上有紀ほか 『大武遺跡Ⅱ 古代～縄文時代編』新潟県埋蔵文化財調査報告書第249集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「第5章 遺構」『和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子ほか 2011 『五千石遺跡 1区・3区・4区東地区・5区』長岡市教育委員会
- 金子拓男ほか 1977 「伊乎乃郡の古墳」『新潟県文化財調査年報第15 南魚沼』新潟県教育委員会
- 金田拓也 2019 「第4章 古墳時代 第5節 生産と流通 第2項 石製模造品生産と流通」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 鴨井幸彦・安井 賢 2004 「古地理図でたどる越後平野の生いたち」『土と基礎』第52巻第11号8-10 土質工学会
- 鴨井幸彦・安井 賢・卜部厚志 2016 「新潟及び内野地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』新潟7第8号・第9号 産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 榎根 勇 1985 『越後平野の1000年』新潟日報事業社
- 川上貞雄・遠藤孝司 1983 『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会
- 川上貞雄 1997 『和納館遺跡』岩室村教育委員会
- 川上貞雄 2002 『腰廻遺跡』笹神村教育委員会
- 小林昌二 2010 「古代越後の蒲原・沼垂郡 -新潟市西区の四十石遺跡にふれて-」『新潟史学』63 新潟史学会
- 小山正忠・竹原秀雄 2014 『新版標準土色帖』37版 日本色研事業株式会社
- サ 斎藤幸太郎 1966 『澁湯周辺の風土と生活』巻町双書第12集 巻町役場
- 齊藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産 -猿投窯を中心に-」『古代の土器研究 -律令的土器様式の西・東3-』古代の土器研究会
- 坂井秀弥ほか 1989 『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新潟県教育委員会
- 笹沢正史ほか 2002 『下割遺跡』上越市教育委員会
- 佐藤友子ほか 2012 『小坂居付遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第238集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 嶋田仁志ほか 2004 『野中土手付遺跡』加治川村教育委員会
- 白銀賢瑞 1929 「頸城順礼・潟町村(二)」『高田新聞』9月18日号、高田新聞
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 2000 『新潟県潟東村所蔵の考古資料整理報告 -谷川忠壽美氏収集資料の調査記録-』潟東村教育委員会
- 関 雅之 2016 「上越地方の古代祭祀遺跡について -古墳時代の石製模造品祭祀具の出土例-」『頸城文化』64号 上越郷土研究会
- タ 高野晶文ほか 2019 『石田遺跡Ⅱ』三条市教育委員会
- 高橋健自 1919 『古墳発見石製模造具の研究』帝室博物館学報第1冊 帝室博物館
- 高橋 保 2022 「第Ⅶ章 まとめ 2 遺物」『稲葉遺跡』燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 燕市教育委員会
- 滝沢規朗 1993 「新潟県における古墳時代の祭祀遺物」『古墳時代の祭祀 -祭祀関係の遺跡と遺物-』東日本埋蔵文化財研究会
- 龍田優子ほか 2015 『下新田遺跡第6・8・9次調査』新潟市教育委員会
- 龍田優子 2016 「Ⅱ2(10) 仲歩切遺跡第3次調査(2014179)及び工事立会(2014178)」『新潟市文化財センター年報』第3号 新潟市文化財センター
- 龍田優子 2019 「Ⅱ2(4) 仲歩切遺跡工事立会(2016191・2017175)」『新潟市文化財センター年報』第6号 新潟市文化財センター

- 田畑 弘ほか 2015 『行屋崎遺跡』 田上町教育委員会
- 立木宏明ほか 2019 『赤鎔砂山遺跡第 5 次調査』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・奈良佳子ほか 2017 『細池寺道上遺跡Ⅵ第 44 次調査』 新潟市教育委員会
- 寺崎裕助・高浜信行ほか 2000 「味方排水機場遺跡調査報告書」『味方村誌』 味方村
- 土田孝雄・安藤文一・千家和比古 1978 『笛吹田遺跡』 糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄 1986 『糸魚川市史 資料集第 1 考古編』 糸魚川市
- 東京管区気象台 2015 『気候変化レポート 2015 - 関東甲信・北陸・東海地方 -』 東京管区気象台
- ナ 中川晃子 2024 「第Ⅶ章 総括 第 2 節 古代土器について」『茶院 A 遺跡第 6 次調査』 新潟市教育委員会
- 長沼吉嗣ほか 2006 『花立遺跡・小諏訪前遺跡』 吉田町教育委員会
- 改訂中之口村誌編集委員会 1987 『改訂中之口村誌』 中之口村
- 新潟市 2009 『内野新川』 新新潟歴史双書 4 新潟市
- 新潟市潟環境研究所 2018 『みんなの潟学』 新潟市潟環境研究所
- 新潟市文化財センター 2024 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2023』 新潟市文化財センター
- 新潟地方気象台 2010 『北陸地方の気候変動 2010 ～変わりつつある北陸を知ってください』 新潟地方気象台
- 野崎 保 2023 「越後平野とその周辺の地形・地質概要」『新潟県越後平野中央部地盤解析報告書』 新潟応用地質研究会・平野地盤研究グループ
- ハ 橋本正博 2003 「第Ⅶ章 木製品」『八日市地方遺跡Ⅰ（第 2 分冊遺物報告編）』 石川県小松市教育委員会
- 長谷川晴一 2001 「第 1 章 第 4 節 平野への進出と西川水系の変遷」『吉田町史 資料編 1』 吉田町史編さん委員会
- 長谷川眞志・遠藤恭雄ほか 2024 『寺裏遺跡第 3 次調査』 新潟市教育委員会
- 長谷川眞志 2025 「馬堀上組遺跡」『新潟市遺跡発掘調査速報会 2024』 新潟市文化財センター
- 布施智也ほか 2000 『江添 C 遺跡』 吉田町文化財調査報告書第 5 集 吉田町教育委員会
- 布施智也・平岡和夫 2000 『江添 E 遺跡』 吉田町教育委員会
- 布施智也ほか 2006 『花立遺跡・小諏訪前遺跡』 吉田町教育委員会・株式会社吉田建設
- 細井佳浩・山本友紀・瀧口泰孝・水落雅明ほか 2010 『六反田南遺跡Ⅱ』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 211 集 新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細野高伯・伊比博和ほか 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ第 7・9・11・12・14 次調査』 新潟市教育委員会
- 本間信昭・家田順一郎 1976 『茶院遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 5 集 新潟県教育委員会
- マ 前山精明 2021 「信濃川最下流域における土器の混和材」『千曲川 - 信濃川流域の先史文化』 津南学叢書第 40 号 津南町教育委員会
- 松島悦子 2001 『三角田遺跡』 燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集 燕市教育委員会 吉田町教育委員会
- 松島悦子・田中万里子 2022 『稲葉遺跡』 燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集 燕市教育委員会
- 松島悦子ほか 2010 『五千石遺跡 2 区・4 区西地区』 燕市教育委員会
- 松島悦子 2024 「燕市石港遺跡」『新潟県考古学会第 36 回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 丸山一昭 2019 「第 5 章 古代 第 2 節 土器・木製容器 第 4 項 島崎川・西川流域」『新潟県の考古学Ⅲ』
- 三上喜孝 2013 「古代地域社会における祭祀・儀礼と人名」『日本古代の文字と地方社会』 吉川弘文館
- 水澤幸一ほか 2004 『屋敷遺跡 2 次』 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2009 『天野遺跡 3 次・4 次』 第 16 集 胎内市教育委員会
- 水澤幸一 2015 「蒲原平野の遺跡分布からみた潟と河川」『島根県古代文化センター研究論集』 第 15 集
- 百瀬正恒ほか 1997 『長岡京左京出土木簡一』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 森 行人 2020 『潟のくらし展 ガイドブック』 新潟市歴史博物館
- ヤ 矢田俊文 1991 「中世越後における集落の移動に関する一考察」『新潟史学』 26 新潟史学会
- 矢田俊文 2025 「越後の中世・近世初期集落」『新潟市遺跡発掘調査速報会 2024』 新潟市文化財センター
- 山口栄一 1994 「Ⅱ 考古資料 2 各時代の概観 5 中世」『巻町史資料編 1 考古』 巻町
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 吉田町 2000 『吉田町史資料編 1 考古 古代 中世』 吉田町
- ワ 渡邊朋和・清水 香 2021 「V 1 南区馬場屋敷遺跡下層出土の木製品」『新潟市文化財センター年報』 第 8 号 新潟市文化財センター
- 渡邊ますみほか 2012 『四十石遺跡第 2 次調査』 新潟市教育委員会

第Ⅵ章

【第2節 樹種同定】

- 林 昭三 (1991) 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫 (1995) 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫 (1996) 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫 (1997) 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫 (1998) 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫 (1999) 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編) (2012) 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 444p.
- 春日真実 (2008) 越後における古墳時代～中世の柱材について. 新潟考古, 19, 新潟県考古学会, 43-74.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) (2006) 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫 (1982) 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) (1998) 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.
- 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

【第3節 放射性炭素年代測定】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

【第4節 種実同定】

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
- 佐藤敏也 (1988) 弥生のイネ. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版株式会社, p.97-111.
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19.
- 南木睦彦 (1991) 栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

【第5節 貝類・動物遺体同定】

- 松井 章 (2008) 動物考古学. 312p, 京都大学学術出版会.
- 波部忠重 (1994) 続原色日本貝類図鑑. 182p, 保育社.
- 奥谷喬司 (2006) 日本の貝2 - 二枚貝・陸貝・イカ・タコほか -. 204p, 学研プラス.

【第6節 プラント・オパール分析】

- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, 73-85.
- 近藤鍊三・佐瀬隆, 1986, 植物珪酸体, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-63.
- 杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38 (2), 109-123.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, 189-213.
- 杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -. 考古学と自然科学, 19, 69-84.

【第7節 花粉分析】

- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 4, 187-193.

徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・孢子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

【第8節 珪藻分析】

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

Asai Kazumi&Watanabe Toshiharu,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.

Cholnoky, B. J., 1968, Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewässern. p. 699. Lehre (Cramer) .

千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊. 近未来社, 204p.

Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,1-13, Plates,401-621.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III . Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義 -わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 1, 9-44.

小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9,p.250.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1) : 876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (2) : 596p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (3) : 576p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1991a, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (4) : 437p.

Lange-Bertalot, H., Witowski, A., Metzeltin, D.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts ,1,925p.

別表1 遺構計測表

凡例

- 遺構名 総表の記載順は、区ごと、上層・下層の順とし、遺構種別はSN→SE→SK→SD→SX→Pの順で、その番号順である。SBにまとめられるものは、別途SBとして表にまとめた。あわせて分別図版No.・個別図版No.・写真図版No.を明記し、索引としての役割をもたせてある。
- 時代 遺構の所属する時代は大きく区分に基づいた。遺構の分類及び項目・切り合い関係などは、本文の章の記述に対応する。
- 主軸方位 掘削記録など、必要と思われるもののみ記載した。
- 規模 断面については長軸が長きで、短軸が幅である。規模の()内数値は残存部の値である。
- 形 断面形は残存状況の良いものを示した。断面形はセクション上の形状を基本とした。
- 切り合い関係 分かる範囲で切り合う遺構名を記載した。重複関係の表示は、本遺構を切る遺構を(<)とした(新・古)。

4区 遺構計測表

図版No.	写真図版No.	種別	No.	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)		底面隆標 (m)	形態		覆土の分類	重複関係	遺物有無	遺物図版No.	備考	
								長軸	短軸		平面	断面						
6・8・9	3・5	上層	SN 12	7F・5F	中世	Ⅷ	N-13°-E	(7.00)	0.11	1.32	-	弧状	1	-	○	30・37・38		
6・8・9	3・5	上層	SN 13	7F・5F	中世	Ⅷ	N-13°-E	(17.75)	0.11	1.28	-	弧状	1	-	○	30・37・38		
6・8・9	3・5・6	上層	SN 14	7F・3F・3C・4F	中世	Ⅷ	N-10°-E	20.70	(3.00)	1.20	-	弧状	2	-	○	30・37・38		
6・8	6	上層	水口 29	7F・5F3・4	中世	Ⅷ	N-84°-W	-	0.26	1.27	-	弧状	1	B				
6・8	6	上層	水口 30	7F・4F23・24	中世	Ⅷ	N-74°-W	-	0.24	1.31	-	弧状	1	B				
6・9	6	上層	畦畔 24	6F・10G13・14・18・19	中世	Ⅶ	N-86°-E	(2.40)	2.15	1.26	-	台形状	4	-				
6・8・9	6	上層	畦畔 25	7F・2F25・3F5	中世	Ⅶ	N-89°-E	-	1.30	1.36	-	台形状	3	-				
6・8・9	6	上層	畦畔 26	7F・4F23・24・5F3・4	中世	Ⅶ	N-74°-E	(2.90)	1.52	1.28	-	台形状	4	-				
6・8・9	6・7	上層	畦畔 27	7F・5F3・4・8・13・17・18・22・6F16・17	中世	Ⅶ	N-13°-E	(0.80)	0.75	1.18	-	台形状	2	-				
7・9	7	上層	畦畔 28	8F・5F5・10・5G1・6	中世	Ⅶ	N-64°-W	0.42	1.50	1.16	-	台形状	2	-				
7・10	7・8	上層	SD 8	8F・8F10・15・20・25・9F5	中世	Ⅶ	N-8°-W	-	1.04	0.87	-	弧状	6	B	○	30		
7・10	7	上層	SD 9	8F・6F20・25・7F5・10・15・20	中世	Ⅶ	N-16°-W	-	2.36	0.56	1.44	-	弧状	4	B	○	38	
7・10・23・24	8	上層	SD 11	9F・1F19・20	中世	Ⅶ	N-81°-E	-	0.28	1.12	-	弧状	1	B	○	30		
7・10	8	上層	P 10	8F・9F20	中世	Ⅶ	-	0.56	(0.32)	1.18	円形	半円形	2	B	○			

5区 遺構計測表

図版No.	写真図版No.	種別	No.	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)		底面隆標 (m)	形態		覆土の分類	重複関係	遺物有無	遺物図版No.	備考	
								長軸	短軸		平面	断面						
6・11・13・15	14	上層	SN 156	7F・5D・5E・6E・6F	中世	IX	-	-	(0.31)	1.10	-	-	5	B				
11・12・15	13	上層	畦畔 157	7D・1J・2J	中世か	IX	N-58°-E	-	1.27	(0.35)	1.57	-	1	-	<SD1			
11・12・15	13・14	上層	畦畔 158	7E・2C	中世か	IX	N-15°-W	-	2.12	(0.30)	1.59	-	2	-				
11・13・15	14	上層	畦畔 159	7F・5D	中世か	IX	N-44°-W	-	1.70	(0.37)	1.37	-	5	-	>SD48・151<SD30・47			
11・12・15	13	上層	SD 1	7D・2J5・9・10・7E・2A1・6	中世	IX	N-32°-E	-	1.33	0.57	1.37	-	6	A	>畦畔157			
11・12・15	14	上層	SD 2	7E・2C16・17・22・23・3C3	中世	IX	N-19°-W	-	1.38	0.22	1.47	-	2	A	<畦畔158			
11・12・16	14	上層	SD 3	7E・3F25・3G16~19・21~24	中世	IX	N-79°-E	-	1.24	0.25	1.75	-	2	A		○	30	
11・12・16	15	上層	SD 4	7E・3G23・24・4G3・4	中世	IX	N-3°-E	-	0.67	0.15	1.77	-	2	A		○		
11・12・16	15	上層	SD 11	7E・4H3~5	中世	Ⅷ	N-86°-E	3.26	0.22	0.05	1.88	溝	1	A				
11・12・16	15・16	上層	SD 13	7E・4H5	中世	Ⅷ	N-66°-E	0.84	0.18	0.03	1.86	溝	1	A		○	30	
11・12・16	15・16	上層	SD 15	7E・4H8・13	中世	Ⅷ	N-12°-E	-	0.66	0.22	1.63	-	4	B				
11・12・16	16	上層	SD 17	7E・4I2・7・12	中世	Ⅷ	N-3°-E	-	0.37	0.27	1.72	-	2	B				
11・12・16	16	上層	SD 19	7E・4I9・14・19	中世	IX	N-2°-E	-	0.59	0.10	1.65	-	2	C		○	30	
11・12・16	16	上層	SD 20	7E・4I9・10・14・15・20	中世	IX	N-5°-W	-	0.53	0.10	1.72	-	1	B	>P21	○	36	
11・13・15・16	14・16	上層	SD 30	7F・5D12・13・17・18	中世	IX	N-1°-E	-	1.42	0.42	1.08	-	6	B	>畦畔159, SD47・48	○	38	
11・12・16	17	上層	SD 43	7E・4J12・13・16~18・22・23	中世	IX	N-1°-W	-	2.78	0.44	1.56	-	2	A		○	30	
11・13・15・16	14・16	上層	SD 47	7F・5D13・18	中世	IX	N-14°-E	-	0.71	0.41	1.29	-	1	A	>SD48, <SD30	○		
11・13・15・16	14・16・17	上層	SD 48	7F・5D14・18・19	古墳	IX	N-53°-E	-	0.97	0.25	1.22	-	1	B	<SD30・47・151, 畦畔159	○	31・36	
11・13・15	14・17	上層	SD 151	7F・5D14・19・20	中世	IX	N-16°-W	-	0.79	0.56	0.79	-	2	B	>SD48			
11・12・16	17	上層	SX 5	7E・3D10・15・3E6・11	中世	IX	N-6°-W	-	1.93	0.15	1.62	-	1	A				
12		上層	P 6	7E・3E12	中世	IX	-	0.63	0.55	0.12	1.65	円形	2	A				
11・12・16	17	上層	P 7	7E・3E13	中世	IX	-	(0.47)	0.18	1.70	円形	半円形	3	A				
12		上層	P 8	7E・3E15・3F11	中世	IX	-	0.26	0.24	0.13	1.73	円形	半円形	2	A'			
12		上層	P 9	7E・3G16・21	中世	IX	-	(0.38)	0.11	1.86	(円形)	半円形	3	A'				

図版No.	写真図版No.	類別	No.	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)	底面隆起 (cm)	形態	堆積状況	覆土の分類	重視関係	遺物有無	遺物図版No.	備考		
		上層 P	下層 P			中世	長軸	短軸	深度	平面	断面	覆土						
12		上層 P 12	7E-4H10		中世	Ⅷ	0.54	0.42	0.09	1.84	楕円形	断面	レンズ状	2	C			
11・12・16		上層 P 16	7E-4I6		中世	Ⅷ	0.28	0.26	0.23	1.65	V字状	柱状	4	A		○ 31		
11・12・16		上層 P 21	7E-4I9・10・14・15		中世	Ⅷ	(0.95)	0.68	0.28	1.55	楕円形	強状	レンズ状	3	C	<SD20		
11・13・16		上層 P 23	7E-5B9		中世	Ⅸ	0.38	0.24	0.21	1.40	不整形	階段状	斜位	3	A		○	
13		上層 P 25	7E-5B10		中世	Ⅸ	0.28	0.25	0.17	1.36	円形	U字状	柱状	2	A			
13		上層 P 26	7E-5C6・7		中世	Ⅸ	0.57	0.40	0.28	1.25	楕円形	階段状	単層	1	A			
11・13・16		上層 P 31	7E-5B5		中世	Ⅸ	0.24	0.24	0.10	1.47	円形	強状	レンズ状	3	A		○	
12		上層 P 33	7E-5C7		中世	Ⅸ	0.54	0.33	0.39	1.14	不整形	階段状	柱状	5	A			
12		上層 P 34	7E-4J20		中世	Ⅸ	0.37	0.35	0.09	1.51	円形	強状	レンズ状	2	A			
12		上層 P 36	7E-4A21		中世	Ⅸ	0.64	0.64	0.13	1.51	楕円形	強状	レンズ状	2	B			
11・13・16		上層 P 44	7E-5B4		中世	Ⅸ	0.35	0.32	0.22	1.31	円形	不整形	柱状	3	A			
12		上層 P 51	7E-3G21		中世	Ⅸ	0.21	0.20	0.18	1.79	円形	U字状	単層	1	B			
12		上層 P 52	7E-3G22		中世	Ⅸ	0.14	0.10	0.09	1.83	不整形	U字状	単層	1	A			
11・12・16		上層 P 63	7E-3H21		中世	Ⅸ	(0.57)	(0.54)	0.58	1.22	円形	U字状	柱状	4	B		○ 38	
12		上層 P 85	7E-4J12		中世	Ⅸ	0.38	0.23	0.13	1.51	楕円形	V字状	単層	1	C		○	
13		上層 P 124	7E-5C8		中世	Ⅸ	0.21	0.18	0.08	1.37	円形	強状	単層	1	C		○	
17・18・20		下層 SK 42	7E-4J18・19・23・24		古代	Ⅷ	N-16°W	1.21	0.82	0.10	1.63	楕円形	強状	レンズ状	2	A		○
17・18・20	24・25	下層 SK 114	7E-4J13		古代	Ⅸ	N-48°W	1.09	0.78	0.14	1.53	楕円形	強状	レンズ状	2	B		○
11・17・18・20	25	下層 SD 10	7E-3G25, 4G5, 4H1		古代	Ⅷ	N-19°W	—	0.68	0.11	1.71	—	強状	レンズ状	3	C	<P99	○
17・18・20	25	下層 SD 14	7E-4H10, 4I6		古代	Ⅷ	N-74°W	1.89	0.82	0.11	1.81	溝	強状	単層	1	B		○
17・18・20	25・26	下層 SD 39	7E-4J24・25, 7E-4A16・21		古代	Ⅸ	N-73°E	—	0.36	0.09	1.53	—	強状	単層	1	C		○
17・18・20	26	下層 SD 49	7E-3E13・14		古代	Ⅸ	N-77°W	3.24	0.98	0.20	1.52	溝	強状	レンズ状	2	C		○
17・18・20	26	下層 SD 55	7E-3G23~25		古代	Ⅸ	N-84°E	2.81	0.34	0.07	1.65	溝	強状	単層	1	C		○
17・18・20	26	下層 SD 62	7E-4H2~5・7~9		古代	Ⅸ	N-88°E	—	0.65	0.14	1.69	—	強状	単層	1	C	>SD65 <P74	○ 31
17・18・20	26	下層 SD 65	7E-4H7~9		古代	Ⅸ	N-83°E	—	0.38	0.10	1.72	—	強状	単層	1	C	<SD62	○
17・18・20	27	下層 SD 66	7E-4H9		古代	Ⅸ	N-6°E	—	0.53	0.12	1.79	—	強状	単層	1	C	>SX106	○
17・18・21	27	下層 SD 75	7E-3H21, 4H1・6		古代	Ⅸ	N-4°W	—	0.43	0.25	1.63	—	強状	単層	1	C		○
17・18・21	27	下層 SD 84	7E-4I8		古代	Ⅸ	N-19°W	—	0.45	0.14	1.65	—	強状	単層	2	C		○
18・21	27・28	下層 SD 94	7E-4I12~15		古代	Ⅸ	N-82°E	—	0.42	0.14	1.54	—	強状	レンズ状	1	C	>P118 <SD100	○ 31
17・18・21	27	下層 SD 95	7E-4G5		古代	Ⅸ	N-4°W	—	0.36	0.22	1.67	—	強状	単層	1	C		○
17・19・21	28	下層 SD 100	7E-4I8~10・13~15, 4H11・12		古代	Ⅸ	N-84°W (8.62)	0.63	0.19	1.51	溝	強状	レンズ状	2	C	>SB150・P82・130, SB160・P113, SD94, P118・144	○ 31	
17・18・21	28	下層 SD 103	7E-4G5, 4H1		古代	Ⅸ	N-76°E	—	0.31	0.09	1.66	—	強状	レンズ状	2	C		○
17・18・21	28	下層 SD 107	7E-4I23~25		古代	Ⅸ	N-89°E	—	0.23	0.09	1.59	—	強状	単層	1	C	>SD108	○
17・18・21	28	下層 SD 108	7E-4I18・23・24		古代	Ⅸ	N-70°W	—	0.36	0.08	1.58	—	強状	単層	1	C	<SD107	○
17・18・21	28	下層 SD 135	7E-4I20, 4J16		古代	Ⅸ	N-82°E	—	0.29	0.14	1.57	—	強状	レンズ状	2	C		○
17・18・21	28・29	下層 SD 137	7E-5C6~8・11		古代	Ⅸ	N-69°E	—	0.49	0.09	1.37	—	強状	レンズ状	2	C		○
17・18・21	29	下層 SD 146	7E-4I20, 4J16		古代	Ⅸ	N-83°E	—	0.21	0.06	1.62	—	強状	単層	1	C		○
17・18・21	29	下層 SD 148	7E-4J19・20		古代	Ⅸ	N-77°E	—	0.27	0.13	1.46	—	半円状	レンズ状	2	C		○
17・18・21	29	下層 SX 106	7E-4H8・9		古代	Ⅸ	—	—	0.07	1.78	不整形	強状	単層	1	C		○	
18		下層 P 18	7E-4I12		古代	Ⅷ	—	0.34	0.32	0.36	1.53	楕円形	漏斗状	柱状	2	C		
18		下層 P 50	7E-3G22		古代	Ⅸ	—	0.26	0.23	0.18	1.78	円形	箱状	柱状	2	B		
18		下層 P 53	7E-3H22		古代	Ⅸ	—	0.34	0.32	0.13	1.74	円形	強状	単層	1	C		
18		下層 P 54	7E-4H2		古代	Ⅸ	—	0.27	0.22	0.08	1.75	楕円形	強状	単層	1	C		
18		下層 P 56	7E-3H22, 4H2		古代	Ⅸ	—	0.32	0.31	0.11	1.76	円形	強状	単層	1	C		
17・18・21	30	下層 P 57	7E-3H23, 4H3		古代	Ⅸ	—	0.38	0.29	0.10	1.78	楕円形	強状	単層	1	C		○
18		下層 P 58	7E-4H3		古代	Ⅸ	—	0.43	0.36	0.14	1.75	楕円形	強状	斜位	2	C		
18		下層 P 59	7E-4H5		古代	Ⅸ	—	0.43	(0.42)	0.10	1.75	楕円形	強状	単層	1	C		
17・18・21	30	下層 P 60	7E-4H5		古代	Ⅸ	—	0.30	0.29	0.25	1.54	円形	U字状	柱状	3	C		
18		下層 P 61	7E-4H9		古代	Ⅸ	—	0.45	0.40	0.09	1.78	円形	強状	単層	1	C		
17・18・20	26	下層 P 64	7E-4H8		古代	Ⅸ	—	0.38	(0.25)	0.11	1.70	楕円形	強状	単層	1	C		
17・18・21	30	下層 P 67	7E-3G23		古代	Ⅸ	—	0.33	0.30	0.14	1.76	円形	強状	レンズ状	2	B		
18		下層 P 68	7E-4H3		古代	Ⅸ	—	0.44	0.41	0.08	1.77	円形	強状	単層	1	C		
18		下層 P 69	7E-4H5・10		古代	Ⅸ	—	0.32	0.32	0.10	1.72	円形	台形状	単層	1	C		
18		下層 P 71	7E-4H11		古代	Ⅸ	—	0.18	0.18	0.09	1.71	円形	半円状	単層	1	C		○

図版No.	写真図版No.	種別	No.	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)	底面隆起 (cm)	形態	堆積状況	覆土の分類	重複関係	遺物有無	遺物図版No.	備考	
								長軸	短軸	深度	平面	断面					
17・18・21	30	下層 P	72	7E-411	古代	IX	-	0.38	(0.37)	0.17	1.61	円形	円形	レンズ状	2	C	
18		下層 P	73	7E-4111	古代	-	-	0.25	0.25	0.18	1.62	円形	U字状	単層	1	C	○
17・18・20	26	下層 P	74	7E-4H4・9	古代	IX	-	0.43	0.36	0.12	1.74	円形	弧状	単層	1	C	>SD62
18		下層 P	76	7E-4114	古代	IX	-	0.29	0.23	0.15	1.56	楕円形	台形状	単層	1	C	
18		下層 P	78	7E-4J11	古代	IX	-	0.22	0.21	0.10	1.57	円形	V字状	単層	1	C	
17・18・21	31	下層 P	79	7E-4J11	古代	IX	-	0.43	(0.38)	0.38	1.32	円形	U字状	柱状	4	C	○
17・18・22	31	下層 P	80	7E-4J16	古代	IX	-	0.56	0.42	0.14	1.57	楕円形	弧状	レンズ状	3	C	>SB150-P88
18		下層 P	86	7E-4112・13	古代	IX	-	0.39	0.34	0.09	1.71	円形	弧状	レンズ状	2	C	
18		下層 P	87	7E-4J12	古代	IX	-	0.45	0.34	0.14	1.54	楕円形	弧状	単層	1	C	
18		下層 P	89	7E-418	古代	IX	-	0.44	0.31	0.12	1.64	楕円形	弧状	レンズ状	2	C	○
18		下層 P	90	7E-418	古代	IX	-	0.38	0.30	0.11	1.66	楕円形	弧状	レンズ状	2	C	○
17・18・22	31	下層 P	92	7E-419・10	古代	IX	-	0.31	0.29	0.15	1.61	円形	U字状	柱状	2	C	○
17・18・22	31	下層 P	96	7E-4120・4J16	古代	IX	-	0.41	0.37	0.46	1.24	円形	U字状	柱状	3	C	○
18・20		下層 P	99	7E-4J13	古代	IX	-	0.37	0.34	0.15	1.43	円形	弧状	レンズ状	2	B	>SK114
17・18		下層 P	101	7E-4J18	古代	IX	-	0.27	0.25	0.09	1.62	円形	弧状	単層	1	C	
17・18		下層 P	102	7E-4J18	古代	IX	-	0.38	0.37	0.11	1.58	円形	弧状	単層	1	C	
18		下層 P	104	7E-419	古代	IX	-	0.44	0.39	0.13	1.66	円形	弧状	レンズ状	2	C	○
17・18・22	32	下層 P	105	7E-4J19	古代	IX	-	0.55	0.49	0.13	1.48	円形	弧状	レンズ状	2	C	
18		下層 P	109	7E-4A16・17	古代	IX	-	0.44	0.40	0.23	1.34	円形	U字状	レンズ状	2	C	○
18		下層 P	110	7E-4H7	古代	IX	-	0.16	0.14	0.07	1.73	円形	弧状	単層	1	C	○
17・18・22	32	下層 P	111	7E-419	古代	IX	-	0.75	(0.38)	0.44	1.35	不整形	階段状	柱状	3	C	○
18・22	32	下層 P	112	7E-413	古代	IX	-	(0.38)	0.33	0.22	1.58	円形	U字状	柱状	3	C	
18		下層 P	115	7E-4A24	古代	IX	-	0.32	(0.30)	0.15	1.37	円形	半円状	単層	1	C	
17・18・22	32・33	下層 P	116	7E-4J13・18	古代	IX	-	(0.38)	(0.26)	0.23	1.39	楕円形	U字状	柱状	2	C	○
17・18・22	33	下層 P	117	7E-5B9	古代	IX	-	0.49	(0.40)	0.18	1.29	楕円形	弧状	レンズ状	2	C	○
17・18・21	27	下層 P	118	7E-4115	古代	IX	-	(0.19)	0.18	0.16	1.40	円形	U字状	単層	1	C	<-SD94・100
17・18・22	33	下層 P	119	7E-5B2	古代	IX	-	0.70	0.52	0.18	1.32	楕円形	弧状	レンズ状	2	C	○
17・18・22	33	下層 P	120	7E-5A5	古代	IX	-	0.29	(0.27)	0.14	1.39	円形	弧状	レンズ状	2	C	
17・18・22	33・34	下層 P	123	7E-5B3	古代	IX	-	0.39	(0.36)	0.28	1.19	円形	U字状	柱状	2	C	○
18		下層 P	125	7E-4114	古代	IX	-	(0.30)	0.26	0.21	1.54	円形	U字状	単層	1	C	○
18		下層 P	126	7E-4113・14	古代	IX	-	(0.16)	0.15	0.10	1.63	円形	U字状	単層	1	C	
18		下層 P	127	7E-5B3	古代	IX	-	(0.17)	(0.17)	0.12	1.37	円形	弧状	柱状	2	C	
18		下層 P	128	7E-4115	古代	IX	-	0.22	0.18	0.06	1.65	円形	弧状	単層	1	C	
18		下層 P	129	7E-4114	古代	IX	-	0.40	0.35	0.24	1.38	円形	U字状	単層	1	C	○
18		下層 P	131	7E-5A5	古代	IX	-	0.38	(0.33)	0.06	1.66	円形	弧状	レンズ状	2	C	
17・18・22	34	下層 P	132	7E-4J14・19	古代	IX	-	0.54	0.49	0.13	1.50	円形	弧状	レンズ状	2	C	
17・18・22	34	下層 P	133	7E-4J18	古代	IX	-	0.45	(0.36)	0.08	1.62	楕円形	弧状	レンズ状	2	C	
17・18・22	34	下層 P	136	7E-4J13・14	古代	IX	-	0.48	0.39	0.11	1.51	楕円形	弧状	レンズ状	2	C	○
18		下層 P	138	7E-5C7・12	古代	IX	-	0.20	(0.17)	0.05	1.40	円形	弧状	単層	1	C	
18		下層 P	139	7E-5C8	古代	IX	-	0.30	(0.30)	0.24	1.19	円形	U字状	単層	1	C	
17・18・22	34	下層 P	140	7E-5C10・15	古代	IX	-	0.54	(0.52)	0.23	1.16	円形	箱状	レンズ状	2	C	○
18		下層 P	141	7E-4J18	古代	IX	-	0.48	(0.35)	0.09	1.62	楕円形	弧状	単層	1	C	
17・18・22	35	下層 P	142	7E-4115	古代	IX	-	0.19	(0.19)	0.17	1.53	円形	U字状	レンズ状	2	C	
17・18・22	35	下層 P	143	7E-4115・4J11	古代	IX	-	0.32	0.19	0.07	1.62	不整形	弧状	レンズ状	2	C	
17・18・22	35	下層 P	144	7E-419・14	古代	IX	-	(0.33)	-	0.37	1.26	(円形)	U字状	斜位	3	C	<-SD100
18		下層 P	145	7E-5C2・7	古代	IX	-	0.41	(0.35)	0.19	1.29	円形	弧状	単層	1	C	
17・18・22	35	下層 P	147	7E-417	古代	IX	-	0.83	(0.56)	0.19	1.59	楕円形	弧状	単層	1	C	
17・18・22	35	下層 P	149	7E-4114	古代	IX	-	0.26	(0.22)	0.20	1.51	円形	U字状	レンズ状	2	C	○
17~19	22	下層 P	153	7E-4110	古代	IX	-	(0.36)	0.36	0.39	1.53	円形	U字状	柱状	2	C	
18		下層 P	155	7E-419	古代	IX	-	0.22	0.21	0.26	1.27	円形	箱状	単層	1	C	

6 区 遺構計列表

図版No.	写真図版No.	種別 No.	グリッド	時代	確認	主軸方位	規模 (m)		底面深縁 (m)	形態		堆積状況	覆土の分類	重積関係	遺物有無	遺物図版No.	備考
							長軸	短軸	深度	平面	断面						
23・26	上層 SE 5	8E-10J2・3・7・8		中世	Ⅷ	—	2.26	0.96	0.95	—	階段状	レンズ状	8 A		○		
23・25	上層 SE 7	8E-10I5, 10J1		中世	Ⅷ	—	1.17	(0.52)	0.82	1.11	方形	U字状	7 A	>P12	○		
23・25	上層 SE 19	8E-9I22		中世	Ⅷ	N89°W	(0.78)	0.44	0.83	1.14	楕円形	漏斗状 レンズ・ 水平	3 A		○		
23・25	上層 SK 1	8F-10A11・12		中世	Ⅶ	N75°W	0.98	(0.32)	0.46	1.30	楕円形	レンズ状	4 A		○		
23・25	上層 SK 34	8E-9G15, 9H11		中世	Ⅶ	N66°E	(0.94)	(0.93)	0.41	1.57	楕円形	レンズ状	3 A		○		
23・24・26	上層 SK 44	8E-7A24, 8A4		中世	Ⅶ	N78°W	(0.68)	0.60	0.12	1.27	円形	単層	1 A				
23・24・26	上層 SK 47	9F-1E6・7・11		中世	地業1	N65°E	(0.60)	0.66	0.36	1.55	楕円形	レンズ状	4 A		○	33	
23・24・26	上層 SK 80	8F-10I3		中世	Ⅶ	N13°E	(0.53)	(0.70)	0.32	1.56	方形	漏斗状	2 C		○		
23・24・26	上層 SD 3	8F-10B16・17		中世	Ⅶ	N38°E	—	1.30	0.21	1.53	—	単層	1		○		
23・24・26	上層 SD 6	8E-10I1・2・6		中世	Ⅶ	N28°E	—	0.92	0.55	1.36	—	半円状	5 A		○	40	
23・24・26	上層 SD 8	8F-10B18・19		古代	Ⅶ	N40°E	—	1.30	0.19	1.58	—	単層	1 C		○		
23・24・26	上層 SD 9	8E-10J9		中世	Ⅶ	N19°E	—	0.92	0.25	1.48	—	単層	1 A				
23・24・26	上層 SD 16	8E-10J8・9		中世	Ⅶ	N46°E	—	0.52	0.28	1.47	—	単層	1 A				
23・24・26	上層 SD 23	8E-9I23		中世	Ⅶ	N4°W	—	0.26	0.22	1.76	—	レンズ状	2 A	<P24			
23・24・26	上層 SD 26	8E-10J3・8		中世	Ⅶ	N19°E	—	0.52	0.36	1.42	—	レンズ状	3 A		○		
23・24・26	上層 SD 36	8E-10I5		中世	Ⅶ	N15°E	—	0.78	0.30	1.58	—	単層	1 A	<P43	○		
23・24・26	上層 SD 41	8E-9F3・4・8・9		中世	Ⅶ	N2°E	—	1.28	0.16	1.68	—	レンズ状	2 A				
23・24・26	上層 SD 42	8E-9F3・8		中世	Ⅶ	N5°E	—	0.56	0.12	1.70	—	単層	1 A				
23・24・26	上層 SD 45	8E-8E23・24, 9E3・4		中世	Ⅶ	N8°E	—	1.40	0.30	1.21	—	台形状	2 A				
23・24・26	上層 SD 46	8D-7J18・19		中世	Ⅶ	N13°E	—	2.50	0.15	1.48	—	単層	1 A				
23・24・26	上層 SD 50	9F-1E13・14・19		中世	地業1	N4°E	—	2.44	0.22	1.45	—	単層	1 A		○		
23・24・26	上層 SD 51	8E-8E21・22		中世	地業2	N84°E	—	0.28	0.09	1.29	—	単層	1 A				
7・23・24・26	上層 SD 53	8E-7F・8F・9F・10F, 9F-1F		中世	地業2	N1°W	—	(8.72)	0.71	0.83	—	強状	6 A		○	33・36・37・ 40・41	
23・24	上層 SD 64	9F-1D3・8		中世	地業2	N2°E	—	0.28	0.40	1.20	—	強状	1		○		
23・24・26	上層 SD 87	8F-10C22・23		中世	Ⅶ	N33°E	—	0.44	0.15	1.49	—	強状	1	<P86	○		
23・24・26	上層 SX 2	8F-10A14・15・20, 10B11・16		中世	Ⅶ	N0°S	(0.61)	2.48	1.15	—	—	レンズ状	3 A		○	34・37・41	
23・24・27	上層 P 4	8F-10B25		中世	Ⅶ	—	0.56	(0.52)	0.45	1.13	楕円形	階段状	2 A		○		
23・24・27	上層 P 10	8F-10C21		中世	Ⅶ	—	1.02	(0.35)	0.50	1.12	—	半円状	3 A		○	37	
23・24・27	上層 P 11	8E-10J9・10		中世	Ⅶ	—	0.88	(0.40)	0.51	1.44	—	強状	1 B				
23・24	上層 P 12	8E-10I5		中世	Ⅶ	—	(0.34)	(0.28)	0.05	1.79	—	強状	1 A	<SE7			
23・24・27	上層 P 13	8E-10I4・5		中世	Ⅶ	—	0.46	0.40	0.21	1.63	階段状	単層	1 A	>P14			
23・24・27	上層 P 14	8E-10I5		中世	Ⅶ	—	0.22	(0.20)	0.08	1.77	円形	強状	2 A	<P13	○		
23・24	上層 P 15	8E-10I4		中世	Ⅶ	—	0.26	(0.12)	0.21	1.62	楕円形	単層	1 A				
23・24・27	上層 P 17	8E-9I22・23		中世	Ⅶ	—	0.44	0.40	0.35	1.49	円形	U字状	2 A		○	34・37	
23・24	上層 P 18	8E-9I22		中世	Ⅶ	—	(0.44)	0.20	0.06	1.79	円形	強状	1 A		○		
23・24・27	上層 P 20	8E-9H25		中世	Ⅶ	—	0.38	0.36	0.41	1.55	円形	V字状	単層	1 A	○		
23・24	上層 P 21	8E-9H25		中世	Ⅶ	—	0.44	0.38	0.32	1.65	円形	U字状	単層	1 A			
23・24・27	上層 P 22	8E-9H20・25		中世	Ⅶ	—	0.56	0.50	0.29	1.64	円形	U字状	単層	1 A			
23・24・26	上層 P 24	8E-9I23		中世	Ⅶ	—	—	—	0.06	1.90	—	強状	単層	1 A	>SD23		
23・24	上層 P 25	8E-9I23・24, 10I3・4		中世	Ⅶ	—	0.34	0.18	0.16	1.69	楕円形	強状	単層	1			
23・24・27	上層 P 27	8E-9H25		中世	Ⅶ	—	0.30	0.28	0.67	1.44	円形	U字状	水平	2 A			
23・24・27	上層 P 28	8E-9H24		中世	Ⅶ	—	0.24	0.24	0.44	1.66	円形	U字状	単層	1 A			
23・24・27	上層 P 29	8E-9H24		中世	Ⅶ	—	0.53	0.44	0.57	1.72	円形	階段状	2 A				
23・24・27	上層 P 30	8E-9H18		中世	Ⅶ	—	0.30	(0.14)	0.32	1.54	円形	階段状	柱状	2 B			
23・24・27	上層 P 31	8E-9H18		中世	Ⅶ	—	0.38	0.27	0.28	1.70	円形	単層	1 A				
23・24	上層 P 32	8E-9H17		中世	Ⅶ	—	0.30	0.26	0.10	1.61	円形	強状	単層	1 A			
23・24	上層 P 33	8E-9I23		中世	Ⅶ	—	0.26	0.18	0.05	1.79	楕円形	強状	単層	1 A			
23・24・27	上層 P 35	8E-9G14		中世	Ⅶ	—	(0.30)	0.45	0.11	1.89	楕円形	強状	単層	1 A			
23・24	上層 P 37	8E-9H16		中世	Ⅶ	—	0.20	0.18	0.09	1.74	円形	強状	単層	1 A			
23・24	上層 P 38	8E-9F10		中世	Ⅶ	—	0.20	0.18	0.10	1.70	円形	階段状	単層	1 A			
23・24	上層 P 39	8E-9F10		中世	Ⅶ	—	0.24	0.20	0.60	1.70	円形	強状	単層	1			

図版No.	写真図版No.	種別	No.	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)		底面隆起 (m)	形態		堆積状況	覆土の分類	重視関係	遺物有無	遺物図版No.	備考
								長軸	短軸		平面	断面						
23・24		上層 P	40	8E-9F9	中世	Ⅶ	-	0.26	0.21	0.07	1.71	円形	断面	1	A'			
23・24・26	42	上層 P	43	8E-10I5	中世	Ⅶ	-	(0.24)	(0.11)	0.29	1.63	円形	階段状	2	A'	>SD36		
23・24	45	上層 P	49	9F-1E11	中世	地業2	-	0.28	0.24	0.33	1.30	円形	階段状	4	A'			
23・24		上層 P	52	9F-1F16	中世	地業2	-	(0.88)	(0.40)	0.10	1.48	方形	階段状	1	A'			
23・24		上層 P	54	9F-1F16	中世	地業2	-	0.22	(0.18)	0.07	1.45	円形	階段状	1	A			
23・24		上層 P	55	9F-1E11	中世	地業2	-	0.28	0.22	0.12	1.53	楕円形	階段状	1	A'			
23・24		上層 P	56	9F-1E6・11	中世	Ⅶ	-	0.25	0.23	0.44	1.19	円形	U字状	1	-			
23・24		上層 P	57	9F-1E6・11	中世	地業2	-	0.22	0.20	0.88	1.47	円形	階段状	1				
23・24		上層 P	58	9F-1D10	中世	地業2	-	0.27	0.26	0.14	1.42	円形	階段状	1	B			
23・24・27	45・46	上層 P	59	9F-1D10	中世	地業2	-	0.26	0.26	0.24	1.36	円形	U字状	2	A			
23・24		上層 P	61	9F-1D9	中世	地業2	-	0.30	(0.10)	0.23	1.48	円形	U字状	2	A'			
23・24		上層 P	62	9F-1D9	中世	地業2	-	0.24	0.23	0.12	1.43	円形	-	-				
23・24		上層 P	69	9F-1D1	中世	地業2	-	0.32	0.30	0.13	1.48	円形	階段状	1	B			
23・24		上層 P	70	9F-1D1	中世	地業2	-	0.28	0.28	0.15	1.42	円形	半円形	1				
23・24		上層 P	73	9F-1D9	中世	地業2	-	0.28	0.28	0.15	1.42	円形	U字状	2	A'			
23・24		上層 P	76	8E-9H25	中世	Ⅶ	-	0.19	-	0.55	1.58	円形	階段状	1				
23・24		上層 P	77	8E-10I9・10	中世	Ⅶ	-	0.48	(0.10)	0.10	1.52	円形	階段状	1	C			
23・24		上層 P	78	9F-1D7	中世	地業2	-	0.28	0.25	0.23	1.32	円形	半円形	1	A			
23・24		上層 P	81	9F-1D7	中世	地業2	-	0.25	0.08	0.17	1.33	円形	階段状	1	A'			
23・24・27	46	上層 P	82	8F-10B25、10C21	中世	地業2	-	0.64	(0.40)	0.18	1.47	円形	階段状	3	B	>P83		
23・24・27	46	上層 P	83	8F-10B25	中世	Ⅶ	-	0.43	(0.33)	0.36	1.24	円形	漏斗状	2	B	<P82		
23・24・27	46	上層 P	84	9F-1D8	中世	Ⅶ	-	0.32	0.30	0.18	1.33	円形	階段状	2	A'			
23・24・27	46	上層 P	85	8F-10C22	中世	Ⅶ	-	0.39	0.35	0.25	1.32	円形	階段状	2	A'			
23・24・26	43	上層 P	86	8F-10C23、9F-1C3	中世	Ⅶ	-	(0.20)	0.60	0.28	1.42	円形	台形状	1	A'	>SD87		
23・24・27	46	上層 P	88	9F-1D7	中世	Ⅶ	-	0.24	(0.15)	0.16	1.25	方形	U字状	1	B	<SB95-P68	41	
26		上層 P	98	9F-1E14	中世	地業2	-	-	-	-	-	-	-	1				
28・29	47・48	下層 SN	94	9F-1E、1F	古代	Ⅶ	N-0°-S	-	(9.48)	0.12	1.32	-	-	1	B	<P90		36
28		下層 SK	74	9F-1C5	古代	Ⅶ	N-74°-W	0.86	(0.18)	0.08	1.49	楕円形	階段状	1	B			
28・29	47	下層 SK	91	8F-10C23、9F-1C3	古代	Ⅶ	N-72°-W	(0.32)	0.80	0.37	1.17	-	箱形	3	A'			
28		下層 SK	92	9F-1C5	古代	Ⅶ	N-5°-E	(0.30)	0.50	0.22	1.12	楕円形	階段状	1	-	>SB96-P93		
28		下層 SD	66	9F-1D2・7	古代	地業2	N-3°-W	-	0.62	0.15	1.49	-	階段状	2	A	<P67		
28・29	47	下層 SD	75	9F-1D2・7~10・15、1E11	古代	地業2	N-72°-W	-	0.65	0.09	1.49	-	階段状	1	C			36
28・29		下層 SD	89	9F-1E12	古代	Ⅶ	N-0°-S	-	1.00	0.30	1.36	-	階段状	2	C			
28		下層 P	67	9F-1D2	古代	地業2	-	0.44	(0.20)	0.12	1.53	円形	階段状	1	A	>SD66		
28・29	48	下層 P	71	9F-1D1	古代	地業2	-	0.39	0.36	0.14	1.48	円形	階段状	2	C			
28・29	48	下層 P	72	9F-1C5	古代	地業2	-	0.59	(0.37)	0.33	1.27	円形	階段状	2	B			
28・29	48	下層 P	90	9F-1E13・14	古代	SN94	-	-	-	-	-	-	-	1	B	>SN94		42
28・29	48	下層 P	97	8F-10A15・20	古代	Ⅶ	-	0.85	(0.35)	0.18	1.27	円形	階段状	1	B	>SN94		42

5 区上層掘立柱建物 (SB) 遺構計測表

図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)	
			N-76°-W						3×1間		8.68			
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.	
11・13・14	10・11	SB45	P22	7F-5B8	楕円形	漏斗状	0.53	0.52	1.05				○	
11・13・14	10・11		P24	7F-5B5	楕円形	階段状	0.51	0.67	0.89				○	
11・13・14	10・11		P27	7F-5C12	楕円形	漏斗状	0.47	0.52	1.00				○	
11・13・14	10・11		P28	7F-5C1・6	円形	U字状	(0.37)	0.64	0.93					
11・13・14	10・12		P37	7F-5C7・8	円形	U字状	(0.46)	0.63	0.91	○	0.90	○	○	38
11・13・14	10・12		P40	7F-5B3・4	円形	U字状	0.32	0.43	1.09				○	
図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)	
			N-64°-W						2×1間		3.60			
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.	
11・13・14	10・12	SB46	P29	7F-5B5・10	円形	漏斗状	0.21	0.38	1.18					
11・13・14	10・12・13		P32	7F-5B4	円形	U字状	(0.28)	0.43	1.13	○	1.15		30・38	
11・13・14	10・13		P35	7F-5B8	円形	U字状	(0.21)	0.16	1.41	○	1.41	○	38	
11・13・14	10・13		P38	7F-5B3・8	円形	U字状	0.23	0.12	1.35					
11・13・14	10・12		P41	7F-5B3	方形	U字状	0.26	0.16	1.36					

5 区下層掘立柱建物 (SB) 遺構計測表

図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)	
			N-85°-E						3×1間		6.66			
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.	
17~19	19・21	SB150	P82	7E-4I10・15	楕円形	U字状	0.58	0.48	1.26				○	31
17~19	19・21		P83	7E-4I12・13	円形	U字状	0.38	0.36	1.44				○	
17~19	19		P88	7E-4J16	円形	箱状	0.52	0.24	1.42				○	
17~19	19・21		P91	7E-4J6	円形	U字状	(0.34)	0.38	1.32				○	
17~19	19・21・22		P130	7E-4I8・9・13・14	円形	U字状	(0.47)	0.22	1.32				○	
図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)	
			N-22°-W						2×1間		3.94			
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.	
17~19	20・22	SB160	P81	7E-4I14・19	円形	階段状	0.50	0.44	1.25				○	31
17~19	20・22		P98	7E-4I15、4J11	不整形	階段状	0.69	0.43	1.28				○	
17~19	20・22		P113	7E-4I14	円形	U字状	0.45	0.46	1.28				○	
17~19	20・22		P152	7E-4I10	円形	U字状	0.55	0.48	1.39					
17~19	20・23		P154	7E-4I8・9	円形	U字状	0.29	0.36	1.26					
図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)	
			N-77°-W						2間		5.46			
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.	
17・18・20	20・23	SB161	P121	7F-5C7	不整形	弧状	0.58	0.26	1.23				○	
17・18・20	20・23		P122	7F-5B9・10	不整形	U字状	(0.66)	0.62	0.88	○	0.86	○	38	
17・18・20	20・23		P134	7F-5C6	楕円形	U字状	(0.55)	0.43	1.04	○	-	○	38	

6 区上層掘立柱建物 (SB) 遺構計測表

図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)	
			N-81°-W						3間		6.04			
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.	
23~25	39	SB95	P60	9F-1D9	円形	U字状	0.27	0.32	1.30	○	1.05	○	39	
23~25	39		P63	9F-1D8・9	楕円形	階段状	0.60	0.46	1.18				○	39
23~25	39		P65	9F-1D7・8	方形	U字状	0.40	0.48	1.14	○	0.99	○	33・39	
23~25・27	39		P68	9F-1D6・7	方形	U字状	(0.56)	0.62	1.02	○	1.04	○	40	

6 区下層掘立柱建物 (SB) 遺構計測表

図版No.	写真図版No.	建物No.	方位		建物形式		身舎面積		間数		長軸 (m)		短軸 (m)
			N-74°-W						1間		3.06		
			遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸	最大深度	底面標高 (m)	柱根	柱根下端標高 (m)	遺物有無	遺物図版No.
28・29	47	SB96	P69	9F-1D2	楕円形	U字状	(0.60)	0.93	0.72	○	0.72	○	42
28・29	47		P93	9F-1C5	円形	U字状	0.80	0.56	0.56	○	0.61		41

別表2 土器観察表

凡例

- 1 器種 第V章に記した。
- 2 法重 口径・底径・器高を指す。括弧内の数値は遺存率の低いものである。
- 3 胎土 状態：青=普通、紺=黒曜、胎土内に含まれる黒曜について記した。石=石英粒、長=長石粒、雲=金雲母あるいは黒雲母、チ=チャート、白=白色凝灰岩、角=角閃石、海=海綿骨針。分類：第V・VII章に記した。
- 4 色 調 新製標準土色帳J37版小山・市原1967/2014版の土色名を記した。
- 5 制作痕・手法 特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「糸切り」、「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。回転方向は回転台の回転方向を表す。高台は記載がない限り「胎り付け高台」である。
- 6 残存率 36%別の残存率を示した。

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	種別	器種	分類	法重 (cm)			胎土 状態・含有物	色調 分類	製作痕・手法				備考				
				遺構	グリッド					口径	底径	器高			外面	内面	底面	回転		口径	残存率	付着物	
30	49	1	4区	SN12	7F-5F3	1	須恵器	無台杯	BII	11.6	7.8	3.2	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	6	16	底面が還元不良	
30	49	2	4区	SN12	7F-5F22	1	須恵器	無台杯	BII	11.2	8.0	3.0	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	2	3	高台底部に炭化物	
30	49	3	4区	SN14	7F-3F10	1	須恵器	有台杯	BI	7.4	4.1	(4.1)	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		10	スス		
30	49	55	4区	SD8	8F-9F5	-	須恵器	無台杯	B	8.5	1.6	(1.6)	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		11		底部外面に墨書「上成」	
30	49	56	4区	遺構外	7F-8H8	VII	須恵器	無台杯	BI	12.4	7.8	3.2	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		15	16	底部外面に墨書	
30	49	6	4区	遺構外	7F-7H24	VII	須恵器	無台杯	BII	11.9	8.8	3.4	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		5	6		
30	49	7	4区	遺構外	8F-5F24	VII下	土師器	長甕	A3	21.6	(5.7)		普石・長・角・海	a	灰白	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、ハケメ			6	スス	口縁端部外面に沈線1条	
30	49	8	4区	遺構外	排土		須恵器	杯蓋	AII	13.6	(1.35)		普石・長・白	C	灰	ロクロナデ、ロクロナデ	ロクロナデ			6			
30	49	9	5区 上層	SB46P32	7F-5B4	1	須恵器	無台杯	AII	11.8	7.3	3.6	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		13	15		
30	49	10	5区 上層	SD3	7E-3G18	1	瓦器	火鉢・風筒		36.0	(3.8)		普石・長・白	-	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ			2		頸部に浮線文5条	
30	49	11	5区 上層	SD15	7E-4I13	1	須恵器	無台杯	A	9.4	(1.6)		普石・長・白・海	C	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		4			
30	49	12	5区 上層	SD15	7E-4I13	1	須恵器	有台杯	BI	10.0	(2.65)		普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		6		内面還元不良	
30	49	13	5区 上層	SD15	7E-4I8	1	須恵器	有台杯	A	6.7	(2.0)		普石・長・角	a	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	右	32		外面自然釉、底部縁辺打ち欠き	
30	49	14	5区 上層	SD15	7E-4I13	1	土師器	無台杯		5.2	(1.85)		普石・長	a	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	20		外面剥離あり	
30	49	15	5区 上層	SD15	7E-4I13	1	土師器	無台杯		6.0	(4.8)		普石・長・角・赤	a	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り後縁辺部ナデ	右	20		全体的に摩耗	
30	49	16	5区 上層	SD15	7E-4I6	1	土師器	長甕	B		(6.45)		普石・長・角	a	淡赤橙	タタキメ							
30	49	17	5区 上層	SD19	7E-4I9	1	土師器	長甕	A		(16.2)		普石・長・角	a	橙	ハケメ、ケズリ						スス	スス
30	49	18	5区 下層	SD43	7E-4I17	1	須恵器	有台杯	BI	8.1	(5.85)		普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ロクロナデ後ナデ	ヘラ切り	左	36		外面自然釉、内面に降灰	
31	49	19	5区 上層	SD48	7F-5D19	底面	土師器	高杯		14.8	11.2	10.75	普石・長・雲	-	浅黄	ハケメ、指頭圧痕	ハケメ	(脚部)ハケメ、ナデ		3	29		
31	49	20	5区 上層	SD48	7F-5D18	底面	土師器	高杯		13.4	(8.7)		普石・長・角・海	-	にぶい橙	ハケメ後ナデ	ハケメ、ナデ			5		外面磨耗あり、外面黒斑	
31	49	21	5区 上層	SD48	7F-5D19	-	土師器	杯		11.4	3.8	5.15	普石・長・白・角	-	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		23	36	内外面黒斑		
31	49	22	5区 上層	PD6	7E-4I6	1	土師器	無台杯	BII	12.0	5.5	3.8	普石・長・角・海	a	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	14	32	スス	
31	50	23	5区 下層	SB150P82	7E-4I10	1	須恵器	無台杯	I	13.0	(2.65)		普石・長・白	C	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ			5		還元不良	
31	50	24	5区 下層	SB160P81	7E-4I4	1	須恵器	無台杯	A1	13.6	8.0	3.6	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		4	10	炭化物	
31	50	25	5区 下層	SD62	7E-4H2	1	須恵器	無台杯	BI	12.7	7.8	3.6	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナズリ	左	30	36		
31	50	26	5区 下層	SD94	7E-4H3	1	須恵器	甕		(11.4)			普石・長・白	B	褐灰	タタキメ(格子状)	当て具(同心円)						
31	50	27	5区 下層	SD100	7E-4I8	1	須恵器	無台杯	BI	13.4	9.0	4.15	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	6	21		
31	50	28	5区 下層	SD100	7E-4J11	1	須恵器	無台杯	A	10.4	(2.6)		普石・長・白	A	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		7			
31	50	29	5区 下層	SD100	7E-4I15	1	須恵器	有台杯	BI	9.2	(1.55)		普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		5			
31	50	30	5区 下層	SD100	7E-4J11	1	土師器	長甕	B2	21.0	(5.5)		普石・長・角	a	灰白	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ			5			
31	50	31	5区 下層	SD100	7E-4I15	1	土師器	長甕	B1	21.2	(5.5)		普石・長・角	a	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			4			
31	50	32	5区 下層	遺構外	7E-4J11	VII・VIII	須恵器	杯蓋			(1.65)		普石・長・白	B	灰	ロクロナデ、天井部	ロクロナデ						

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	種別	器種	法量 (cm)		胎土 状態・含有物	分類	色調	製作痕・手法			回転	残存率	付着物		備考	
				遺構	グリッド				口径	底径				器高	外周	内面			底面	外面		内面
31	50	33	5区	遺構外	7E-411	VII	須恵器	杯蓋	AII	14.0	(2.15)	普石・長・白	不明	灰赤	ロクロナデ							
31	50	34	5区	遺構外	7E-413	VII下	須恵器	杯蓋	BI	15.9	(1.8)	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ		6					
31	50	35	5区	遺構外	7E-413	VII	須恵器	杯蓋	BIII	11.7	2.8	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ		36	13	漆カ			
31	50	36	5区	遺構外	7F-5B4	VIII	須恵器	無台杯	AII	8.2	3.05	普石・長	C	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	7	34			
31	50	37	5区	遺構外	7E-413	VII下	須恵器	無台杯	BI	13.2	9.5	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	4	12			
31	50	38	5区	遺構外	7F-5B9	VII下	須恵器	無台杯	A1	12.4	9.8	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	8	11			
31	50	43	5区	遺構外	7F-5B10	VIII	須恵器	無台杯	A1	13.1	8.6	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	1	12		底部外面板状正装	
31	50	40	5区	遺構外	7E-418	VII下	須恵器	無台杯	AII	11.6	6.8	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	4	19		黒色の吹き出しあり	
31	50	41	5区	遺構外	7E-411	VII下・VII	須恵器	無台杯	BII	11.9	8.4	普石・白	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	3	9		外面口縁部自然線、刻書「×」内外面に黒色の吹き出し	
32	50	42	5区	遺構外	7E-419	VII	須恵器	無台杯	BI	13.6	9.0	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	10	31			
32	50	43	5区	遺構外	7E-419	VII下・VII	須恵器	有台杯	BI	12.3	7.9	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	5	20			
32	50	44	5区	遺構外	7F-5B8	VII下	須恵器	有台杯	BI	9.0	(3.1)	粗石・長・白	A	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	3				
32	51	45	5区	遺構外	7E-3D7	VII・VII下	須恵器	長頸瓶		10.45	(13.7)	普石・長・白	C	灰黄褐	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	26			還元不良 肩部に沈線と糸1単位が2本	
32	51	46	5区	遺構外	7F-5B2	VII	須恵器	甕		16.0	(5.0)	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ後ナデ		1				
32	51	47	5区	遺構外	7F-418	VII	土師器	無台杯	AII	12.0	(4.0)	普石・長・角		浅黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ		4			内面に縮麗正装カ	
32	51	48	5区	遺構外	7E-413	VII下	土師器	無台杯		7.0	(1.5)	普石・長・角・海	a	にぶい褐色	ロクロナデ	糸切り、縁辺部ナデ	右	36	スス			
32	51	49	5区	遺構外	7E-418	VII下	土師器	鉢		15.0	(4.3)	粗石・長・角	f	にぶい黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ		5			(口縁部割離)	
32	51	50	5区	遺構外	7E-412	VII	黒色土器	鉢		14.0	(5.6)	普石・長・角		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ミガキ		7			内面黒色処理	
32	51	51	5区	遺構外	7E-411	VII	土師器	長甕	A1	(22.0)	(8.2)	普石・長・角	b	にぶい褐色	ロクロナデ	ロクロナデ、ハケム		4			ロクロナデは口縁のみ	
32	51	52	5区	遺構外	7E-4G5	VII下	土師器	長甕	A1	23.6	(8.5)	普石・長・角	a	灰白	ハケム、ナデ	ハケム、ナデ		7			面割離	
32	51	53	5区	遺構外	7E-4G5	VII下	土師器	長甕	A3	24.2	(5.2)	普石・長・雲・角	a	褐色	ロクロナデ	ロクロナデ、ハケム		2				
32	51	54	5区	遺構外	7E-418	VII	土師器	小甕	A1	13.2	(4.2)	普石・長・角	a	明黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ、ハケム		3			体部外面表面割離	
32	51	55	5区	遺構外	7F-4A16・17	VII・VII下	土師器	小甕	A	9.0	(7.6)	普石・長・角	a	淡赤褐色	ハケム、ケズリ	ハケム		17		スス	外面割離あり	
32	51	56	5区	遺構外	7E-414・19	VII	土師器	小甕	B	9.5	(7.0)	普石・長・角	a	にぶい黄褐色	ハケム	ハケム		21		スス		
33	51	57	5区	遺構外	7F-418	VII	土師器	小甕	B	5.0	(3.1)	普石・長・角	a	にぶい褐色	ロクロナデ	ロクロナデ		36				
33	51	58	5区	遺構外	7F-5A4	VII	土師器	甕		6.25	(2.9)	普石・長・雲・白・角・海	a	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ		21			穿孔は外から内へ13孔	
33	51	59	5区	遺構外	7E-4H5	VII下・VII	土師器	甕		6.8	(6.1)	普石・長・雲・白・角	a	浅黄褐色	ナデ	ナデ					比較による外面の荒れ 穿孔は外から内へ14孔	
33	51	60	5区	遺構外	表探		須恵器	杯蓋	A1	16.0	(2.3)	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ後	ロクロナデ後ナデ		2			内面刻書「×」カ	
33	51	61	5区	遺構外	表探		土師器	角状把手			(7.25)	普石・長・白		にぶい褐色	指頭正装				スス			
33	51	62	6区	上層	SB95-P65	2	須恵器	無台杯	BII	11.8	8.0	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	21	31		底部外面に墨書「宅成」
33	51	63	6区	上層	SK47	3	須恵器	有台杯	BII	6.4	(3.6)	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ		10	スス		
33	51	64	6区	上層	SD53	1	珠洲焼	片口鉢		(32.2)	(7.45)	普石・長・白・海	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		2			12条1単位の刻目 吉岡編年III期	
33	51	65	6区	上層	SD53	1	珠洲焼	甕		(57.6)		普	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					吉岡編年III期	
33	51	66	6区	上層	SD53	2	須恵器	杯蓋	BII	14.0	(0.9)	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		5				
33	51	67	6区	上層	SD53	5	須恵器	無台杯	BII	8.5	2.85	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	左	2	13		内外面に黒色の吹き出し 内面織紙
33	51	68	6区	上層	SD53	2	須恵器	無台杯	B	7.8	(2.0)	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	右	36	スス	漆カ	

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	調査書	出仕位置		層位	種別	器種	分類	法量 (cm)		胎土		色調	製作痕・手法			残存率		付着物		備考
					遺構	グリッド					口径	底径	器高	状態・含有物		分類	外面	内面	口縁	底部	外面	内面	
33	52	69	6区 上層	SD53	9F-1F20	2	須恵器	無台杯	B I	12.0	7.6	2.5	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	6	16	漆カ		内面に黒色の吹き出し	
33	52	70	6区 上層	SD53	8F-8F5	2	須恵器	無台杯	B I	12.1	8.0	2.7	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	6	12				
33	52	71	6区 上層	SD53	9F-1F17	1	須恵器	有台杯	B		8.0	(2.2)	普石・長	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	8				体部外面に墨書	
33	52	72	6区 上層	SD53	8F-9F10	1	須恵器	有台杯	B II		6.6	(3.0)	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	12					
33	52	73	6区 上層	SD53	8F-9F10	2	須恵器	有台杯	B II		4.8	(2.2)	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	11					
33	52	74	6区 上層	SD53	9F-1F20・25	2	須恵器	有台杯	B I		7.4	(1.6)	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	32		漆カ		外面自然釉。底部縁部打ち火き	
33	52	75	6区 上層	SD53	8F-10F10	2	須恵器	横瓶				(3.3)	普石・白	C	灰	平行タタキ後ロクロナデ	当て具(同心円)					底部外面に墨書	
34	52	76	6区 上層	SX2	8F-10A15	1	須恵器	有台杯	B I		7.0	(1.1)	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	3					
34	52	77	6区 上層	P17	8E-9I23	1	土師器	有台杯	B II	12.6		(4.2)	普石・長・角	a	浅黄緑	ロクロナデ	糸切り後ナデ	9					
34	52	78	6区 上層	P17	8E-9I23	1	土師器	無台杯			4.8	(3.2)	普石・長・角	a	にぶい黄緑	ロクロナデ	糸切り後ナデ	36				内面に靑磁正痕	
34	52	79	6区 上層	P17	8E-9I23	1	土師器	無台杯			4.8	(2.5)	普石・長・角	f	浅黄緑	ロクロナデ	回転糸切り後縁部ナデ	18					
34	52	80	6区 上層	地聚1	9F-1D6		白磁	皿			6.4		糊	-	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後高台ケス	5					
34	52	81	6区 上層	地聚1	9F-1D8		灰釉陶器	椀			7.0	(2.05)	普石・長・白	-	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ケスリ	13				体部外面と高台周込中心に釉	
34	52	82	6区 上層	地聚1	9F-1D15		須恵器	杯蓋				(2.45)	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ							
34	52	83	6区 上層	地聚1	9F-1D9		須恵器	杯蓋	B III		12.0	(1.4)	普石・長	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	11				外面自然釉。打ち火き	
34	52	84	6区 上層	地聚1	9F-1D1		須恵器	杯蓋	A I		16.0	(2.3)	普石・長・白	B	褐灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	4					
34	52	85	6区 上層	地聚1	9F-1D1		須恵器	盃蓋		11.1		(2.75)	普石・長・白	C	褐灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	8				内外面自然釉	
34	52	86	6区 上層	地聚1	9F-1D7		須恵器	杯蓋	B I	12.0	7.0	3.1	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	3	14				
34	52	87	6区 上層	地聚1	9F-1D8		須恵器	有台杯	B I		9.1	(1.7)	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り	17				打ち火き	
34	52	88	6区 上層	地聚2	9F-1D8		須恵器	有台杯	B2		5.3	(3.9)	普石・長・白	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り	28				底部外面に墨書「×」	
34	52	89	6区 上層	地聚1	9F-1D7		須恵器	有台杯	B II		6.7	(2.0)	普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り	14				内外面に自然釉(台内側を除く)	
34	52	90	6区 上層	地聚2	9F-1C4		須恵器	長頸瓶		15.0		(12.75)	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	糸切り後ナデ	10				口縁部内外面に自然釉	
34	52	91	6区 上層	地聚2	9F-1C5		土師器	無台杯	A II	12.2	5.0	4.45	普石・長・角	a	灰白	ロクロナデ	糸切り後ナデ	24	36	スス	スス	灯明皿か、内面2ヶ所粉殻圧痕	
34	52	92	6区 上層	地聚1	9F-1C4		土師器	無台杯	A I	14.9	5.5	4.95	普石・長・角	a	浅黄緑	ロクロナデ	糸切り	3	13				
34	52	93	6区 上層	地聚1	9F-1D7		土師器	無台杯			5.0	(1.3)	普石・長・角	a	にぶい黄緑	ロクロナデ	糸切り	36	スス			灯明皿か	
34	52	94	6区 上層	地聚1	9F-1D1		土師器	高杯		18.0		(5.1)	普石・長・角	f	浅黄緑	ロクロナデ	糸切り	5				内面黒色処理、外面厚化粧	
34	52	95	6区 上層	地聚1	9F-1D7		黒色土器	高杯				(3.8)	普石・長・角		浅黄緑	ハケメ						脚部内面黒色 全体に厚化粧	
34	52	96	6区 上層	地聚2	9F-1C5		須恵器	杯蓋				(2.3)	普石・長・白	A0+	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ						
34	52	97	6区 上層	地聚2	9F-1C5		須恵器	杯蓋	B I		16.4	(3.0)	普石・長・白	D	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	6					
34	52	98	6区 上層	地聚2	9F-1E11		須恵器	無台杯	B I	12.0	8.5	3.2	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	15	18				
34	52	99	6区 上層	地聚2	9F-1E12		須恵器	無台杯	B I	11.6	8.6	3.5	普石・長	C	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	13				打ち火き	
35	52	100	6区 上層	地聚2	9F-1E6		須恵器	無台杯	B I	11.6	7.8	3.2	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	22	36				
35	52	101	6区 上層	地聚2	9F-1F16		須恵器	無台杯	A		6.8	(3.2)	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	21					
35	52	102	6区 上層	地聚2	9F-1C5		須恵器	無台杯	B		8.0	(0.85)	普石・長・白	B	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	8				底部外面に墨書「宅成」、板目正痕	
35	52	103	6区 上層	地聚2	9F-1E11		須恵器	無台杯	B I	12.8	8.4	2.85	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	6	18				
35	52	104	6区 上層	地聚2	9F-1E13		須恵器	有台杯	B I	11.2	7.5	3.5	普石・長・白	B	灰	ロクロナデ	ヘラ切り	3	9			外面・底部外面に自然釉	
35	52	105	6区 上層	地聚2	9F-1E11		須恵器	壺・地聚		11.0	(2.9)		普石・長・白	C	灰白	ロクロナデ	ヘラ切り	6				底部下端と高台に自然釉	
35	52	106	6区 上層	地聚2	9F-1D2		土師器	無台杯	A II	11.9	5.7	4.4	普石・長・角	f	にぶい黄緑	ロクロナデ	糸切り	11	36				
35	52	107	6区 上層	地聚2	9F-1D2		土師器	無台杯	B II	11.8	5.8	4.4	普石・長・白	a	にぶい黄緑	ロクロナデ	糸切り	14	18				
35	52	108	6区 上層	地聚2	9F-1D2		土師器	無台杯	B II	13.0		(3.6)	普石・長・角	a	黄	ロクロナデ	糸切り	8				内面剥離	
35	52	109	6区 上層	地聚2	9F-1D2		土師器	無台杯			4.85	(1.85)	普石・長	f	灰白	ロクロナデ	糸切り後ナデ	27					

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	種別	器種	分類	法量 (cm)		胎土	色調	製作痕・手法			残存率		付着物		備考	
				遺構	グリット					口径	底径			器高	状態・含有物	分級	外周	内面	底面	口縁		底面
35	53	110	6区	上層	地業2	9F-1D2	土師器	無台杯		5.0	(3.4)	普石・長	a	浅草層	ロクロナ字後ナデ	糸切り	右	36				
35	53	111	6区	上層	地業2	9F-1C5	土師器	無台杯		7.2	(1.8)	普石・長・角	a	にふい層	ロクロナ字後ナデ	糸切り	右	21				
35	53	112	6区	上層	地業2	9F-1C3	土師器	無台杯		4.8	(2.85)	普石・長・角・海	a	にふい層	ロクロナ字後ナデ	糸切り	右	36				
35	53	113	6区	上層	地業2	9F-1D2	土師器	無台杯		5.7	(2.0)	普石・長・角	f	にふい層	ロクロナ字後ナデ	糸切り	右	19				
35	53	114	6区	上層	地業2	9F-1D2	土師器	罎		37.0	13.35	普石・長・角	a	にふい層	ロクロナ字後ナデ	格子状タタキ	21	36	スス		全体的に磨耗、剥落あり	
36	54	115	6区	下層	SN94	9F-1E20	須恵器	短頸壺		9.6	(3.0)	普石・長・白	C	赤灰	ロクロナ字後ナデ		4				還元不良	
36	54	116	6区	下層	SD75	9F-1E14	須恵器	無台杯	B1	12.4	8.6	普石・長・白	C	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	7	14				
36	54	117	6区	下層	SD75	9F-1D8	須恵器	無台杯	B2	11.8	8.2	普石・長・白	C	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	7	8				
36	54	118	6区	下層	SD75	9F-1D9	須恵器	無台杯	B	8.2	(2.5)	普石・長・白	B	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	20				打ち欠き	
36	54	119	6区	下層	SD75	9F-1D15	須恵器	有台杯	B1	11.0	6.8	普石・長	D	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	3	30				
36	54	120	6区	下層	SD75	9F-1D9	須恵器	有台杯	A2	14.0	(2.2)	普石・長・白	D	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	6				天井部外面に墨書	
36	54	121	6区	下層	SD75	9F-1D8	須恵器	有台杯		14.0	(5.2)	普石・長・白	B	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	4					
36	54	122	6区	下層	SD75	9F-1D15	須恵器	有台杯		14.0	(6.9)	普石・長・白	C	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	12				胴部外面に波状文	
36	54	123	6区	下層	SD75	9F-1D9	須恵器	有台杯		11.0	(5.1)	普石・長・白	B	灰	ロクロナ字後ナデ	ヘラ切り後ナデ	12				口縁内部に自然釉、黒色の吹き出し	
36	54	124	6区	下層	SD75	9F-1D9	須恵器	有台杯	A2	12.0	4.8	普石・長・角		浅草層	ロクロナ字後ナデ	糸切り	右	13	36			

別表 3 土製品観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	器種	備考	
				遺構	グリット				
36	54	125	5区	上層	7E-4J14	VII	土鏝	重量 (g) 4.6	形状に磨耗あり
36	54	126	6区	上層	地業2 9F-1E12	-	土鏝	重量 (g) 92.3	カワリ痕多

別表 4 石製品観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	器種	備考	
				遺構	グリット				
36	54	127	5区	上層	SD48 7F-5D18	底面	石製薬用品	重量 (g) 0.5	粘板岩
36	54	128	5区	上層	7E-4H10	VII	砥石	重量 (g) 176.0	凝灰岩
36	54	129	6区	上層	SD53 8F-10F5	2	砥石	重量 (g) 1150.0	花崗閃緑岩

別表 5 円盤・転用研磨具観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	器種	備考	
				遺構	グリット				
36	54	130	5区	上層	SD20 7E-4I15	1	円盤	重量 (g) 0.01	須恵器製
36	54	131	6区	下層	SD75 9F-1D8	1	円盤	重量 (g) 0.01	土師器製
36	54	132	6区	下層	SD75 9F-1D8	1	円盤	重量 (g) 0.01	須恵器製
36	54	133	5区	上層	8F-10C21	-	円盤	重量 (g) 0.01	須恵器製
36	54	134	6区	上層	SD53 9F-1F10	2	転用研磨具	重量 (g) 131.0	琢磨研磨具 外面と右側面、外面下 部に磨耗あり

別表 6 鉄製品・鍛冶関連遺物観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	器種	材質	法量 (mm)		重量 (g)	備考
				遺構	グリット				長さ	幅		
37	56	135	4区	上層	SN12 7F-5F8	1	鉄鏃	24.8	34.8	25.4	15.0	ガラス質溶化
37	56	136	4区	上層	SN14 7F-4F14	1	鍛造滓	24.5	18.6	6.1	2.9	剥片
37	56	137	4区	上層	SN14 7F-3F20	1	流動滓	28.9	20.0	13.2	5.0	ガラス質溶化
37	56	138	5区	上層	遺構外 7F-4A24	VI	鉄片	(108.9)	31.8	2.3	12.3	
37	56	139	5区	上層	遺構外 7F-5D14	VII	鉄片	28.6	23.5	19.0	6.6	
37	56	140	5区	上層	遺構外 7E-4I6	VII	和釘 鉄	71.2	9.3	6.4	4.7	
37	56	141	5区	上層	遺構外 7E-4I2	VII	和釘 鉄	47.8	6.7	6.7	1.8	
37	56	142	5区	上層	遺構外 7E-3H23	1	和釘 鉄	105.0	6.6	7.3	16.6	
37	56	143	5区	上層	遺構外 7E-4H4	VII	流動滓	26.7	31.6	18.9	3.9	
37	56	144	5区	上層	遺構外 7E-4I2	-	鉄滓	19.5	29.2	6.5	1.1	ガラス質溶化
37	56	145	6区	上層	SD53 9F-1F17・18	-	鉄鏃	127.5	13.5	10.0	18.5	縦裏型
37	56	146	6区	上層	SD53 8F-9F25	2	環口	41.7	(外径) 30.0	(孔径) 15.0	22.7	
37	56	147	6区	上層	SD53 8F-7F25	2	環口	36.6	(外径) 70.0	(孔径) 30.0	17.7	
37	56	148	6区	上層	SD53 8F-7F25	2	環口	25.8	43.6	16.7	11.1	
37	56	149	6区	上層	地業2 9F-1D2	-	羽釜	6.0	(外径) 330.0	(胴部径) 276.0	70.6	鋳造
37	56	150	6区	上層	P10 8F-10C21	2	櫛型滓	38.9	60.1	17.9	72.7	
37	56	151	6区	上層	P10 8F-10C21	2	和壁	45.6	25.3	17.3	8.3	
37	56	152	6区	上層	P17 8E-9I23	1	和壁	57.7	37.3	11.7	13.8	
37	56	153	6区	上層	遺構外 8F-10C21	カクラン	環口	42.5	(外径) 80.0	(孔径) 60.0	2.8	

別表 7 銭貨観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告書 No.	調査区	出土位置		層位	器種	材質	法量 (mm)		重量 (g)	備考
				遺構	グリット				長さ	幅		
37	56	154	6区	上層	SD53 9F-1F17	1	銭貨	銅	25.5	25.5	2.0	開口通貫
37	56	155	6区	上層	SN2 8F-10A5	1	銭貨	銅	25.5	25.5	2.0	冠和通貫

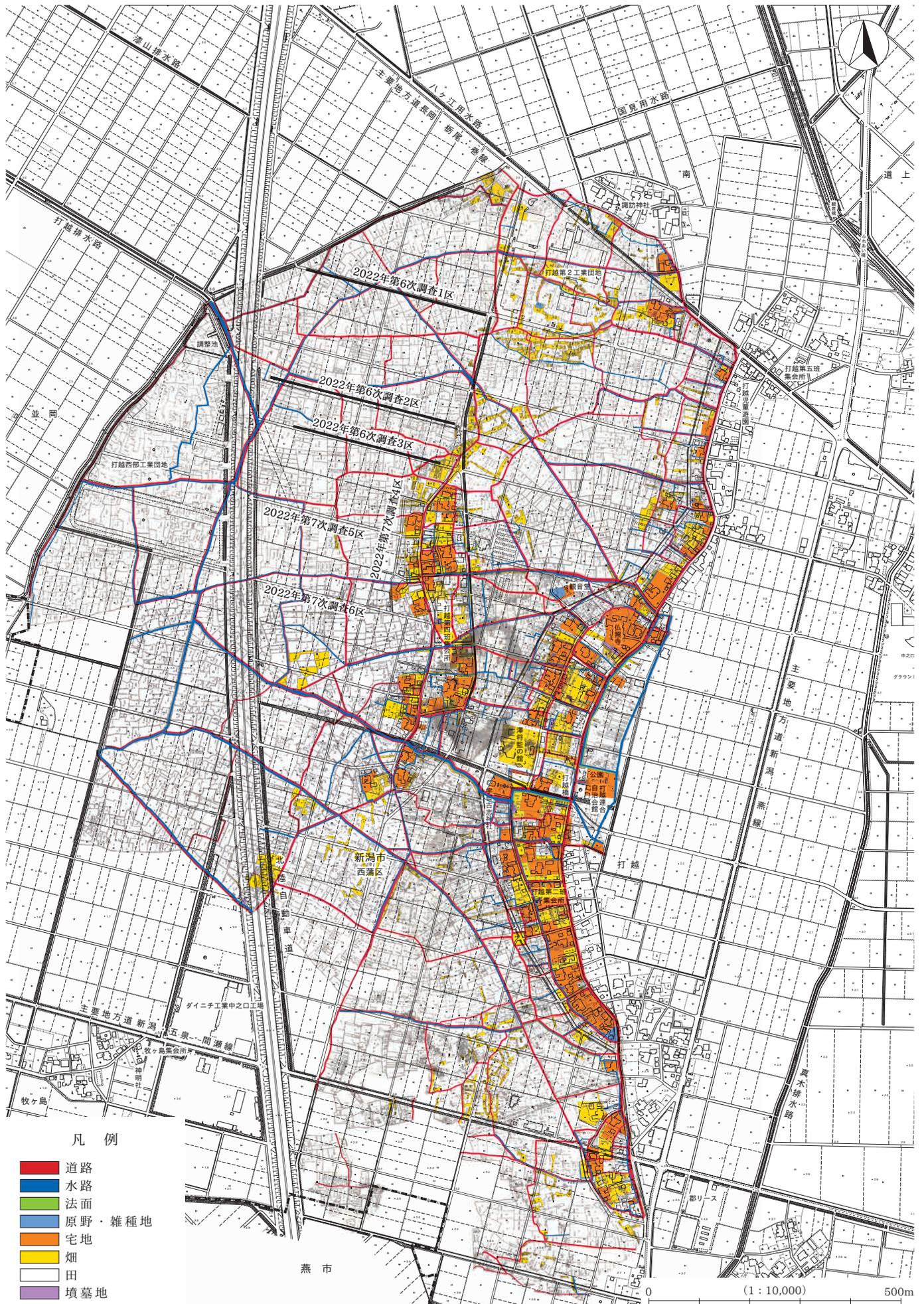
別表8 木製品観察表

図版No.	写真版No.	報告No.	調査区	出土位置			器種	樹種	木取り	法量 (cm)			備考	
				遺構	グリッド	層位				長さ	幅・径	厚さ		
38	57	156	4	SN12	7F-5F13	畦畔2	約文字状木製品		板目	10.6	2.6	0.4	内外:刃物痕	
38	57	157	4	SN14	7F-4F5	1	板状木製品	針葉樹	板目	(17.6)	3.8	0.5	欠損した先端がコゲている (付け木転用か?)	
38	57	158	4	SD9	8F-7F10	-	把手		板目	29.4	2.2	2.1	一部炭化	
38	57	159	4	SD9	8F-7F15	-	箸	針葉樹	板目	(16.3)	0.7	0.4	片側欠損	
38	57	160	4	遺構外	8F-9F5	VII	炭化材 (加工痕あり)		板目	5.5	2.7	3.3		
38	57	161	5	上層	SB45-P37	7F-5C8	-	礎板	ハンノキ属ハンノキ亜種	偏半割材	21.0	10.3	4.3	試料9 1205-1270cal AD ハツリ痕 柱のあたりによるテカリ 樹皮付
38	57	162	5	上層	SB46-P32	7F-5B4	-	木柱	ヤナギ属	丸木取り	31.5	14.0	14.6	試料8 1220-1275cal AD
38	57	163	5	上層	SB46-P35	7F-5B8	-	礎板	ハンノキ属ハンノキ亜種	偏半割材	18.5	12.8	4.1	試料10
38	57	164	5	上層	SD30	7F-5D17	-	漆器 椀	ケヤキ	縦木取り	14.2	6	5.3	試料7 15C頃
38	57	165	5	上層	SD30	7F-5D18	-	下駄	モクレン属	板目	23.2	9.3	2.7	試料14 刃物痕 つま先部使用痕
38	57	166	5	上層	P63	7E-3H21	3	木柱	コナラ属コナラ節	丸木取り	26.9	4.9	4.0	試料11 1152-1220cal AD 両端欠損
38	57	167	5	下層	SB161-P122	7F-5B9	3	木柱	ニレ属	丸木取り	12.7	12.9	12.9	試料12 669-774cal AD
38	57	168	5	下層	SB161-P134	7F-5C6	-	木柱	オニグルミ	丸木取り	38.3	12.2	10.9	試料13 673-779cal AD
39	57	169	5	遺構外	7F-5B10	VII	杭	ヤマウルシ	丸木取り	17.3	3.4	2.95	試料36 樹皮わずかに残る 大きく三方向から削っている	
39	57	170	5	遺構外	7E-3D1	VII	斎串	針葉樹	板目	30.3	1.8	0.6		
39	57	171	5	遺構外	7E-3D1	VII	斎串	針葉樹	板目	27.6	2.5	0.5	武器形か	
39	57	172	5	遺構外	7F-5D18	VII	火鑽白	スギ	板目	13.7	1.9	1.0	試料37	
39	58	173	6	上層	SB95-P60	9F-1D9	-	木柱	クリ	芯取りミカン割り	75.7	15.7	11.4	試料25 チョウナ痕
39	58	174	6	上層	SB95-P63	9F-1D9	-	礎板	クリ	板目	23.9	11.0	6.4	試料38 No.175と同一材か 建築部材を転用
39	58	175	6	上層	SB95-P63	9F-1D9	-	礎板	クリ	板目	22.9	5.1	2.5	試料39 No.174と同一材か 建築部材を転用
39	58	176	6	上層	SB95-P65	9F-1D7・8	-	木柱	クリ	芯取りミカン割り	69.3	19.6	12.6	試料26
40	58	177	6	上層	SB95-P68	9F-1D6	-	木柱	クリ	芯取りミカン割り	80.2	21.3	17.8	試料27 1220-1275cal AD チョウナ痕
40	58	178	6	上層	SB95-P68	9F-1D6	-	礎板	クリ	板目	32.7	12.2	5.5	試料28 釘穴 (角) 2.5mm×1
40	58	179	6	上層	SE5	8E-10J7	5	箸	針葉樹	板目	17.6	0.7	0.45	
40	58	180	6	上層	SE5	8E-10J2	-	箸	針葉樹	板目	15.6	0.7	0.4	
40	58	181	6	上層	SE5	8E-10J7	5	箸	針葉樹	板目	8.3	0.55	0.4	
40	58	182	6	上層	SE5	8E-10J7	5	箸	広葉樹	板目	8.2	0.7	0.25	両端欠損
40	58	183	6	上層	SE5	8E-10J2	-	円盤状木製品		板目	8.7	5.8	2.1	
40	58	184	6	上層	SD6	8E-10J2	-	木柱	ハンノキ属ハンノキ亜種	丸木取り	16.8	9.7	9.2	試料15
40	58	185	6	上層	SD53	9F-1F17	-	漆器 皿			(3.0)	(1.7)	0.3	13C頃 内外:黒漆 黒漆に朱漆で花紋
40	58	186	6	上層	SD53	9F-1F17	-	箸	針葉樹	板目	15.4	0.95	0.65	両端欠損
40	58	187	6	上層	SD53	9F-1F17	-	箸		板目	12.5	0.6	0.35	両端欠損
40	58	188	6	上層	SD53	9F-1F17	-	箸		板目	10.2	0.7	0.35	両端欠損
40	58	189	6	上層	SD53	9F-1F17	-	舟形		板目	7.4	1.8	1.4	
40	58	190	6	上層	SD53	9F-1F17	-	板状木製品	針葉樹	板目	20.8	4.3	0.7	片面は割りっぱなし 両面刃物痕
40	59	191	6	上層	SD53	9F-1F17	-	人形	スギ	板目	12.8	4.3	0.9	試料18
40	59	192	6	上層	SD53	9F-1F17	-	曲物側板	スギ	板目	9.2	5.1	0.3	試料17 穿孔 (外から) ケビキ
41	59	193	6	上層	SD53	8F-9F25	2	下駄	モクレン属	板目	13.0	8.6	2.7	試料5 親指の痕 (左足か)、差し込み穴にコゲあり
41	59	194	6	上層	SD53	8F-9F25	2	下駄の歯	スギ	板目	8.2	7.4	1.7	試料6 本体とのあたり痕 加工時のハクリ痕
41	59	195	6	上層	SD53	9F-1F17	-	下駄の歯	スギ	板目	11.0	6.4	1.8	試料19
41	59	196	6	上層	SD53	9F-1F17	1	板状木製品	スギ	板目	44.2	3.3	1.45	表からあけた2mmの穴×1 裏面は割りっぱなし
41	59	197	6	上層	SD53	9F-1F17	-	棒状木製品	針葉樹	板目	29.4	2.3	1.9	先端のみ削って加工
41	59	198	6	上層	SX2	8F-10A20	2	曲物側板		板目	18.3	3.0	0.2	内:刃物痕
41	59	199	6	上層	P88	9F-1D7	-	木柱	ハンノキ属ハンノキ亜種	丸木取り	21.3	10.6	10.6	試料34 1261-1299cal AD 樹皮付
41	59	200	6	上層	地業1	9F-1E20	-	柄	スギ	板目	11.3	2.9	0.45	試料23 201とセット 目釘孔2
41	59	201	6	上層	地業1	9F-1E20	-	鞘	スギ	流れ板目	12.9	3.2	0.5	試料22 200とセット
41	59	202	6	上層	地業2	9F-1E20	-	匙状木製品	モクレン属	板目	22.5	2.7	1.3	試料41 凹み加工あり
41	59	203	6	下層	SB96-P93	9F-1C5	-	木柱	クリ	丸木取り	49.6	23.0	21.8	試料29 678-749cal AD
42	59	204	6	下層	SB96-P69	9F-1D2	-	木柱	クリ	丸木取り	60.4	21.8	15.2	試料35 772-883cal AD
42	59	205	6	下層	SB96-P69	9F-1D2	-	木柱	クリ	丸木取り	51.9	17.8	10.8	試料40
42	60	206	6	下層	SB96-P69	9F-1D2	-	礎板	スギ	板目	45.4	18.4	5.5	試料42
42	60	207	6	下層	SB96-P69	9F-1D2	-	礎板		板目	33.7	11.5	3.1	2.0×5.5×2.0ノミでえぐった痕あり 建築部材を転用
42	60	208	6	下層	P90	9F-1E14	1	板状木製品		板目	14.8	2.2	0.5	刃物痕
42	60	209	6	下層	P97	8F-10A20	2	木柱	スギ	丸木取り	52.1	14.8	16.5	試料21 675-779cal AD 3方から削り出し
42	60	210	6	遺構外	8E-8E21	-	弓	イヌガヤ	丸木取り	139.6	3.7	3.8	試料24 820-901cal AD	

*試料とはVI章樹種同定試料である

圖 版





凡例

- 道路
- 水路
- 法面
- 原野・雑種地
- 宅地
- 畑
- 田
- 墳墓地

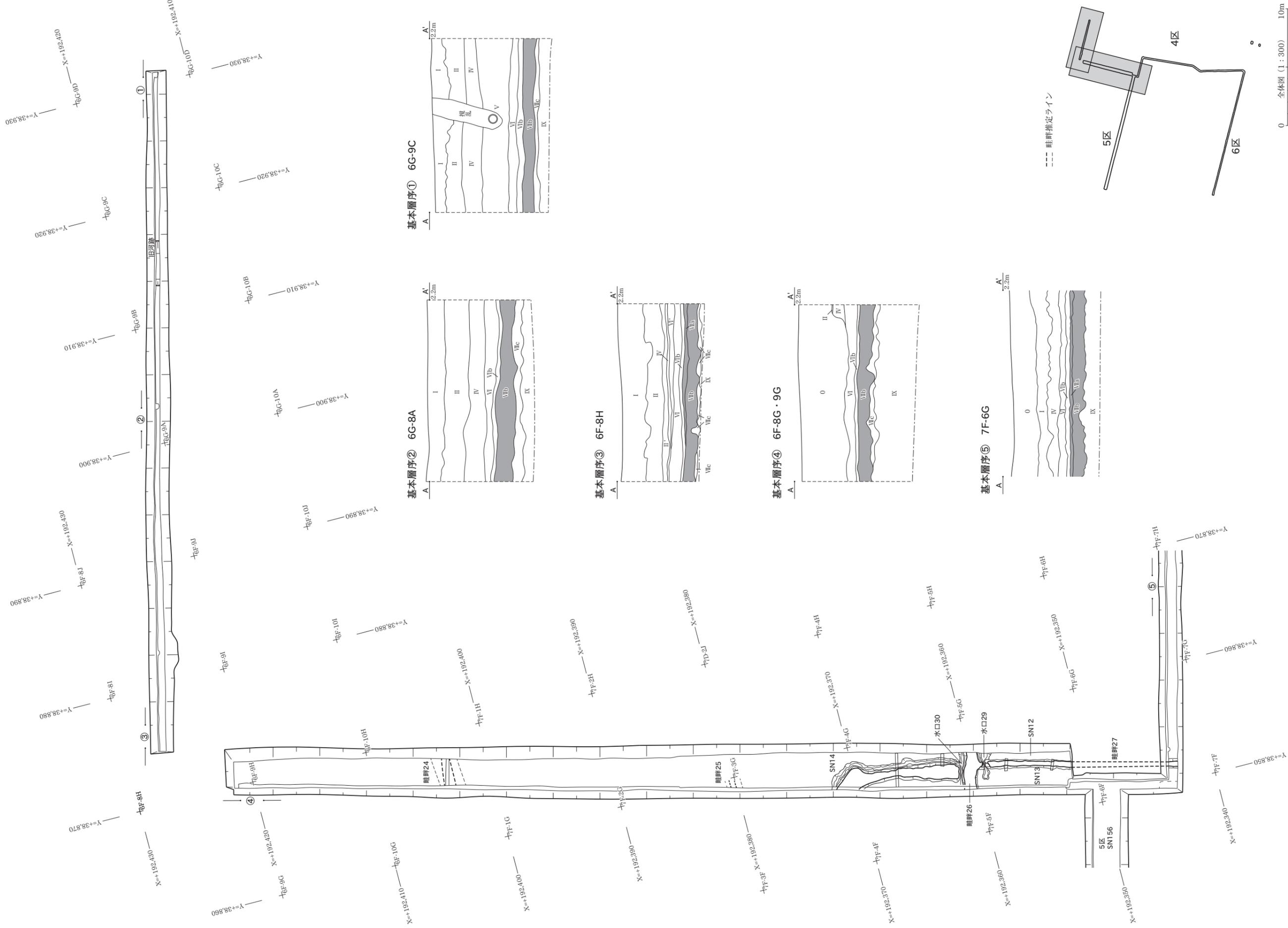
0 (1:10,000) 500m

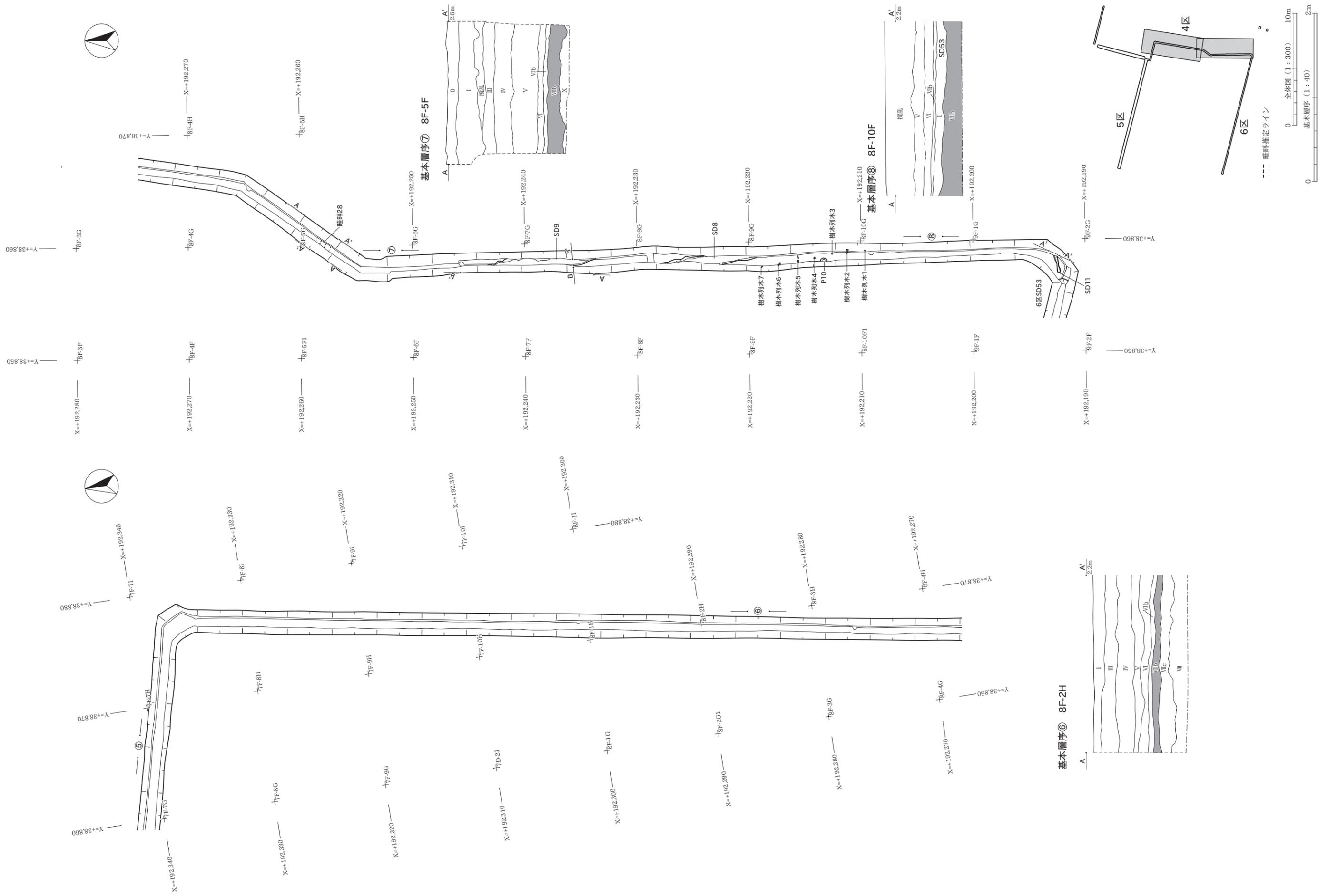
平面直角座標値は世界測地系による
新潟市地形図(2007・2009・2010年)1:2,500→1:10,000
西蒲原郡道上村大字打越更正図を合成

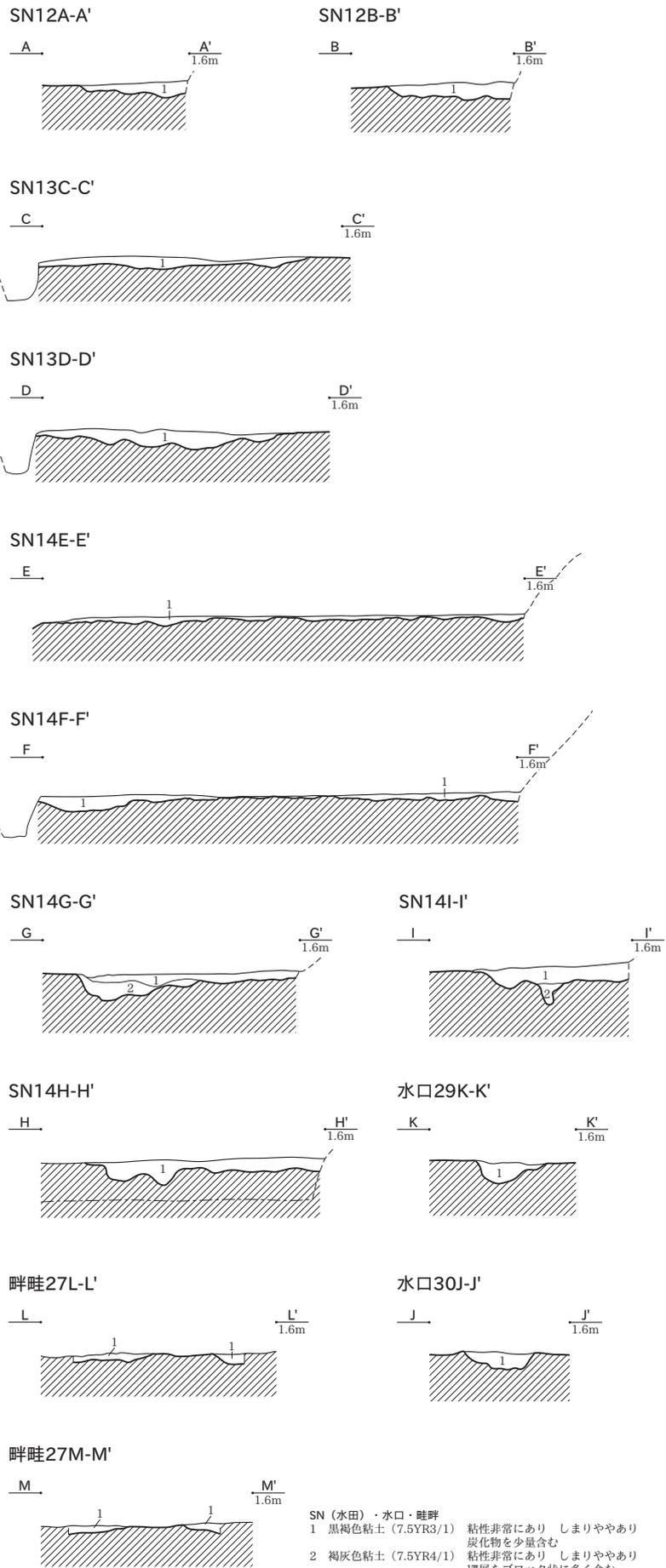
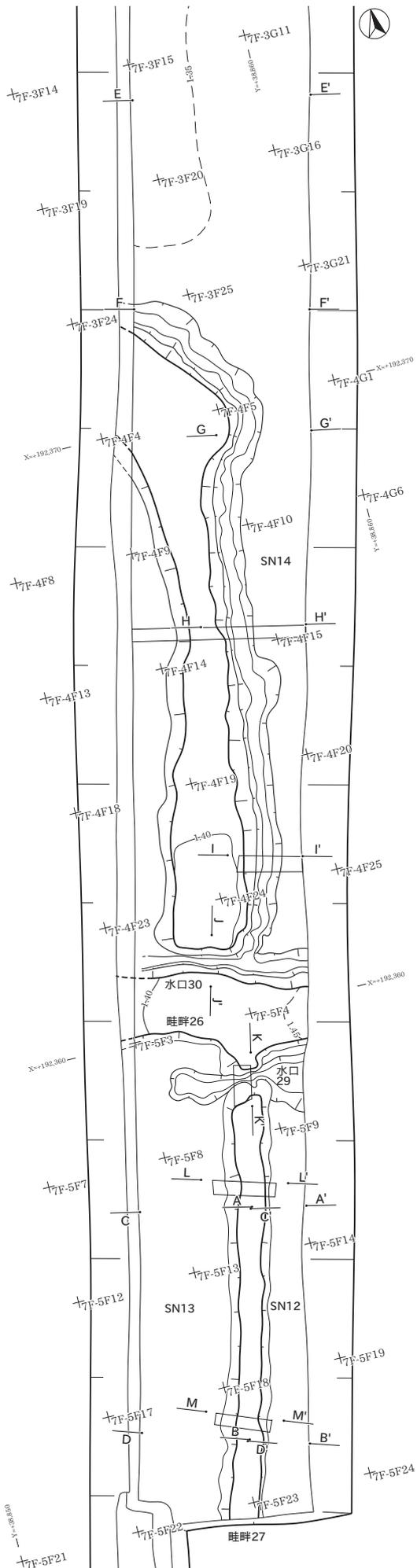


平面直角座標値は世界測地系による
新潟市地形図 (2007・2009・2010年) 1:2,500→1:10,000

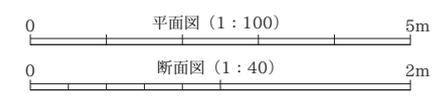


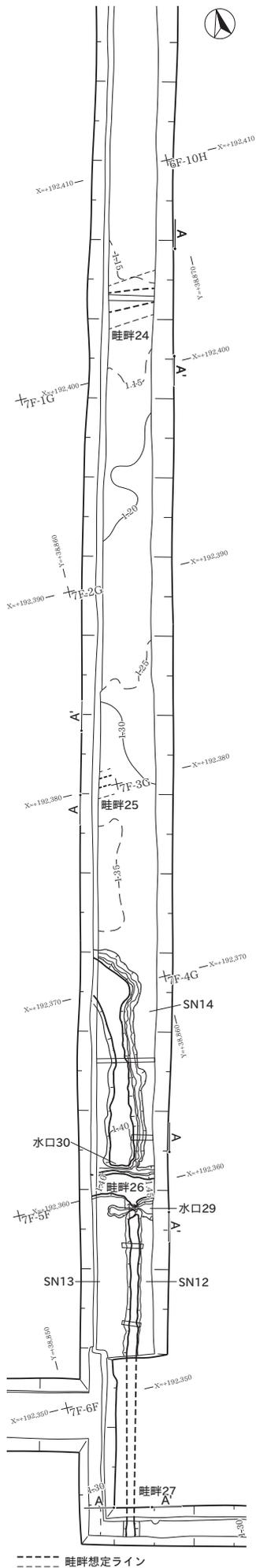




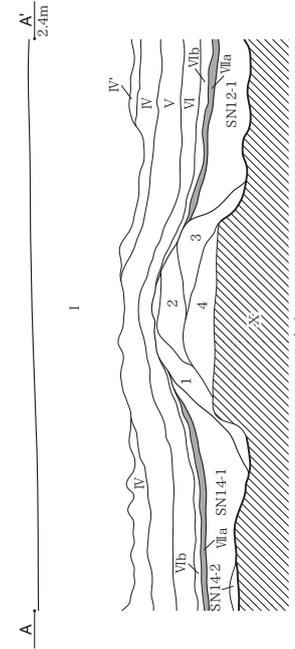


SN (水田)・水口・畦畔
 1 黒褐色粘土 (7.5YR3/1) 粘性非常にあり しまりややあり
 炭化物を少量含む
 2 褐灰色粘土 (7.5YR4/1) 粘性非常にあり しまりややあり
 Ⅷ層をブロック状に多く含む



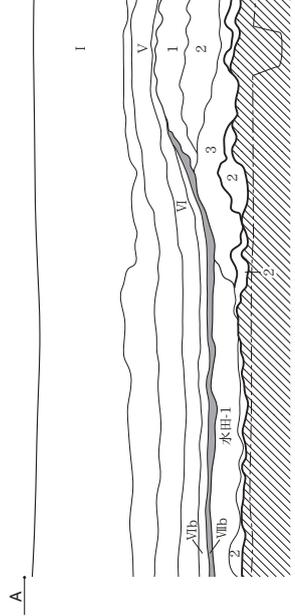


畦畔26



畦畔26
 1 黒褐色粘土 (7.5YR3/2) 粘性・しまりあり Ⅷ層をブロック状に少量含む
 2 褐灰色粘土 (7.5YR4/1) 粘性非常にあり しまりあり Ⅷ層をブロック状に多く含む
 3 褐灰色粘土 (7.5YR4/1) 粘性非常にあり しまりあり Ⅷ層をブロック状に多く含む
 4 黒褐色粘土 (7.5YR3/1) 粘性非常にあり しまりあり Ⅷ層をブロック状に少量含む

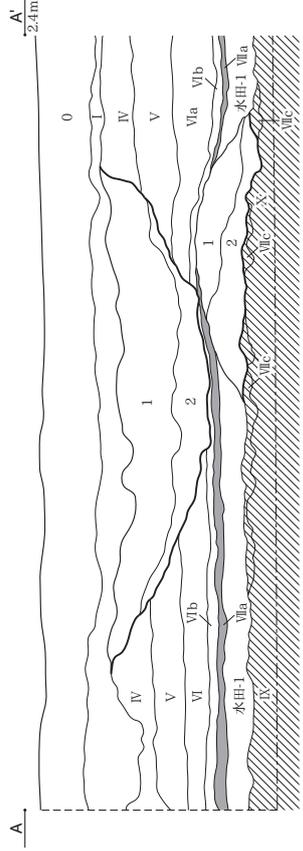
畦畔24



畦畔24
 1 黒褐色粘土 (7.5YR3/1) 粘性・しまりあり 褐灰色粘土をブロック状に含む
 2 黒褐色粘土 (7.5YR3/1) 粘性・しまりあり Ⅷ層をブロック状に少量含む
 3 黒褐色粘土 (7.5YR2/2) 粘性非常にあり しまりあり

水田 (SN12~14)
 1 黒褐色粘土 (7.5YR3/1) 粘性非常にあり しまりややあり 炭化物を少量含む
 2 褐灰色粘土 (7.5YR4/1) 粘性非常にあり しまりややあり Ⅷ層をブロック状に多く含む =VIIc

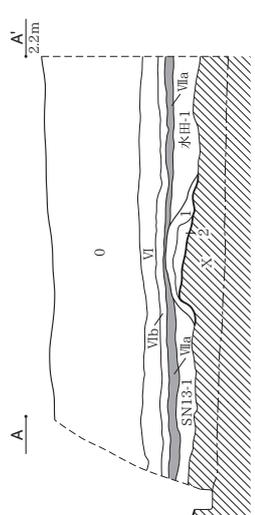
畦畔28



畦畔28
 1 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの黒褐色粘土をブロック状に含む
 2 褐灰色シルト (10YR5/1) 粘性なし しまりややあり 直径10~30mmの灰白色粘土をブロック状に含む

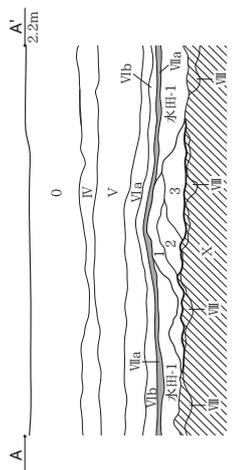
SD
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのX層をブロック状に含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのX層をブロック状に少量含む

畦畔27



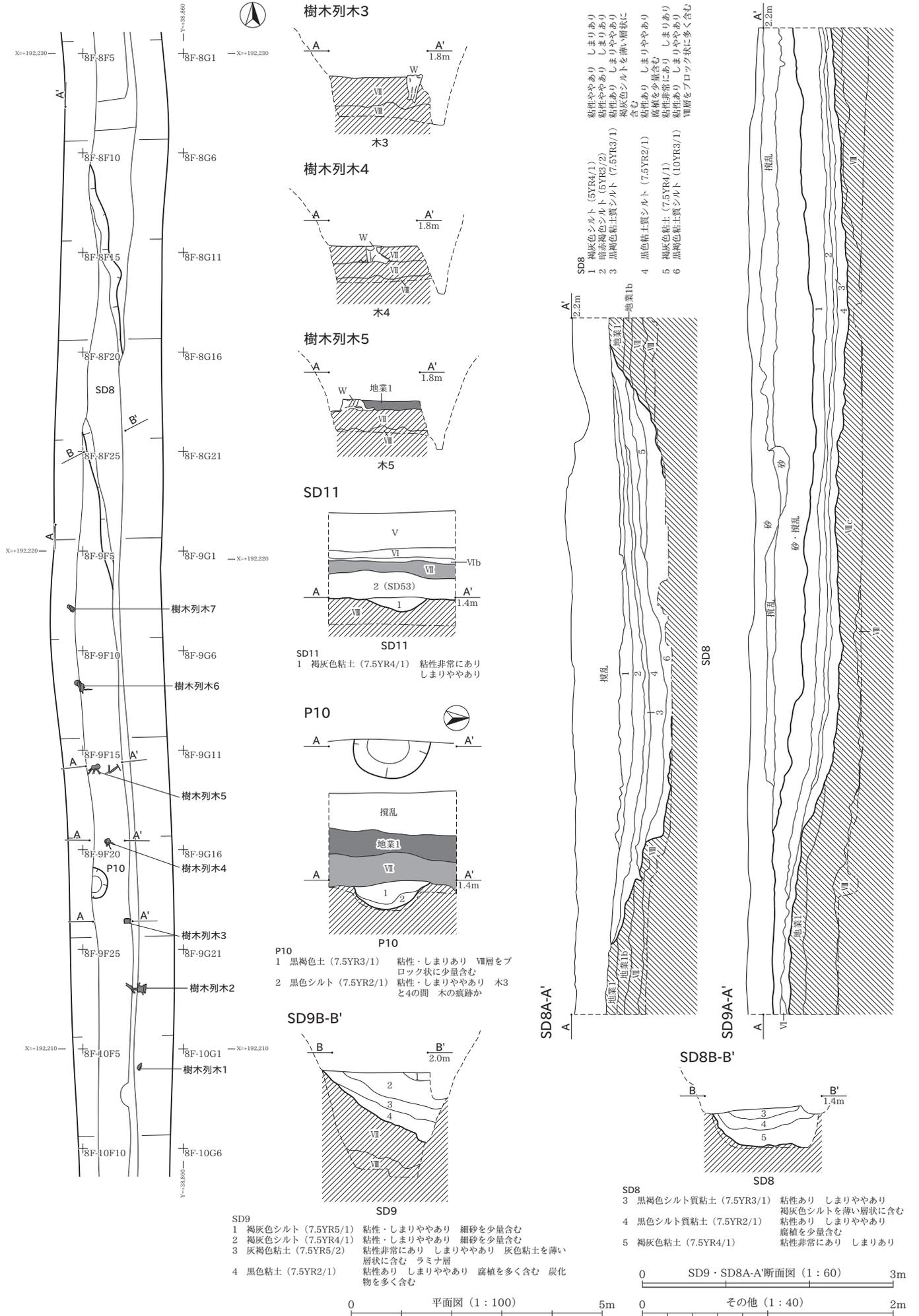
畦畔27
 1 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのX層をブロック状に含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのX層をブロック状に多く含む

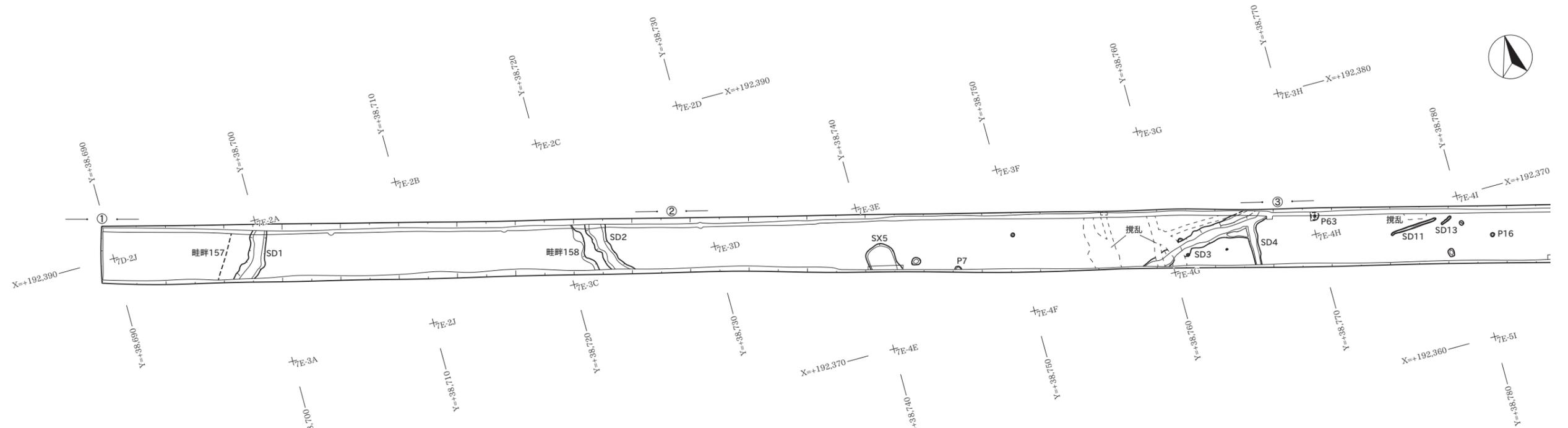
畦畔25



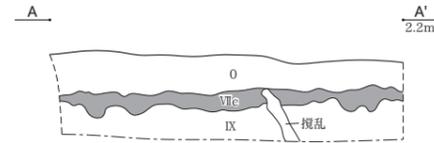
畦畔25
 1 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのX層をブロック状に少量含む
 2 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり
 3 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのX層をブロック状に含む



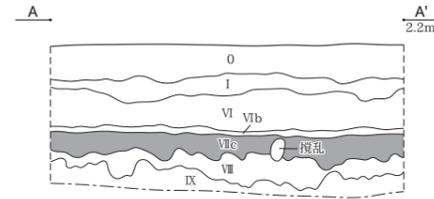




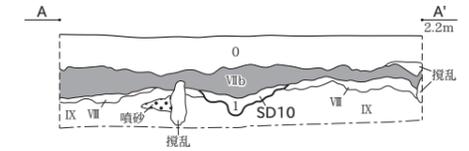
基本層序① 7D-1J



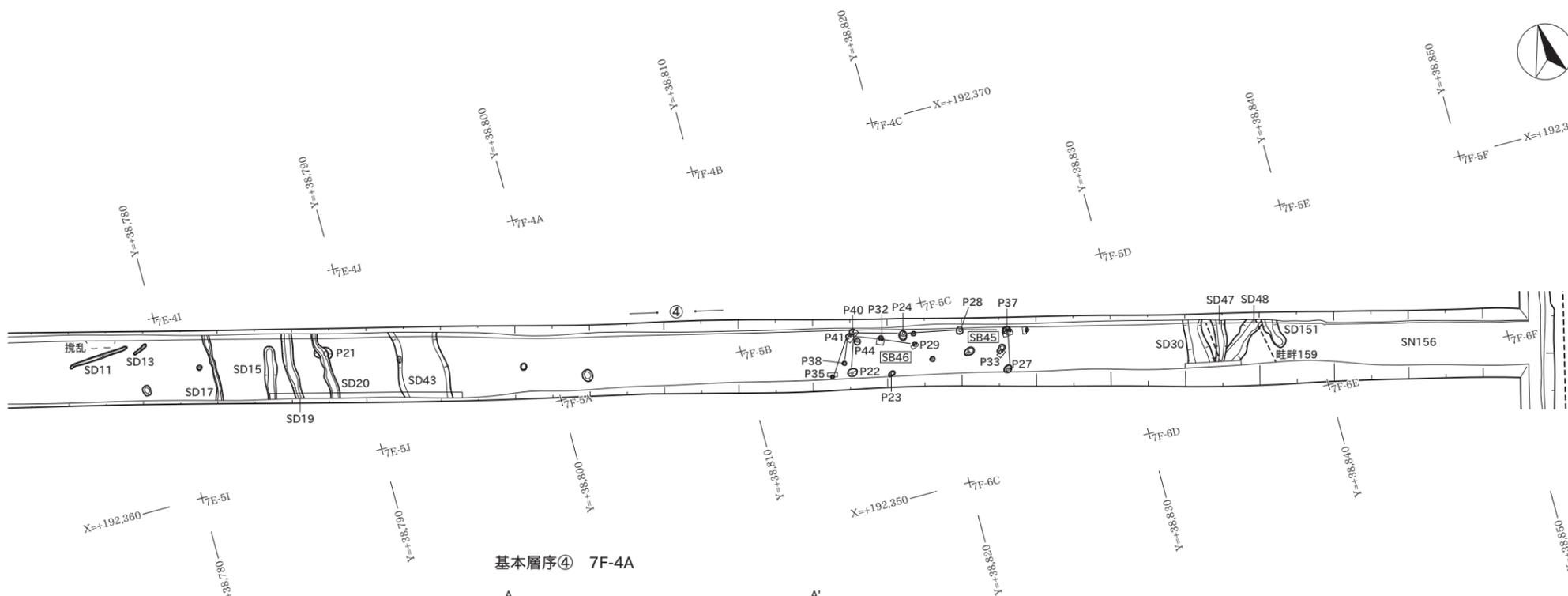
基本層序② 7E-2C



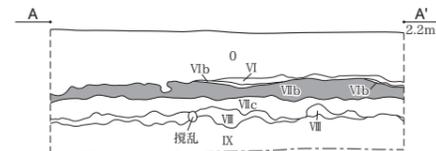
基本層序③ 7E-3G



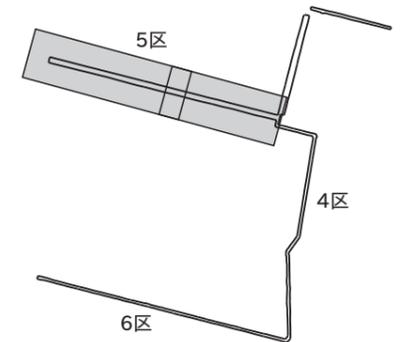
SD10
1 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりやあり 直径5~10mmの
層層をブロック状に少量含む



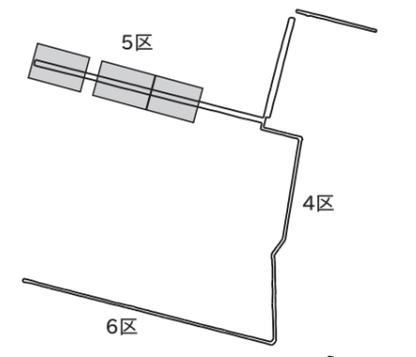
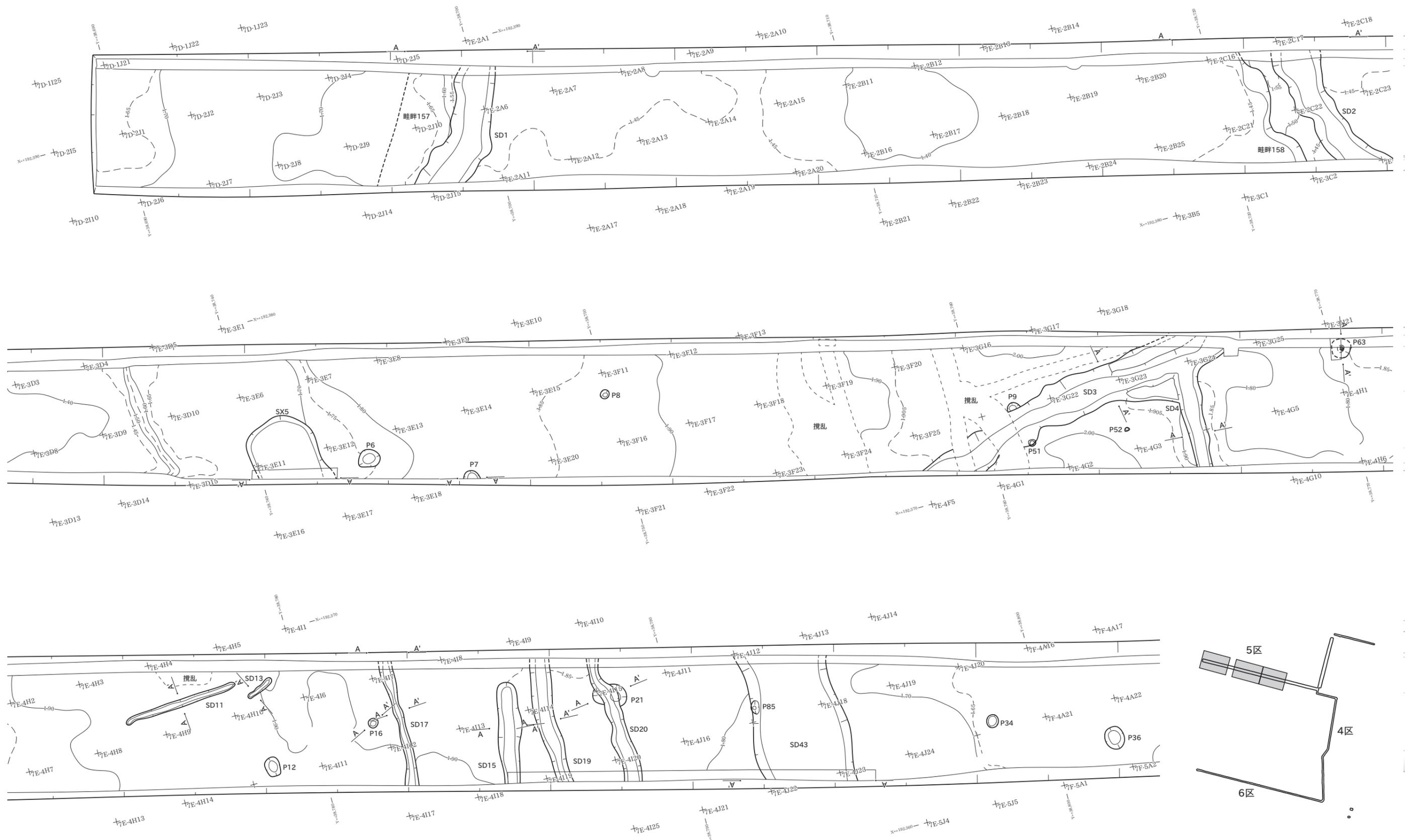
基本層序④ 7F-4A

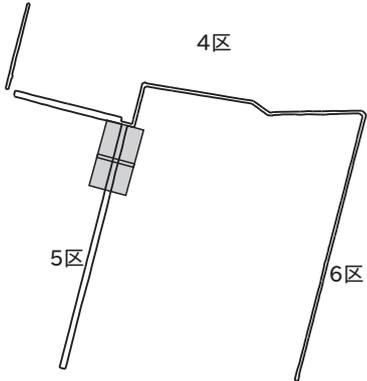


--- 畦畔推定ライン

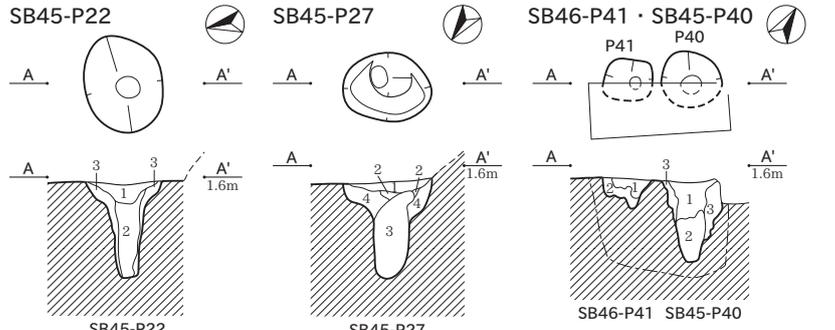
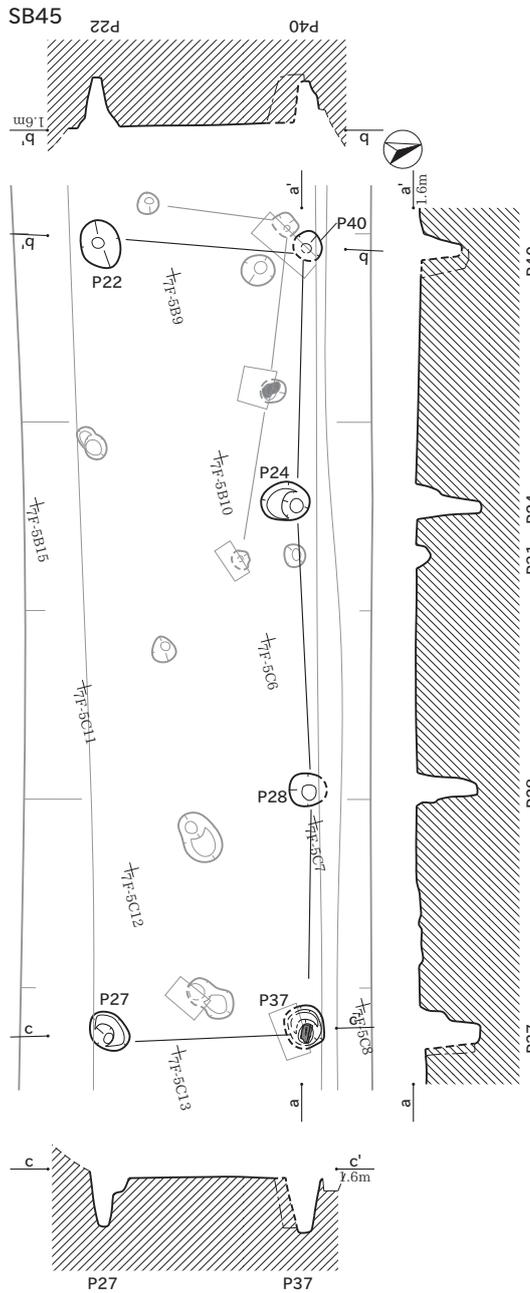


0 全体図 (1 : 300) 10m
0 基本層序 (1 : 40) 2m

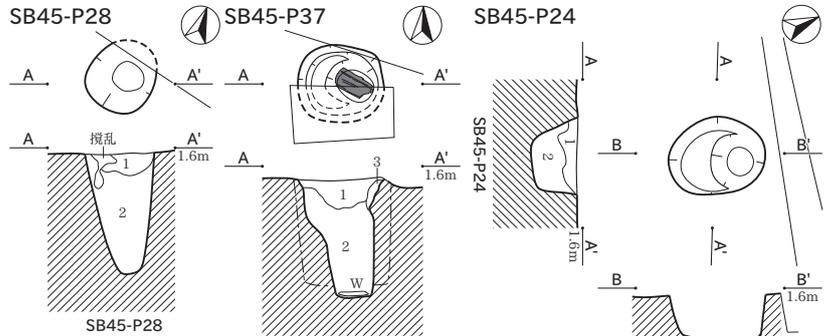




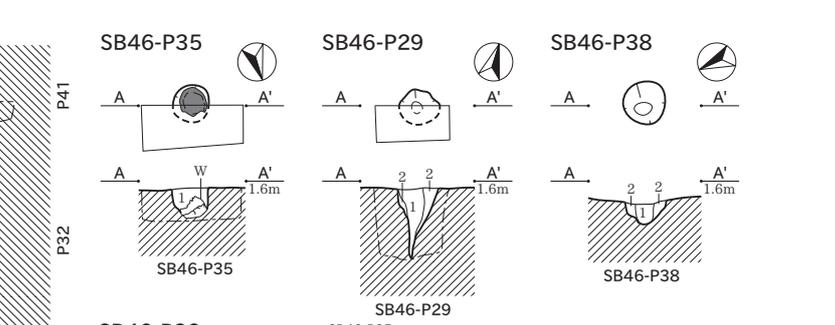
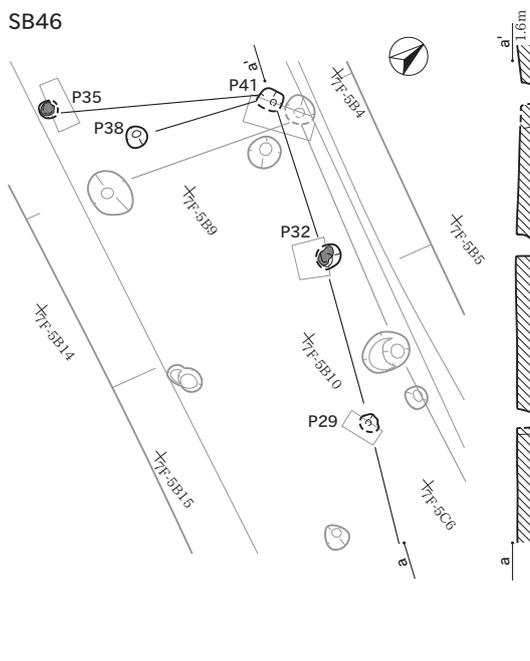
0 (1 : 100) 5m



- SB45-P22**
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性非常にあり しまりなし
 3 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- SB45-P27**
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのⅦ層をブロック状にわずかに含む
 2 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径20mmの炭化物を含む 直径1~5mmのⅦ層をブロック状に含む
 3 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの黒色粘土をブロック状に含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む
 4 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径1~5mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- SB45-P40**
 1 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmのⅦ層をブロック状に多く含む
 2 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのⅦ層をブロック状にわずかに含む
 3 灰色粘土 (N5/0) 粘性あり しまりややあり 直径5~20mmのⅦ層をブロック状に多く含む



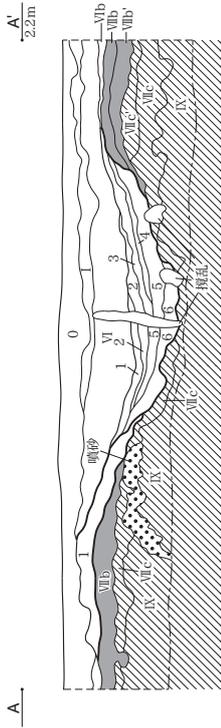
- SB45-P28**
 1 黒色粘土 (10YR2/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
 2 黒色粘土 (10YR2/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- SB45-P37**
 1 灰色粘土 (N5/0) 粘性・しまりあり 直径10~30mmの黒褐色粘土をブロック状に含む 直径1~10mmのⅦ層をブロック状に少量含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmの灰色粘土をブロック状に少量含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む
 3 灰色粘土 (N6/0) 粘性・しまりあり 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む
- SB45-P24**
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりなし 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に少量含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~100mmのⅦ層をブロック状に多く含む



- SB46-P35**
 1 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりややあり 直径5~20mmの灰色粘土をブロック状に少量含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む
- SB46-P29**
 1 黒色粘土 (10YR2/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む 直径1~5mmのⅦ層をブロック状にわずかに含む
 2 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- SB46-P38**
 1 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりややあり
 2 灰色粘土 (N6/0) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む
- SB46-P32**
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~30mmの褐色粘土をブロック状に多く含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に少量含む
 2 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性・しまりあり 直径1~5mmのⅦ層をブロック状に含む

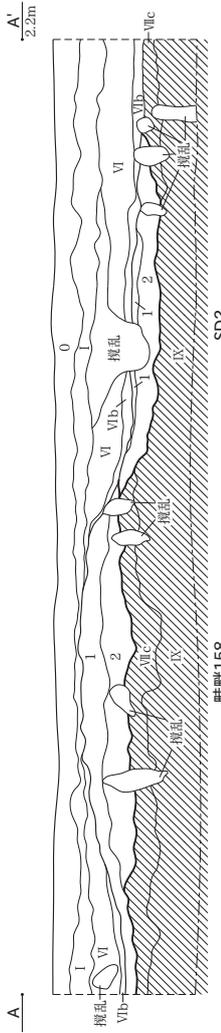
0 SB平面図・エレベーション図 (1:80) 4m 0 その他 (1:40) 2m

畦畔 157・SD1



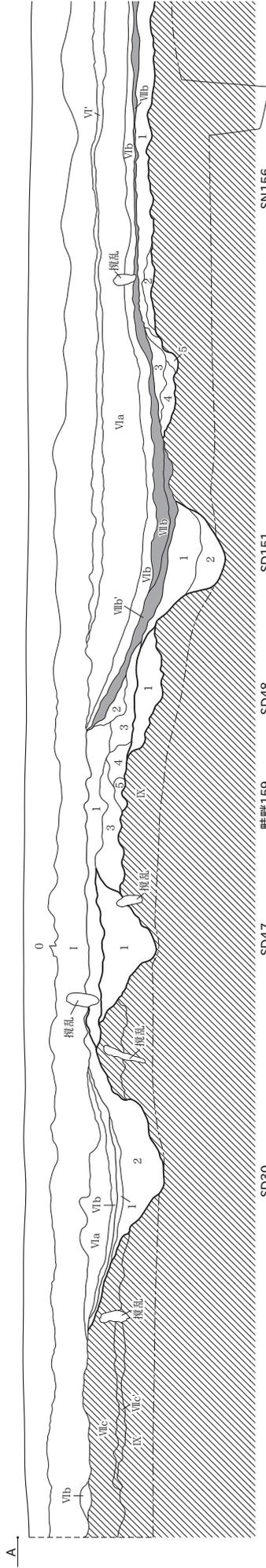
- 畦畔 157**
- SD1
- 1 黒褐色シルト (7.5YR3/1) 粘性・しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に少量含む
- 基本層序**
- 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に含む
 - 2 黒褐色シルト (10YR7/1) 粘性・しまりややあり 直径10~50mmの圓層をブロック状に多く含む

畦畔 158・SD2



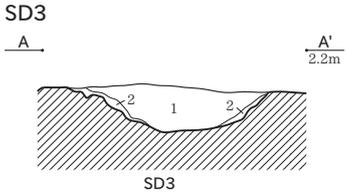
- 畦畔 158**
- SD2
- 1 灰白色粘土 (10YR7/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの圓層をブロック状に含む
 - 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの圓層をブロック状に含む
- 基本層序**
- 1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 粘性・しまりややあり 直径10~100mmの灰白色粘土をブロック状におよび含む
 - 2 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 粘性・しまりややあり 直径10~100mmの灰白色粘土をブロック状におよび含む

SD30・47、畦畔 159、SD48・151、SN156

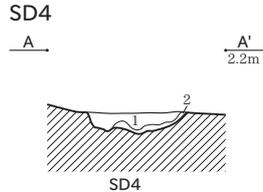


- SD30**
- 1 灰白色粘土 (5Y4/1) 粘性あり しまりややあり 底面に厚さ15mmの明背灰白色シルトを層状に含む
 - 2 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりややあり 腐植を含む
- SD47**
- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に含む
- SD48**
- 1 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に含む
- SD151**
- 1 黒褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に含む
 - 2 黒褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりなし
- SN156**
- 畦畔 159**
- 1 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの灰白色シルトをブロック状に含む
 - 2 灰白色シルト (2.5Y7/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmの黒褐色粘土をブロック状に少量含む
 - 3 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの灰白色シルトをブロック状に含む
 - 4 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの灰白色シルトをブロック状に少量含む
 - 5 灰白色シルト (2.5Y7/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmの黒褐色粘土をブロック状に少量含む
- 基本層序**
- 1 灰白色粘土 (5Y4/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に少量含む
 - 2 灰白色シルト (N5/0) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの圓層をブロック状に含む
 - 3 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~50mmの灰白色シルトをブロック状に含む
 - 4 灰白色シルト (2.5Y7/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に含む
 - 5 灰白色粘土 (N5/0) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの圓層をブロック状に含む
- 基本層序**
- 1 灰白色粘土 (5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 腐植をラミナ状に含む
 - 2 灰白色粘土 (5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径1~5mmの白色粘土をブロック状に含む

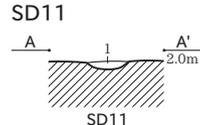




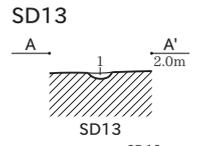
SD3
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径10~30mmのⅧ層をブロック状に多く含む



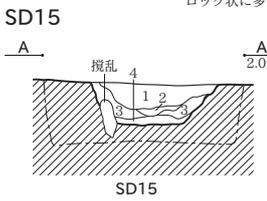
SD4
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径10~30mmのⅧ層をブロック状に多く含む



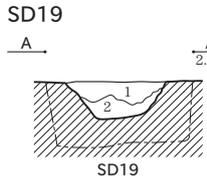
SD11
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む 直径5~10mmの褐色粘土をブロック状に含む



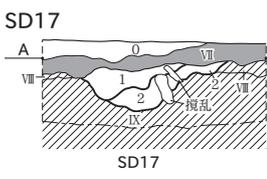
SD13
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む 直径5~10mmの褐色粘土をブロック状に含む



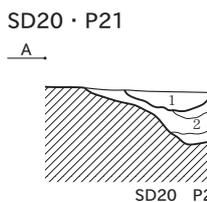
SD15
 1 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり
 直径1~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む
 2 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり
 3 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む
 4 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりなし



SD19
 1 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり
 直径1~10mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に少量含む
 2 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり
 直径1~10mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む

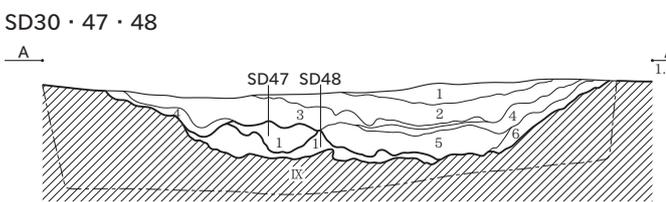


SD17
 1 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性非常にあり しまりあり
 直径2~3mmの炭化物をやや多く含む
 2 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性・しまりあり
 直径2~3mmの炭化物をわずかに含む 灰白色粘土をブロック状に含む

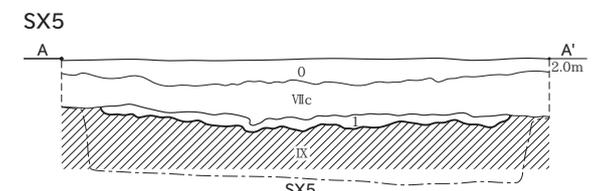


SD20
 1 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり
 直径1~10mmの炭化物を少量含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に少量含む

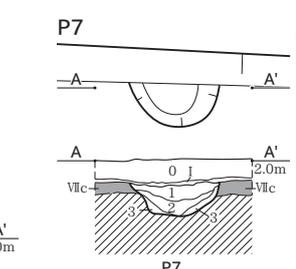
P21
 1 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり
 直径1~10mmの炭化物を少量含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む
 粘性あり しまりややあり
 直径5~30mmのⅧ層をブロック状に多く含む
 3 褐色シルト (10YR6/1) 粘性・しまりややあり
 直径10~30mmのⅧ層をブロック状に含む



SD30
 1 灰色粘土 (5Y4/1) 粘性あり しまりややあり 底面に厚さ15mmの明青灰色シルトを層状に含む
 2 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりややあり 底面に直径10~30mmの明青灰色シルトをブロック状に含む
 腐植を少量含む
 3 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりややあり 底面に直径10~30mmの明青灰色シルトをブロック状に含む
 腐植をやや多く含む
 4 黒色粘土 (2.5Y2/1) 粘性あり しまりややあり 腐植を多く含む
 5 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~100mmのⅧ層をブロック状に含む
 6 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 粘性あり しまりややあり

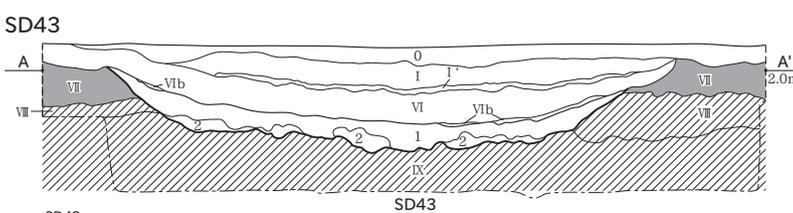


SX5
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径10~30mmのⅧ層をブロック状に多く含む

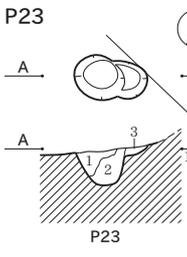


P7
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に少量含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む
 3 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径10~30mmのⅧ層をブロック状に多く含む

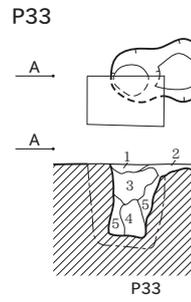
P16
 1 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり
 2 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりなし
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に少量含む
 3 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む
 4 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む



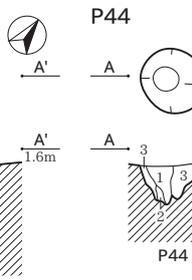
SD43
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状にわずかに含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む



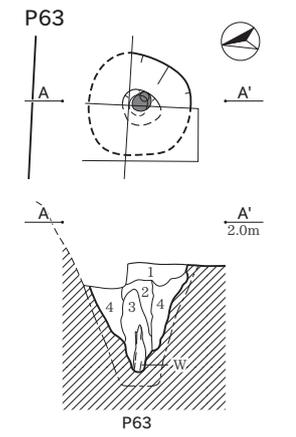
P23
 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~30mmのⅧ層をブロック状に含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性非常にあり しまりなし
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に少量含む
 3 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む



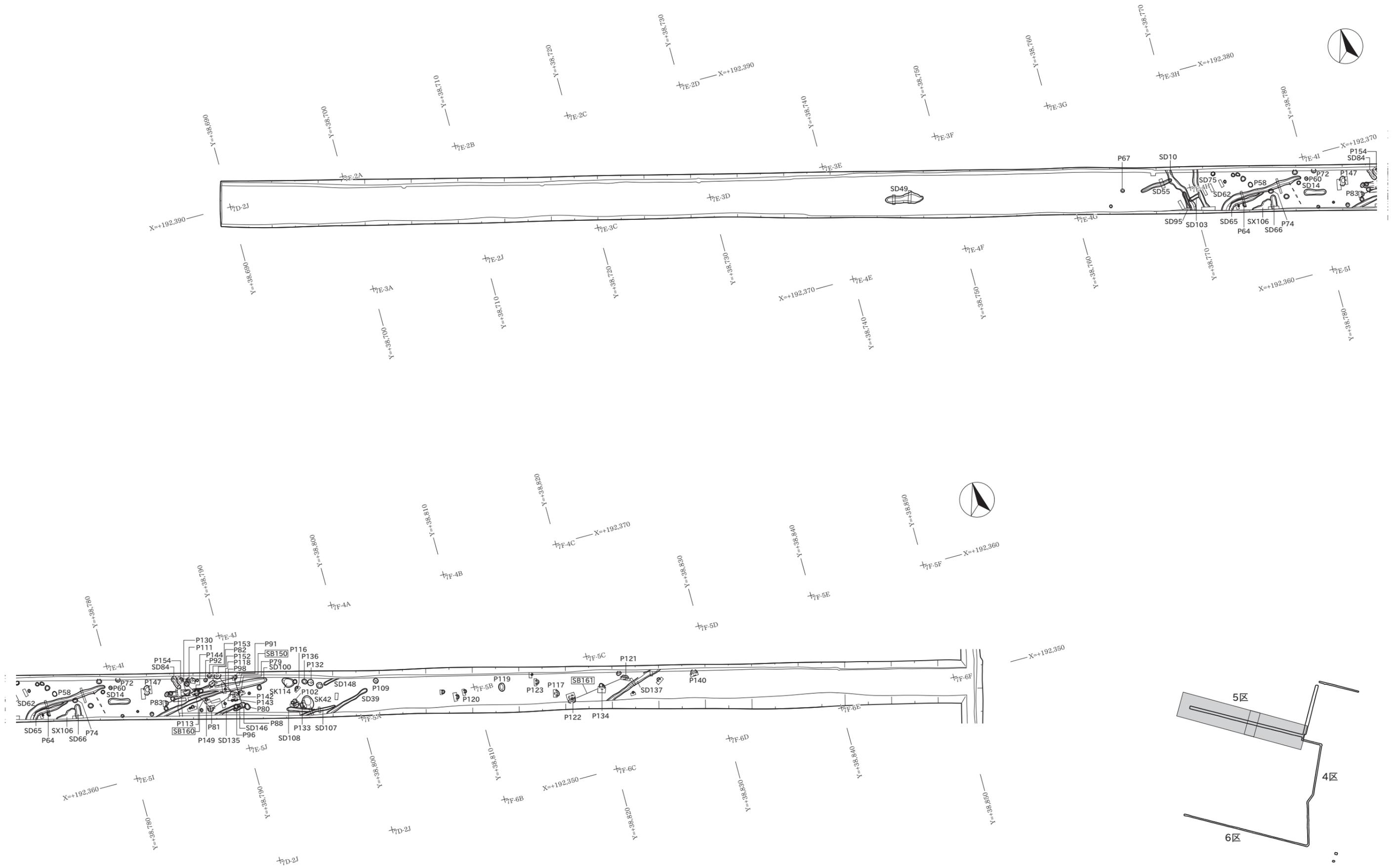
P33
 1 灰色粘土 (N5/0) 粘性あり しまりややあり
 直径10~30mmの黒色粘土をブロック状に含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む
 2 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりややあり
 直径10~50mmの灰色粘土をブロック状に多く含む 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に含む
 3 灰色粘土 (N5/0) 粘性・しまりあり
 直径10~20mmの黒褐色粘土をブロック状に少量含む 直径1~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む
 4 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性非常にあり しまりなし
 直径1~5mmのⅧ層をブロック状に少量含む
 5 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり
 直径5~10mmのⅧ層をブロック状に多く含む

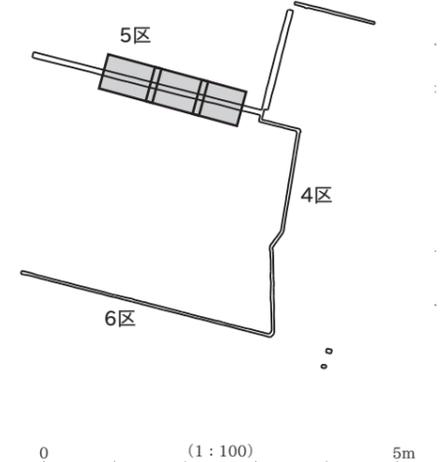
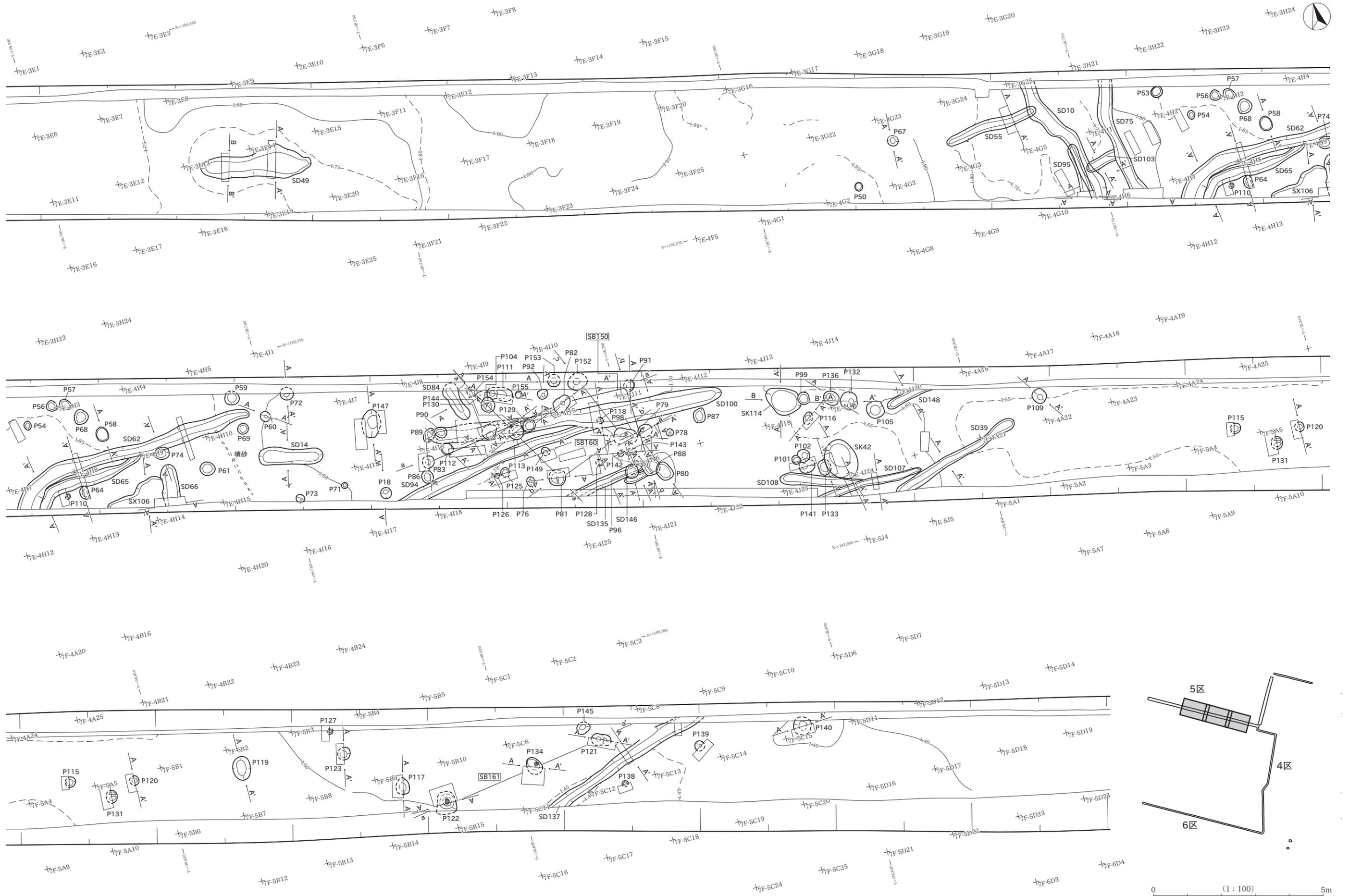


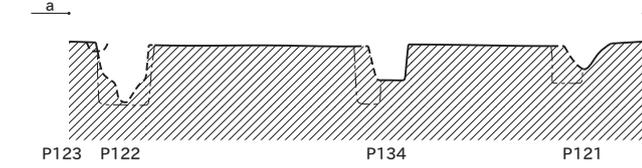
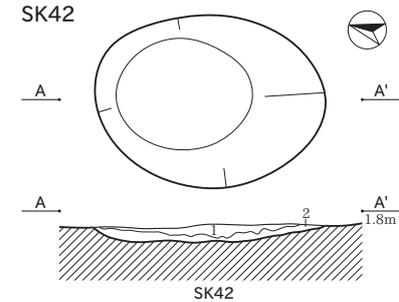
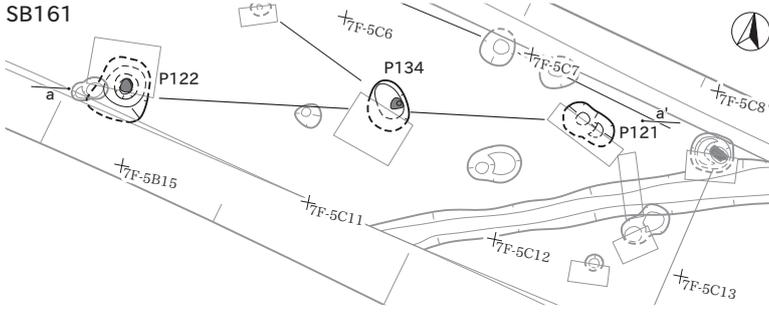
P44
 1 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりややあり
 直径10~50mmのⅧ層をブロック状に多く含む
 2 灰色粘土 (N5/0) 粘性非常にあり しまりなし
 直径5~20mmのⅧ層をブロック状に含む
 3 青灰色シルト (5BG6/1) 粘性・しまりややあり
 直径10~30mmの灰色シルトをブロック状にわずかに含む



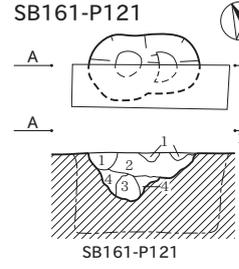
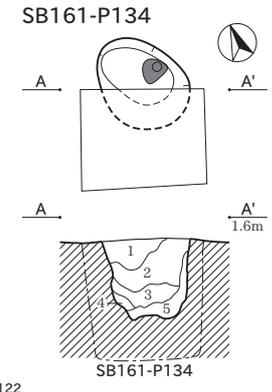
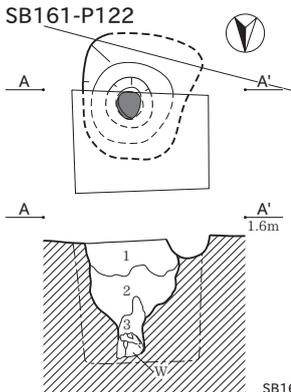
P63
 1 明オリブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性ややあり しまりあり
 直径5mmの褐色粘土をブロック状に含む
 2 黄灰色シルト (2.5Y6/1) 粘性あり しまりなし
 直径5mmの炭化物を多く含む 直径5mmのⅧ層をブロック状に多く含む
 3 褐色シルト (10YR5/1) 粘性あり しまりなし
 直径1~5mmの炭化物を含む
 4 明オリブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性なし しまりややあり
 直径5~10mmの褐色粘土をブロック状にわずかに含む







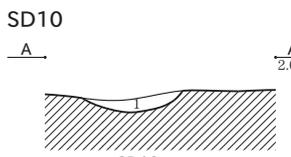
SK42
 1 褐灰色シルト (10YR4/1) 粘性・しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのIX層をブロック状に含む
 2 青灰色シルト (5BG6/1) 粘性・しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmの褐灰色シルトをブロック状にわずかに含む



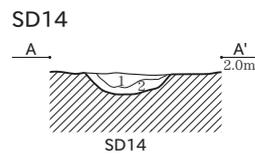
SB161-P121
 1 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~20mmの炭化物を含む 直径5~10mmのIX層をブロック状に少量含む
 2 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物をわずかに含む 直径10~50mmのIX層をブロック状に多く含む
 3 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりなし 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmのIX層をブロック状に含む
 4 黄灰色シルト (2.5Y6/1) 粘性あり しまりなし 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をブロック状に少量含む

SB161-P122
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む 直径30~60mmのIX層をブロック状に多く含む
 2 灰色粘土 (N4/0) 粘性あり しまりややあり 直径30~60mmのIX層をブロック状に多く含む
 3 明オリーブ灰色粘土 (5GY7/1) 粘性あり しまりなし

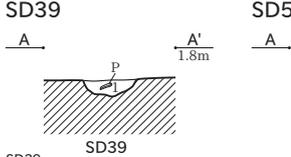
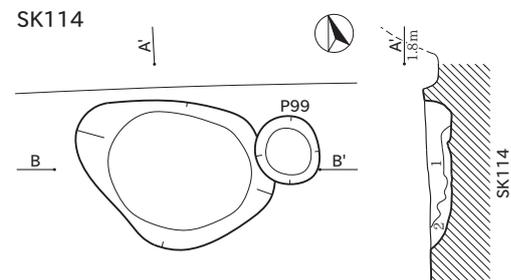
SB161-P134
 1 明オリーブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をわずかに含む
 2 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径10~30mmの黒褐色粘土をブロック状に少量含む 直径10~30mmのIX層をブロック状に多く含む
 3 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を多く含む 直径10~30mmの黒褐色粘土をブロック状に含む 直径10~30mmのIX層をブロック状に多く含む
 4 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりなし 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのIX層をブロック状に多く含む
 5 明オリーブ灰色シルト (2.5GY7/1) 粘性あり しまりなし 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmの黒褐色粘土をブロック状にわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をわずかに含む



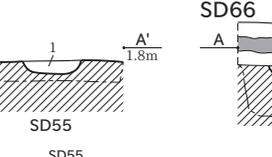
SD10
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのIX層をブロック状に少量含む



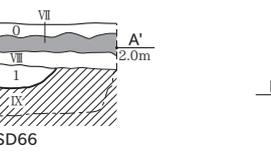
SD14
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのIX層をブロック状に含む
 2 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmのIX層をブロック状に多く含む



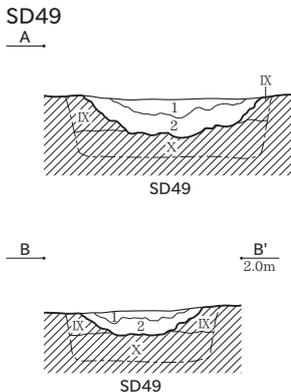
SD39
 1 褐灰色シルト (10YR6/1) 粘性・しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を少量含む



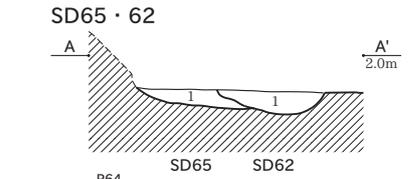
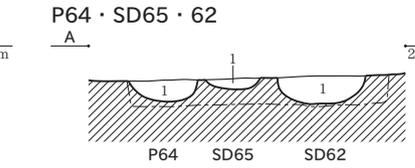
SD55
 1 黄灰色シルト (2.5Y5/1) 粘性・しまりあり 直径1~2mmの炭化物をやや多く含む マンガンを含む



SD66
 1 黄灰色シルト (2.5Y5/1) 粘性・しまりあり 直径3mmの炭化物を少量含む

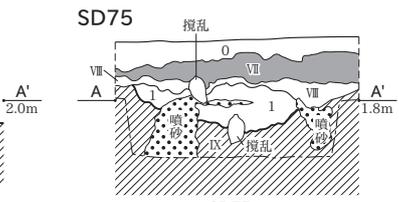


SD49
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのIX層をブロック状に多く含む
 2 褐灰色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む 直径10~30mmのIX層をブロック状に多く含む

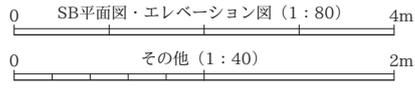


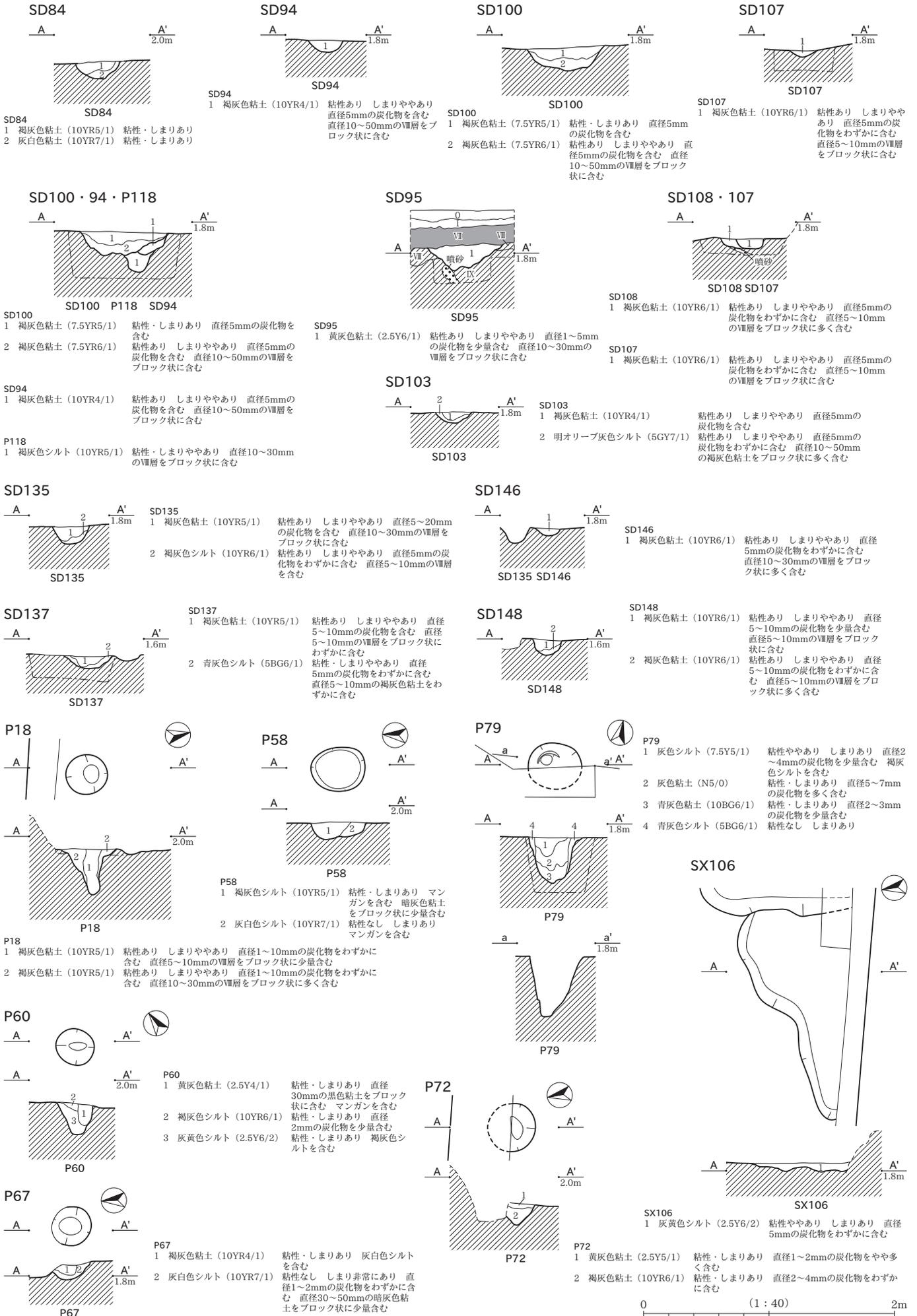
P64
 1 褐灰色シルト (10YR5/1) 粘性なし しまりあり 覆土上半に炭化物を少量含む
SD65
 1 灰色シルト (5Y6/1) 粘性ややあり しまりあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む
SD62
 1 灰色シルト (5Y6/1) 粘性・しまりあり 直径3mmの炭化物を少量含む
P74
 1 黄灰色シルト (2.5Y6/1) 粘性ややあり しまりあり 直径3~5mmの炭化物を少量含む マンガンを含む

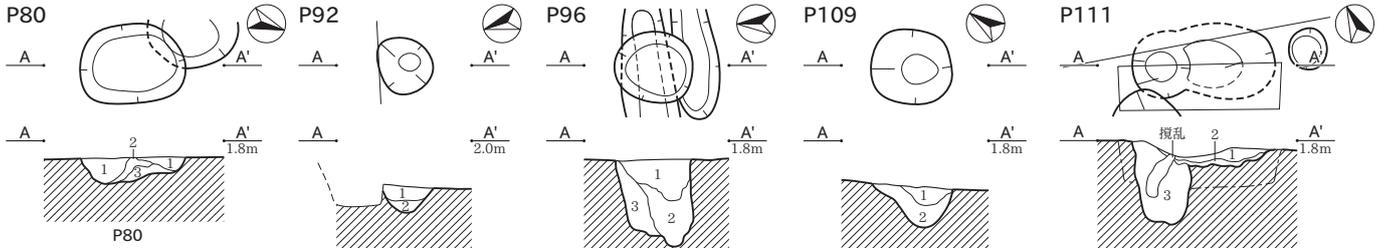
SK114
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのIX層をブロック状にわずかに含む
 2 褐灰色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmのIX層をブロック状に多く含む
 3 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性非常にあり しまりあり 直径5mmの炭化物を含む



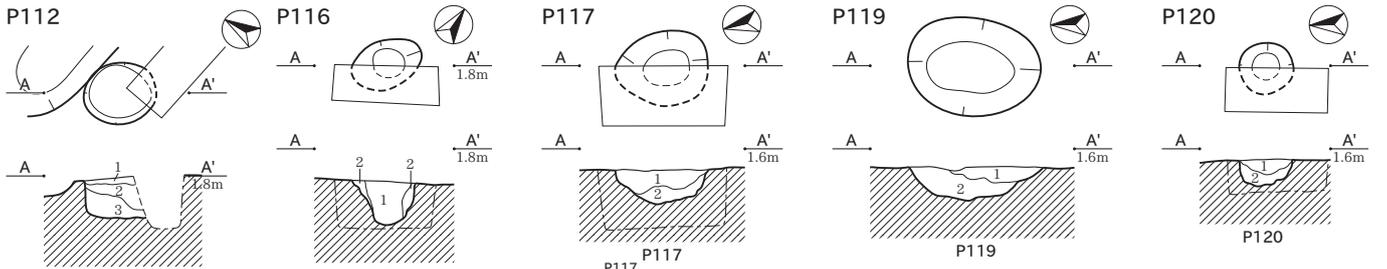
SD75
 1 灰色シルト (N6/0) 粘性ややあり しまりあり 直径1~5mmの炭化物を少量含む



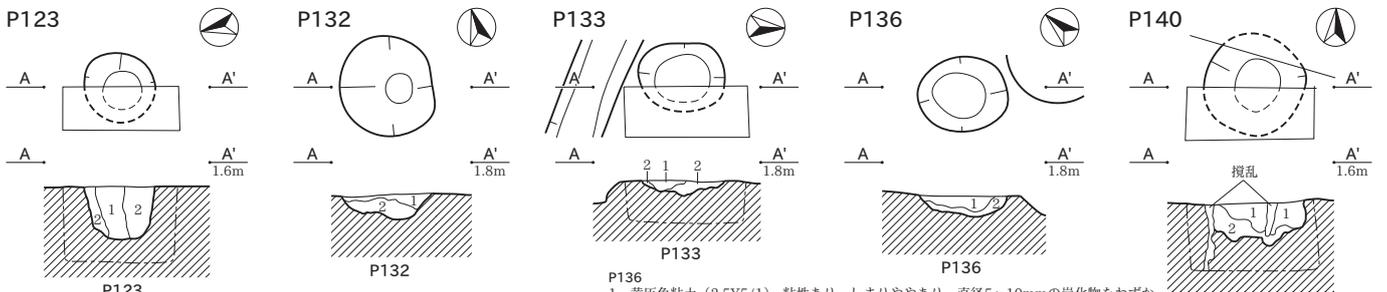




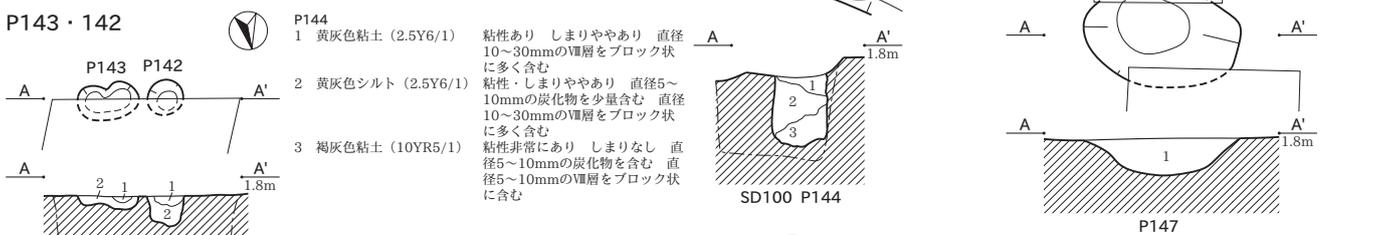
- P80**
 1 灰色シルト (5Y5/1) 粘性ややあり しまりあり 直径2~5mmの炭化物をやや多く含む 灰白色シルトを含む
 2 灰白色粘土 (7.5Y7/1) 粘性・しまりあり
 3 灰白色シルト (10Y7/1) 粘性・しまりあり
- P92**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性・しまりあり 直径1~2mmの炭化物を少量含む 灰白色シルトを含む
 2 灰色粘土 (5Y6/1) 粘性・しまりあり 直径1~2mmの炭化物をわずかに含む
- P96**
 1 灰色粘土 (10Y6/1) 粘性・しまりあり 直径1~2mmの炭化物を少量含む 焼土粒をわずかに含む
 2 灰色粘土 (10Y4/1) 粘性・しまりあり 直径5mmの炭化物を少量含む
 3 明青灰色シルト (5BG7/1) 粘性・しまりややあり
- P109**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
 2 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりなし 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P111**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性・しまりあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状にわずかに含む
 2 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に多く含む
 3 褐灰色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む



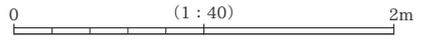
- P112**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性・しまりあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む
 2 褐灰色粘土 (10YR6/1) 粘性ややあり しまりあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~50mmのⅦ層をブロック状に含む
 3 灰黄褐色粘土 (10YR6/2) 粘性ややあり しまりあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~50mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P116**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む
 2 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P117**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む
 2 明オリーブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をブロック状に含む
- P119**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む
 2 明オリーブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をブロック状に含む
- P120**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む
 2 明オリーブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をブロック状に含む

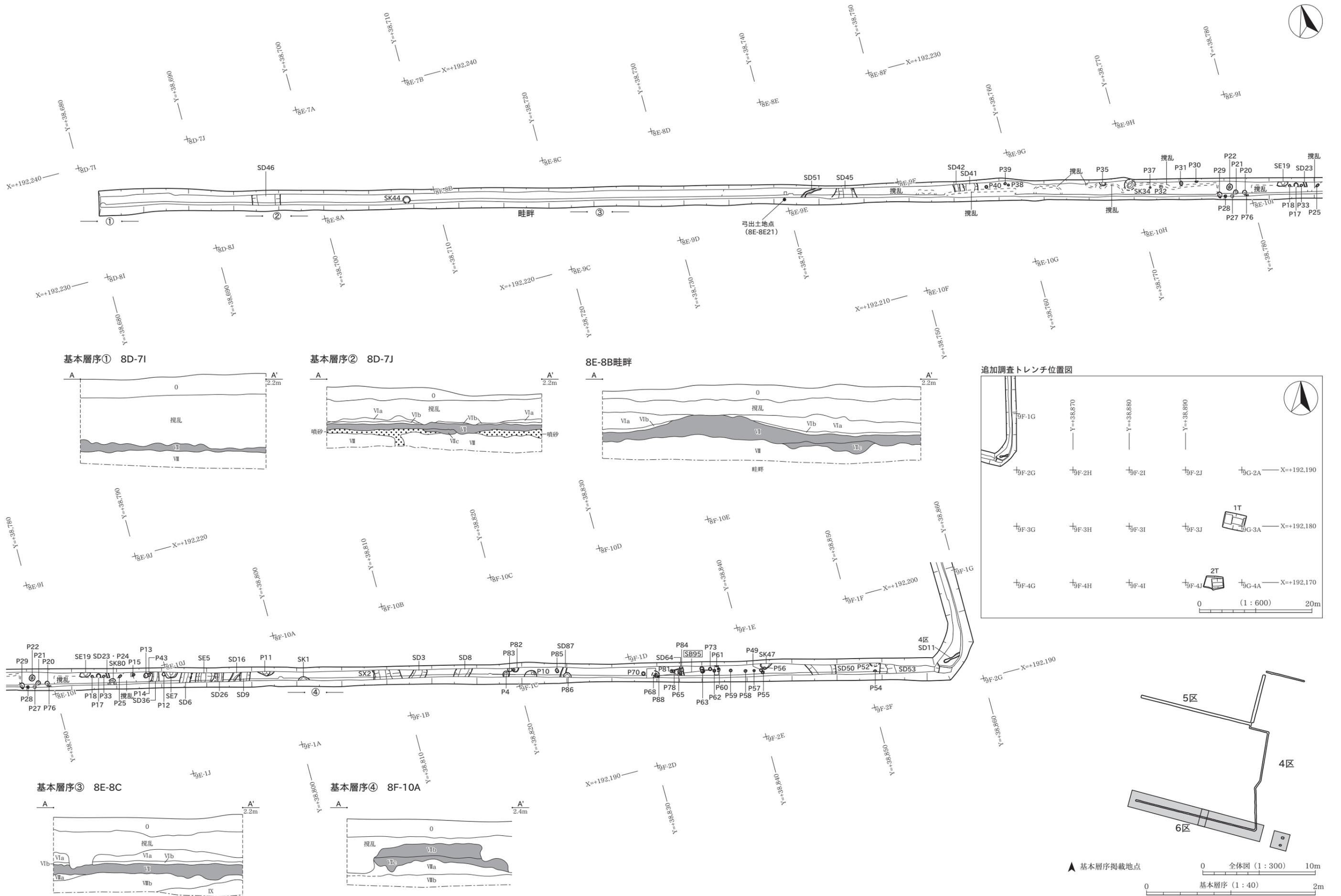


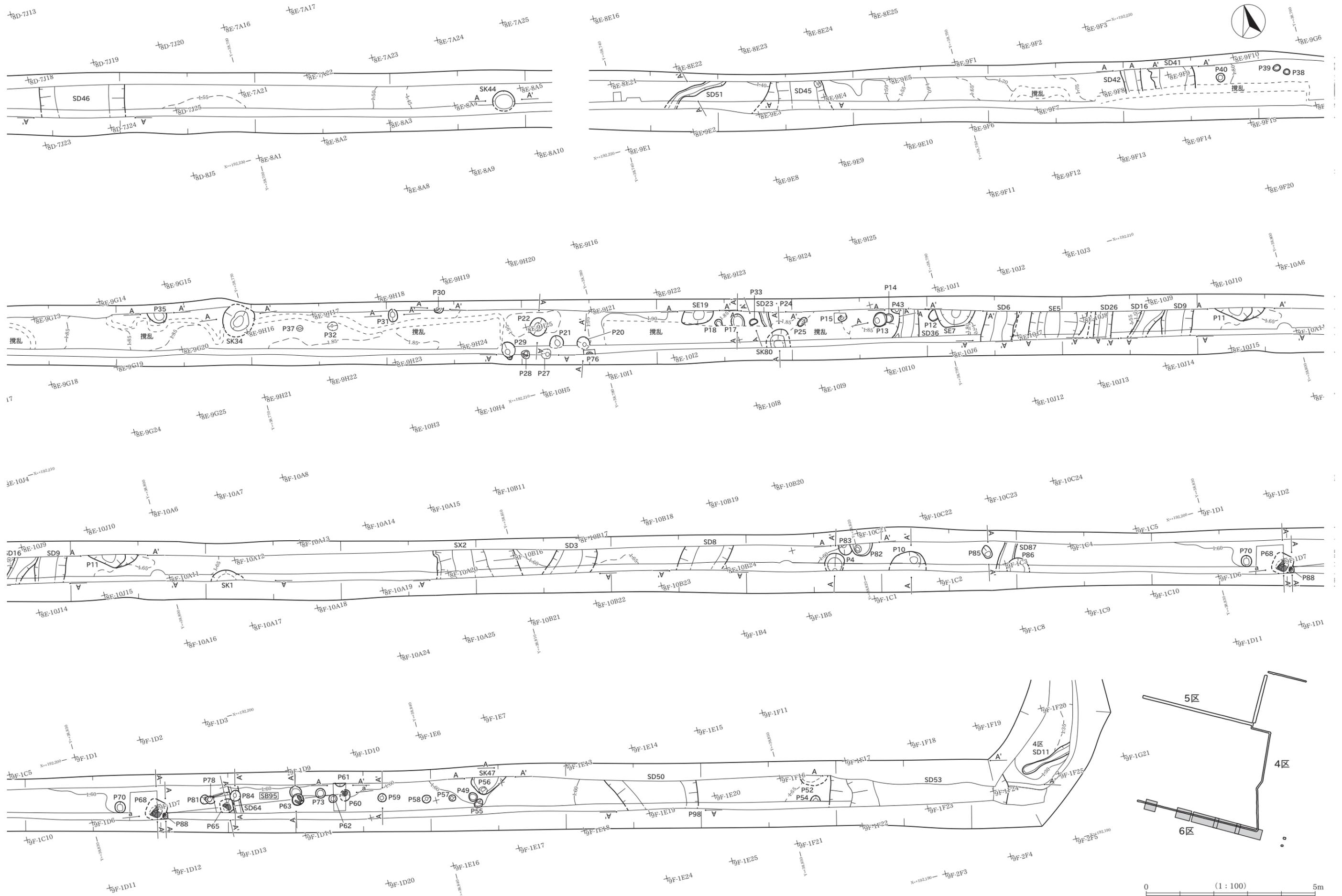
- P123**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物を含む
 2 明オリーブ灰色シルト (5GY7/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径5~10mmの褐灰色粘土をブロック状に含む
- P132**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
 2 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~50mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P133**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状にわずかに含む
 2 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
- P136**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
 2 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~50mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P140**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
 2 黄灰色シルト (2.5Y6/1) 粘性・しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を少量含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む



- P143・142**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
 2 黄灰色シルト (2.5Y6/1) 粘性・しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を少量含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
 3 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性非常にあり しまりなし 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む
- P144**
 1 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に含む
 2 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5mmの炭化物をわずかに含む 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P147**
 1 褐灰色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物をわずかに含む
- P149**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に少量含む
 2 褐灰色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりややあり 直径10~30mmのⅦ層をブロック状に多く含む
- P143**
 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に少量含む
 2 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 直径5~10mmの炭化物を含む 直径5~10mmのⅦ層をブロック状に含む

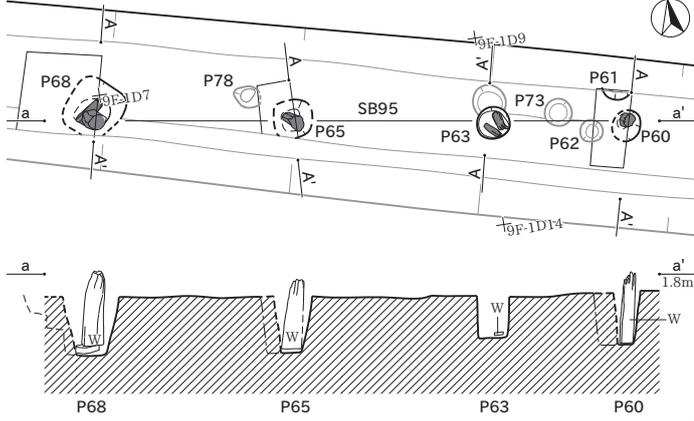




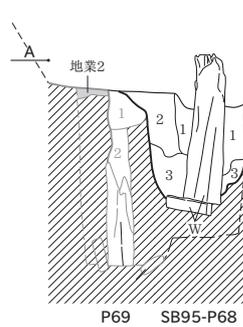


0 (1:100) 5m

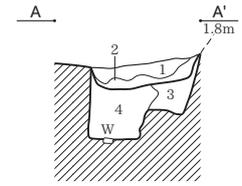
SB95



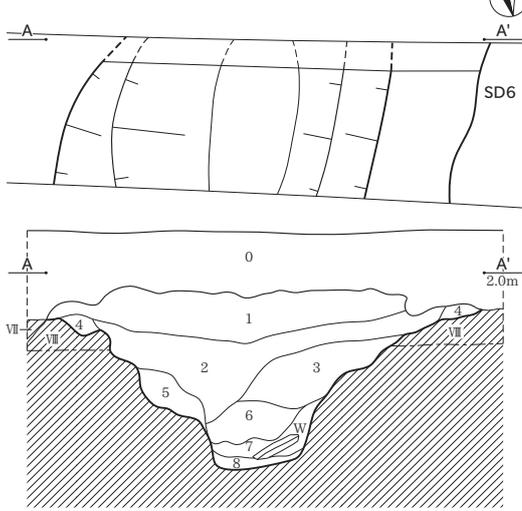
SB95-P68



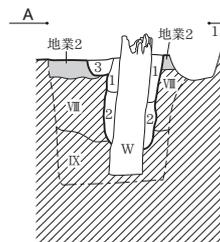
SB95-P63



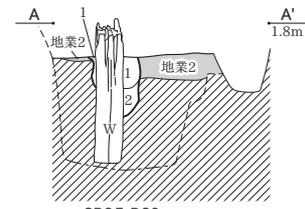
SE5



SB95-P65



SB95-P60



SB95-P60

- 1 黄灰色粘土 (2.5Y4/1)
- 2 褐灰色シルト (10YR6/1)
- 3 灰黄色シルト (2.5Y6/2)

粘性・しまりあり マンガンを砂状に少量含む 黒色粘土をブロック状に含む 木の根の痕か
 粘性・しまりあり 直径2mmの炭化物を少量含む
 粘性・しまりあり 褐灰色シルトを含む

地業2 暗褐色シルト質粘土 (7.5YR3/3) 粘性ややあり しまり非常にあり 炭化物を少量含む VII層をブロック状にやや多く含む マンガン多く含む

SE5

- 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性ややあり しまりあり
- 2 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 灰色粘土をブロック状に少量含む
- 3 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 腐植を多く含む
- 4 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりあり 灰白色粘土をブロック状に少量含む
- 5 灰白色粘土 (10YR7/1) 粘性非常にあり しまりあり 灰色粘土をブロック状に少量含む
- 6 灰色粘土 (7.5Y6/1) 粘性あり しまりあり 腐植を多く含む
- 7 灰色粘土 (7.5Y6/1) 粘性あり しまりあり 腐植を多く含む 灰白色粘土を少量含む
- 8 灰色粘土 (7.5Y4/1) 粘性非常にあり しまりあり 腐植を含まず ち密な粘土

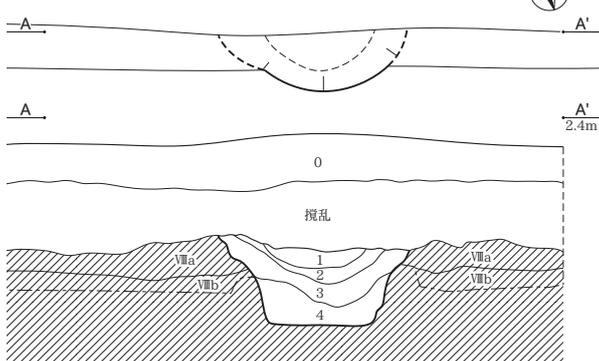
SE7

- 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 粘性ややあり しまりあり 褐色細砂を多く含む 直径5mmの炭化物を少量含む
- 2 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりあり
- 3 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりあり 直径20~30mmの灰黄色シルトをブロック状に少量含む
- 4 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 粘性あり しまりあり 直径5mmの灰色シルトをブロック状に少量含む
- 5 黒褐色シルト (2.5Y3/2) 粘性なし しまりあり 腐植を多く含む
- 6 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 粘性・しまりあり
- 7 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 粘性・しまりあり 灰白色粘土をブロック状に含む

P12

- 1 灰色粘土 (5Y5/1) 粘性あり しまり非常にあり 黒褐色粘土と灰黄色シルトをブロック状に少量含む

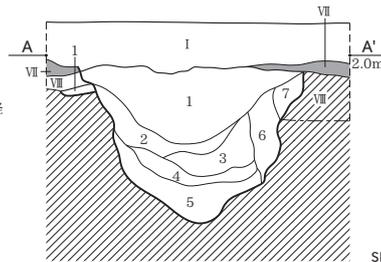
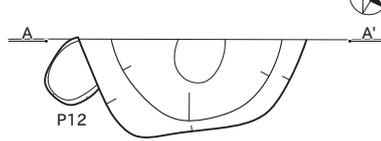
SK1



SK1

- 1 灰色シルト質粘土 (5Y4/1) 粘性あり しまりあり
- 2 灰色シルト質粘土 (5Y5/1) 粘性あり しまりややあり 粗砂と腐植を多く含む
- 3 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりふつう 腐植を多く含む
- 4 暗灰色粘土 (N3/0) 粘性あり しまりあり 粒子の細かい直径2mm以下の灰色粘土を少量含む

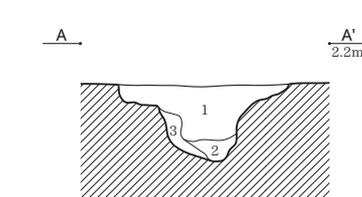
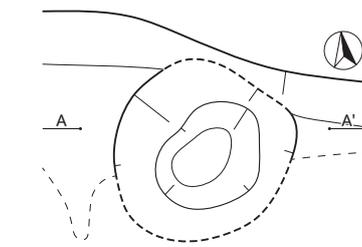
SE7



P12

- 1 灰色粘土 (5Y5/1) 粘性あり しまり非常にあり 黒褐色粘土と灰黄色シルトをブロック状に少量含む

SK34



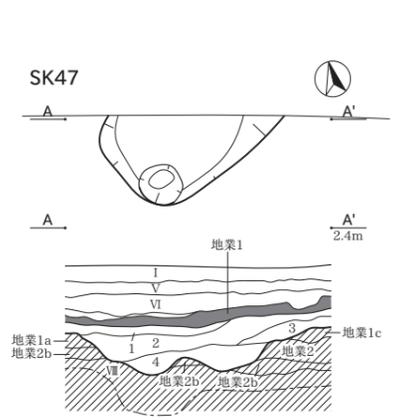
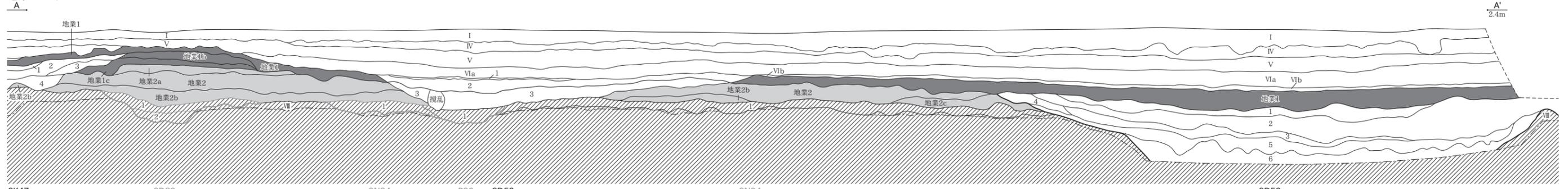
SK34

- 1 灰色シルト (10Y4/1) 粘性あり しまり非常にあり 直径50mmのVII層をブロック状に多く含む 直径2~3mmの炭化物を少量含む
- 2 灰黄色粘土 (2.5Y7/2) 粘性・しまりあり 灰色シルトを層状に少量含む
- 3 灰黄色粘土 (2.5Y7/2) 粘性・しまりあり マンガンを少量含む

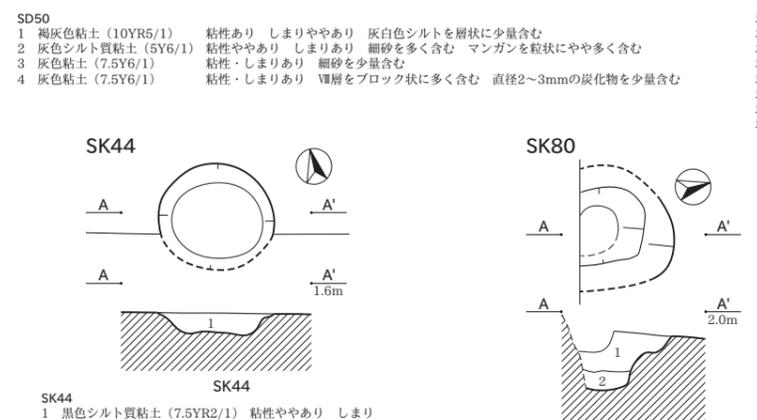
0 SB平面図・エレベーション図 (1:80) 4m

0 その他 (1:40) 2m

地業1・2、SD50・53



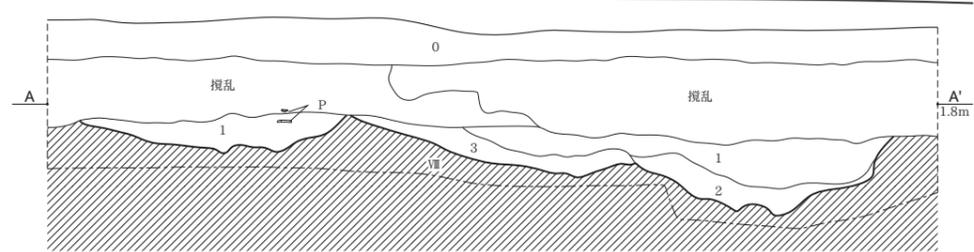
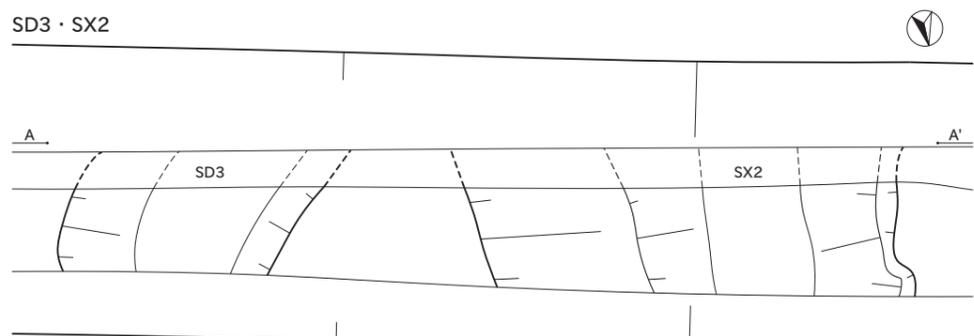
- SK47**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR1.7/1) 粘性ややあり しまりあり炭化物多く含む
 - 2 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまりあり炭化物を多く含む VII層をブロック状に少量含む
 - 3 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/1) 粘性ややあり しまりあり VII層をブロック状に多く含む
 - 4 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR2/2) 粘性・しまりあり
- SK44**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまりあり VII層をブロック状に多く含む 細砂をブロック状に少量含む



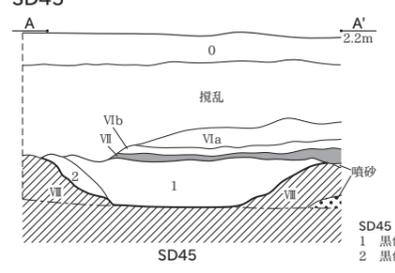
- SK80**
- 1 灰黄褐色シルト質粘土 (10YR6/2) 粘性・しまりあり 灰粘土を多く含む 粘性・しまりあり直径2~3mmの炭化物を少量含む
 - 2 褐色粘土 (10YR5/1)

- 地業1** 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/1) 粘性ややあり しまり非常にあり 炭化物を少量含む VII層をブロック状にわずかに含む
- 地業1a** 黒色シルト質粘土 (7.5YR1.7/1) 粘性なし しまりあり 炭化物を多く含む
- 地業1b** 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまり非常にあり 炭化物を多く含む VII層をわずかに含む
- 地業1c** 黒色シルト質粘土 (7.5YR1.7/1) 粘性なし しまりあり 炭化物を非常に多く含む 灰粘土を薄い層状に含む
- 地業2** 暗褐色シルト質粘土 (7.5YR3/3) 粘性ややあり しまり非常にあり 炭化物を少量含む VII層をブロック状にやや多く含む マンガン多く含む
- 地業2a** 極暗褐色シルト質粘土 (7.5YR2/3) 粘性ややあり しまり非常にあり 炭化物を少量含む VII層をブロック状に少量含む マンガン多く含む
- 地業2b** 極暗褐色シルト質粘土 (7.5YR2/3) 粘性あり しまりあり 炭化物を少量含む VII層をブロック状に少量含む マンガン多く含む
- 地業2c** 褐色シルト質粘土 (7.5YR4/1) 粘性非常にあり しまりあり VII層をブロック状に多く含む マンガンを多く含む

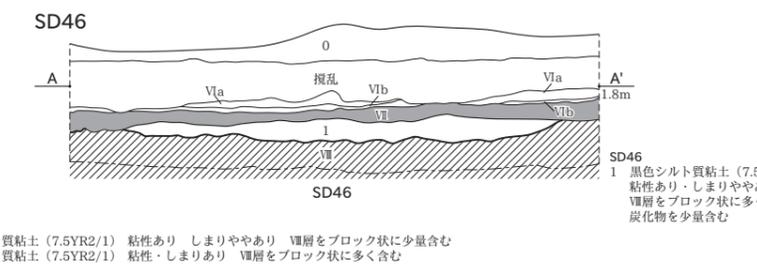
- SD53**
- 1 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/2) 粘性・しまりあり VII層をブロック状にわずかに含む
 - 2 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/1) 粘性非常にあり しまりややあり VII層をブロック状に多く含む 黒色シルトをブロック状に少量含む
 - 3 極暗褐色シルト質粘土 (7.5YR2/3) 粘性ややあり しまり非常にあり 炭化物を多く含む
 - 4 褐色シルト質粘土 (7.5YR4/1) 粘性・しまりあり 黒色シルトをブロック状に多く含む
 - 5 黒色シルト質粘土 (7.5YR1.7/1) 粘性なし しまりややあり 炭化物を非常に多く含む
 - 6 褐色粘土 (5YR4/1) 粘性非常にあり しまりややあり



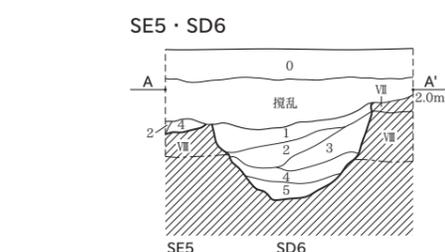
- SD3**
- 1 褐色シルト質粘土 (7.5YR4/1) 粘性ややあり しまりあり 炭化物を少量含む
- SX2**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまりあり
 - 2 黒色シルト質粘土 (7.5YR1.7/1) 粘性・しまりややあり VII層をブロック状に含む
 - 3 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/2) 粘性ややあり しまり非常にあり 地山をブロック状に少量含む 炭化物を少量含む



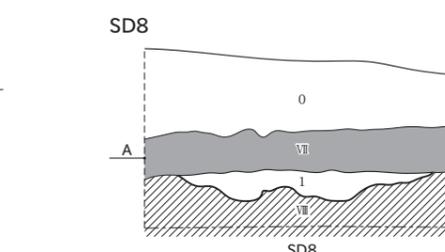
- SD45**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性あり しまりややあり VII層をブロック状に少量含む
 - 2 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性・しまりあり VII層をブロック状に多く含む



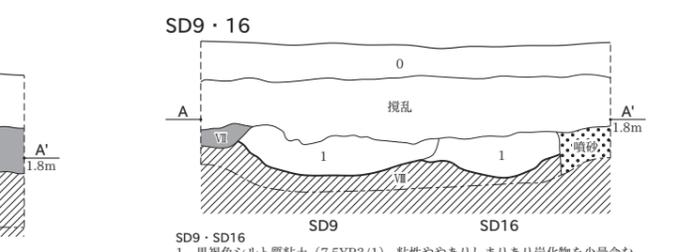
- SD46**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性あり しまりややあり VII層をブロック状に多く含む 炭化物を少量含む



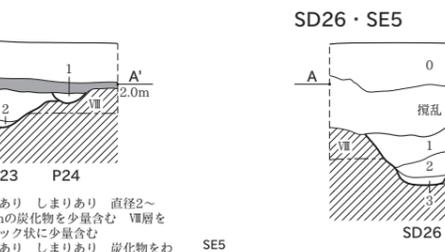
- SE5**
- 1 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 灰粘土をブロック状に少量含む
 - 2 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりあり 灰白色粘土をブロック状に少量含む
- SD6**
- 1 褐色粘土 (7.5YR5/1) 粘性あり しまりややあり 灰粘土を多く含む
 - 2 黒色シルト質粘土 (2.5Y2/1) 粘性・しまりあり 直径5mmの灰粘土をブロック状に少量含む マンガンを少量含む
 - 3 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性・しまりあり
 - 4 黒色粘土 (7.5Y2/1) 粘性あり しまり非常にあり 明灰色粘土をブロック状に少量含む



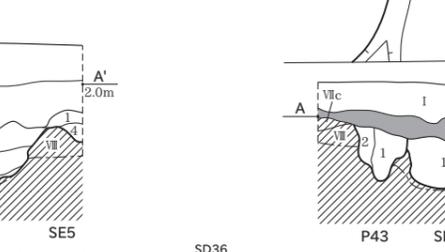
- SD8**
- 1 褐色シルト質粘土 (7.5YR4/1) 粘性・しまりあり 炭化物を少量含む



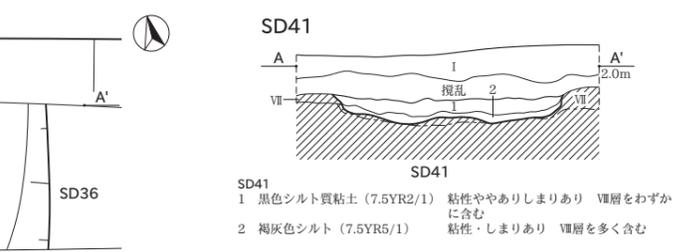
- SD9・SD16**
- 1 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/1) 粘性ややあり しまりあり 炭化物を少量含む SD9と16は同時期とみられる



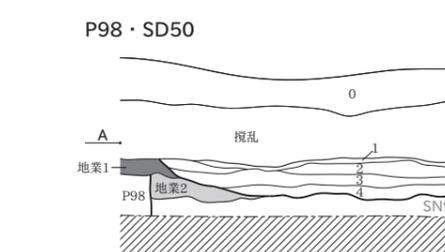
- SD23**
- 1 灰色シルト (7.5Y5/1) 粘性あり しまりあり 直径2~5mmの炭化物を少量含む VII層をブロック状に少量含む
 - 2 褐色粘土 (10YR6/1) 粘性あり しまりあり 炭化物をわずかに含む 褐色細砂を少量含む
- P24**
- 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性あり しまりあり 炭化物と直径3mmのVII層をブロック状に少量含む



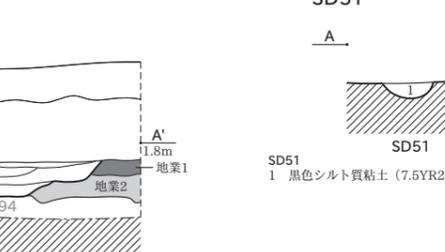
- SE5**
- 1 褐色粘土 (10YR5/1) 粘性ややあり しまりあり
 - 2 褐色粘土 (10YR4/1) 粘性あり しまりあり 灰白色粘土をブロック状に少量含む
- SD26**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまりあり VII層をブロック状に少量含む
 - 2 黒色シルト質粘土 (7.5YR1.7/1) 粘性・しまりややあり
 - 3 褐色シルト (7.5YR4/1) 粘性あり しまりなし



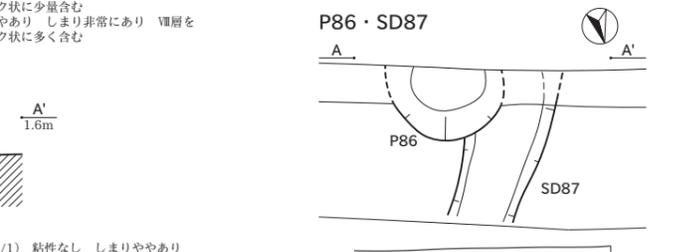
- P43**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまり非常にあり VII層をブロック状に少量含む
 - 2 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性ややあり しまり非常にあり VII層をブロック状に多く含む
- SD36**
- 1 灰色粘土 (5Y5/1) 粘性・しまり非常にあり VII層をブロック状に少量含む 直径1~2mmの炭化物を少量含む



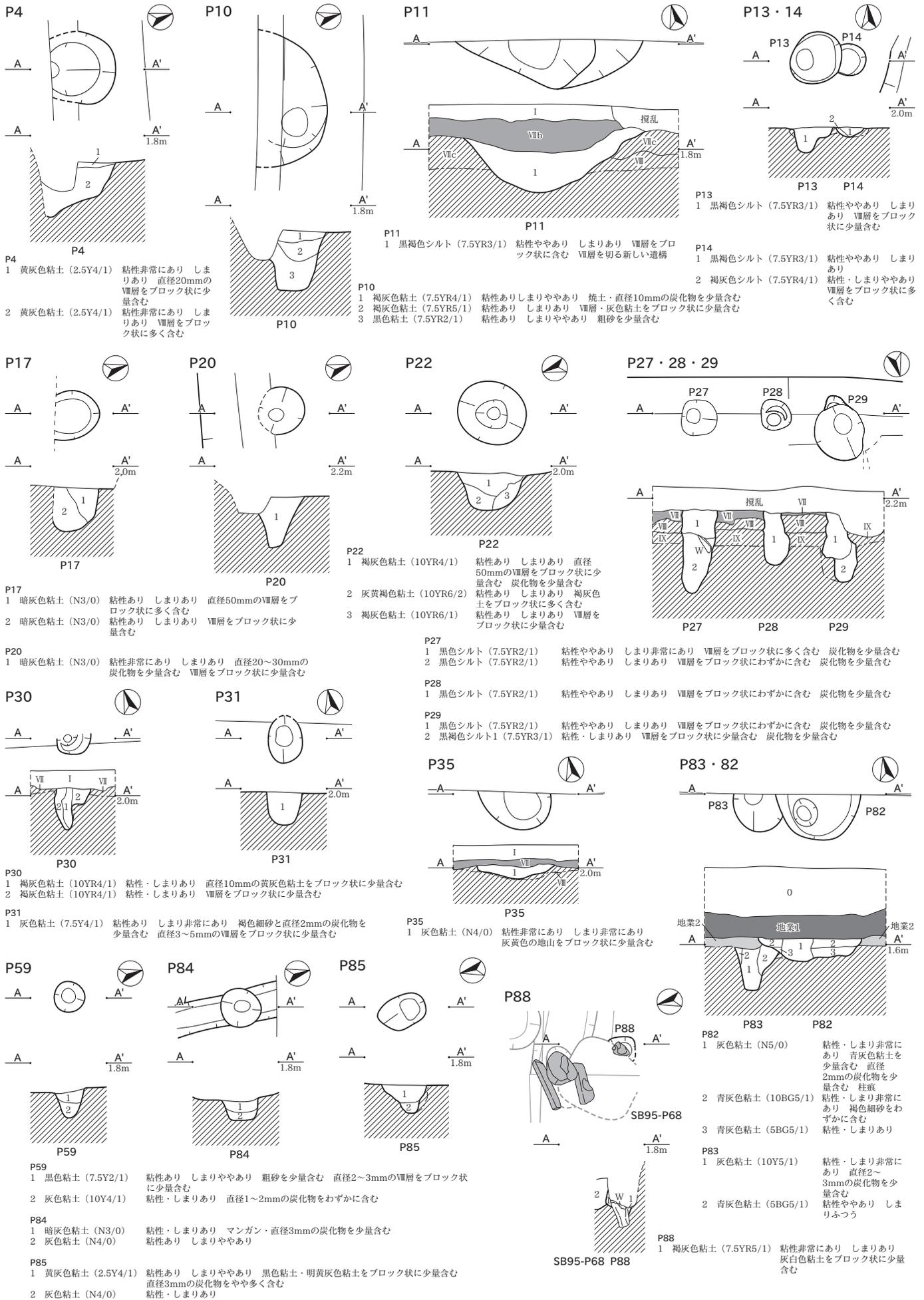
- P98**
- 1 灰色粘土 (10Y5/1) 粘性あり しまりやや弱 小砂利を含む

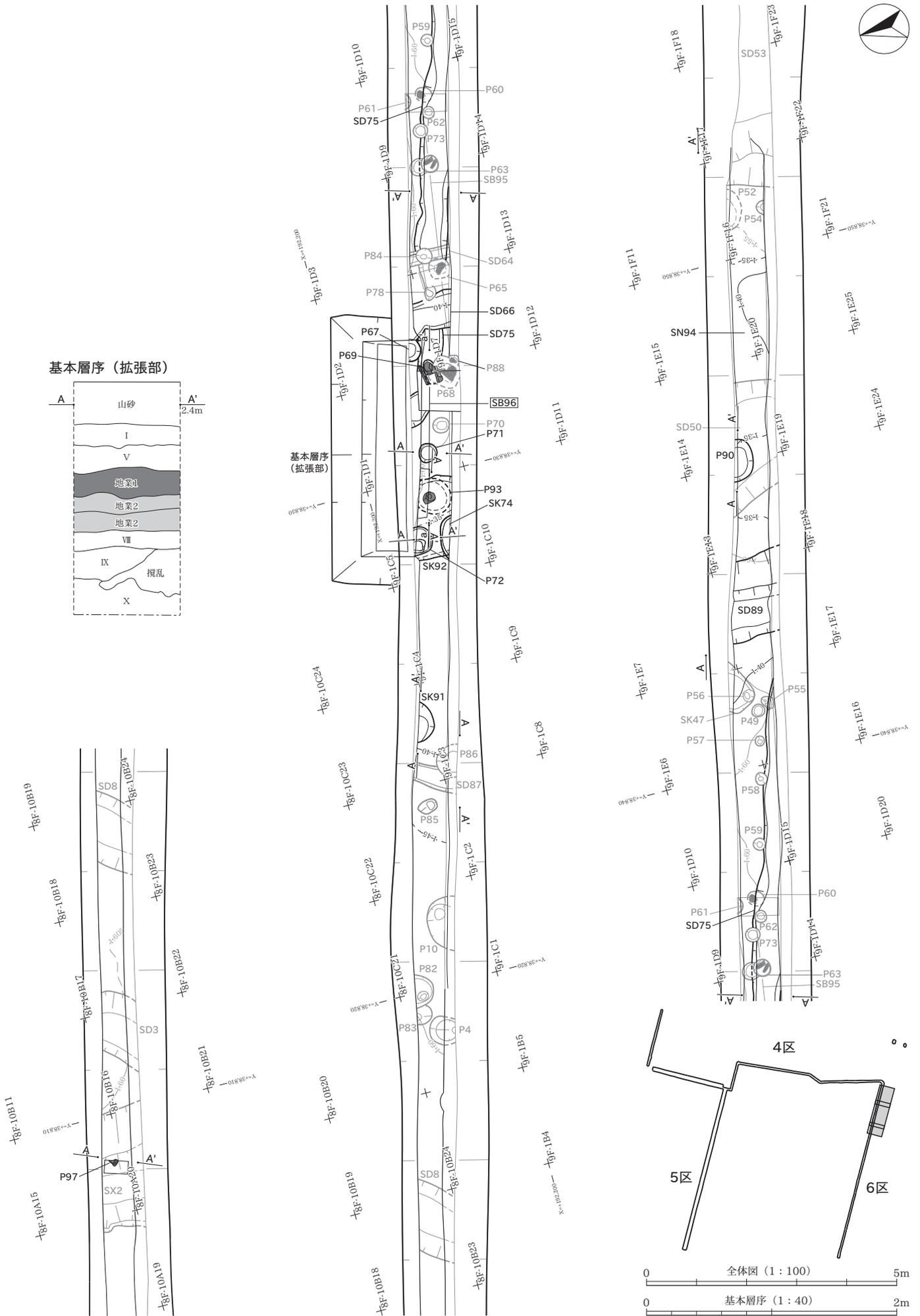


- SD51**
- 1 黒色シルト質粘土 (7.5YR2/1) 粘性なし しまりややあり VII層を削って入る噴砂の砂をブロック状に少量含む

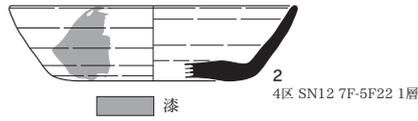
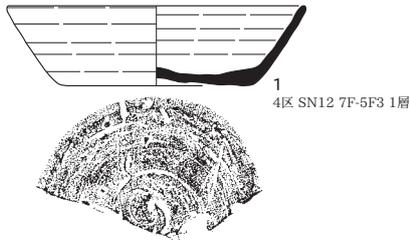


- P86**
- 1 黒色シルト質粘土 (10Y2/1) 粘性ややあり しまりあり 灰粘土をブロック状に少量含む
- SD87**
- 1 灰色粘土 (10Y5/1) 粘性非常にあり しまりあり 直径2~3mmの炭化物を少量含む 褐色細砂をやや多く含む

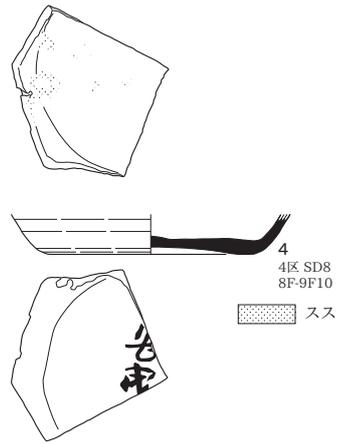




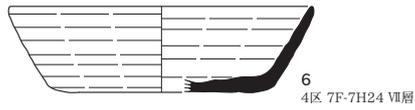
4区 SN12 (1・2)



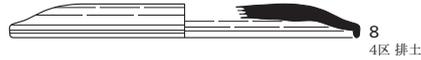
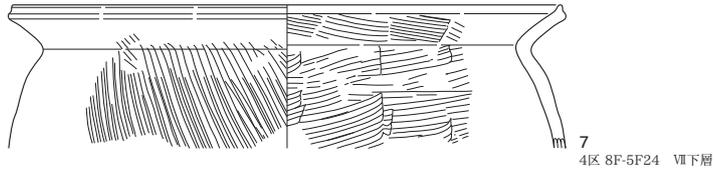
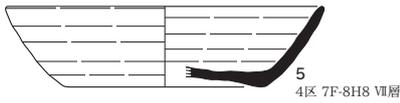
4区 SD8 (4)



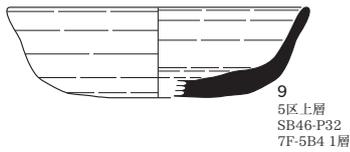
4区 SN14 (3)



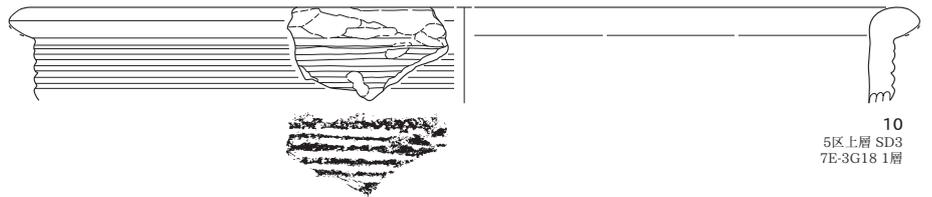
4区 遺構外 (5~8)



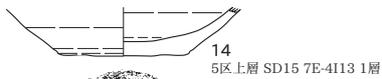
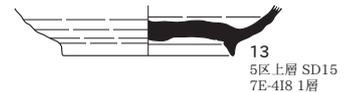
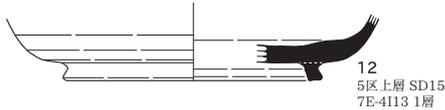
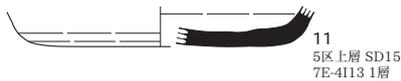
5区上層 SB46-P32 (9)



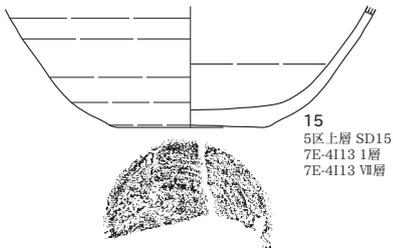
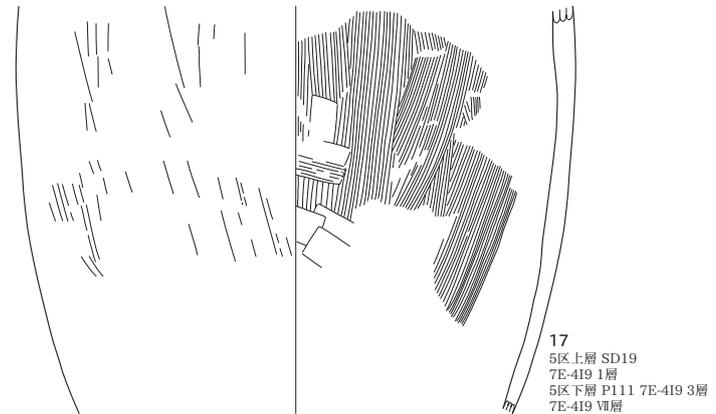
5区上層 SD3 (10)



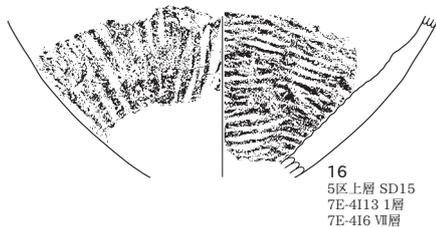
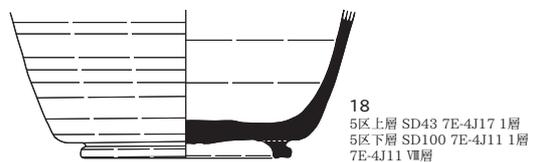
5区上層 SD15 (11~16)



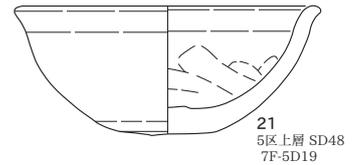
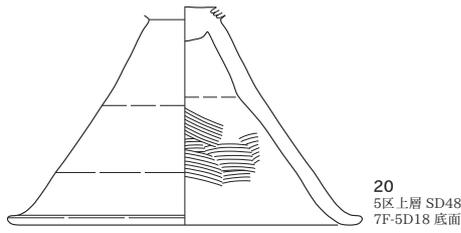
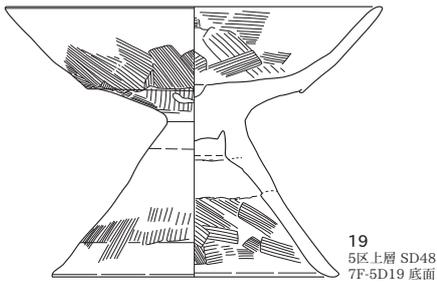
5区上層 SD19 (17)



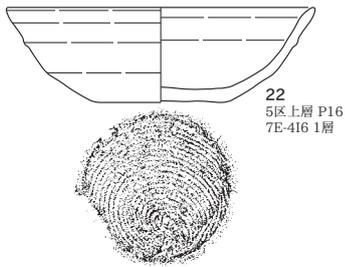
5区上層 SD43 (18)



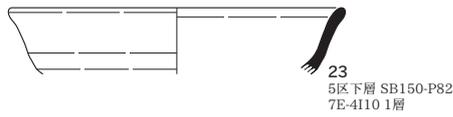
5区上層 SD48 (19~21)



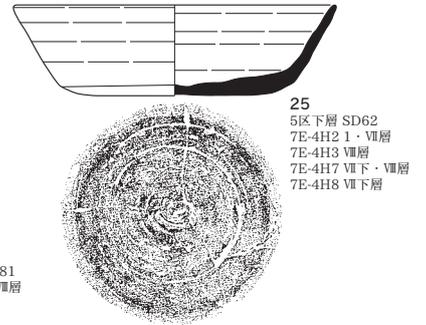
5区上層 P16 (22)



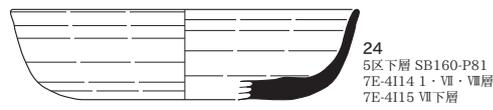
5区下層 SB150-P82 (23)



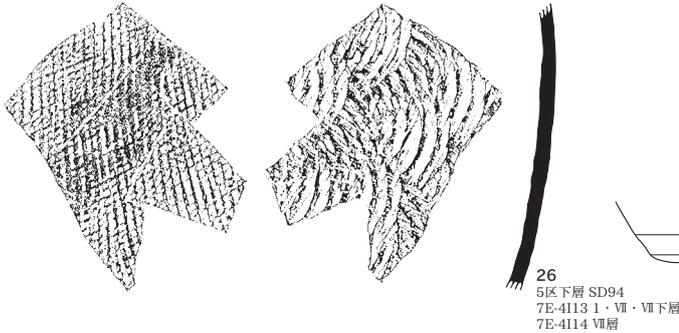
5区下層 SD62 (25)



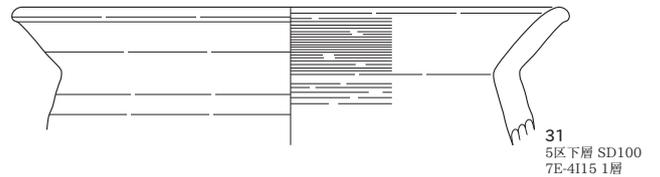
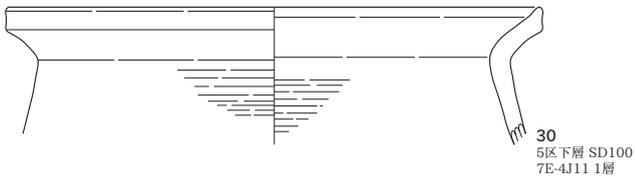
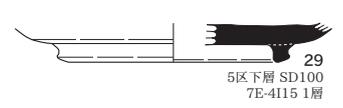
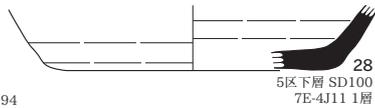
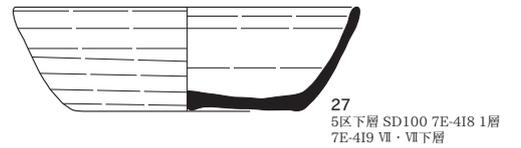
5区下層 SB160-P81 (24)



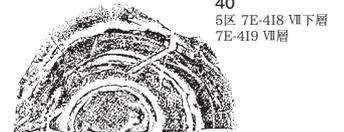
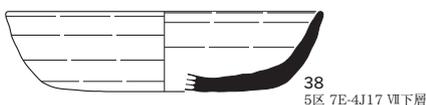
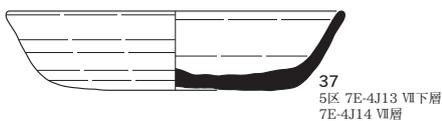
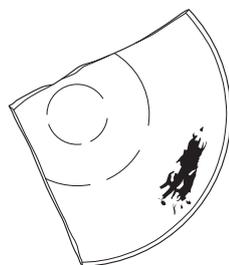
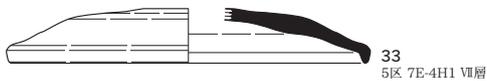
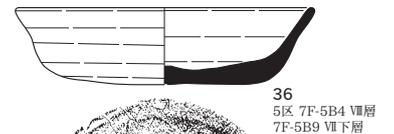
5区下層 SD94 (26)



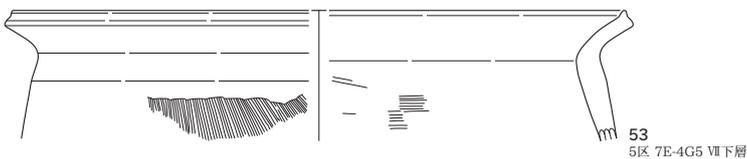
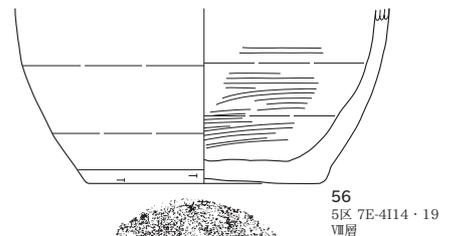
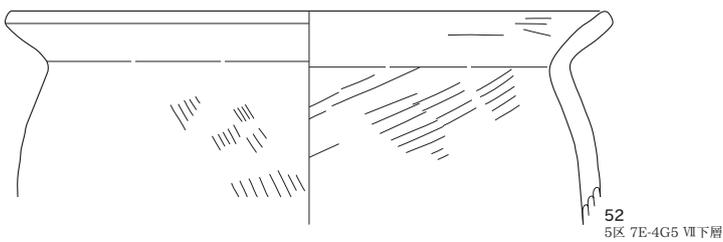
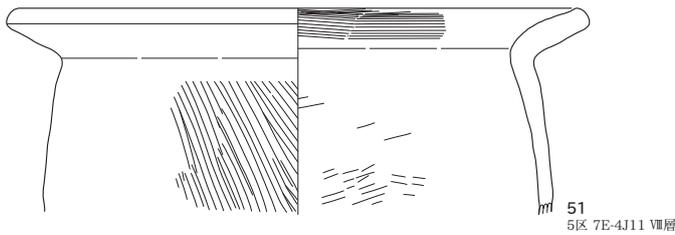
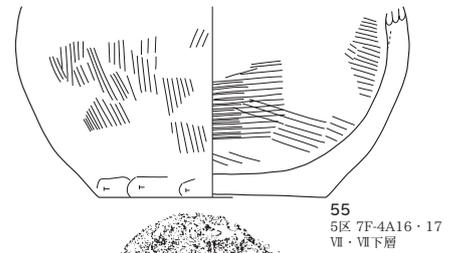
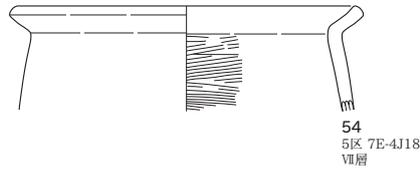
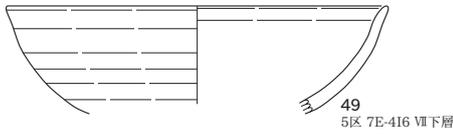
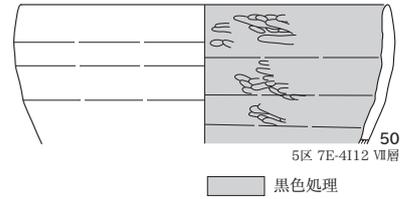
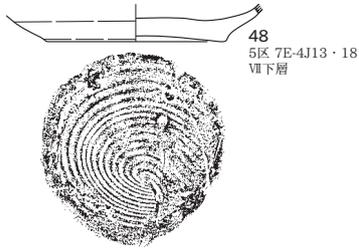
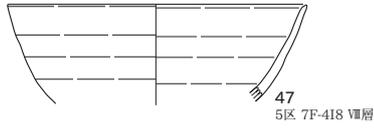
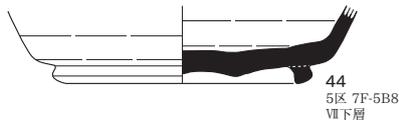
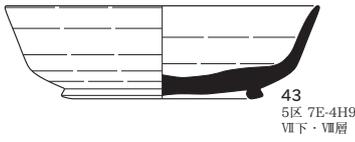
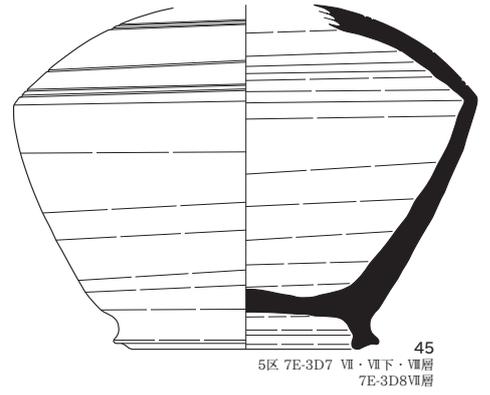
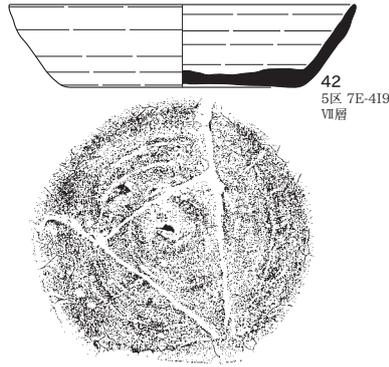
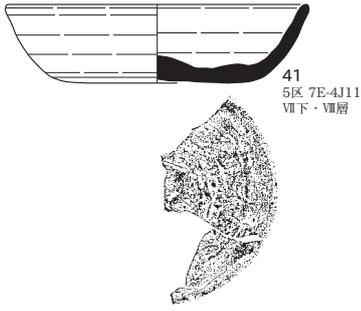
5区下層 SD100 (27~31)



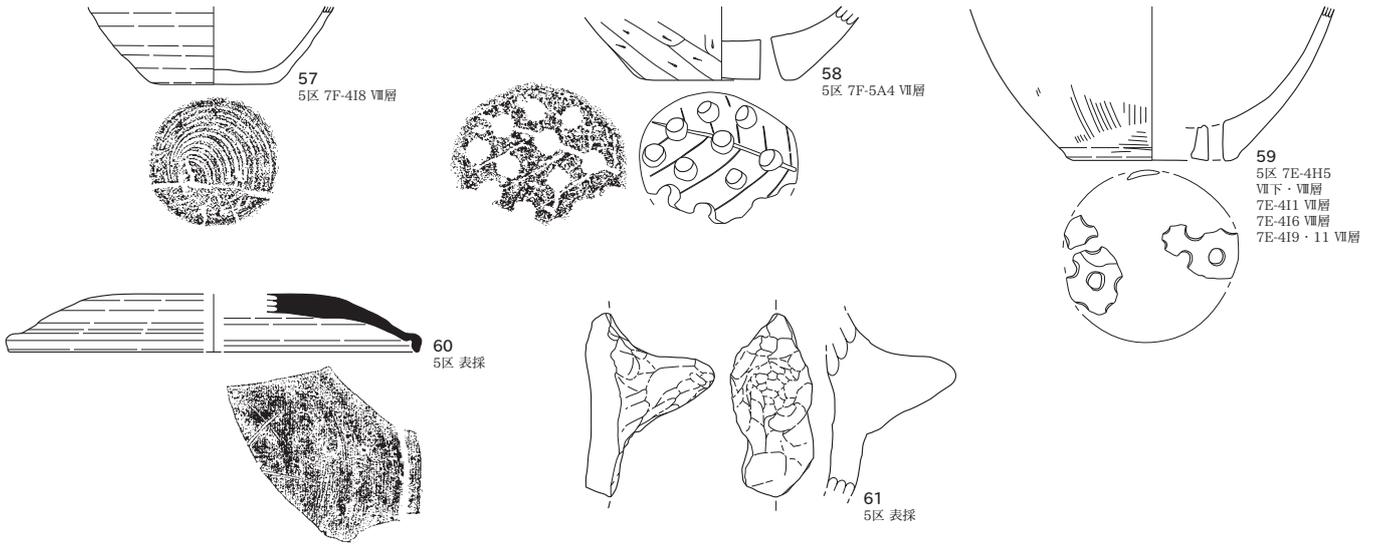
5区 遺構外 (32~40)



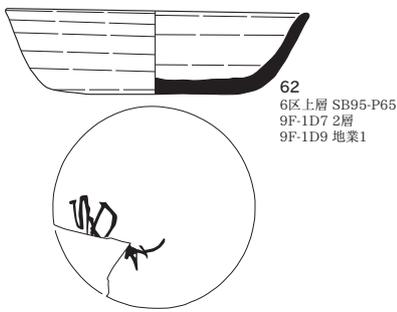
5 区 遺構外 (41~56)



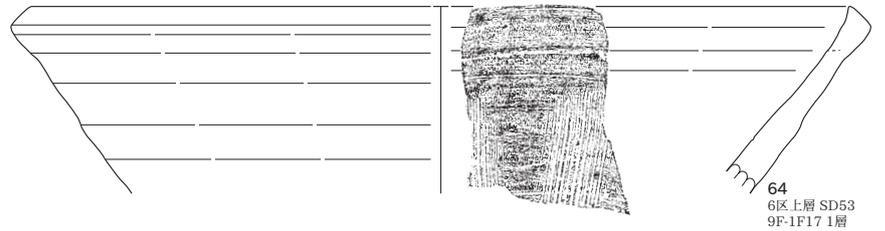
5区 遺構外 (57~61)



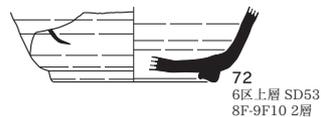
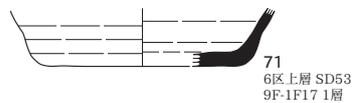
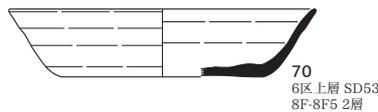
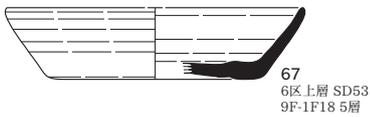
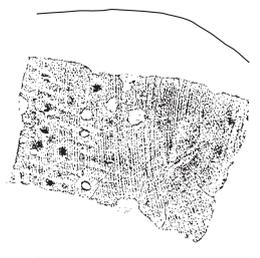
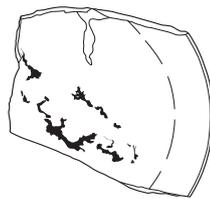
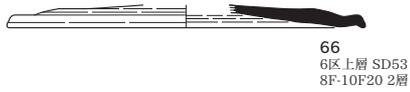
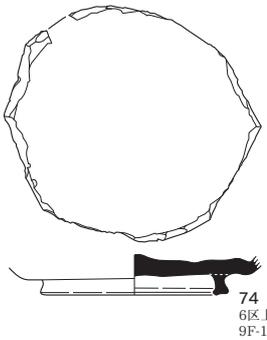
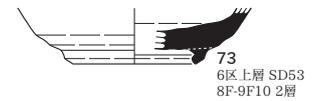
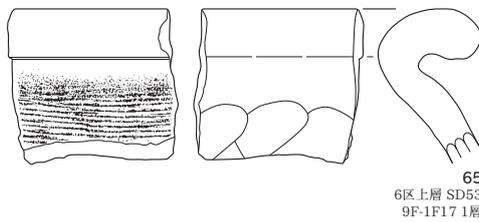
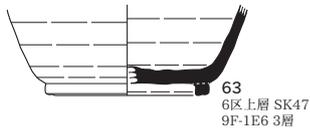
6区上層 SB95-P65 (62)



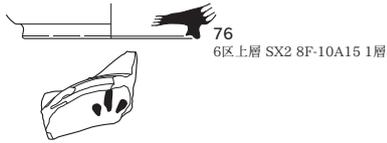
6区上層 SD53 (64~75)



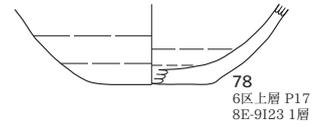
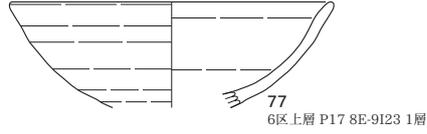
6区上層 SK47 (63)



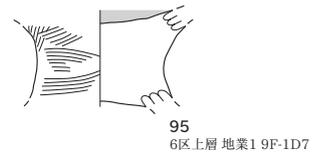
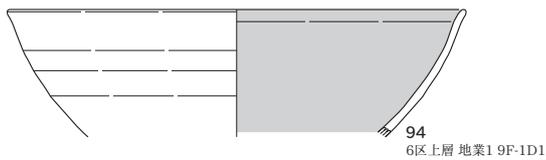
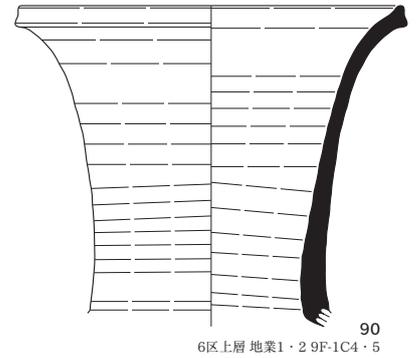
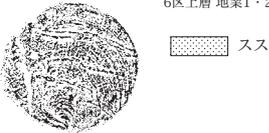
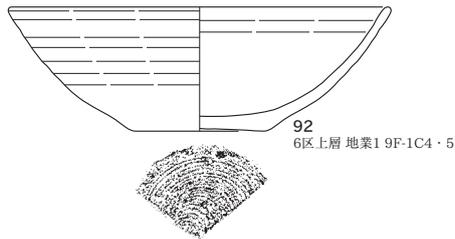
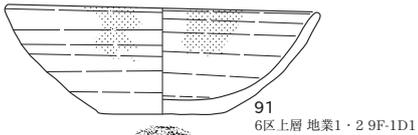
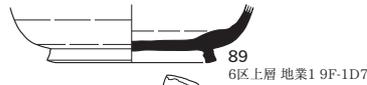
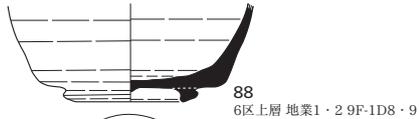
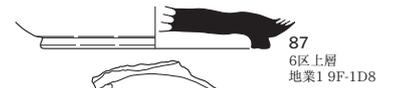
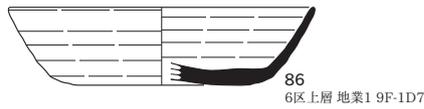
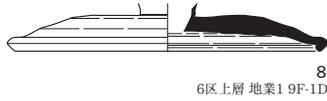
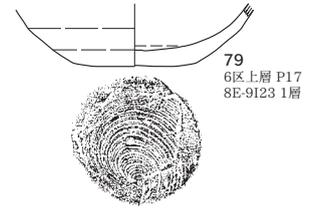
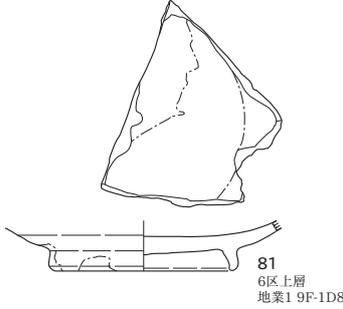
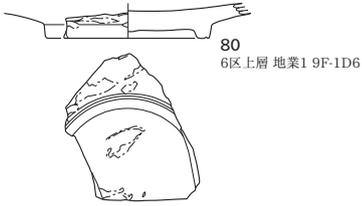
6区上層 SX2 (76)



6区上層 P17 (77~79)

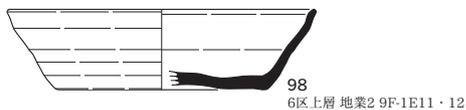
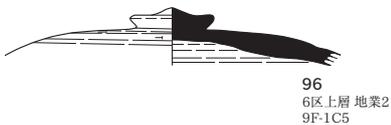


6区上層 地業1・2 (80~99)

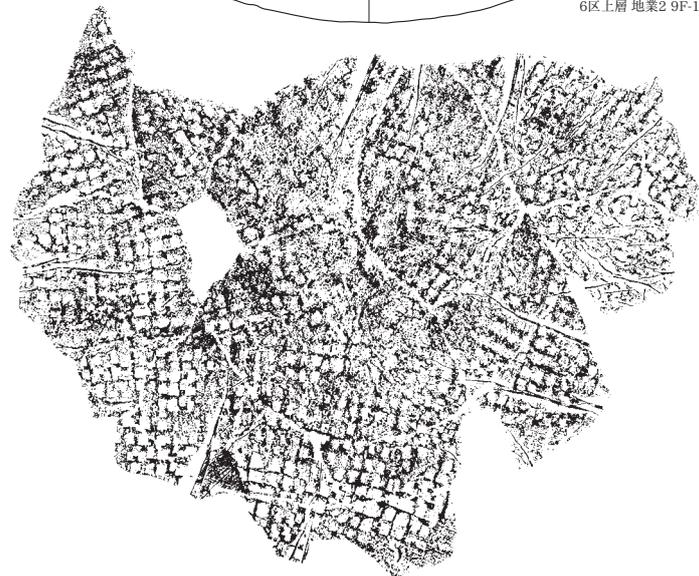
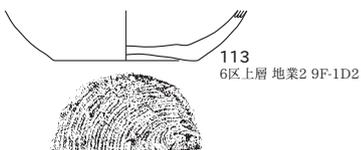
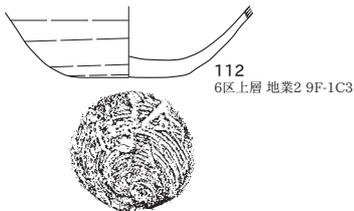
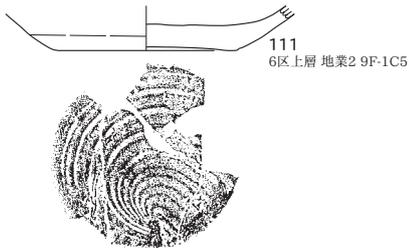
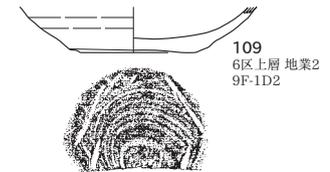
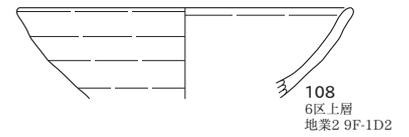
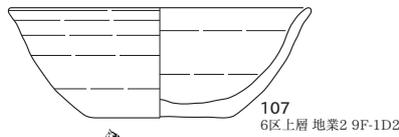
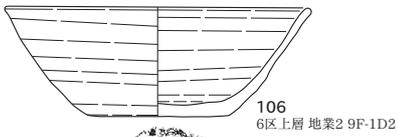
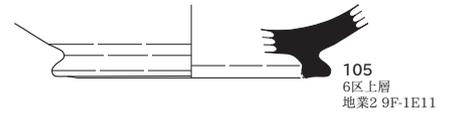
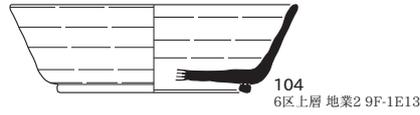
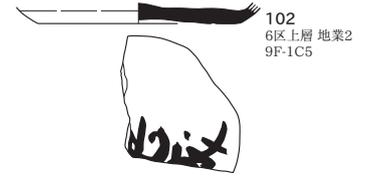


黒色処理

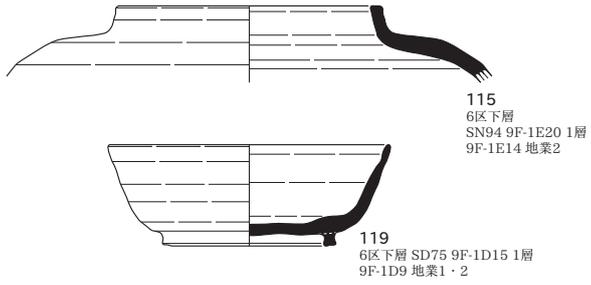
黒色処理



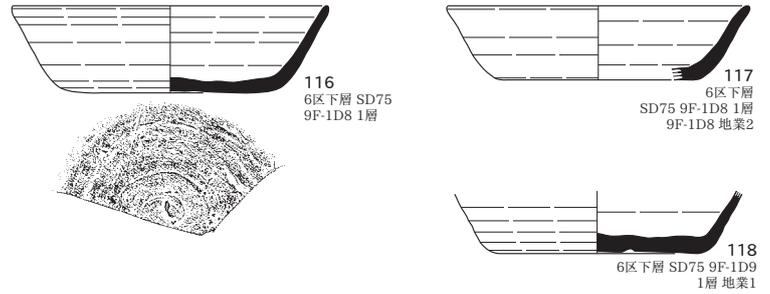
6区上層 地業1・2 (100~114)



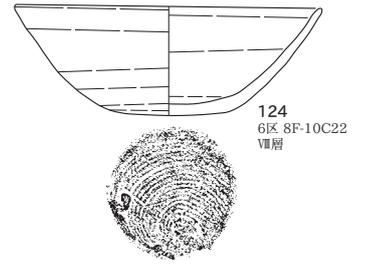
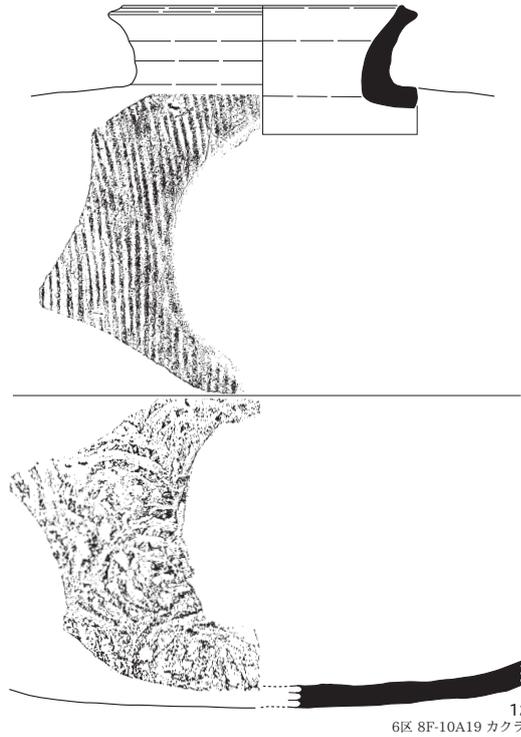
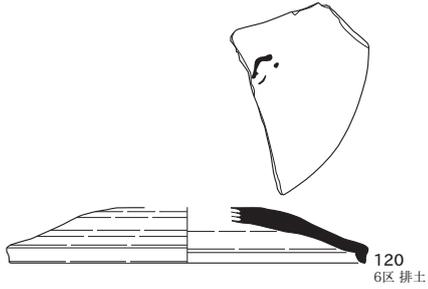
6区下層 SN94 (115)



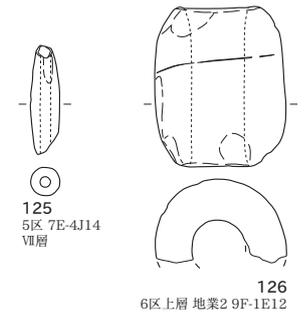
6区下層 SD75 (116~119)



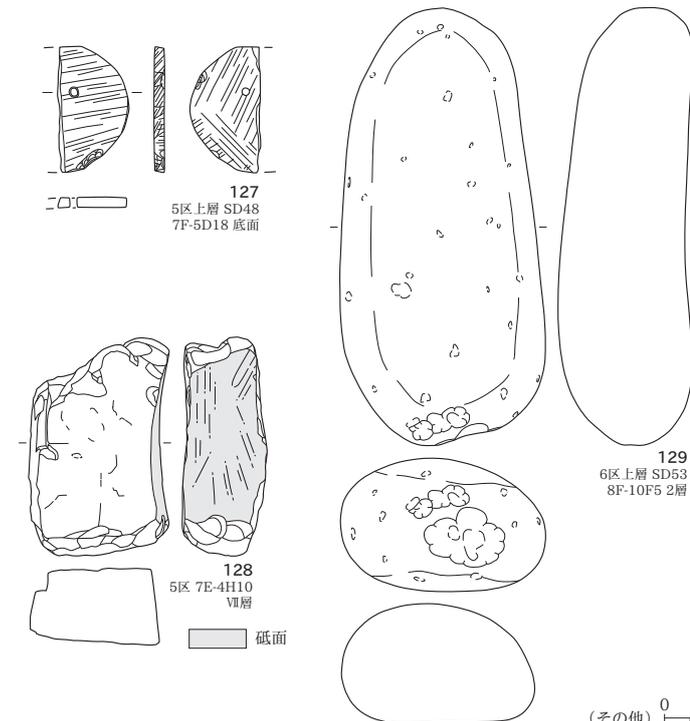
6区 遺構外 (120~124)



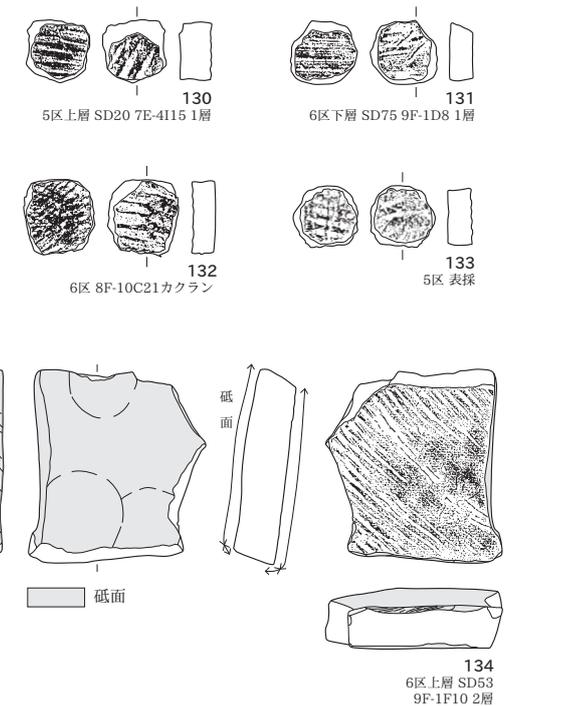
土製品 (125・126)



石製品 (127~129)



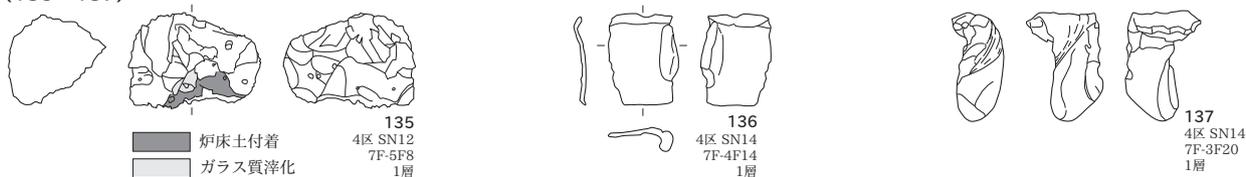
円盤・転用研磨具 (130~134)



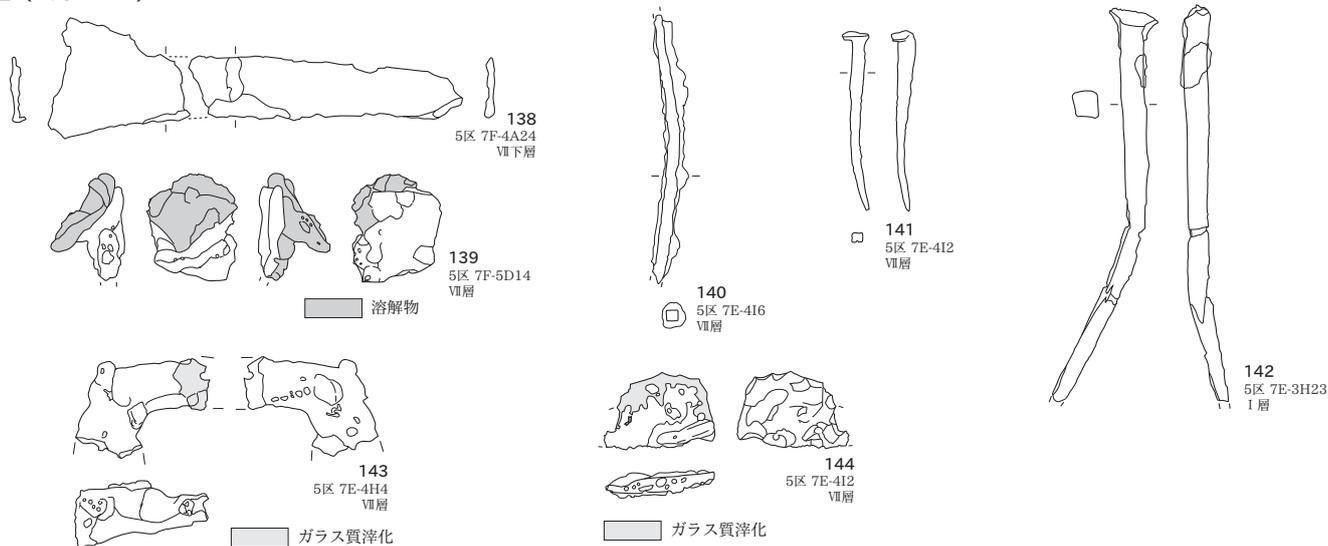
(その他) 0 (1:3) 10cm

(127) 0 (2:3) 5cm

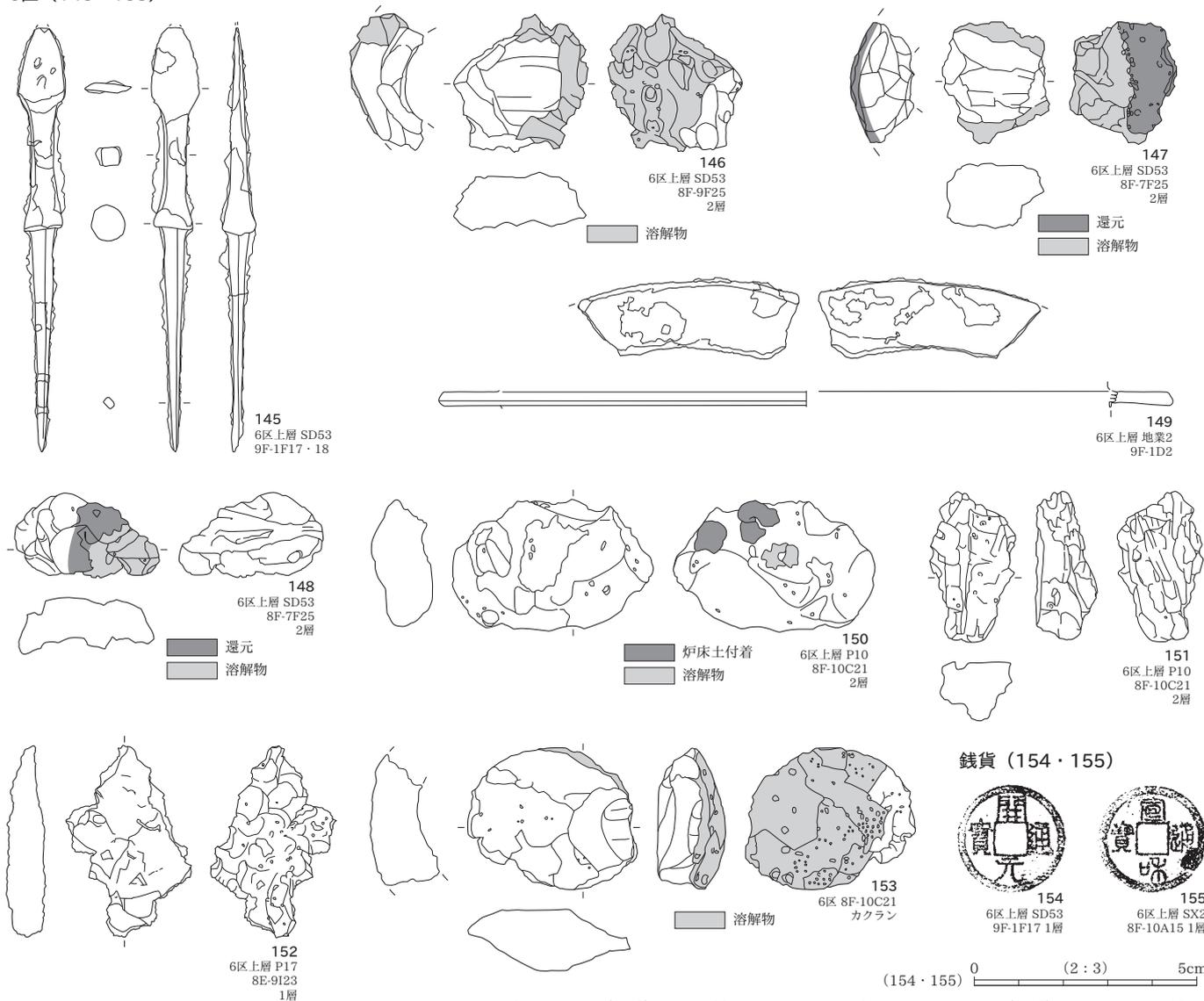
4区 (135~137)



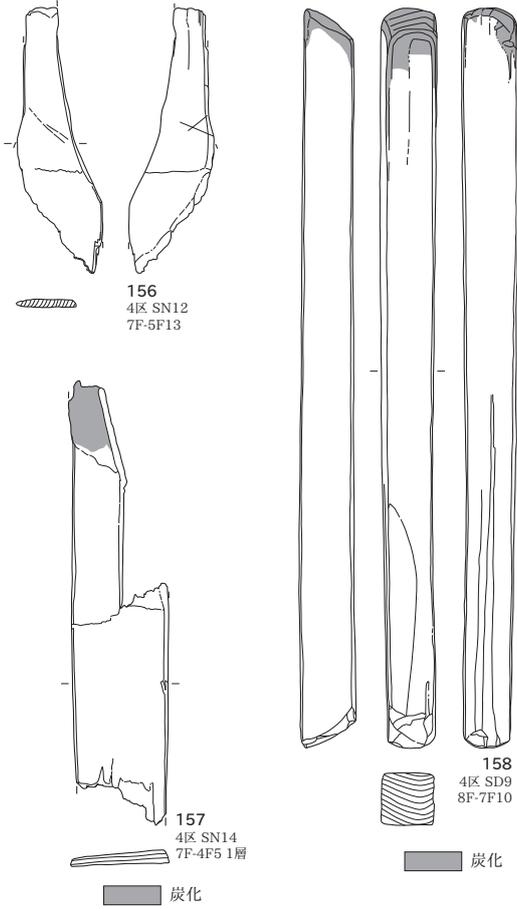
5区 (138~144)



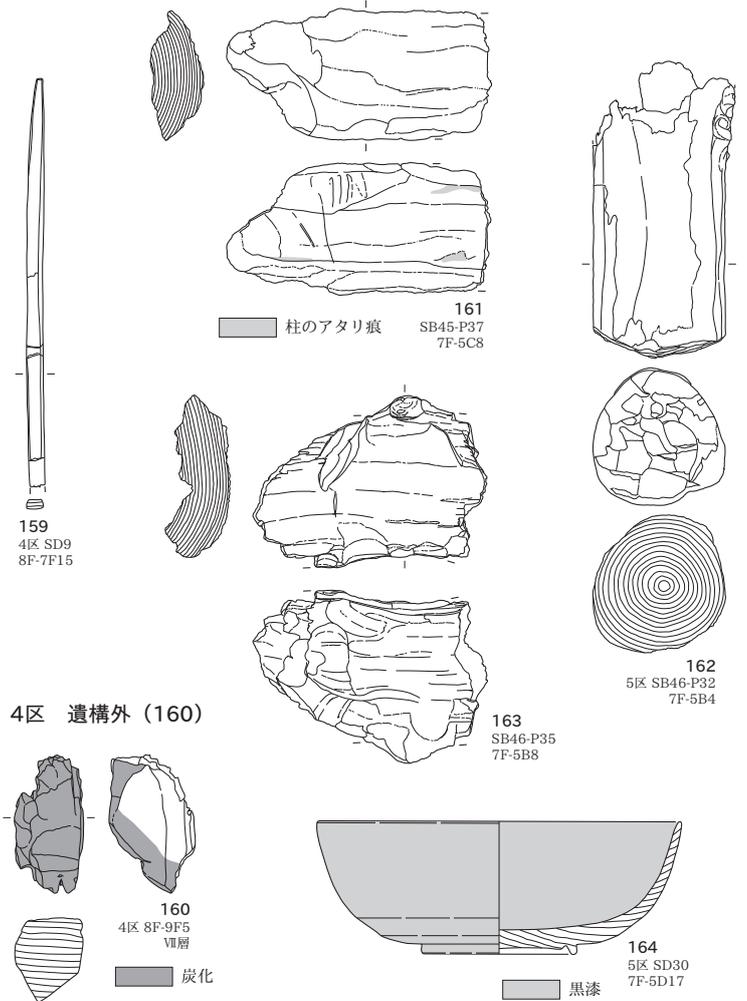
6区 (145~153)



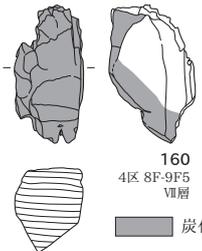
4区 上層遺構 (156~159)



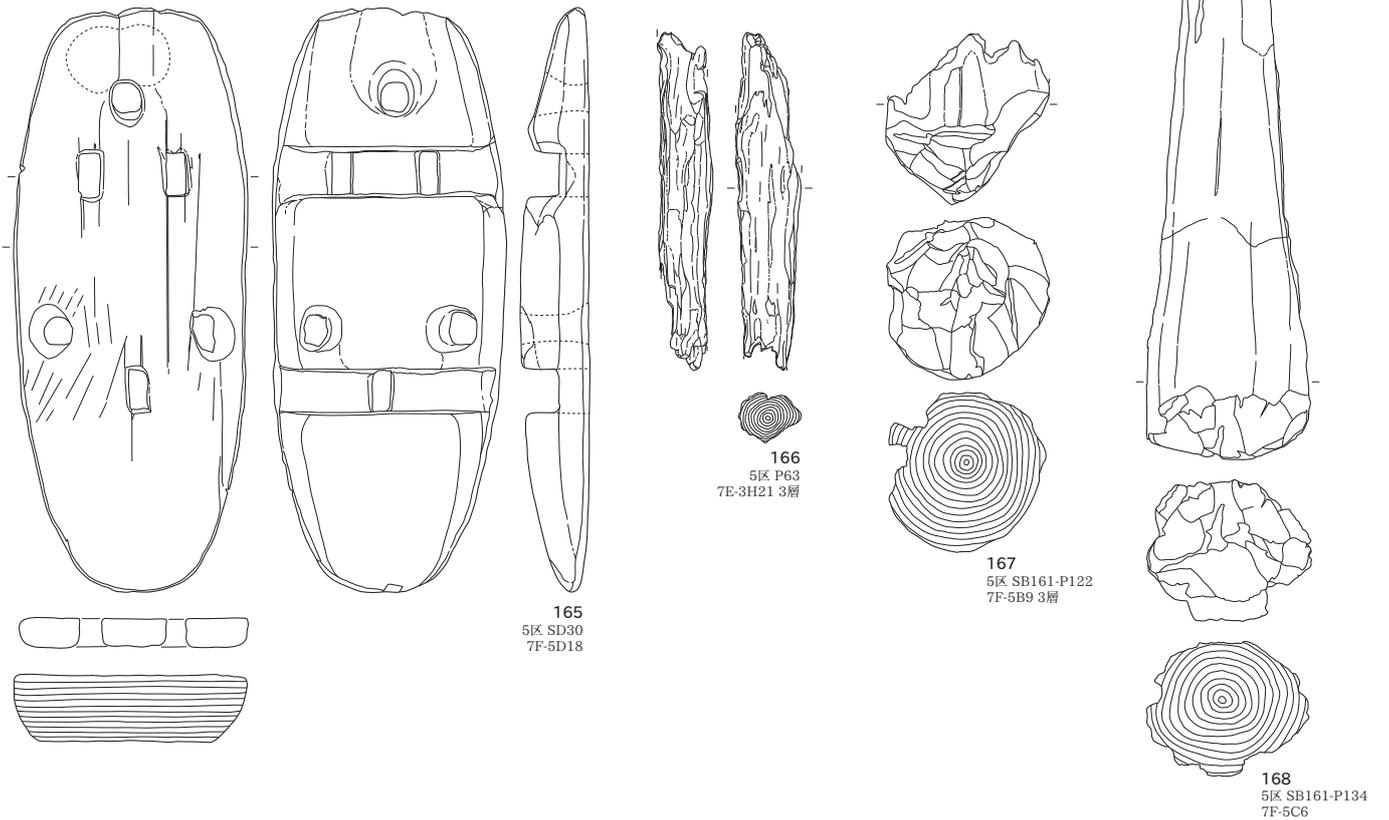
5区 上層遺構 (161~166)



4区 遺構外 (160)



5区 下層遺構 (167・168)

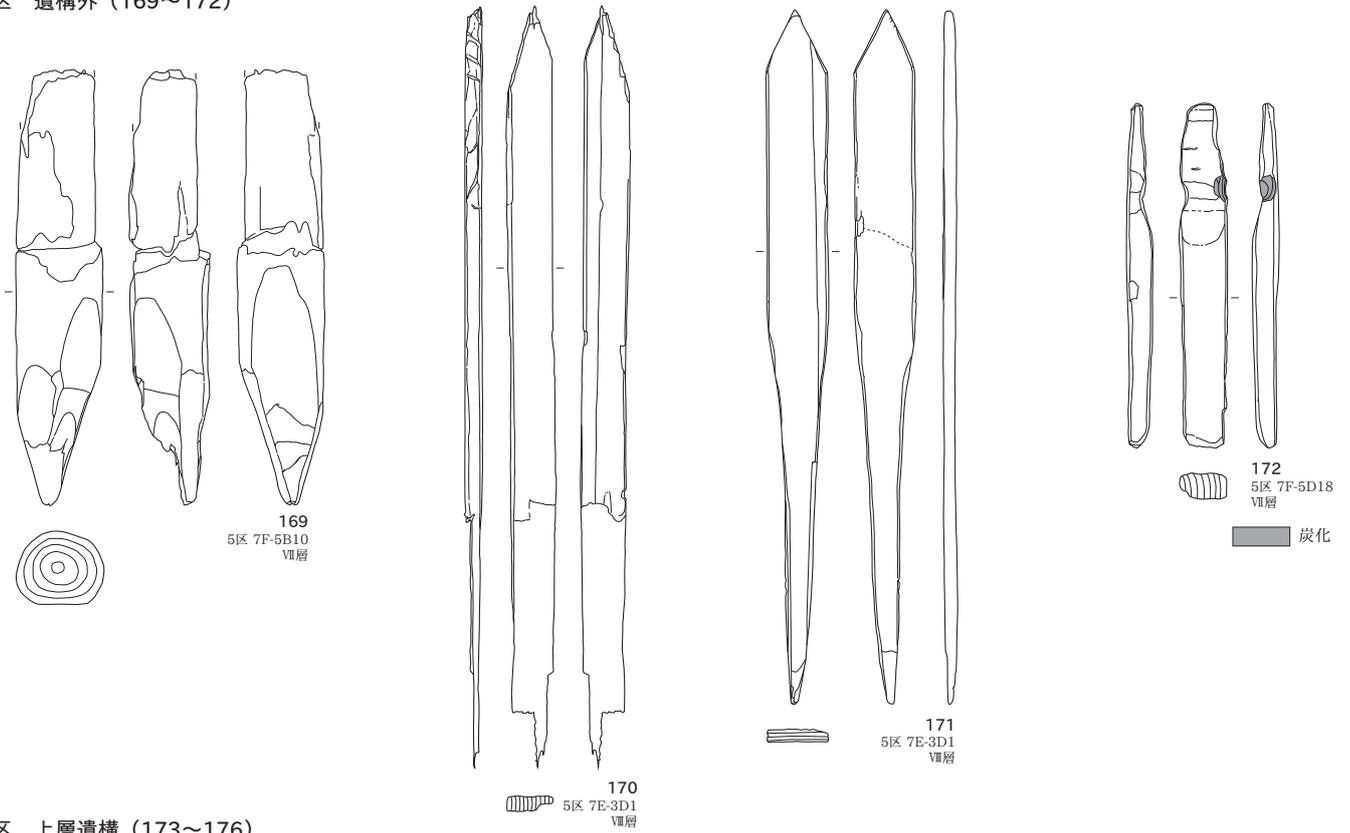


(162) 0 (1:8) 20cm

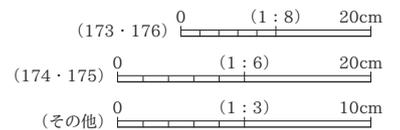
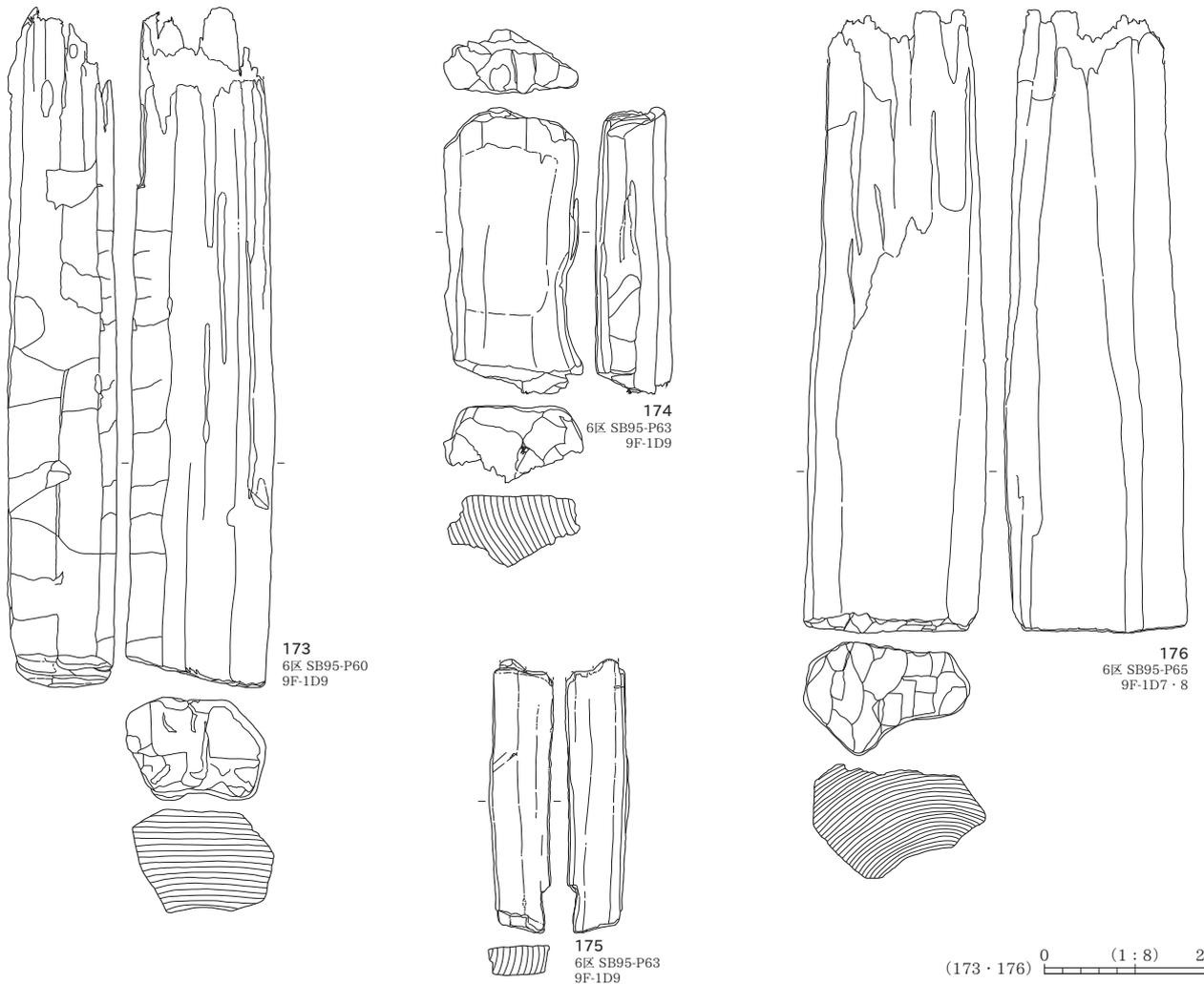
(161・163・166~168) 0 (1:6) 20cm

(その他) 0 (1:3) 10cm

5区 遺構外 (169~172)



6区 上層遺構 (173~176)

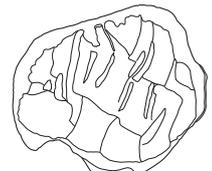


6区 上層遺構 (177~192)

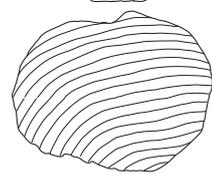


177
6区 SB95-P68
9F-1D6

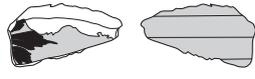
178
6区 SB95-P68
9F-1D6



184
6区 SD6
8E-10J2

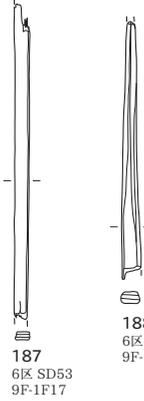


185
6区 SD53
9F-1F17



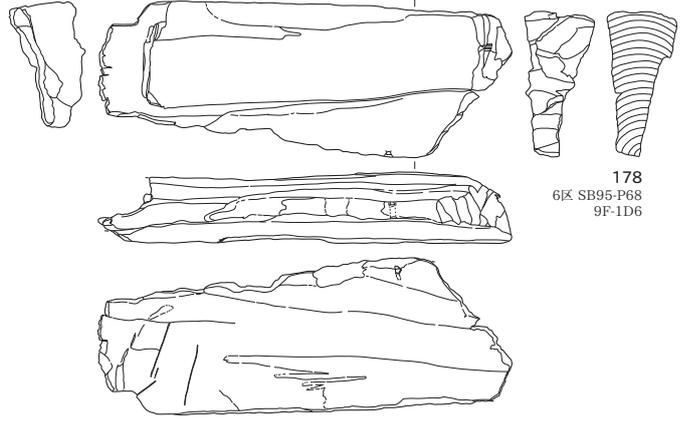
186
6区 SD53
9F-1F17

黒漆



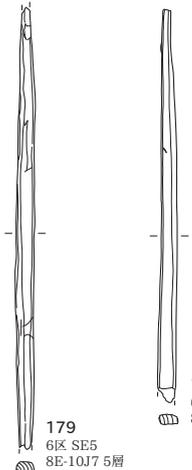
188
6区 SD53
9F-1F17

189
6区 SD53
9F-1F17

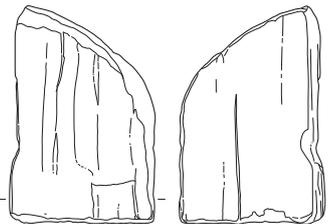


181
6区 SE5
8E-10J7 5層

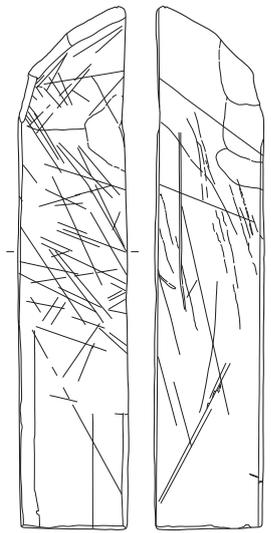
182
6区 SE5
8E-10J7 5層



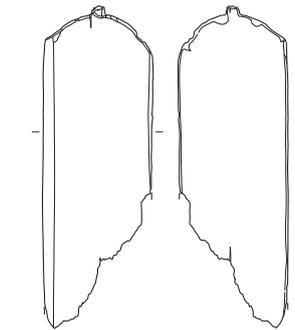
183
6区 SE5
8E-10J2



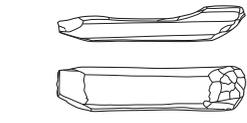
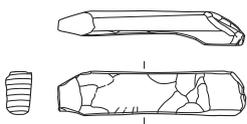
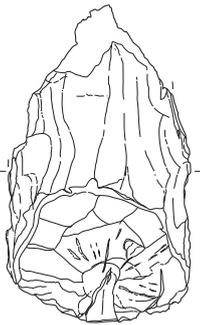
184
6区 SE5
8E-10J2



185
6区 SD53
9F-1F17



186
6区 SD53
9F-1F17



(178) 0 (1:6) 20cm

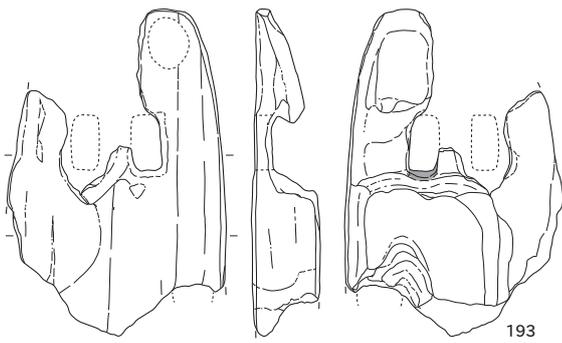
(177) 0 (1:8) 20cm

(184) 0 (1:4) 10cm

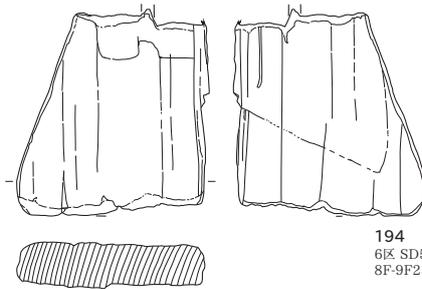
(その他) 0 (1:3) 10cm

(185) 0 (1:2) 10cm

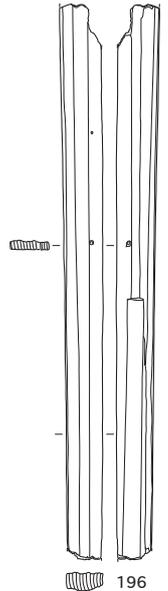
6区 上層遺構 (193~202)



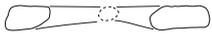
193
6区 SD53
8F-9F25 2層



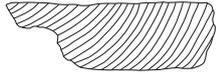
194
6区 SD53
8F-9F25 2層



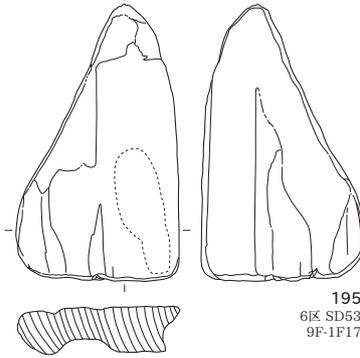
196
6区 SD53
9F-1F17 1層



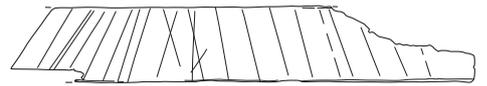
炭化



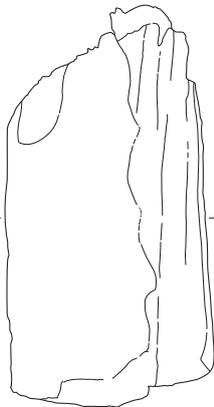
197
6区 SD53
9F-1F17



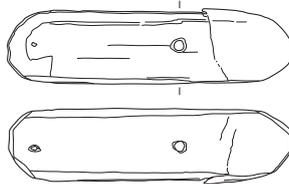
195
6区 SD53
9F-1F17



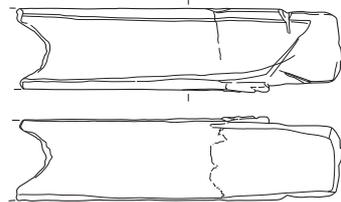
198
6区 SX2
8F-10A20 2層



199
6区 P88
9F-1D7

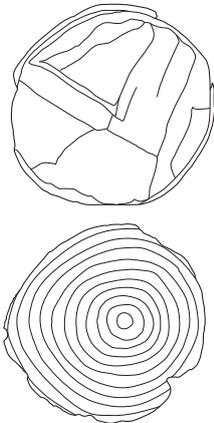


200
6区 地業1
9F-1E20



201
6区 地業1
9F-1E20

6区 下層遺構 (203)



202
6区 地業2
9F-1E20



203
6区 SB96-P93
9F-1C5

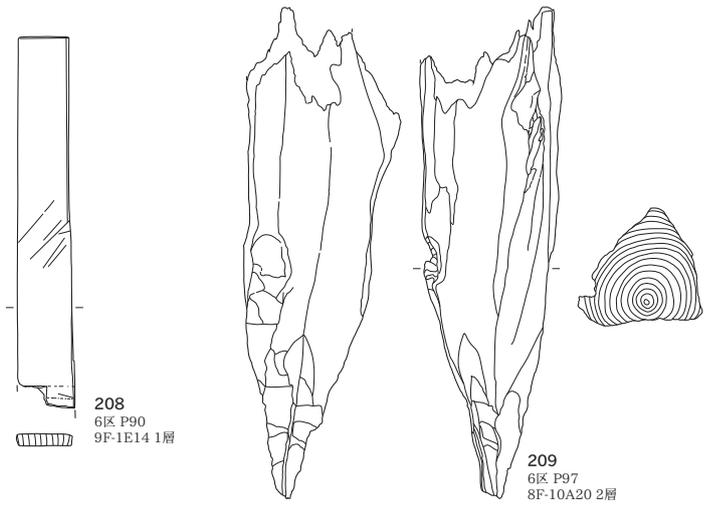
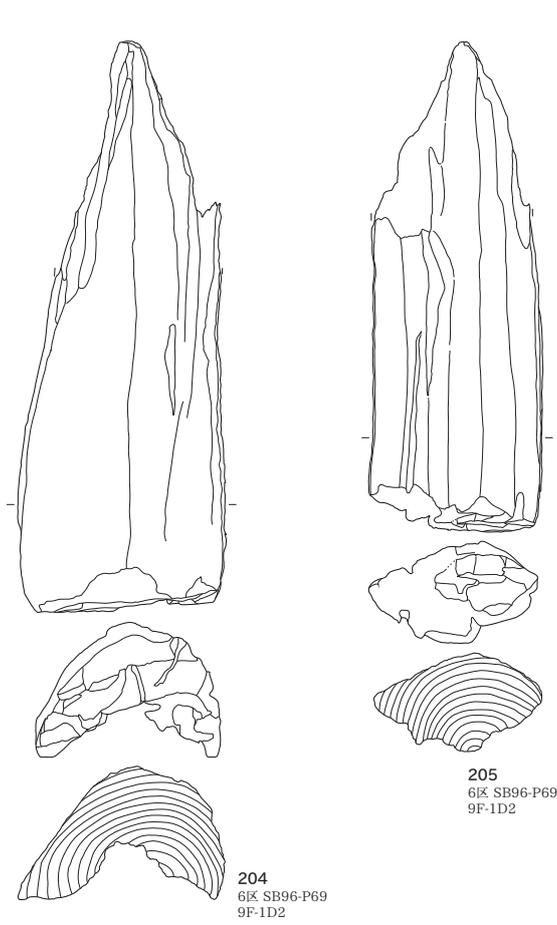
(199) 0 (1:4) 10cm

(203) 0 (1:8) 20cm

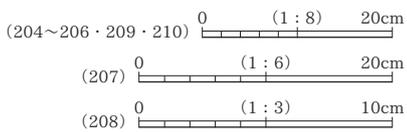
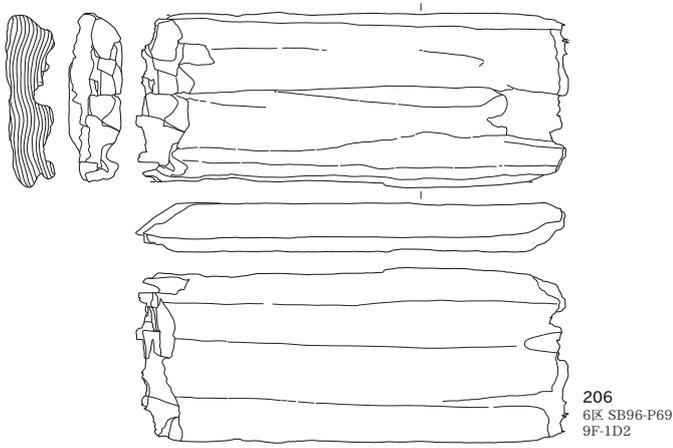
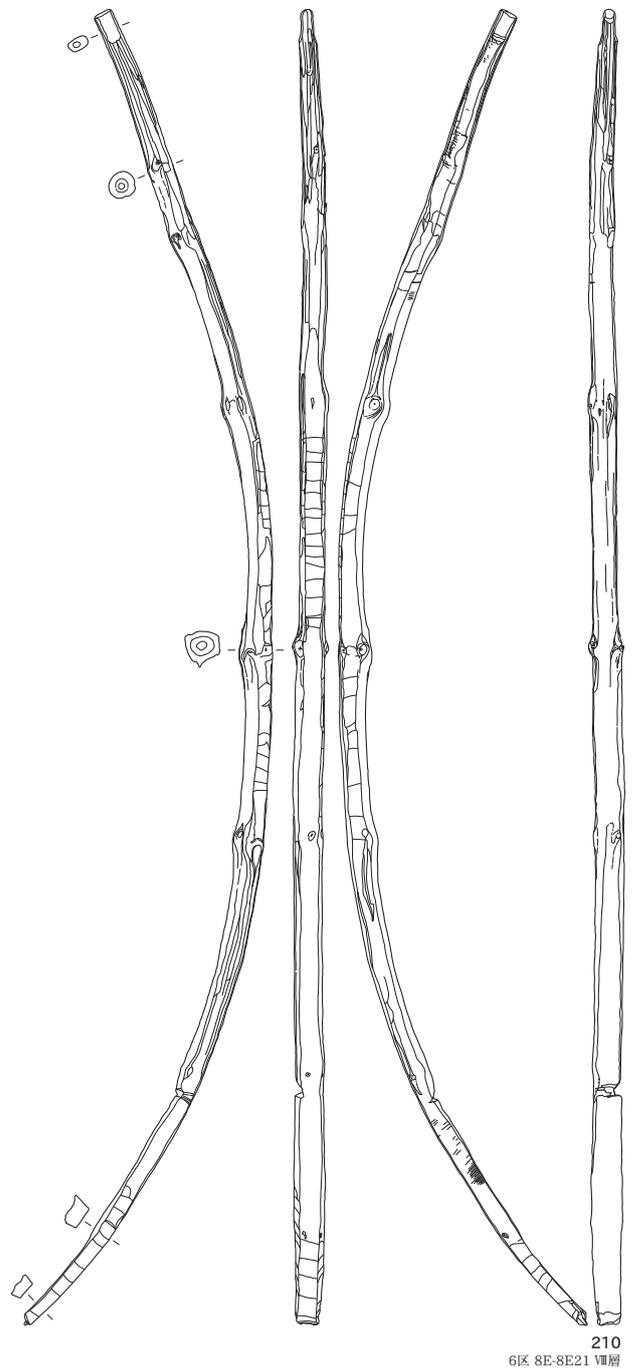
(196・197) 0 (1:6) 20cm

(その他) 0 (1:3) 10cm

6区 下層遺構 (204~209)



6区 遺構外 (210)





茶院 A 遺跡第 7 次調査 調査区遠景 1 (東から)



茶院 A 遺跡第 7 次調査 調査区遠景 2 (西から)



4区 完掘全景1(西から)



4区 完掘全景2(西から)



4区 水田 (SN12・13・14) 完掘 (西から)



4区 水田 (SN12・13・14) 完掘 (南から)



4区 基本層序①(南から)



4区 基本層序②(南から)



4区 基本層序③(南から)



4区 基本層序④(東から)



4区 基本層序⑤(南から)



4区 基本層序⑥(西から)



4区 基本層序⑦(西から)



4区 基本層序⑧(西から)



4区 SN12 土層断面 A (南から)



4区 SN12 土層断面 B (南から)



4区 SN13 土層断面 C (南から)



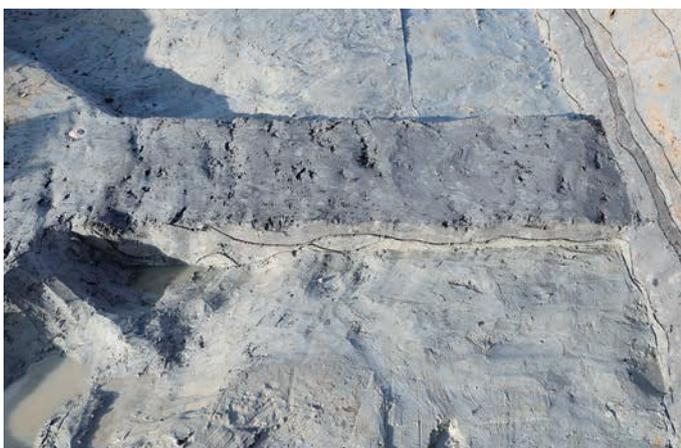
4区 SN13 土層断面 D (南から)



4区 SN14 土層断面 E (南から)



4区 SN14 土層断面 F (南から)



4区 SN14 土層断面 G (南から)



4区 SN14 土層断面 H (南から)



4区 SN14 土層断面 I (南から)



4区 畦畔 27 土層断面 L (南から)



4区 畦畔 27 土層断面 M (南から)



4区 水口 29 土層断面 K (西から)



4区 水口 30 土層断面 J (西から)



4区 畦畔 24 土層断面 (西から)



4区 畦畔 25 土層断面 (東から)



4区 畦畔 26 土層断面 (西から)



4区 畦畔 27 土層断面(南から)



4区 畦畔 28 土層断面(西から)



4区 SD8 土層断面 A(東から)



4区 SD8 土層断面 B(南から)



4区 SD8 完掘(南から)



4区 SD9 土層断面 A(東から)



4区 SD9 土層断面 B(南から)



4区 SD9 完掘(南から)



4区 SD11 土層断面(西から)



4区 P10 土層断面(東から)



4区 樹木列木-2 土層断面(西から)



4区 樹木列木-3 土層断面(南から)



4区 樹木列木-4 土層断面(南から)



4区 樹木列木-5 土層断面(南から)



4区 樹木列木-6・7 土層断面(東から)



4区 SD8・樹木列 完掘(南から)



5区上層 完掘全景(東から)



5区 基本層序①(南から)



5区 基本層序②(南から)



5区 基本層序③(南から)



5区 基本層序④(南から)



5区 SB45 完掘（南東から）



5区 SB46 完掘（南西から）



5区 SB45-P22 土層断面(西から)



5区 SB45-P22 完掘(西から)



5区 SB45-P24 土層断面 A(南から)



5区 SB45-P24 土層断面 B(南東から)



5区 SB45-P24 完掘(南東から)



5区 SB45-P27 土層断面(北西から)



5区 SB45-P27 完掘(北西から)



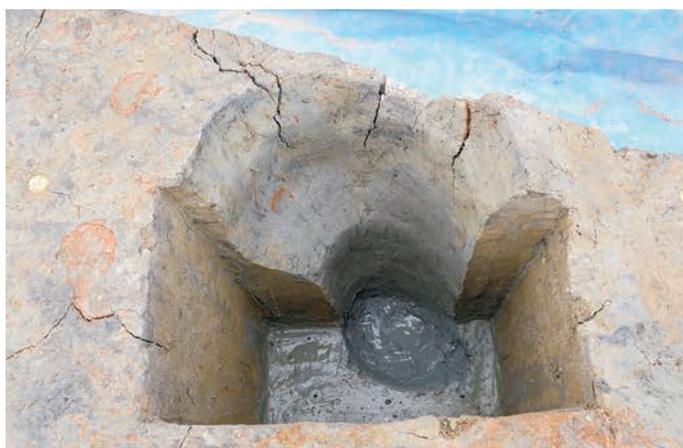
5区 SB45-P28 完掘(南東から)



5区 SB45-P37 土層断面(南から)



5区 SB45-P37 礎板検出状況(南東から)



5区 SB45-P37 完掘(南から)



5区 SB46-P41・SB45-P40 土層断面(南東から)



5区 SB46-P41・SB45-P40 完掘(南東から)



5区 SB46-P29 土層断面(南から)



5区 SB46-P29 完掘(南から)



5区 SB46-P32 土層断面(南から)



5区 SB46-P32 完掘(南から)



5区 SB46-P35 土層断面(北から)



5区 SB46-P35 礎板検出状況(北から)



5区 SB46-P38 土層断面(西から)



5区 SB46-P38 完掘(西から)



5区 SD1 土層断面(南から)



5区 畦畔 157 土層断面・SD1 完掘(南から)



5区 畦畔 158 土層断面(南から)



5区 西側低地 完掘(東から)



5区 SD30・47・畦畔 159・SD48・151・SN156 土層断面(南西から)



5区 SD30・47・畦畔 159・SD48・151 土層断面(南から)



5区 SN156 土層断面・完掘(南東から)



5区 西側低地 完掘(西から)



5区 畦畔 158 土層断面・SD2 完掘(南から)



5区 SD3 土層断面(西から)



5区 SD3 完掘(西から)



5区 SD4 土層断面(南から)



5区 SD4 完掘(南から)



5区 SD11 土層断面(東から)



5区 SD11 完掘(西から)



5区 SD13 土層断面(北東から)



5区 SD13 完掘(南西から)



5区 SD15 土層断面(南から)



5区 SD15 須恵器出土状況(北西から)



5区 SD17 土層断面(南から)



5区 SD17 完掘(南から)



5区 SD19 土層断面(南から)



5区 SD20・P21 土層断面(南から)



5区 SD15・19・20 完掘(南から)



5区 SD30・47・48 土層断面(北から)



5区 SD30 下駄出土状況(北東から)



5区 SD30 漆器出土状況(西から)



5区 SD43 完掘(南から)



5区 SD48 土師器出土状況(南から)



5区 SD151 土層断面・完掘(南から)



5区 SX5 土層断面(北から)



5区 SX5 完掘(西から)



5区 P7 土層断面・完掘(北から)



5区 P16 土層断面(南東から)



5区 P16 完掘(南東から)



5区 P23 土層断面(北西から)



5区 P23 完掘(北西から)



5区 P33 土層断面(南東から)



5区 P33 完掘(南東から)



5区 P44 土層断面(南西から)



5区 P44 完掘(南西から)



5区 P63 土層断面(西から)



5区 P63 柱根検出状況(西から)



5区下層 完掘(東から)



5区 SB150 完掘(南から)



5区 SB160 完掘(南から)



5区 SB161 完掘(南西から)



5区 SB150-P82 土層断面(南から)



5区 SB150-P82 完掘(南から)



5区 SB150-P83 土層断面(西から)



5区 SB150-P83 完掘(西から)



5区 SB150-P91 土層断面(西から)



5区 SB150-P91 完掘(西から)



5区 SB150-P130 土層断面(北から)



5区 SB150-P130 柱痕検出状況(北から)



5区 SB150-P130 完掘(北から)



5区 SB160-P81 土層断面(北から)



5区 SB160-P81 完掘(北から)



5区 SB160-P98 土層断面(南から)



5区 SB160-P98 完掘(南から)



5区 SB160-P113 土層断面(北から)



5区 SB160-P113 完掘(北から)



5区 P153・SB160-P152 土層断面・完掘(南から)



5区 SB160-P154 土層断面(南西から)



5区 SB160-P154 完掘(南西から)



5区 SB161-P121 土層断面(南西から)



5区 SB161-P121 完掘(南西から)



5区 SB161-P122 土層断面(北から)



5区 SB161-P122 柱根検出状況(北から)



5区 SB161-P134 土層断面(南から)



5区 SB161-P134 柱根検出状況(南から)



5区下層 完掘(西から)



5区 SK42 土層断面(南西から)



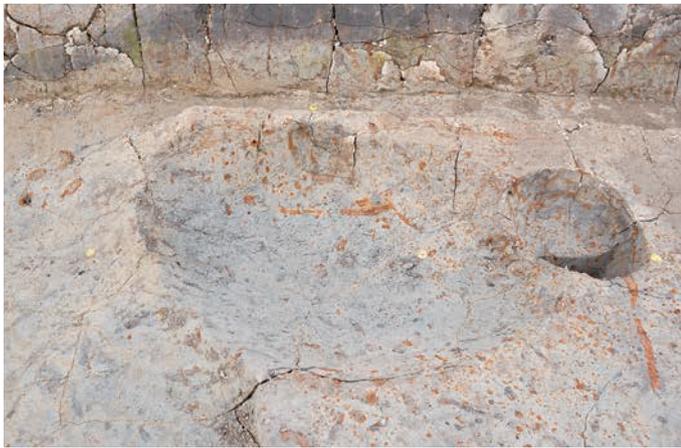
5区 SK42 完掘(南西から)



5区 SK114 土層断面A(東から)



5区 SK114 土層断面B(南から)



5区 SK114 完掘(南から)



5区 SD10 土層断面(南から)



5区 SD10 完掘(南から)



5区 SD14 土層断面(東から)



5区 SD14 完掘(西から)



5区 SD39 土層断面(南西から)



5区 SD39 完掘(南西から)



5区 SD49 土層断面A(西から)



5区 SD49 土層断面 B (西から)



5区 SD49 完掘 (東から)



5区 SD55 土層断面 (西から)



5区 SD55 完掘 (西から)



5区 P74・SD62 土層断面 (東から)



5区 SD65・62 土層断面 (東から)



5区 P64・SD65・62 土層断面 (東から)



5区 SD65・62 完掘 (東から)



5区 SD66 土層断面(北から)



5区 SD75 土層断面(北から)



5区 SD75 完掘(北から)



5区 SD84 土層断面(南から)



5区 SD84 完掘(南から)



5区 SD94 土層断面(西から)



5区 SD95 土層断面(北から)



5区 SD100・94・P118 土層断面(西から)



5区 SD100 土層断面(東から)



5区 SD94・100 完掘(東から)



5区 SD103 土層断面(西から)



5区 SD108・107 土層断面(西から)



5区 SD107 土層断面(西から)



5区 SD108・107 完掘(西から)



5区 SD135 土層断面(西から)



5区 SD137 土層断面(南西から)



5区 SD137 完掘(南西から)



5区 SD146 土層断面(西から)



5区 SD146 完掘(西から)



5区 SD148 土層断面(西から)



5区 SX106 土層断面(西から)



5区 SX106 完掘(北から)



5区 P18 土層断面(東から)



5区 P18 完掘(東から)



5区 P58 土層断面(西から)



5区 P58 完掘(西から)



5区 P60 土層断面(南西から)



5区 P60 完掘(南西から)



5区 P67 土層断面(西から)



5区 P67 完掘(西から)



5区 P72 土層断面(西から)



5区 P72 完掘(西から)



5区 P79 土層断面(南から)



5区 P79 完掘(南から)



5区 P80 土層断面(東から)



5区 P80 完掘(東から)



5区 P92 土層断面(西から)



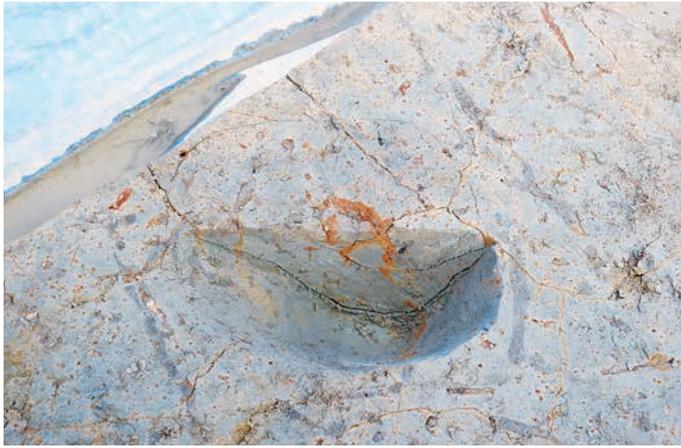
5区 P92 完掘(西から)



5区 P96 土層断面(西から)



5区 P96 完掘(西から)



5区 P109 土層断面(南西から)



5区 P109 完掘(南西から)



5区 P111 土師器出土状況(南から)



5区 P111 土層断面(南から)



5区 P111 完掘(南から)



5区 P112 土層断面(南西から)



5区 P112 完掘(南西から)



5区 P116 土層断面(南東から)



5区 P116 完掘(南東から)



5区 P117 土層断面(西から)



5区 P117 完掘(西から)



5区 P119 土層断面(西から)



5区 P119 完掘(西から)



5区 P120 土層断面(西から)



5区 P120 完掘(西から)



5区 P123 土層断面(西から)



5区 P123 完掘(西から)



5区 P132 土層断面(南から)



5区 P132 完掘(南から)



5区 P133 土層断面(東から)



5区 P133 完掘(東から)



5区 P136 土層断面(南西から)



5区 P140 土層断面(南から)



5区 P140 完掘(南から)



5区 P143・142 土層断面(北から)



5区 P144 土層断面(南から)



5区 P144 完掘(南から)



5区 P147 土層断面(西から)



5区 P147 完掘(西から)



5区 P149 土層断面(南から)



5区 P149 完掘(南から)



5区 噴砂検出状況・砥石出土状況(南から)



6区 完掘全景(東から)



6区 完掘全景(西から)



6区 木製品弓 出土状況 8E-8E21 (西から)



6区 基本層序① (北から)



6区 基本層序② (北から)



6区 基本層序③ (北から)



6区 8E-8B 畦畔 (北から)



6区 SD53 土層断面・完掘（南東から）



6区 地業1・2 土層断面（南から）



6区 SB95-P60 柱根検出状況 (西から)



6区 SB95-P63 礎板検出状況 (東から)



6区 SB95-P65 柱根検出状況 (西から)



6区 SB95-P68 柱根検出状況 (西から)



6区 SB95 (P68・65・63・60) 検出状況 (西から)



6区 SE5 土層断面・完掘(北から)



6区 SE7 土層断面・完掘(南から)



6区 SE19 土層断面・完掘(南から)



6区 SK1 土層断面・完掘(北から)



6区 SK34 土層断面(南から)



6区 SK34 完掘(南から)



6区 SK44 土層断面(南から)



6区 SK44 完掘(南から)



6区 SK47 土層断面・完掘(南から)



6区 SK80 土層断面(東から)



6区 SK80 完掘(東から)



6区 SD3 土層断面・完掘(北から)



6区 SD6 土層断面・完掘(北から)



6区 SD8 土層断面・完掘(北から)



6区 SD9・16 土層断面・完掘(北から)



6区 SD23・P24 土層断面・完掘(南から)



6区 SD26 土層断面・完掘(北から)



6区 P43・SD36 土層断面・完掘(南から)



6区 SD41 土層断面・完掘(南から)



6区 SD42 土層断面・完掘(南から)



6区 SD45 土層断面・完掘(北から)



6区 SD46 土層断面・完掘(北から)



6区 P98・SD50 土層断面・完掘(北から)



6区 SD51 土層断面(東から)



6区 P86・SD87 土層断面・完掘(北から)



6区 SX2 土層断面・完掘(北から)



6区 P4 土層断面(東から)



6区 P4 完掘(北から)



6区 P10 土層断面(東から)



6区 P10 完掘(東から)



6区 P11 土層断面・完掘(南から)



6区 P13・14 土層断面(南から)



6区 P14・13 完掘(北から)



6区 P17 土層断面(東から)



6区 P17 完掘(東から)



6区 P20 土層断面(東から)



6区 P22 土層断面(東から)



6区 P22 完掘(東から)



6区 P27 土層断面(南から)



6区 P27 完掘(北から)



6区 P28・29 土層断面・完掘(北から)



6区 P30 土層断面・完掘(南から)



6区 P31 土層断面(南から)



6区 P31 完掘(南から)



6区 P35 土層断面・完掘(南から)



6区 P49 土層断面(北から)



6区 P49 完掘(北から)



6区 P59 土層断面(東から)



6区 P59 完掘(東から)



6区 P83・82 土層断面(南から)



6区 P84 土層断面(東から)



6区 P84 完掘(東から)



6区 P85 土層断面(西から)



6区 P85 完掘(西から)



6区 P88 土層断面(西から)



6区 P88 完掘(西から)



6区下層 完掘 (西から)



6区下層 基本層序 拡張部 (南から)



6区 SB96-P69 柱根検出状況 (西から)



6区 SB96-P69 完掘 (西から)



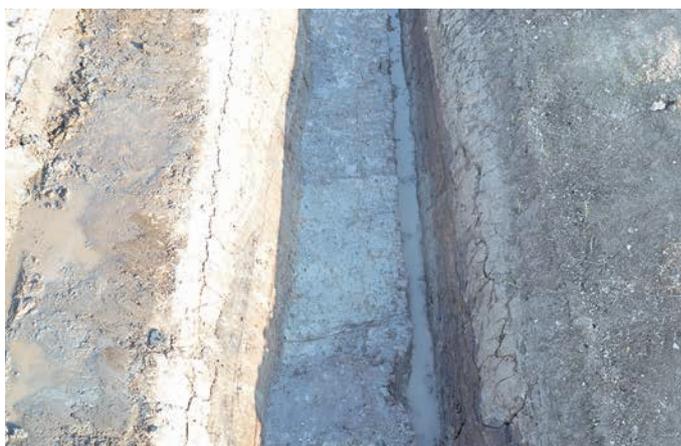
6区 SB96-P93 土層断面 (北から)



6区 SK91 土層断面・完掘 (南から)



6区下層 SD75 土層断面 (東から)



6区 SN94・畦畔 プラン確認 (西から)



6区 SN94・畦畔 土層断面(北から)



6区 SN94 土層断面(北から)



6区 SN94 完掘(西から)



6区 P71 土層断面(西から)



6区 P72 土層断面(西から)



6区 P90 土層断面・完掘(南から)

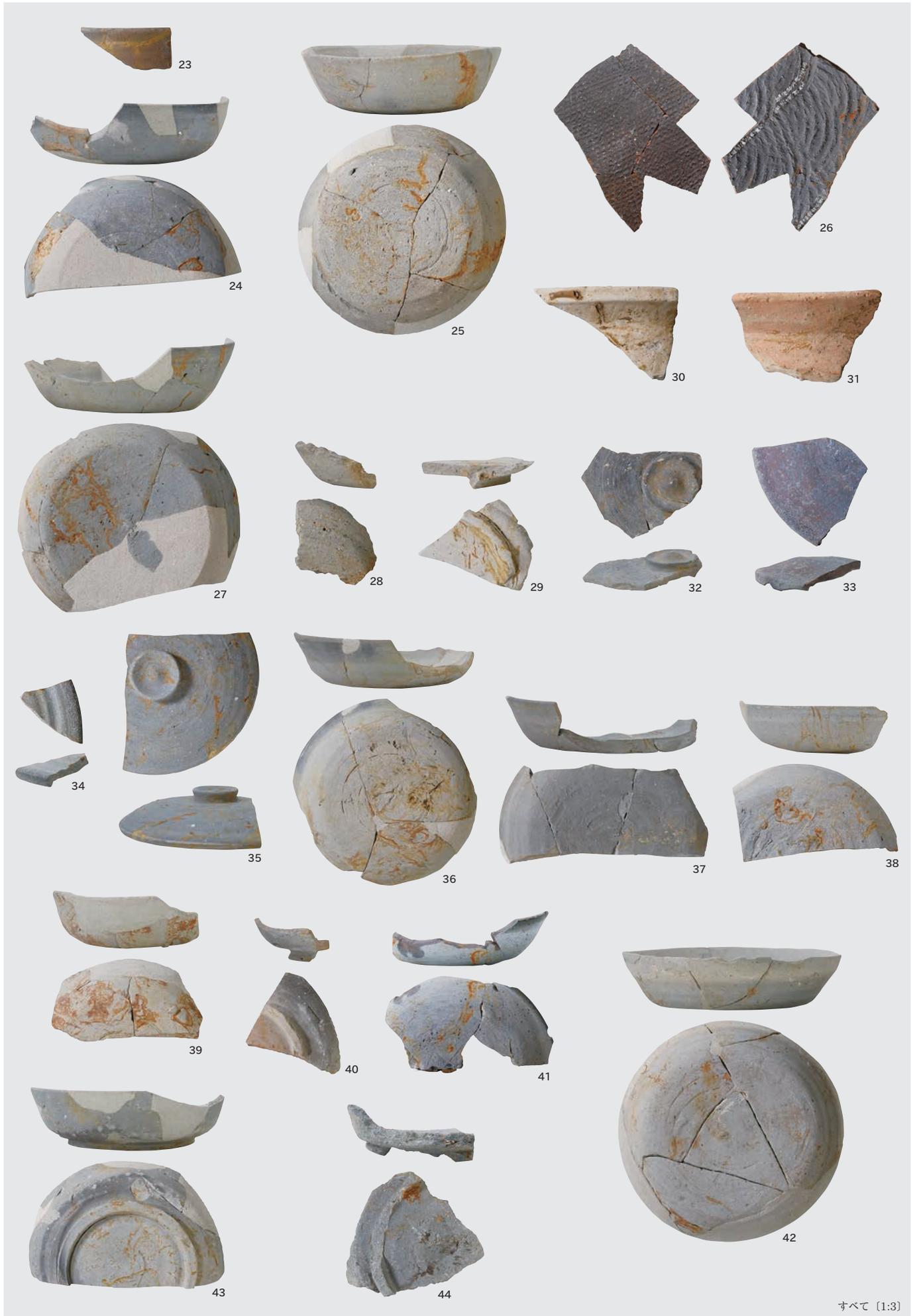


6区 P97 柱根検出状況(西から)



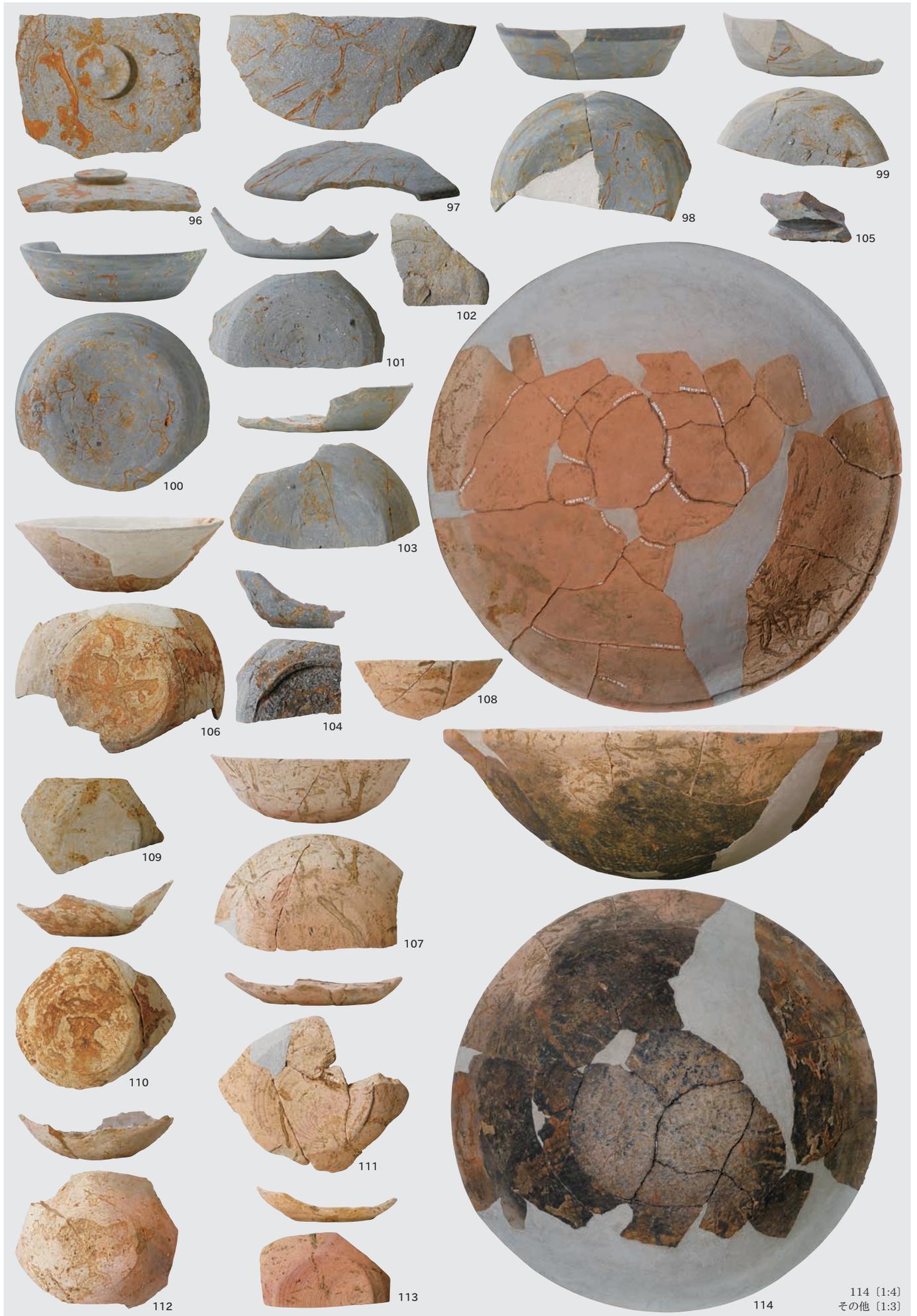
6区 VIII層土師器出土状況











114 [1:4]
その他 [1:3]



127 (1:1)
127以外 (1:3)



4



5



62



72



76



102



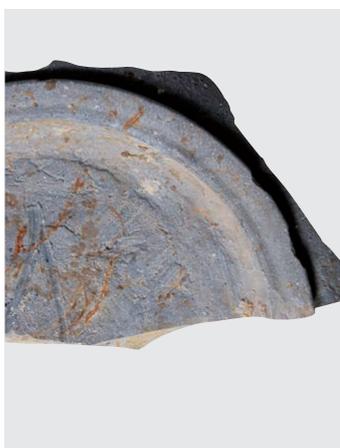
120



41



60



87



88



89



68



47



78



91

4区



5区



6区



149 [1:3]
140~142 [1:2]
その他 [2:3]

4区



162 [1:8]
 161・163・166・168 [1:6]
 その他 [1:3]







206



207



208



209



210

206・209 [1:8]
207・210 [1:6]
208 [1:3]

報告書抄録

ふりがな	ちやいんえいいせきに だいななじちようさ							
書名	茶院 A 遺跡Ⅱ 第7次調査							
副書名	経営体育成基盤整備事業（打越地区）に伴う茶院 A 遺跡第5次発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	今井さやか（新潟市文化財センター）、長沼吉嗣・竹部佑介・松井 智・田中万里子・伊藤正志（（株）吉田建設）、相澤 央（帝京大学）、高橋 敦・金原美奈子・三谷智広・辻本裕也・井上智仁・松田隆二（（株）古環境研究所）							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場 2748 番地 1 TEL 025-378-0480							
発行年月日	2026年1月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ちやいんえい 茶院 A 遺跡	にいがたけん 新潟県新潟市 にしかんくうちこしあざ 西蒲区打越字 ぬまおつ 沼乙 388 ほか	15100	543	37° 44' 05"	138° 56' 26"	20230620 ~ 20231122	1710.9	経営体育成基盤整備 事業打越地区に伴う 本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
茶院 A 遺跡	集落跡	古墳時代（中期） 奈良時代、平安時代、 鎌倉時代		水田遺構・掘立柱建物 跡・井戸・土坑・溝・ 性格不明遺構・ピット		珠洲焼・土師器・須恵器・灰 釉陶器・土製品・石製品・鉄 製品・鍛冶関連遺物・木製品		埋没した自然 堤防上の集落
要約	<p>茶院 A 遺跡は、埋没した大通川の自然堤防上に位置する集落跡である。現況は、現標高 2.0～2.4m の水田で、東側には遺跡に平行するように南北に延びる自然堤防上に打越集落がある。調査は経営体育成基盤整備事業打越地区に伴い令和 5 年に実施した。調査の結果、上層では 13 世紀鎌倉時代の屋敷地が見つかった。屋敷地では、溝で区画した範囲に地業を行って造成されていた。また、溝に平行する柳の植栽が行われ、掘立柱建物 1 棟が見つかった。また、低地部では複数の畦畔を伴う水田遺構を検出した。遺物は珠洲焼・白磁のほか、羽釜や鉄鎌といった鉄製品、下駄や齋串などの木製品が出土した。屋敷地や水田の様相は、南区の小坂居付遺跡に類似している。</p> <p>下層では、主に 8 世紀の掘立柱建物が見つかった。遺物は「宅成」と書かれた墨書土器 3 点のほか、8 世紀後半から 9 世紀にかけての須恵器・土師器が多数出土した。また、特筆すべき遺物として丸木弓があげられる。</p> <p>さらに遺構は確認できなかったが、古墳時代中期の土器と石製模造品が出土し、この地域の沖積地にも古墳時代の集落が存在したことが示唆される。</p>							

茶院 A 遺跡Ⅱ 第7次調査

— 経営体育成基盤整備事業（打越地区）に伴う茶院 A 遺跡第5次発掘調査報告書 —

2026年1月22日印刷

2026年1月23日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター

〒950-1122 新潟市西区木場 2748 番地 1

TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会

〒951-8554 新潟市中央区古町通 7 番町 1010 番地

古町ルフル 4 階

TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフィック

〒950-2022 新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号

TEL 025 (233) 0321